

さらば愛しき女よ

Farewell, My Lovely (1940)

レイモンド・チャンドラー

Raymond Chandler

山形浩生訳¹

翻訳期間：2025年8月3日-

¹ hiyori13@alum.mit.edu 委員会内部利用のみ。委員以外閲覧禁止

目次

[1].....	4
[2].....	7
[3].....	15
[4].....	20
[5].....	24
[6].....	33
[7].....	37
[8].....	42
[9].....	52
[10].....	56
[11].....	62
[12].....	67
[13].....	74
[14].....	86
[15].....	90
[16].....	94
[17].....	99
[18].....	105
[19].....	120
[20].....	123
[21].....	126
[22].....	135
[23].....	138
[24].....	142
[25].....	146
[26].....	151
[27].....	155
[28].....	162
[29].....	168
[30].....	179
[31].....	185
[32].....	191
[33].....	199
[34].....	207
[35].....	211
[36].....	217
[37].....	221
[38].....	225
[39].....	235
[40].....	246
[41].....	250
訳者あとがき.....	253

[1]

そこはセントラル街のありがちな混合人種街区の一つ、まだ完全に黒人街になっていない街区だった。おれはちょうど椅子が三つの床屋から出てきたところだ。そこはある事務所に臨時雇いのディミトリ・オス・アレイディスという理髪師が働いているかもしれないと教えてくれたところだった。大した話じゃない。彼の奥さんは、旦那が家に戻ってくるのに少しお金を払ってもいいと言ったんだ。

結局彼はみつからなかった。でもアレイディス夫人も一銭も支払ってくれなかった。

暖かい日、三月もほぼ終わりで、おれは床屋の外に立って、二階のフロリアンズという博打レストランの張り出したネオンサインを見上げていた。別の男もそのネオンを見上げていた。彼はほこりっぽい窓を、ある種の何やらうっとりした表情を硬直させて見上げていた。大男とはいえ、身長二メートルを超えてはいないし、ビールのトラックほど太ってもいない。三メートルほど離れていた。その腕は両脇にだらりと下げられ、巨大な指の間では忘れられた葉巻が煙をたてている。

やせた物静かな黒人たちが街路を行ったり来たりして通りすがり、横目でチラリと彼を見つめた。見るだけの価値はあった。ボロボロのボルサリーノ帽、粗野な灰色のスポーツジャケットを着ていて、そのボタン代わりに白いゴルフボールが使われている。茶色のシャツ、黄色のネクタイ、プリーツ入りの灰色いフラシ天スラックスとワニ皮靴で、そのつま先は白い爆発模様になっている。外側の胸ポケットからは、ネクタイと同じまばゆい黄色のハンカチがカスケード状にのぞいていた。帽子のバンドには、色つきの羽根が何本か挿してあったが、本当は必要なかった。セントラル街という世界で最も地味な通りとは言えない場所ですら、そいつはエンジェルフードケーキの上のタランチュラ並に目立っていた。

肌は青白くて無精髭まみれ。いつも無精髭まみれだった²。カールした黒髪で、分厚い眉毛はほとんどでかい鼻の上でくっつきそうだった。これほどの大きさの男にしては耳は小さく整っており、目は

2 村上訳は「いついかなるときにもひげ剃りが必要に見えるタイプなのだろう」。この話はすべて、リアルタイムで語られてはおらず、すべて終わった後からのマーロウの回想として語られている。だからこれは、そのときにそういう推測をしたということではない。その後のつきあいも含め、彼がいつも無精ひげを生やしていた、という話。

灰色の目にありがちに思える、あの涙に近い輝きを持っていた。彼は彫像のように立ち、長いことたってにっこりした。

彼はゆっくりと歩道を横切り、二階への階段を遮断する二重スイングドアに向かった。それを押し開け、通りに冷ややかで無表情な視線を向けて上から下まで走らせ、中に移動した。もっと小男で、もっと地味な服装だったら、強盗でもやらかすのかと思ったかもしれない。だがあの服ではそれはないし、あの帽子にあの体つきではあり得ない。

左右の扉は反動で外に開いてから、ほとんど止まりかけた。完全に止まる前に、再びそれが、猛然と外側に開いた。何かが歩道を横切って宙を飛び、駐車車両二つの間のドブに着地した。そいつは両手両膝で着地し、追い詰められたネズミのような、甲高い悲しげな声をあげた。それがゆっくり立ち上がり、帽子を拾い上げると、歩道上にまた戻った。痩せた肩幅の狭い茶色の青年で、ライラック色のスーツとカーネーションを身につけていた。精悍な黒髪だ。口は開けたまましばらくヒイヒイ言っていた。人々はそれをぼんやり見つめた。それからそいつはかっこつけて帽子を直すと、壁際にスッと地下より、街区に沿ってだまって扁平足状に歩み去った。

沈黙。車がまた動きはじめた。おれはスイングドアの前へと進み、その前に立った。もうドアは動いていなかった。おれの知ったことじゃない。そこでそれを押し開けて中を覗いた。

暗い中から、おれがすわれそうなほどの手が出てきて、肩をつかみ、粉々に握りつぶした。そしてその手はおれをドアの中へと移動させ、平然と一段持ち上げた。でかい顔がおれを見た。深く柔らかい声が、静かに言った。

「黒んぼがここにいるとはな、え？ あんたも見ただろう、旦那」

中は暗かった。上のほうからは人間の漠然とした音がしたが、階段にいるのはおれたちだけだった。大男はおれを真面目くさった顔で見つめ、そのままおれの肩を手で握りつぶし続けた。

「クロちゃんだよ。たったいま放り出した。おれがやつを放り出すの、見ただろ？」

彼は肩を離してくれた。骨は折れていないようだったが、腕は麻痺していた。

「ここはそういう場所なんだよ」とおれは肩を撫でた。「黒人がいて当然だろ？」

「そういうなよ、旦那」と大男は柔らかくのどを鳴らした。夕食後のトラ四頭のような。「ヴェルマが昔ここで働いてたんだよ。かわいいヴェルマが」

彼はまたおれの肩に手を伸ばした。よけようとしたが、ネコ並の素早さ。その鉄の指で、さらにおれの筋肉を絞り上げ始めた。

「そう、かわいいヴェルマがな。もう八年も会ってねえ。ここがクロちゃん酒場だって？」

おれはその通りだとうめいた。

彼はおれをさらに二段持ち上げた。おれは何とか身をふりほどいて、多少距離を置こうとした。銃は持っていなかった。ディミトリオス・アレイディス探しには必要なさそうだったからだ。持っていたても、さほど役に立ったかどうか。この大男なら、おれから銃を奪って喰っちゃまっただろう。

「上に行って自分で見てきなよ」おれは声になるべく苦悶を出さないようにした。

大男はまた放してくれた。灰色の目に何やら悲しみをたたえておれを見た。「良い気分なんだ。だれともめ事はおこしたくないんだよ。あんたとおれで上に行って、一杯引っかけようぜ」

「出してくれないよ。黒人専用酒場だって言っただろう」

彼は深く悲しい声で言った。「ヴェルマにはもう八年も会ってねえんだ。さよならを言ってから丸八年。最後に手紙をもらってから六年。でも何かわけがあるんだろう。昔はここで働いてたんだ。かわいかったんだぜ。あんたとおれで、上がってみようぜ、な？」

おれは怒鳴った。「わかったよ。いっしょに上に行くよ。ただ持ち上げるのはやめてくれ。歩かせろって。大丈夫だから。ちゃんとした大人なんだぜ。トイレだって一人で行けるし何でもできる。だから持ち上げたりしないでくれ」

「かわいいヴェルマがここで昔働いてたんだ」と彼は優しく言った。おれの言うことなんか聞いちゃいない。

二人で階段を上がった。歩かせてもらえた。肩が痛んだ。首の後ろが濡れていた。

[2]

階段のてっぺんを、さらに二つのスイングドアが閉ざしてその向こうにあるものを遮っていた。大男はそれを親指で軽々と開き、部屋に入った。細長い部屋で、あまりきれいではなく、あまり明るくはなく、あまり楽しげでもなかった。隅っこでは黒人のグループがチンチロリン³のテーブル上を照らす光の円錐の中で、何かを唱えておしゃべりしていた。右手壁に沿ってバーカウンターがあった。部屋の残りは主に小さな丸いテーブルが並んでいた。お客は数名ほどの男女で、みんな黒人だ。

チンチロリンのテーブルでの詠唱がいきなり止まり、その上の照明がぱっと消えた。いきなり、水浸しの船ほども重い沈黙が垂れ込めた。目がこちらを見た。灰色から真っ黒まで様々な顔の中におさまった、栗色の目だ。頭がゆっくりと巡らされ、その中の目はギラつき、別の人種の死んだような異質な沈黙の中でこちらを見つめた⁴。

大柄で首の太い黒人がカウンターの端に寄りかかり、シャツの袖をピンクのゴム輪で止めて、広い背中では白いサスペンダーが交差している。見るからに用心棒だ。彼はあげた片足をゆっくりとおろし、ゆっくりと向き直っておれたちを見つめ、足を静かに広げ、唇に広い舌を走らせた。その顔はボロボロで、まるで掘削機のバケット以外のあらゆるものでぶん殴られたようだった。傷を負い、潰され、膨れ、まだらになり、こぶだらけだった。何者も恐れる必要のない顔だ。だれかが思いつくようなことはすべて、すでにやられてしまっていた。

その縮れた短髪はちょっと白髪交じりだった。片耳の耳たぶはちぎれていた。

黒人は重量感があり身体の幅も広い。脚も巨大で重たく、黒人には珍しく少しO脚気味だった。彼はさらに舌を動かし、にっこりして身体を動かした。軽いファイター式の構えで身をかがめつつ近づいてきた。大男はだまってそれを待った。

3 英語で Craps は、日本語ではまさにチンチロリンなんだけど、最近はチンチロリンを知ってる人も少ないし、「クラップス」とか「サイコロ博打」とでもしておいたほうがいいんだろうね。ぼくは死語温存協会の人間なので、ここでは敢えて古い表現を使っています。

4 stared in the dead alien silence of another race. 村上訳は「異なった人種に対する反感がもたらす、痛いほどの沈黙」。清水訳も「異人種の侵入に敵意を見せて」という訳で村上と同じ解釈。でもチャンドラーが言っているのはそういうことではなく、黒人の沈黙はなんか感じがちがうんだ、ということ。反感や敵意、といった内容はない。ある意味でチャンドラー自身も少し偏見じみたものがある、ここにそれが出ている。

ピンクの袖止めを腕につけた黒人は、大男の胸に巨大な茶色い手を当てた。大きいとはいえ、ボタンまがいには見えなかった。大男は動かなかった。用心棒は優しく微笑した。

「白人さんお断りなんだよ、兄弟。有色人種専用でしてね。ほんとすまんこって」

大男はその小さな悲しい目を動かして、部屋を見回した。頬が少し紅潮した。「靴磨き野郎が」と歯を食いしばりつつ怒ったように行った。そして声を上げた。「ヴェルマはどこへいる？」と用心棒に尋ねた。

用心棒は、笑ったとは言えなかった。大男の服装を検分し、その茶色いシャツに黄色のネクタイ、粗野な灰色の上着とそこについた白いゴルフボールを見た。その分厚い頭を繊細に動かして、こうしたすべてを各種の角度から検討した。ワニ皮の靴を見下ろした。そして軽く笑った。おもしろがっているようだ。おれは少し哀れみを感じた。彼はまた柔らかい声で言った。

「ヴェルマだってえ？ ヴェルマなんざ、ここにゃあいねえって、兄弟。酒なし、ネエちゃんなし、なんもなし。行っちゃもうしかねえんだって、白んぼ坊や。行っちゃまえて」

「ヴェルマは昔、ここで働いてたんだ」と大男。ほとんど夢見るような口ぶりで、まるで森の中にたった一人でスマイルでも摘んでいるかのよう。おれはハンカチを取りだして、また首の後ろを拭った。

用心棒はいきなり笑い出した。そして肩越しに聴衆をすばやく一瞥した。「そうだろそうだろ、ヴェルマは昔、ここで働いてたんだ。でもヴェルマはもうここじゃ働いてねえんだ。引退しておさらばよ。グワハハハ」

「なんかてめえのくそつたれな手を、おれのシャツからどけろってか」と大男。

用心棒は顔をしかめた。そういう口の利き方をされるのに慣れていなかったのだ。彼はシャツから手を放し、それを握って巨大なナスの大きさと色をしたゲンコツにした。仕事もあるし、タフだという評判もあり、世間体も考えにゃならん。それを一瞬考えてから、ましがいをしでかした。そのゲンコツを、いきなり肘を外側に振りかぶり、強烈かつ短く叩きつけて、大男の横アゴを殴ったのだ。部屋中に軽いため息が漏れた。

良いパンチだった。肩は下がり、それに続き腰も入っていた⁵。体重がしっかり乗ったパンチで、それを繰り出した男はたっぷり訓練を積んでいた。大男は頭を三センチも動かさなかった。パンチをブ

5 村上訳：「その背後で身体が小気味よく揺れた」。そうじゃない。パンチの腕の背後からちゃんと身体がついてきた、つまり腕を大ぶりするだけの素人パンチじゃない体重の乗ったパンチだったということ。明確にするため原文表現を離れて「腰が入った」としてみました。意味的にはそういうこと。

ロックしようとかえしない。まともに受けて、軽く身震いし、のどで静かな音をたてて、用心棒の喉元を捕まえた。

用心棒は、股間に膝で蹴りを入れようとした。大男は空中で彼をまわし、その派手な靴を床を覆うざらざらのリノリウムの上ですべらせ仁王立ちになった。用心棒の背中を鯖折りにして、右手をそいつのベルトに伸ばした。ベルトはたこ糸のようにぷつぷつ切れた。大男はその巨大な手を用心棒の背骨に平らに当てて力を入れた。そして部屋越しにきれいに放り投げた。用心棒は回転しつつよろめき、腕をばたつかせた。男三人が飛び退いた。用心棒はテーブル越しにふっとび、壁の幅木⁶にぶちあたって、その衝突音はデングァーまで聞こえただろう。彼は両脚をひきつらせた。そして動かなくなった。

「タフになる頃合いってもんがわかってない連中もいるんだな、これが」と大男はおれのほうを剥いた。「そうなんだよ。じゃあおれたちで一杯やろうぜ」

カウンターにでかけた。顧客は一人、二人、三人ずつ、静かな影となって音も立てずフロアを横切り、音も立てず階段てっぺんのドアを通り抜けていった。草の上の影みたいに無音⁷。スイングドアをスイングさせることさえしなかった。

おれたちはカウンターにもたれた。「ウィスキー・サワー」と大男。「あんたも好きなのを」

「ウィスキー・サワー」とおれ。

二人でウィスキー・サワーを飲んだ。

大男はウィスキー・サワーを、分厚く寸詰まりのグラスの側面から無感動にチビチビと舐めた。そしてまじめくさってバーテンを見つめた。心配そうな黒人で白い上着をきて、足の痛みをかばうような動き方だった。

「おまえ、ヴェルマがどこにいるか知ってる？」

バーテンは縮み上がった声を出した。「ここいらじゃ最近は見かけないっすけど。ここんとこ最近ではないっす、いいえ旦那」

「おまえ、ここはいつからいるの？」

6 村上春樹訳「床の幅木」。幅木は壁のほうにつくもの。そりゃ壁の床からの立ち上がり部分につけるから、屁理屈をこねるなら床についているとも言えるけどさ。

7 Soundless as shadows on grass. 『長いお別れ』ではこうした比喩の説明は一切なかったが、本書ではそれなりに登場する。まだ本作ではチャンドラーの文体が完成していなかったことがうかがえる。このため、チャンドラーの文体に鈍感な既訳も、本書ではあまり欠点があらわになっていない。

「どうでしたっけ」とバーテンはタオルを置いておでこにしわを作り、指を折って数え始めた。

「十ヶ月ってどこですかね。いや一年ほど。いや——」

「腹決めろよ」と大男。

バーテンはのどをつまらせ、そののど仏が頭をちょん切ったニワトリみたいに跳ね回った。

「このショバはいつから黒んぼ店になったんだ」と大男はつっけんどんに問いただした。

「え、なんですか？」

大男はげんこつを作り、ウィスキー・サワーのグラスはほとんど視界から溶け去るほどだった。

「長くても五年前だよ。こいつはヴェルマなんていう白人娘のことなんか何も知らない。ここのやつはだれも知らないよ」

大男はまるで、おれがそこで突然卵から孵ったとでもいうようにこっちを見た。ウィスキー・サワーでもどうやら怒りは改善しなかったようだ。

「てめえに口をはさめってだれが頼んだんだよ？」

おれはにっこりした。それを大きく暖かい、仲良しスマイルにした。「いっしょにここに入ってきたじゃないか。覚えてるだろ？」

すると彼も笑顔を返してよこした。何も含みのない平板な笑顔だった。彼はバーテンに告げた。

「ウィスキー・サワーだ。もたもたすんな。急げ」

バーテンは白目をぎよろぎよろさせつつ、駆けずりまわった。おれはカウンターに背中でもたれ、部屋の中を見回した。いまやバーテンと大男とこのおれ、そして壁際につぶれている用心棒以外は無人だ。用心棒は動き始めていた。激痛の中を必死で動いているかのようにゆっくりと動いていた。幅木に沿ってゆっくりと、羽が片方しかないハエみたいに這いずっていた。テーブルの背後で、疲れ切ったように、いきなり歳をとった男のように、いきなり幻滅した男のように動いていた。おれはその動きを見ていた。バーテンはさらにウィスキー・サワーを追加した。おれはカウンターのほうを向いた。大男は、這いずる用心棒をさりげなく一瞥し、それ以上は目もくれなかった。

彼は不満げに言った。「昔の店は何も残ってねえ。小さなステージとバンドがあって、男がお楽しみできるかわいいちっちゃな部屋があったんだよ。ヴェルマは少し歌を歌ってたんだ。赤毛だよ。レースのパンツみてえにかawaiiの。おれたち結婚するはずでよってときに、おれが奴らにつかまっちゃったんだよ」

おれは二杯目のウィスキー・サワーを手を取った。もうこの冒険にもいい加減飽きてきた。「つかまったって、何で？」と尋ねた。

「さっき言った八年の間、おれがどこにいたと思ってるんだ？」

「チョウチョでもつかまえてたのかと」

彼はバナナのような人差し指で自分の胸をつついた。「ブタ箱だよ。名前はマロイ。人呼んでヘラ鹿マロイ、でっかいもんでな⁸。グレート・ベンド銀行襲撃。四万ドル。一人だけで。大したもんだろ」

「それをこれから使おうってわけか？」

大男はおれを鋭くにらんだ。背後で物音がした。用心棒が再び立ち上がり、少しよろよろしていた。手をチンチロリンのテーブルの裏にあった黒い扉の握りにおいていた。そのドアを開けて、半ば倒れ込むように中に入った。扉はガチャンと閉まった。カチリと鍵がかかった。

「あれはどこに続くんだ？」ヘラ鹿マロイは問い詰めた。

バーテンの目が頭の中で泳ぎ、用心棒が倒れこんだドアに焦点をあわせるのに苦労した。

「あ、あれは——モンゴメリーさんの事務所です、旦那。ここの親分です。そのオフィスがあつた裏にあるんです」

「そいつなら知ってるかもしれん」と大男は言った。そしてドリンクを一息で飲み干した。「それと、そいつも聞いた風な口はきかないほうがいいぜ。おかわりあと二杯」

大男はゆっくり部屋を、軽い足取りで、この世に心配事など何もないというふうに横切った。その巨大な背中がドアを隠した。鍵がかかっていた。男がそれをゆすると、パネルの破片が一方に飛んでいった。男は中に入り、ドアを背後で閉めた。

沈黙。おれはバーテンを見た。バーテンはおれを見た。その目が考え込んだ。彼はカウンターを磨き、ため息をついて、右腕でその下に腕をのぼした。

おれはカウンター越しに手をのぼし、その腕をつかんだ。細くもろい腕だ。おれはそれを握ってにっこりした。

8 They call me Moose Malloy, on account of I'm large. 村上春樹訳ではここに「ムースは漫画『アーチャー』に出てくる大男。いささか頭が弱い」と注がついているが、巨漢の一般的な比喩なので『アーチャー』を持ち出す必然性はない……という以前に、1940年刊行の本書に、1941年連載開始の『アーチャー』への言及はあり得ない。(しかもWikipediaによると、ムースは初登場1949年)

「その下に何があるんだい、兄ちゃん」

彼は唇を舐めた。おれの腕によりかかり、何もいわなかった。その輝く顔に灰色が侵入した。

「あいつはタフな男だ。かなりエグい真似もする。飲むとそうなるんだ。昔知ってた女の子を探してる。この場所は昔は白人専用の店だった。わかるか？」

バーテンは唇をなめた。

「長いことお勤めしてたんだ。八年。どうも本人は、それがどんなに長い時間かわかってない。それが一生に等しい時間なのをわかってほしいもんだがな。ここにいる連中が、その女の子の居場所を知ってるはずだと思ってる。わかるか？」

バーテンはゆっくり言った。「あの人はあんたの連れだと思ってましたよ」

「おれもどうしようもなかったんだって。下で質問されて、それからひきずってこられたんだ。それまで会ったこともない。でも家越しに放り投げられそんな感じはなかったがな。あんた、その下に何があんの？」

「銃身を切り詰めたショットガン」とバーテン。

おれは囁いた。「チィッ。それ違法だぜ。なあ、おれとあんたは一連託生だぜ。他になんかあんの？」

バーテンは言った。「チャカが。葉巻の箱に。腕を放せよ」

「そいつは結構。さ、ちょっとそっちへ動いてくれ。ゆっくりな。横にだ。いまは飛び道具を持ち出すときじゃないぜ」

「うるせえよ」とバーテンはせせら笑い、疲れた体重をおれの腕にかけてきた。「うるせえ——」

そこで止まった。目がぎよろついた。頭がびくついた。

その場所の奥で、鈍い平板な音が響いた。あのチンチロリンのテーブル背後の閉じた扉の奥だ。ドアを叩きつけた音かもしれない。だがおれはそうは思わなかった。バーテンもそうは思わなかった。

バーテンは凍りついた。口が開いてヨダレが垂れた。おれは聞き耳をたてた。他に音はしない。おれはカウンター端へと急いで向かった。聞き耳をたてる時間が長すぎた。

奥のドアがバタンと開いてヘラ鹿マロイが、なめらかな重い足取りでそこから出てくると、ピタッと止まった。足はしっかり床を踏みしめ、顔には広く青白い笑いが浮かんでいる。

コルト・アーミー 45 口径は、彼の手の中ではおもちゃのピストルのように見えた。

「だれも気の利いた真似なんかしようとするなよ」と彼はくつろいだ口調で言った。「おまえら手をカウンターに出せ」

バーテンとおれはカウンターに両手を出した。

ヘラ鹿マロイは部屋を検分するように見渡した。その微笑はこわばり、顔に釘で打ち付けられていた。足をずらして静かに部屋を横切ってきた。銀行を一人で襲撃したというのもうなずける——この服装でやったといっても信じられる。

彼はカウンターにやってきた。「立てよ黒んぼ」と優しく言う。バーテンは手を宙に高くかかげた。大男はおれの背後にまわり、左手でおれの全身を慎重に探った。男の息がうなじに熱かった。それが遠ざかった。

「モンゴメリーさんも、ヴェルマの居場所は知らなかったよ。それを言うのに——こんなもんを持ち出しやがった」彼の堅い手が銃を叩いてみせた。おれはゆっくりとふりかえって、彼を見た。「そうとも。おれって男がわかったろう。おれを忘れてはしないよな、てめえ。あの野郎どもには、うかつな真似すんなって言いたいだけだよ」と彼は銃を振り回した。「じゃあな、チンピラども。路電をつかまえなきゃならんのでね」

大男は階段のてっぺんへと向かい始めた。

「酒代払ってないぜ」とおれ。

彼は止まっておれを慎重に眺めた。

「そいつは一理あるかもしれんが、おれだったらあんまり詮索はしないがな⁹」

彼はそのまま進み続け、ダブルドアをすべりぬけ、階段を降りる足音が遠くから聞こえた。

バーテンが身をかがめた。おれはカウンターの向こうに飛び込んで、そいつを突き飛ばした。銃身を切り詰めたショットガンが、カウンター下の棚のタオル下に寝ていた。その隣に葉巻の箱がある。

9 "Maybe you got something there," 村上春樹訳：「そこに何かがあるのかは知らんが、俺なら余計な真似はしねえな」。
「そこ」ってどこのこと？ ここは、酒代払ってないという指摘に対する回答。「何かがあるのかは知らん」なんてことではない。マロイは自分が飲み代踏み倒しているのは百も承知。「そこ」はこの場合、「その指摘には」という意味。だからこれは「確かにその通りだ」と認めなくてはならない。そうしつつ空っぽけて、踏み倒す気満々だと示さなくてはいけない。

清水訳「お前えが持ってるだろう。なにも、そっくり捲き上げようとはいわねえよ」。酒代のことだときちんと理解できてる。そして踏み倒すのではなくマールウに払わせようとしていたという踏み込んだ解釈。考えられなくはない(チョイ苦しいと思うが)

その葉巻箱には 38 口径自動拳銃。その両方ともとりあげた。バーテンはカウンターの奥に並ぶガラスの列に背中を押しつけた。

おれはカウンターの端を裏にまわり、チンチロリンのテーブルの後ろにある、あぐりと口を開いたままの戸口へと部屋を横切った。その向こうには廊下があり、L字型で、ほとんど照明がない。用心棒は気絶して床に大の字を描いており、片手にナイフを持っていた。おれは身を屈め、そのナイフを引っ張って離させると、裏階段に投げ下ろした。用心棒はいびきのような呼吸をして、手はだらりとしていた。

おれはそいつを踏み越えて、はげかけた黒ペンキで「オフィス」と書かれたドアを開いた。

半ば板を打ち付けた窓の近くに、小さな傷だらけの机があった。その椅子で、男の胴体が直立している。その椅子の背もたれは高く、ちょうど男のえりのところまで来ていた。頭は、その高い椅子の背もたれの上で後ろに二つ折りになり、鼻が板を打ち付けた窓のほうを向いていた。あっさり二つ折りで、まるでハンカチかちょうつがいみたいだ。

その机で、男の右手の引き出しが開いていた。中には新聞があり、真ん中に油染みがついていた¹⁰。銃はおそらくそこから出てきたのだろう。たぶんそのときにはいい考えに思えたんだろうが、モンゴメリーさんの頭の位置を見ると、その思いつきがまちがっていたことが示されていた。

机の上に電話があった。銃身を切り詰めたショットガンを置いて、ドアに鍵をかけにいったから警察に電話した。そのほうが安全に思えたし、モンゴメリー氏も気にしないようだった。

パトカーの警官たちがドカドカ階段を上がってくる頃には、用心棒とバーテンは姿を消し、そこにいるのはおれ一人だった。

10 with a smear of oil in the middle. 村上春樹訳：「その真ん中にはオイルの匂いがした」。smear は染みのことで、匂いの意味はまったくない。なぜ村上がこんな改変をしたのか不明。日本語的にも「真ん中はオイルの匂いがした」とか「真ん中からはオイルの匂いがした」じゃないの？細かい話だが、この作品の村上訳にはこういう日本語的な無神経さが随所に見られる。清水訳「中央が油で汚れていた」。無問題。

[3]

ナルティーってやつが担当となった。あごの細い陰気な野郎で、おれと話している間のほとんどは、長く黄ばんだ手を膝小僧の上で組んでいた。77番通り署所属の警部補で、おれたちが話をしたむきだしの部屋は、反対側の壁の一つずつ机があって、その間に動けるくらいの間はある。ただし二人同時に動こうとしない限りの話だが¹¹。床は汚い茶色のリノリウムで覆われ、古い葉巻吸いさしの匂いが宙に漂っている。ナルティーのシャツは色あせ、上着は袖口のところで折り返されていた。貧乏そうで正直には見えたが、ヘラ鹿マロイを相手にできるような人物には見えなかった。

葉巻の半分に火をつけてマッチを床に投げ捨てたが、そこにはお仲間のマッチがたくさん待っていた。彼の声が苦々しげに言った。

「黒人だ。またも黒人殺し。こいつの分署で十八年やってきて、それがおれの見立てだ。写真なし、紙面なし、求人欄の四行にも劣る扱い」

おれは何も言わなかった。彼はおれの名刺を手に取り、もう一度読んで投げ下ろした。

「フィリップ・マーロウ、私立探偵。その手の連中かよ、え、まったくずいぶんタフななりだな。その間ずっと何してたんだよ」

「その間ってどの間？」

「このマロイとやらが、この黒ちゃんの首をねじってた間ずっと」

「ああ、それは別の部屋で起きたんですよ。マロイは出かけるときに、だれかの首を折るなんて約束してくれなかったもんで」

ナルティーは苦々しげに言った。「馬鹿にしやがって。いいよ、いくらでも馬鹿にしろ。みんなやってることだ。一つ増えたくらいどうってことない。哀れな老いぼれナルティー。ちょっと出かけ

11 村上春樹訳：「二人が同時にその机に向かっているならば」。そうじゃなくて、二人が同時に立ち上がらなければ、ということ。すわるだけなら十分可能。清水訳は当然ながら無視。

てあいつをからかってやろうじゃねえか。物笑いの種にはおあつらえ向きだからな、ナルティーってやつは」

「別に馬鹿になんかしてませんよ。本当にそういうふうに起きたんですって——別の部屋で」

ナルティーは、臭い葉巻の煙を吐き出した。「そうだろうとも。そこにいてこの目で見たんですってか？ おまえ、銃とか持ってなかったのか？」

「あの手の仕事じゃね」

「どの手の仕事だよ」

「奥さんから逃げ出した床屋を探してたんですよ。説得して家に連れ帰れると奥さんは思ったもんで」

「黒んぼか？」

「いや、ギリシャ人」

「わかった」とナルティーはゴミ箱にツバを吐いた。「大男には、どうやって会ったって？」

「もう言ったでしょう。たまたまその場に居合わせただけですって。あいつがフロリアンズから黒人を放り出して、おれは愚かにも何が起きてるのか見ようと頭を突っ込んだんだ。そこであいつがおれを上連れて行った」

「銃をつきつけられたってことか？」

「いやいや、そのときはまだ、あいつは銃は持ってない。少なくとも、見せはしなかった。銃はモンゴメリーから奪ったんでしょう、たぶんね。おれはあっさり引っかけられたってわけ。ときどきおれって、なんかカワイかったりするもんで」

「どうだか。おまえ、えらく尻軽そうではあるがな¹²」

「わかったわかった。口論しても仕方ない。おれは男を見てるし、あんたは見てない。おれもあんたも、腕時計の飾りに仕立てられるようなヤツなんだ。あいつが立ち去るまで、人を殺したなんてわか

12 "You seem to pick up awful easy." Pick upには、持ち上げるという意味とナンパするという意味がある。マーロウの「おれはカワイイ」というのはそのかけことばを意識したギャグ。だからこのナルティーの返事は、そのギャグを真に受けて、おまえはpick upされてすぐついてくようなやつなのか、という嫌味。村上春樹訳「おたくは簡単につまみ上げられそうには見えない」は、文の意味を逆にしてニュアンスもまちがえている。清水訳は「おかしいね。君はそんな男じゃあるまい」。まあ苦肉の策で安全パイで逃げた感じ。

らなかった。銃声は聞いたけれど、だれかがびびってマロイを撃って、マロイがその誰やらから銃を奪ったと思ひ込んだんだよ」

ナルティーはほとんど愛想良く尋ねた。「して、なんだってそんな思いこみを？ やっこさんは、銀行を襲うのに銃を使っただろうに？」

「あいつの服装を考えてみてくださいよ。だれかを殺しにあそこに行ったわけじゃないんだ。あんな格好じゃあり得ない。銀行強盗で捕まるまえにレコだった、ヴェルマっていう娘を探しにいったんだ。フロリアンズで働いてたんだと、あそこがまだ白人の店だった頃には別の名前だったかもしれないけど。そこで逮捕されたんだ。だからまちがいなく今度も捕まえられるって」

「そうだろうとも。そんな巨体でそんな服装ならな。お茶の子さいさい¹³」

「別のスーツを持ってるかも。車と隠れ家と金と仲間も。でも捕まえられるよな」

ナルティーはまたゴミ箱に唾を吐いた。「捕まえるとも、おれの歯が次に生え替わる頃にはな¹⁴。この事件の担当者は何人？ 一人だ。なあ、なぜかわかるか？ 記事にならんからだ。あるとき、黒ちゃん五人が東八十四番でお互いハーレムの夕日みたいに斬り合うナイフ乱闘を演じやがった。一人はすでに死亡。家具に血、壁に血、天井にまで血だ。おれが出かけたら、『クロニクル』のヤツ、トップ屋がポーチを下りて車に乗りこむところだった。おれたちにしかめっ面をして「いやあ。まったく黒んぼだ」と言って、ボロ車に乗って行っちゃった。家の中に入りさえしない」

「保釈破りをしてるかもよ。そっちから協力が得られるかも。でも逮捕のときは愛想良くしろよ、さもないとオマワリ二人ほどがああ世行きだぜ¹⁵。そうなったら新聞沙汰にはしてもらえるけどね」

「そしておれもこのヤマから外されちまうよ」とナルティーはせせら笑った。

彼の机の電話が鳴った。それに聞き耳をたてて、彼は悲しげに微笑した。電話を切るとメモ用紙に何かを書き殴り、その目にはかすかな輝きがあった。ほこりっぽい廊下のはるか奥の光だ。

13 ここらへん「レコ」とか「お茶の子さいさい」とか、敢えて死語っぽい多用しているのは、単なる山形のお遊び。1940年の本だから、ちょっと古びているくらいでいいんじゃないかとは思ふ。

14 *about the time I get my third set of teeth*. 歯は乳歯、永久歯と二回にわたり1セットずつ生えてくる。それ以上はない。だからそれが三回目に起きる頃には、というのはつまり、絶対にあり得ないということ。村上春樹訳「総入れ歯を三回作り直すまでにはな」。意味をとりちがえ、絶対にあり得ないくらい不可能というニュアンスがなくなっている。入れ歯を作り替えるくらい、長生きすればあるかもしれないもの。

15 *he'll knock off a brace of prowlies*. *brace* は、二つの/一対の意味。*prowly* はおまわりさん。あの男ならおまわり二人くらい楽に殺せるぞ、ということ。村上春樹訳「パトカーの窓の支柱を叩き折られるぞ」。brace は確かにつかい棒という意味があるのでそれでまちがえたんだろうが、ちょっと初歩的すぎ。だいたいスチールの支柱を叩き折るのは無理よ。スーパーマンでもスチールは曲げるだけよ。清水訳は「うまく立ちまわらんと、生命が危いぜ」。少なくともパトカーの話じゃないのは理解できている。

「いやあ、ヤツがわかった。いまのは記録課だ。指紋、顔写真、すべて。いやはや、多少は役に立つな」そしてメモ用紙から読み上げた。「いやはや、すげえ野郎だ。身長 197 センチ、体重百二十キロ、それもネクタイなし。いやはや、とんでもねえな。まあ、もう逃げられん。無線で手配が流れた。どうせ盗難車一覧のおまけみたいな扱いだろうがな。あとは待つだけ」と彼は葉巻をたんつぼに投げ込んだ。

「女を捜してみたらどうだい。ヴェルマだ。マロイは彼女を探してるはずだ。それが発端だから。ヴェルマを探してみては」

「それはおまえが探せよ。おれは曖昧宿にはもう二十年もご無沙汰でね」

おれは立ち上がった。「オッケー」と言ってドアに向かった。

「おい、ちょい待ち。冗談だよ。おまえ、さほど忙しいわけじゃなかろう？」

おれは指の間にタバコを回して、彼を見ながら戸口の脇で待った。

「つまり、おまえこのご婦人をちょいと探して見たりするような暇はあったりするだろ。いまのおまえ、いいアイデアだったぜ。何か出てくるかもしれん。警察の紐付きでの仕事だ」

「おれに何の得が？」

彼は悲しげに黄色い手を広げた。その微笑のずる賢いこととよきたら、壊れたねずみ取り並だった¹⁶。

「おまえ、おれたちサツとは以前にもめてるよな。ないとは言わせないぜ。おれの聞いた話はちがう。次回は、味方がいても悪くはないと思うんだがな」

「味方がいて何かいいことがありますかねえ¹⁷」

ナルティーは促した。「なあ、おれはただの大人しいヤツだ。だが署にだれか味方が一人いるだけで、かなりちがってくるもんだぜ」

「無料奉仕か——それとも何か金が出る？」

16 His smile was as cunning as a broken mousetrap. 微笑が狡猾そうだった……と言った直後に「壊れたねずみ取り並に」と落とすことで、魂胆見え見えで狡猾さのかけらもなかった、というのを表現しているの、多少はそういう、上げて落とす感じが欲しい。村上春樹訳「その微笑みは壊れたねずみ取りみたいに狡猾だった」。ぼくの訳でもちょっと苦しいけれど、これは表現としてのひねりというか意地悪さがあまりになさすぎでしょう。

17 "What good is it going to do me?" 村上春樹訳：「どんな素敵なことを、私のためにしてくれるんだろう」。翻訳調にしたかったといっても、これは受験英語の直訳並にひどい。

「金はなし」とナルティーはその悲しい黄色い鼻にしわを寄せた。「だがおれはどうしても多少の手柄がいるんだ。こないだの組織改正以来、いろいろ本当にキツくてな。恩は忘れないぜ、相棒。絶対に」

おれは腕時計を見た。「わかった。何か思いついたら教えよう。それと面通しの写真が手に入ったら、本人確認もしてやるよ。昼飯食ったらね」二人で握手をして、おれは泥色の廊下と階段を下って建物の前の自分の車まで来た。

ヘラ鹿マロイがアーミー・コルトを持ってフロリアンズを後にしてから、二時間たっていた。ドラッグストアで昼飯を食って、バーボン1パイントを買い、東に車を走らせてセントラル街にたどりつき、そのセントラル街をまた北上した。おれの山勘は歩道からたちのぼる陽炎のように漠然としたものだった。

好奇心はそそられるが、おれには何の関係もない事件だ¹⁸。だが厳密に言えば、おれはそもそも一ヶ月もの間、仕事には一切ありついていなかった。無料仕事ですら、その転機ではあった。

18 Nothing made it my business except curiosity. 村上春樹訳「私の商売を成り立たせているのは、まずは好奇心である」。これじゃまったく文脈が通らない。このあとでは、いまは仕事がない、だから無料仕事でも、仕事があるだけありがたい、という話をしている。だから。この部分では、これは自分とは関係ない仕事なんだ、という話でないと文として成り立たない。

[4]

フロリアンズは、当然ながら封鎖されていた。一目でわかる私服警官がその前の車の中において、新聞を読むふりをしている。なぜそんな手間をかけるんだか。そこにいるやつはだれも、ヘラ鹿マロイのことなんか何も知らない。用心棒とバーテンは見つかっていない。その街区のだれも、二人についても何も知らなかった、少なくとも話すようなことは何もなかった。

おれはゆっくりとその前を通り過ぎて、角を曲がったところに駐車し、フロリアンズの街区のはす向かいにあって最寄り交差点の向こうにある黒人ホテルをすわって眺めていた。ホテル・サンスーシーという名前だ。車を降りて交差点を歩いて横切り、そのホテルに入った。黒っぽい繊維のカーペットに沿って、空っぽの硬い椅子が二列向かい合っていた。その奥の薄暗がりの中に机があり、その机の向こうにははげ頭の男がいて、目を閉じ、やわらかい茶色の手を穏やかに前の机の上で組んでいた。うつらうつらしていた、少なくともそう見えた。アスコットタイをしているが、まるで一八八〇年頃に結ばれたかのような。その止めピンについた緑の宝石は、リンゴほどではない大きさだ。その巨大でゆるいあごは穏やかにネクタイの上にたたまれ、その組んだ手は穏やかできれいで、爪はマニキュアされ、爪の紫の中に灰色の半月が見えている。

そのひじのところにある金属のエンボス標識には「このホテルは国際共同エージェンシー有限会社が警備しています」と書かれていた。

その穏やかな茶色の男が片目を思慮深げにこちらに向かって開けると、おれはその標識を指さした。「H.P.D.から見回りにきました。何か問題はありますか？」

H.P.D.というのはホテル警備部のことで、これは不渡り小切手を使ったり、裏階段から抜け出して未払い金を踏み倒してレンガ入りの中古スーツケースを残して行く連中の面倒を見る大きなエージェンシーの部局だ。

フロント係は高い朗々とした声で言った。「問題なんてだね、兄弟。ここではまったくお目にかからんのですよ」。そして声を四、五段階ほど下げて付け加えた。「お名前はなんとおっしゃいましたっけ？」

「マーロウ。フィリップ・マーロウ——」

「いいお名前ですな、兄弟。きれいで快活。今日はずいぶんパリッとしておいでだ」そしてまた声を下げた。「しかしあんた、H.P.D.の人なんかじゃないな。そんなの何年もお目にかかってない」。そして組んだ手をほどいて、怠惰そうに標識を指さした。「こいつは中古で買ったんだよ、兄弟。箔をつけるためにね」

「降参だ」おれはカウンターによりかかり、そのむき出しで傷だらけの木の上で半ドル硬貨を回転させ始めた。

「今朝、フロリアンズで起きたことの話は聞いた？」

「兄弟、どうだったかねえ¹⁹」いまや男は両目を開け、回転する硬貨が作り出すぼんやりした光を眺めていた。

「あそこの親玉が命とられちまって。モンゴメリーって男。だれかに首を折られたんだ」

「主がその魂を受け入れたまわんことを、兄弟」そして声がまた下がった。「サツ？」

「私立——極秘の仕事でね²⁰。そして秘密を守ってくれる人は見ればわかる」

彼はおれを観察し、目を閉じて考えた。それを再び慎重に開けて、回転するコインを見つめた。それから目が離せないのだ。彼は穏やかに尋ねた。

「だれの仕業だ？ サムを殺ったのはだれだ？」

「刑期を終えたばかりのタフなヤツが、あそこが白人の店じゃないので頭にきたんだ。昔は白人の店だったらしい。あんたなら覚えてるかな？」

彼は何も言わなかった。硬貨は軽く響くような回転音を最後に倒れて、そのまま転がり止まった。

「好きな方を選んでくれ。聖書の一節を読んでやってもいいし、一杯おごってやってもいい。どっちがお望みだ？」

「兄弟、おれは聖書は、自分の家族と邪魔されずに読む方が好きでねえ」彼は目を輝かせ、ガマガエルのように、安定していた。

19 ここで急に、フロントの男の口調はフォーマルなものから黒人訛りに変わる。翻訳で表現するとインチキくさいくだけたヤクザ調の口調に変えてみたりするわけだが、それもわざとらしいので、まあ敬語がため口になるくらいの変化にしかできないのはちょっと悔しい。

20 On a confidential lay. いまやっている仕事が極秘のものだということ。村上春樹訳は「口の堅さが売り物の仕事だ」。この特定の案件についてのことであって、この職業全体の話ではない。

「あんた、昼飯を食ったばかりかもしれんな」

「昼飯ってのは、わしの体型や気質の人間なら飛ばそうとするもんだ」また声下がった。「机のこっちがわにきてくれ」

おれがそっちにまわり、ポケットから倉庫止めウイスキーの平べったいパイナップルびんを抜き出し、棚にのせた。そして机の前に戻った。彼は身をかがめてそれを検討した。満足したようだった。

「兄弟、こいつで何か買収できると思ったらおおまちがいだぞ。だが軽く一杯ご相伴させていただくのは光栄だ」

彼はボトルを開け、机に小さなグラスを二つのせ、静かにそれぞれを縁まで注いだ。片方を持ち上げ、慎重に匂いを嗅ぎ、小指をたてて、それをのどに流し込んだ。

彼はそれを味わい、思索し、うなずいた。「こいつは正しいボトルから出てきたシロモノだけ、兄弟。さてどんな風にお役に立てますかな？ここいらじゃ、歩道の割れ目一つだってわしにはマブダチみたいなもんだ。はいはい旦那、この酒は相手をしっかり選んできたようで」と彼はグラスをまた満たした。

おれはフロリアンズでの出来事とその原因について話した。男は荘厳におれを見つめてはげ頭を振った。

「サムが経営してたのは、素敵で静かな場所だったのにねえ。あそこじゃもう一ヶ月も、だれも刺されてない」

「フロリアンズが六年か八年かもっと最近まで白人の店だった頃は、なんて名前の店だったんだ？」

「ネオンサインってのは、ずいぶん高くつくものなんだぜ、兄弟」

おれはうなずいた。「名前は同じだったんじゃないかとおれも思ったんだよな。名前が変わっていたらマロイは何か言っただろう。だが経営者は？」

「あんたにはちょっとばかりあきれるよ、兄弟²¹。あのあわれな罪人の名前はフロリアン。マイク・フロリアンだよ——」

「そしてマイク・フロリアンはどうなった？」

21 「フロリアンズ」という店の所有者がフロリアンだってこともわかんないのか、このバカ、という意味。村上春樹訳は「あんたは私を驚かせてくれるね」になっていて、うーん、まあわからなくもないか。

黒人はその優しい茶色い手を広げた。声は朗々として悲しげだった。「死んだよ、兄弟。天に召された。一九三四年、それとも三五年だったかな。そこは厳密には覚えてない。無駄死にだよ、腎臓が完全にイカレたとか。ろくでもない男は角なしの雄牛みたいにぼったり死んだんだよ、兄弟。だが彼方の天国ではお慈悲が待ち受けてるはずよ」その声は普通の大きさに戻った。「わしには理由なんざ皆目見当つかんがね」

「遺族はいるか？ もう一杯いけよ」

彼はボトルにしっかりとコルク栓をはめ、カウンター越しに押しやった。「二杯でおしまいだよ、兄弟——日のあるうちは。だがありがとよ。あんたのアプローチのやり方は、男の尊厳をくすぐってくれる……未亡人がいた。ジェシーっていう」

「その人はどうなった？」

「兄弟、知識の探求ってのはいろいろ質問するってことだ。わしは聞いとらん。電話帳でも見てみることだ」

ロビーの暗い片隅に電話ボックスがあった。そこにでかけて、ボックスの明かりがつくところまで扉を閉めた。鎖でつながれたボロボロの電話帳でその名前を探した。フロリアン是一件もない。おれは机のところに戻った。

「成果なし」

黒人は面倒くさそうに身をかがめ、市の人名録を力をこめて机の上に持ち上げ、こちらに押しやった。彼は目を閉じた。退屈しかけている。ジェシー・フロリアン、未亡人がその人名録には出ていた。住所は西五十四番街 1644。まったくおれは、脳みそをこれまでまともに使ってこなかったのか。

その住所を紙切れに書いて、人名録を机越しに押し戻した。黒人はそれを元の場所に戻し、おれと握手して、入ってきたときとまったく同じ机の上の場所で手を組んだ。まぶたがゆっくりと下がり、眠ってしまったように見えた。

この一件は彼にとってはおしまいだった。戸口まで半ばのところまで、おれはチラリと振り返った。男の目は閉じ、呼吸は穏やかで安定し呼吸の終わりごとに唇を震わせていた。はげ頭が輝いた。

おれはホテル・サンズーシーを出て、通りを横切り車に戻った。実に簡単。あまりに簡単すぎると思えない。

[5]

西五十四番街 1644 は干からびた茶色の家で、その前に干からびた茶色の芝生があった。タフに見えるヤシの木のまわりに、土が大きくむき出しになっている。ポーチには、寂しい木製の揺り椅子が一脚あり、午後のそよ風で去年の刈り込まれていないポインセチアの大きな葉が、ひびわれたスタッコ壁にパタパタと当たっていた。こわばり黄ばんだ洗いかけの衣服が、横庭の錆びた針金ではためいている。

そのまま四分の一街区ほど車を走らせ、通り向かいに駐車して歩いて戻った。

呼び鈴が壊れていたので、網戸の木枠を叩いた。ゆっくりと床をひきずる足音がして、あらわれた薄暗がりの中にいたのは、扉を開けながら鼻をかむ、だらしない女だった。顔は灰色でふくれている。髪はぼさぼさで、茶色でもブロンドでもない、ショウガ色というほどは生気がなく、灰色といえるほどはきれいでない、あいまいな色をしている。身体は太っていて、着ているのは色もデザインもはるか昔の、輪郭のあいまいな毛羽立ちフラシ天バスローブだ。何か身体を覆っているだけの代物。傷だらけの茶色い革製男物スリッパから、でかいつま先が顔をのぞかせている。

「フロリアン夫人？ ジェシー・フロリアン夫人ですか？」

「そうだけど」という声はベッドから下りてくる病人みたいに彼女ののどからしぼりだされた。

「セントラル街で娯楽店舗を営んでいた、マイク・フロリアンの奥様なんですか？」

彼女は親指で、大きな耳の前の毛束をかきあげた。その目が驚きで輝いた。重たくつかえた声こう言った。

「な、なんだってえ？ いやはやなんてこったろね。マイクはもう五年も前に死んだよ。あんた、だれだって言ったっけ？」

網戸はまだ閉じられフックがかけられたままだった。

「捜査してまして、ちょっと情報を求めています」

彼女は丸々陰鬱な一分もかけておれを見つめた。そして苦勞しつつドアのフックを外し、背を向けた。

「んじゃあ入っといで。まだ掃除の暇がなくてね」と泣き言。「オマワリかい、え？」

おれは戸口をまたぎ、網戸のフックを掛け直した。扉の左側の部屋の隅には、巨大でカッコいいキャビネット式ラジオが鳴り響いていた。そこにある唯一のまともな家具だった。新品に見える。他のものはすべてガラクタ——汚い詰め物しすぎの鍵、ポーチにあったやつとセットの木製の揺り椅子、四角いアーチが続く食堂には染みのついたテーブル、その向こうのスイングドアには指の跡だらけ。いくつか色あせたランプに派手なカバーがついていたが、いまや引退立ちんぼ並の華やかさ。

女は揺り椅子にすわり、スリッパをばたつかせながらおれを見た。おれはラジオを見て、ソファの端っこにすわった。彼女は、おれがラジオを見ているのを見た。その顔と声に、作り物の陽気さが入り込んだが、中国人のお茶並に薄い。「唯一の伴侶でねえ」と言って、彼女はクスクス笑った。「マイクがまた何かやらかしたわけじゃないだろうね？ 最近はあまりオマワリからお呼びもかからないよ」

そのクスクス笑いは軽いアル中の声色を持っていた。後ろにもたれると何か硬い物が背中にあたり、それを手探りすると、一クオート入りのジンの空き瓶が出てきた。女はまたクスクス笑った。

「いまのは冗談だよ。でも、いまのあいつの居場所に安手のブロンドがたくさんいると願いたいね。ここじゃいくらいても足りなかったからね」

「むしろ赤毛を探してるんですが」

「赤毛も多少は歓迎だろうよ、あいつ」。彼女の目は、どうもいまや前ほどぼんやりしていないようだった。「パツとは思いつかないけど。何か具体的にだれかのこと？」

「ええ。ヴェルマという娘。どんな姓を名乗っていたかは知りませんが、どうせ偽名でしょう。ご親戚のために居場所を探してるもんで。あなたのセントラル街の店はいまは有色人種店ですが、名前は昔のままで、もちろんいまの連中はヴェルマなんて聞いたこともない。そこであなたを探し出したってわけで」

「親戚がずいぶんと手をこまねいてた後で——その子を探してる、と」女は考え込んだ。

「ちょっとお金がからんでるんです。大した額じゃない。たぶんそれに手をつけるのに、彼女と連絡を取らないといけないんでしょう。金ってやつは記憶を磨いてくれるもんで」

「それを言うなら、酒もそうだねえ。なんか今日は暑いじゃないか。でもあんた、おまわりだって言ってたね」。狡猾な目、しっかりした抜け目のない顔。男物スリッパの足は動かなかった。

おれは空き瓶を掲げて振って見せた。そしてそれを脇に投げ捨て、手を尻にまわして、ホテルの黒人フロント係とおれがほとんど手をつけていない、あの倉庫止めウィスキーの一ポイントびんを取りだした。それをひぎに置いた。女の目が信じられないという視線でそれに釘付けになった。そして疑念が顔中に広がった。まるで子ネコのようなのだが、そんなに楽しげではなかった。

「あんた、おまわりなんかじゃないね。そんな立派な酒を買うようなおまわりはいないよ。こりゃ何の冗談だい、旦那？」

彼女の声は柔らかかった。再び鼻をかんだが、そのハンカチはこれまでお目にかかったこともないほど汚かった。目はボトルに釘付けだった。疑惑が渴きと闘っていて、渴きのほうが勝っていた。いつものことだ。

「このヴェルマって子はエンターテイナー、歌手だったんですよ。ご存じありませんかねえ？ まああなたは店にそんなに顔を出さなかったかも」

海藻色の目はボトルを見つめたままだった。苔の生えた舌が唇の上で丸まっていた。彼女はため息をついた。

「うーん、そいつはまともな酒だねえ。あんただだれだろうと、どうでもいいわ。とにかくそいつを注意して持ってなよ、旦那。何かを落としたりするような頃合いじゃないからね」

彼女は立ち上がり、部屋をよたよたと出て、分厚い汚れたグラスを二つ手に戻ってきた。

「割ったりはなし。あんたの持ってきたものだけ」

おれなら舞い上がってしまいそうなほどの量を注いでやった。彼女は飢えたように手を伸ばし、それをアスピリン錠剤でも飲むかのように一気に飲み込んで、またボトルを見た。おれはもう一杯注ぎ、自分にも少なめに一杯注いだ。女はそれを揺り椅子に持っていった。目はすでに二段階ほど茶色味を増していた。

「効くねえ、こいつはスルスルッと入っちゃうよ²²。何が起きたかわかんないうちに消えちゃった。で、何の話をしてたんだっけ？」

22 Man, this stuff dies painless with me 村上春樹訳「この酒は私の中で安らかに成仏したよ」。仏教徒でもない人が成仏を持ち出すのはねえ。昔ぼくもやっちゃったことがあるけれど、いささか文脈的に不自然。

「セントラル街のあなたの店で働いてた、ヴェルマっていう赤毛の子」

「そうだった」彼女は二杯目を空けた。おれは女に近づき、その隣にボトルを立てた。女は手を伸ばした。「そうそう。で、あんただれと言ったっけ？」

おれは名刺を取りだして渡した。彼女は舌と唇を動かしながらそれを読み、脇のテーブルの上に置いて、その上に空のグラスを乗せた。

「おや、私立探偵かい。さっきはそう言わなかったね、旦那」と彼女は陽気にたしなめるように指をこっちに振って見せた。「でもあんたの酒は、その点であんたが悪い奴じゃないと言ってるよ。犯罪に乾杯」彼女は三杯目を手酌で注ぎ、飲み干した。

おれはすわって、指の間でタバコをまわして待った。何か知ってるのか知らないのか。知ってるのであれば、それを話してくれるか話さないか。実に単純な話だ。

「カワイイ赤毛ちゃんね」と女はゆっくり粘るように言った。「うん、覚えてるよ。歌に踊り。素敵な脚で、それを惜しげも無くさらしてた。どっかにいっちゃったよ。あんなスベタどものやることなんて、あたしにわかるもんかいね」

「ええ、おれもあなたが知っていると本気では思わなかったんですが、でもお伺いしてお尋ねするのが筋ですからね、フロリアンさん。さあウイスキーもっとどうぞ——必要になったらまた行って買ってきますよ」

「あんた、飲んでないね」彼女がいきなり言った。

おれはグラスを握り、その中身をゆっくりと飲み込んで、その中身が実際より多く見えるようにした。

「あの子の親戚ってのはどこにいるんだい？」彼女はいきなり尋ねた。

「それが何の関係が？」

彼女はせせら笑った。「いいよ。オマワリなんてみんな同じだ。いいよ、坊や。酒をおごってくれる男は相棒だよ」彼女はボトルに手を伸ばして四杯目を注いだ。「あんたとなんかダベってるべきじゃないんだけどね。でも男が気に入ったら、あたしはどこまでもやってあげるんだよ」と愛想笑いしてみせる。洗濯桶並のかわいさ。「そこを動くんじゃないよ、ちょっと腰据えてな。いいこと思いついたからね」

彼女は揺り椅子から立ち上がり、くしゃみをして、ほとんどバスローブが脱げそうになり、それを何とか腹に叩きつけるようにして抑え、冷たい目でおれを睨んだ。

「覗いちゃダメよ」と言って再び部屋を出て、その際に戸口に肩をぶつけた。

おぼつかない足取りが家の奥へと向かうのが聞こえた。

正面の壁をポインセチアの新芽がピタピタと鈍く叩き続けた。物干し綱が家の横で漠然ときしんでいた。アイスクリーム売りが鐘を鳴らしつつ通り過ぎた。隅のでっかい新品のかっこいいラジオが、トーチソングのさびを歌う歌手の、深く柔らかく震える声のように、踊りと愛について囁いていた。

すると家の裏手から、各種のがちゃんという音がした。椅子が後ろ向きに倒れたようで、机の引き出しを引っ張りだしすぎて床に落ちたような音、ひっくり返し、倒し、ブツブツと呪詛のことばが聞こえてきた。それから鍵がカチリというゆっくりした音が聞こえ、トランクのふたが開くきしみ音がした。さらにひっくりかえしとぶつかる音。お盆が床に落ちた。おれはソファから立ち上がり、居間にこっそり入って、そこから短い廊下に出た。開いたドアの縁からのぞき込んだ。

彼女はその中でトランクの前で身体をゆすり、その中身をひつつかんで、髪をおでこから怒りにまかせてはねのけていた。自分で思ったより酔っていたのだ。身を屈めてトランクの上で身体を安定させ、咳き込んでため息をついた。そして太った膝をついて、両手をトランクにつっこんで探し回った。

その手が何かを不安定につかんで上がってきた。色あせたピンクのテープで結ばれた分厚い小包だ。ゆっくり、不器用に、彼女はテープをほどいた。その束の中から封筒を一つ取り出し、身を再びかかめてその封筒を、トランク右手の見えないところに突っ込んだ。震える指でテープを結び直した。

おれはこっそり来た道に戻り、ソファにすわった。派手な呼吸音をたてつつ、女は居間に戻ってきて、テープで縛った包みを持って戸口で身体を左右にゆすりつつ立った。

勝ち誇ったように彼女はニヤリとして、その小包を放り投げると、それが足下近くのどこかに落ちた。彼女はヨタヨタと揺り椅子に戻り、すわってウィスキーに手をのぼした。

おれは包みを床から拾い、色あせたピンクのテープをほどいた。女はうなった。

「まあ目を通して見てよ。写真。新聞記事。といってもあの売女ども、警察の指名手配でもなきゃ新聞ネタにはならないけどね。店の連中がそこにいるよ。あのろくでなしが遺したのはそれだけ——それと自分の古着だけ」

おれはプロフェッショナルとしてポーズをとった男女の光沢写真。男たちは鋭いキツネめいた顔立ちで、競馬場のような服装かエキセントリックな道化メイクをしていた。ガソリンスタンド巡業のダンサーやコメディアンたち。ロサンゼルスメイン通り西、芸能界の主流に食い込める者はあまりいないだろう。それなりに品のいい役でも田舎町ドサ回りのボードビル芝居、下品なら安手のストリップ小屋、法律ギリギリの下品さで、たまにはガサ入れを喰らって騒々しい警察法廷裁判が起きるくらいの下品さ、それがすめばまた同じ舞台に戻り、ニヤニヤとして、熾烈なまでに汚く、すえた汗の匂いほどの悪臭を放つ。女たちはいい脚をしていて、風紀委員会ウィル・ヘイズのお気に召さないほど股の内側をのぞかせている。だがその顔は、会計士の事務所での上着並にくたびれている。ブロンド、ブルネット、農民の退屈さをたたえた、巨大な牛まがいの目。少年めいた貪欲さをたたえた、小さく鋭い目。いくつかの顔は見るからに悪漢だ。一人、二人は赤毛かもしれない。写真を見ただけではわからない。²³おれは特に興味も持たずにそれを流し見すると、またテープを結わえた。

「こんな連中はだれも、おれにわかるわけがない。なんでこんなものを見せるんだ？」

女は危なっかしげに右手で格闘しているボトルの上からおれに流し目をくれた。「あんた、ヴェルマを探してるんじゃないのかい？」

「この中にいるのか？」

深い奸計が彼女の顔にあらわれたが、何もおもしろい結果がないのですぐに消えた。「その子の写真はないのかい——その親戚さんどもから？」

「いや」

それで女は不審に思った。どんな女子もどっかに写真を持ってるもんだ。たとえ丈の短いドレスで髪にリボンをつけた写真しかないとしても。おれがそれを持ってないのはおかしい。

「またあんたのことが気に食わなくなってきたようだよ」女はほとんど静かな声で言った。

おれはグラスを持って立ち上がり、歩いてそれをテーブルの彼女の側に置いた。

「あんたがボトルを開ける前に、おれに一杯注いでくれ」

彼女がグラスに手をのばすと、おれはふりかえり、四角いアーチを通過して食堂に、廊下に、開いたトランクとひっくり返ったお盆のある散らかったベッドルームへとすばやく歩いていった。後ろから

23 当然ながら、この時代の写真はすべて白黒写真なので、髪の色はわからない。村上春樹訳ではこのため、ここの「写真」の前に「白黒の」と追加している。これは親切でよい配慮だと思う。

声が叫んだ。おれはトランクの右側に手をつっこんで、封筒を指先に感じ、それをすばやく取りだした。

居間に戻ったとき、女は立ち上がっていたが、まだ二、三步歩いただけだった。その目には異様な淀みがあった。人殺しめいた淀みだ。

おれは女にわざと歯をむき出してみせた。「すわれ。いまはあんたが相手にしてるのは、ヘラ鹿マロイみたいな単細胞のでくの棒じゃねえんだ」

これはほとんど当てずっぽうの物言いだっし、完全に外したようだった²⁴。彼女は二度まばたきして、上唇で鼻を持ち上げようとした。汚い歯が何本か、ウサギの意地悪い顔つきとなつてのぞいた。

「ヘラ鹿？ あのヘラ鹿かい？ あいつがどうしたんだい？」彼女は息をのんだ。

「シャバに出たんだ。牢屋を出て。そこらをうろついてるよ、四十五口径を持ってね。今朝、セントラルで黒んぼを殺したんだ。ヴェルマの居所を言わなかったからって理由で。いまや自分を通報した密告屋を探してる」

女の顔がさっと白くなった。ボトルを唇にあててがぶ飲みした。ウィスキーの一部はアゴをつたい落ちた。

「それでサツが探してるのは、あいつのほうなんだ」と彼女は笑った。「おまわりども。イエイ！」

なんとも素敵な婆さんだねえ。いっしょにいてホント楽しいよ。おれ自身の卑しい目的のためにこいつを酔っ払わせるなんて、実に素敵じゃないか。おれって何とも粋な野郎だ。おれであるのが楽しくてしょうがない。この稼業ではほとんどどんなことにも手を染めなきゃならないが、そろそろ胸が悪くなり始めた。

自分の手が握りしめていた封筒を開けて、光沢処理をされたスチル写真を取りだした。他のと似てはいたが、ちょっとちがってずっと素敵な写真だ。娘はウェストから上はピエロ衣装を着ている。てっぺんに黒ポンポンのついた白い円錐帽の下で、そのふわりと広がる髪の毛は暗い色調で、赤だったかもしれない。顔は横顔になっていたが、見えている目は陽気さをたたえているようだ。美しく無垢な顔とは言わない、おれは顔はそこまで得意じゃないんだ。でもきれいな顔だ。しかしきわめて普

24 ここは原文が非常に下手クソなところ。その直後の展開で、ヘラ鹿マロイの話は見事に女の反応を引き出してる。だからそれがまったく的外れだった、なんてここで言っても、別に皮肉にも反語にもならない。読者が混乱するだけ。「当てずっぽうだったけど、まぐれで当たり」と書いておけばいいのに。

通の顔だし、そのきれいさは本当に量産型。昼の時間ともなれば、どの市街でもこの手の顔は一ダースもお目にかかる。

その写真のウェスト以下はほとんど脚で、しかもかなり素敵な脚だった。右手下の隅にはサインがあった。「いつもあなたの——ヴェルマ・ヴァレント」

それをフロリアン女の前の、手の届かないところに掲げて見せた。彼女は飛びつこうとしたが届かなかった。

「なぜ隠した？」

激しい呼吸音以外は何も音をたてなかった。おれは写真を封筒に戻し、その封筒をポケットに入れた。

「なぜ隠した？」おれは改めて尋ねた。「他のみんなと何がちがうんだ？ いまどこにいる？」

「死んだよ。いい子だったんだけどね。死んだよ。さあ、サツは消えちまいな」

赤茶色のぼさぼさの眉が上がり下がりした。その手が開き、ウィスキーのボトルがじゅうたんにすべり落ちてゴボゴボと中身が流れ始めた。おれは身をかがめてそれを拾った。女はおれの顔を蹴ろうとした。おれは彼女から退いた。

「それでもなぜあんたがこれを隠したかの説明にはなっていない。いつ死んだ？ どんなふうにな？」

彼女は鼻をならした。「あたしや哀れな病気の婆さんだよ。どっかいつちまえ、このクソ野郎」

おれはそこに立ち、何も言わずに彼女を見つめたが、特に言うべきことは思いつかなかった。しばらくして彼女の横に進み、いまやほぼ空っぽの平らなボトルをその脇のテーブルに置いた。

女はじゅうたんを見下ろしていた。ラジオは隅っこで心地よくなっていた。外を車が通り過ぎた。窓ではハエがうなっていた。長いことたって、彼女は唇をもう片方の上に動かして床に何か話していた。無意味なことばのかたまりで、そこから何が出てきたわけでもない。それから笑うと、頭を振り上げてよだれを垂らした。そして右手がボトルにのぼされ、それを飲み干すとボトルが歯に当たった。空っぽになると、それを逆さにして振って、おれに投げつけた。どこかの角に飛んでいって、じゅうたん沿いにすべり、幅木にどすんとぶち当たった。

彼女は再びおれに流し目をくれた。そして目が閉じ、いびきをかきはじめた。

お芝居かもしれないが、どうでもよかった。いきなりもうこんなのたくさん、お腹いっぱいという気分になった。いっぱい過ぎるほどだ。

ソファから帽子を拾い、戸口まで行ってそれを空け、網戸を抜けた。ラジオはまだ隅っこでうなり、女はまだ椅子の中で穏やかにいびきをかいている。扉を閉じる前にふりかえってすばやく一瞥をくれ、それから扉を閉め、もう一度静かに開いて、またのぞいた。

女の目はまだ閉じていたが、まぶたの下で何かきらめいた。おれは階段をおり、ひびの入った歩道に沿って通りに出た。

隣の家では窓のカーテンの片側が開いており、細長い興味津々の顔がガラスに顔を押しつけ、覗いていた。白髪ととがった鼻を持つ婆さん顔だ。

詮索好きの歳寄りのご近所を見張ってる。一街区ごとに少なくとも一人はこういうのがいる。おれはそっちに手を振った。カーテンが下ろされた。

車に戻ると乗り混んで七十七番街分署まで戻り、二階にあるナルティーの事務室と称する臭い小さな狸穴へと階段を登った。

[6]

ナルティは身動きしていないように見えた。苦々しい忍耐強さという同じ態度で椅子にすわっている。だが灰皿には葉巻の吸いさしが二つ増えていて、床はマッチの燃えさしで少し分厚くなっていた。

おれは開いた机に向かってすわり、ナルティーは自分の机に伏せてあった写真をひっくり返してこちらに寄越した。警察の面通し写真、正面と横顔で、その下には指紋分類がついている。マロイにまちがいない。強い照明の下で撮った写真で、まるでフレンチロール並に眉がないような映りだ。

「こいつだ」とおれはそれを返した。

「オレゴン州立刑務所から電報がきた。刑期は全部勤め上げているが、お上ともめた部分は計算に入っていない。状況は改善してるようだ。もう追い詰めた。パトカーが、七番街線の終点で車掌と話をしたんだと。車掌はそんな大きさの男で、そんな様子の男を見かけたそうだ。三番街とアレクサンドリアの交差点で降りたって。これからそいつは、家主が留守のどこかでかい家に侵入するだろうよ。そういう家はあのあたりにたくさんある、古くさい場所で今じゃダウンタウンに近すぎて²⁵、賃貸でも借り手がなかなかつかない家だ。そういう家のどれかに侵入するから、そしたらもう袋のネズミだ。おまえのほうは何してた？」

「そいつ、派手な帽子と上着に白いゴルフボールがついてたか？」

ナルティーは顔をしかめてひざ小僧の上の手をよじった。「いや、青スーツ。茶色だったかも」

「サロングじゃなかったのは確かか？」

「え？ ああそうかい、おもしろいよ。非番の日に笑うから忠告してくれよな」

25 Too far downtown. 村上春樹訳「ダウンタウンから遠くなったために」。いまの常識だとそう解釈したくなる。too far (from) downtown と省略されたんだ、という解釈ですな。AIくんもそう解釈する。ただ、ぼくはちがうんじゃないかと思う。まず、ダウンタウンがなぜ遠くなるのよ。なんか変だと思わない？ 実は1940年代だと、インナーシティ問題がだんだん顕在化してきて、自動車の普及に伴い、高級住宅街の郊外移転が始まりつつあった。ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』（山形浩生訳、鹿島出版会）の特に訳者解説を参照。だからそれに近いほうが貸り手がつきにくい状況がおそらくここで述べられている。省略があるとは考えず「（スラム化しかけた）ダウンタウンに入り込みすぎて」と解釈すべき。これを村上春樹にわかれというのはちょっと酷かも。しかし本作冒頭でまっ先に、かつては白人街だった都心がいまや黒人街になりつつある様子が書かれており、都市環境の変化は本作の重要な背景。だから少しは意識してほしい。

「そいつはヘラ鹿マロイじゃない。あいつは路電なんかに乗らない。カネは持ってる。着ていた服を考えてくれ。吊るしものは着られない。注文服しかあり得ない」

ナルティーは顔をしかめた。「いいよ、バカにすればいいよ。おまえは何をしてたんだ？」

「あんたがやるべきだった仕事ですよ。このフロリアンズという店は、白人向けの夜の店だったときも同じ名前だった。あの近所を知ってる黒人ホテルマンと話をしたんだ。看板は高価なので黒人どもは店が代替わりしてもその名前を使い続けたんだ。所有者の名前はマイク・フロリアンだ。もう数年前に死んだが、未亡人がまだいる。西五十四番街 1644 に住んでる。名前はジェシー・フロリアン。電話帳には載ってないが、市の人名録には出てる」

「で、おれにどうしろと——その婆さんとデートでもしろってか？」とナルティー。

「それはおれが代わりにやっといたから。バーボン・ポイントを持ってったんだ。チャーミングな中年女で、顔は泥バケツみたいで、クーリッジ大統領第二期²⁶以来髪を洗ったことがあったなら、スペアタイヤを食ってやりますよ、リムも含めまるごとね」

「つまらん冗談はとばせ」とナルティー。

「フロリアン夫人にヴェルマのことを訊いたんですよ。ご記憶かと思いますがね、ナルティーさん、ヘラ鹿マロイが探していた赤毛のヴェルマって娘ですよ。退屈させてないといいんですがね、ナルティーさん」

「何をそうカリカリしてるんだ？」

「あんたにゃわからん。フロリアン夫人は、ヴェルマは覚えてないと言った。彼女の家は本当にボロで、ラジオだけ新しい。七十ドルか八十ドルはする」

「どうしておれがそれで大騒ぎしなきゃいけないのか、まだ話してくれてないぞ」

「フロリアン夫人は——おれにはジェシーですが——夫は古着と、ときどき店で働いた役者どものスチル以外何も残さなかったと言った。酒で釣ったんだが、この女はボトルのためにこっちを蹴倒さなきゃいけないでもボトルに飛びつくような人間なんだ。三杯目か四杯目で、彼女は慎ましい寝室にでかけてあれこれ探し回り、古いトランクのそこからそのスチル写真の束を掘り出したんだ。でもこっそりそれを見ていたんだが、その束から一枚抜き出して隠した。そこでしばらくして、おれはそこに忍び込んで隠した写真を奪った」

26 蛇足ながら、1924-1929です。

おれはポケットに手を突っ込んで、ピエロ娘を机にのせた。彼はそれを手に取り、じっと見つめ、唇の角がよじれた。

「かわいいじゃないか。十分かわいい。昔なら、是非ともお相手していただきたかったがな、ハッハッハ。ヴェルマ・ヴァレントだって？ このかわい子ちゃんはどうなった？」

「フロリアン夫人は、死んだという——でもそれじゃ、なぜ写真を隠したか説明がつかない」

「確かに説明つかないな。なぜ隠したんだ？」

「話してくれない。とうとう、ヘラ鹿マロイが出所したと話したら、なんだか気に入っていただけなくなったようなんだ。そんなことってあり得ないでしょう、ねえ？」

「先を続けて」とナルティー。

「それだけ。事実を話して証拠を渡した。これだけお膳立てして何かつかめないなら、もう何を言ってもお役には立てんよ」

「どう役に立つんだ？ 結局は黒人殺しじゃないか。マロイを捕まえるまで待てよ。だいたい、あいつがその娘に会って八年たってるんだらうに。彼女がムショに面会に行っていなければだがな」

「そうかい。だがマロイが彼女を探しているのを忘れるなよ。あいつは手段を選ばない男だ。ちなみに、あいつは銀行強盗でくらったんだろ。つまり懸賞金がかかった。それを受け取ったのはだれだ？」

「知らんな。調べればわかるかも。なぜだ？」

「だれかがマロイを密告したんだ。だれだか知ってるのかもしれない。それはあいつが手間暇かける別の仕事になるだらう」おれは立ち上がった。「じゃあ、ごきげんよう。ご幸運を」

「おれを見捨てるのか？」

おれは扉のところに行った。「家に帰って風呂に入ってうがいをして爪にマニキュアをしなきゃならんもんでね」

「病気じゃないんだろ」

「薄汚れた気分なだけだ。すごく、すごく薄汚れた気分」

「まあそう急ぐこともないだらう。ちょっと座れよ」彼は後ろにもたれて両親指をチョッキに引っかけた。それで多少は警察らしくなったが、それで魅力がいささかも増したりはしなかった。

「急いじゃない。まるで急ぎじゃない。おれにできることはもうないんだよ。どうやらこのヴェルマは死んだらしい、フロリアン夫人がウソをついていないならね——そして現時点では、これについて彼女がウソをつくべき理由はおれは何も知らない。おれに興味があったのはそれだけだ」

「なるほどねえ」とナルティーは疑い深そうに言った——それが習慣なのだ。

「それに、あんたはどのみちヘラ鹿マロイを完全に追い詰めてるんだろう、それでいいじゃないか。だからおれはこのまま家に帰って、食い扶持を稼ぐ仕事に精を出すとするよ」

「マロイは捕まえ損ねるかもしれん。ときどき網の目をすりぬけるヤツもいる。大男であっても」。また彼の目には疑惑の色が浮かんでいた、あの目に多少なりとも表情があればの話だが。「彼女にいくら袖の下をもらった？」

「何だって？」

「この婆さん、おまえに手を引かせるのにいくら払った？」

「手を引くって何を？」

「なんだか知らんが、これからおまえが手を引くことにしたものだよ」彼は親指を脇の下から動かして、ベストの前に持ってくると、それをお互いに押し合わせた。にっこりした。

「チッ、まったく信じられん」とおれは事務室を出て行って、口をあぐり開けた彼を後にした。

ドアから一メートルほど離れたところで、おれは戻ってその扉を静かに開けて中をのぞいた。ナルティーは同じ姿勢でそこにすわっており、両親指を押しつけ合ったままだった。だがもうにっこりはしていなかった。心配そうだった。口はまだあぐり開いていた。

動きもしない、顔を上げもしない。おれが戻っていたのが聞こえたかもわからなかった。おれは再び扉を閉じて立ち去った。

[7]



その年はカレンダーがレンブラントだった。色指定がなまくらなので、いささか薄汚い自画像だ²⁷。かれが汚い親指で、薄汚いパレットを持ち、スコットランドの縁なし帽をかぶっているが、こいつもさしてきれいじゃない。反対の手は絵筆を持って宙に構えており、しばらくしたらちょっと仕事でもしようか、ただしだれかが頭金を払えばの話だ、とでも言うようだ。顔は老い、たるんで、人生への嫌悪と酒の影響の深まりを大いに示している。だがそこにある確固たる陽気さは気に入ったし、目は露のように輝いている。

こいつをおれの事務所の机越しに四時半頃眺めていると、電話がなって、冷ややかで尊大な声した。まるでそいつは、自分の声はかなりいいと思っているかのようだった。おれが電話に出ると、それがまだるっこく言った。

「そちらはフィリップ・マーロウ、私立探偵だな？」

「ご名答」

「おや——つまり、イエスということだね。余計なことをしゃべらないと信用できる人物だという推薦を受けた。今晚七時にうちにおいでいただきたい。相談したいことがある。私はリンゼイ・マリOTT、住所はモンテマー・ヴィスタのカブリー口街四二一二だ。場所はわかるかね？」

「モンテマー・ヴィスタの場所なら知ってますよ、マリOTTさん」

「よろしい。だがカブリー口街はいささか見つけにくい。ここらの通りはすべて、興味深いながらややこしい曲線として敷設されているのでね。歩道カフェから階段を上がってくるのをお勧めしたい。そうすれば、カブリー口は三番目にやってくる通りで、我が家はその街区唯一の家となる。では七時でよろしいかね？」

「この仕事はどんな性質のものでしょうか、マリOTTさん」

「それは電話では話さないほうが私としてはありがたい」

²⁷ おそらくここにあげたヤツだと思う。ほかにこの記述に近い自画像は見当たらない。

「ヒントくらいはくださいよ。モンテマー・ヴィスタはかなり遠いですし」

「合意できなくても、経費は喜んでお支払いしよう。仕事の性質について、何かこだわりがあるのかね？」

「合法的なものである限り特に」

声につららが生えた。「もし合法でなかりせば、そちらに電話などしなかつたらう」

ハーバード卒の野郎か。仮定法の素敵な使い方だ。さっさと逃げ出したくなったが、おれの銀行口座はまだアヒルの下におさまろうとするほどカツカツだ²⁸。おれは声に甘さをこめた。「お電話いただきありがとうございます、マリオットさん。うかがいますので」

向こうは電話を切り、それでおしまい。レンブラントさんが顔にかすかにせせら笑いを浮かべているような気がした。机の深い引き出しから事務室用のボトルを取り出し、軽くあおった。それでレンブラントさんの冷笑はさっさと消えた。

机のふちにくさび状の日光がすべりこんで、無音でじゅうたんにこぼれ落ちた。外の大通りでは信号がチカチカ、都市間の車が行き交い、共有壁の向こうでの弁護士事務所ではタイプライターが単調にカチカチと鳴っている。おれがパイプに煙草を詰めて火をつけたところで、また電話が鳴った。

こんどはナルティだった。口にジャガイモを突っ込んだ声をしている。「いやあ、どうもおれは何かと鈍いみたいだな」と、相手がおれだとわかった瞬間に彼は言った。「一発しくじった。マロイは例のフロリアンのご婦人に会いに行ったんだ」

おれは電話の耳当てが割れるくらい強く握りしめた。上唇がいきなり少し寒くなった。「続けて。袋のねずみじゃなかったのか」

「人違いだった。マロイはそんなあたりには全然いなかった。西五十四番の窓のぞき婆さんから電話があったんだ。フロリアンのご婦人に男が二人会いにきた。一人目は道の反対側に車を停めて、何やら用心深いふるまいだった。中に入る前にあのゴミためをしっかりと観察していったそうさ。一時間ほど滞在した。身長180センチ、黒髪、中肉のがっしりした男。静かに出てきた」

「あと息に酒が混じってた」

28 The end of my foot itched, but my bank account was still trying to crawl under a duck. 村上春樹訳「足の先っぽがどうにもむずむずした。しかし私の預金残高は、水面下で必死にあひるの水かきのようなことをしている」。足がかゆいというのは、どこかに行きたくなる、この場合だと逃げ出したくなるということ。crawl under a duckは、足の短いあひるの下に入る、つまり限りなく地面に＝ゼロに近いということ (duck 以外に cockroach とかを使うこともある)。村上訳は、前半はわかっているような雰囲気はある。後半はまちがいがだがニュアンスは伝わるかな。

「そうだよな、これはあんたのことだよな。で、二人目がマロイだった。派手な服で家くらいでかい。そいつも車で来たが、婆さんはナンバープレートはわからなかった。遠すぎて数字が読めなかったんだ。あんたが帰ってから一時間後くらいだったそうだよ。さっさと入って、五分くらいしか滞在しなかった。車に乗り混む直前に、でっかいチャカを撮りだして弾倉を回転してみせた。たぶん婆さんが目にしたそいつの行動はそういうことだったんだろ²⁹。だから警察に通報したんだ。でも銃声は聞いてない、家の中では」

「そりゃ大いのがっかりだろうな」

「そうとも。おもしろいよ。非番の日に笑うから忠告してくれよな。その婆さんものがっかりだ。うちのおまわりたち³⁰が様子を見に行ったが呼び鈴の返事がなくて、玄関に鍵がかかってなかったから中に入った。だれも床で死んでない。留守だ。フロリアンのご婦人はトズラだ。そこで隣の家に立ち寄って婆さんに言うと、自分がフロリアンさんの外出を見すごしたってんでもうカンカンだ。そこでおまわりたちは報告を入れて仕事に戻った。で、一時間くらい、または一時間半くらいかな、婆さんがまた電話してきて、フロリアン夫人が戻ったという。そこでおれにその電話がまわされて、おれはそれがどうかしましたかと答えて、婆さんは即座に電話を切りやがった」

ナルティーはそこで間を置いて少し息継ぎをすると、おれが何か言うのを待った。こっちは何も言うことはなかった。しばらく待ってから、ナルティーはもがもがが続けた。

「どう思う？」

「そう言われてもねえ。マロイはもちろん、そこに行く可能性は高かったよ。たぶんフロリアン夫人のことはかなりよく知っていただろうから。当然ながら長居はしないよな。警察がフロリアン夫人に目をつけてるかもと思うからな」

ナルティーは落ち着いていった。「思うんだが、出かけて彼女と話をしたほうがいいかも——どこへ言ったのか聞き出すとか」

「そいつはいい考えだ。だれかにあんたのケツを椅子から持ち上げてもらえたらな」

29 I guess that's what the old lady saw he done. 村上春樹訳「ばあさんが目にしたのはそのくらいのものだ」。そうじゃなくて、その婆さんはいろいろ言ったんだけど(たぶんあたりかまわず狙いをつけたとか殺し屋だとか)、その話を総合してみると実際にやったのは弾倉を回転させただけだろうとナルティーは判断した、ということ。

30 Prowl boys. 村上春樹訳「パトカーで警官が」。ロサンゼルスだからたぶんパトカーだったろうが、そうは書いていない。どうも村上春樹は、p.16でもそうだが「prowl」をパトカーのことだと思っているようだ。これは単に、巡回する、というだけの意味なので、まさに日本語のおまわりさん。

「え？ ああまた冗談かよ。でもいまとなっちゃ、別にどうでもいい感じではある。だからわざわざ行くこともなからう」

「わかったよ。なんだか知らんが言ってみろ」

彼は笑った。「マロイはもう完全に足がついた。今度は本当につかまえる。ジラードで目撃されたんだ、レンタカーで北に向かうところだった。そこでガソリン入れたんだが、スタンドの小僧がしばらく前の放送での特徴を聞いてて気がついたんだ。すべてが一致したそうだよ、ただしマロイはダークスーツに着替えていたそうだが。郡警察と州警察が追ってる。北に向かったらヴェンチュラ線で行かまえるし、リッジ線に迂回したら、キャストリックで検札のために止まることになる。止まらなかったら、先に電話して道路封鎖だ。できることなら、おまわりが撃たれるのは避けたい。いい感じだろ？」

「よさげではある。それが本当にマロイで、あんたらの期待通りの行動をあいつが採るならだが」

ナルティーは慎重に咳払いした。「そうだろ。ちなみにだな——おまえ、この件で何してる？」

「何も。なんでおれがこの件で動かにやならんのだ」

「あのフロリアンのご婦人と、かなり話が通じたようじゃないか。他になんか知ってるかもしれんぞ」

「酒びんさえあれば聞き出せる」

「あの女の扱いは見事だった。もしかして、もうちょっといっしょに時間を過ごしちゃどうだい」

「警察の仕事じゃないのか」

「そりゃそうだ。でも娘の線をあたるのはおまえの思いつきだ」

「その線は消えたようだ——フロリアンがウソをついてなければ」

「女なんてすぐウソつくもんだらう——必要なくても練習のためにウソをつく」とナルティーは陰気に言った。「あんた、すごく忙しかったりはしないんだろ？」

「仕事がある。こないだ会った後で入ってきたんだ。払いのある仕事だ。すまんね」

「逃げるのか」

「そういう言い方はどうかね。ただ食い扶持を稼ぐために仕事がいるんだ」

「そうかよ。そういう態度なら、もういいよ」

おれはほとんどどなりかけた。「態度がどうしたいう以前に、あんただろうと他のどんなおまわりだろうと、太鼓持ちしてやる暇はないってだけだよ」

「ふん、勝手にへそ曲げてろ」とナルティーは電話を切った。

おれは切れた電話を持ったまま、それに歯をむいてみせた。「おまわりが千七百五十人もいる町だってのに、おれにかわりに聞き込みやれってのか」

おれは電話の耳当てをおいて、事務室の酒瓶からもう一杯あおった。

しばらくして建物のロビーに下り、夕刊を買った。ナルティは少なくとも一点だけ正しかった。モングメリー殺しはいまのところ、求人欄にすら載っていない。

おれはまた事務所を後にして早めの夕食に向かった。

[8]

モンテマー・ヴィスタについたのは、日が暮れ始めたときだったが、まだ水面には細かいちらつきが残り、波ははるか沖合で、長くなめらかな曲線となって砕けていた。ペリカンの群れが、波の泡立つ縁のすぐ下で爆撃機編隊で飛んでいた。ヨットが一艘だけベイシティのヨットハーバーの向かいつつあった。その向こうには、太平洋の巨大な空虚が紫灰色となっていた。

モンテマー・ヴィスタは、大きさも形も様々な家が数ダース、必死の思いでギリギリのところでは山肌にかじりつき、まるででかいくしゃみでもあれば、浜辺のお弁当箱の間に転がり落ちてきそうな様子の場所だ。

浜辺の上には高速道路が幅の広いコンクリートのアーチの下を走っていた。そのアーチは実は歩道橋なのだ。その内側の端には太いメッキの手すりが片側についたコンクリート階段が、山肌をまっすぐ物差しで描いたように上がっている。そのアーチの向こうに顧客が言っていた歩道カフェがあり、店内は明るく陽気だったが、縞模様の日よけの下にある、鉄の脚でタイルを天板にした屋外テーブルは、たった一人黒人女³¹がいるだけだ。彼女はスラックス姿でタバコを吸い、海を感傷的に眺めつつ、目の前にビール瓶を置いている。フォクステリアが鉄製の椅子の一つを電柱がわりにしてオシッコをしていた。おれが車で横を通ると彼女は犬を形ばかり叱って見せたが、おれとしてもこの歩道カフェは、駐車場を拝借する以上の利用をするつもりはなかった。

おれは戻ってアーチをくぐり、階段を登り始めた。素敵な道のりだ、もしドタ作業がお好きならの話だが。カブリーリョ通りまでに二百八十段あった。階段は風に吹かれてきた砂に覆われ、手すりはガマガエルの腹のように冷たく濡れていた。

てっぺんについたときには、水面のきらめきは消え、折れた脚をだらりと垂れたカモメが沖合のそよ風に沿って身をよじっていた。おれは湿った冷たい階段にすわり、靴から砂を振って出し、心拍数が百の前半台に下がるまで待った。おおむね普通の呼吸に戻ると、おれはシャツを汗で貼り付いた背中から引き剥がして、階段から怒鳴って聞こえる範囲にある唯一の照明付き家屋へと進んだ。

31 Dark woman. 村上春樹訳「黒髪の女」。白人地域っぽい雰囲気ではあるが、一方で髪の話だと示すものはない。

素敵な小さな家で、塩でやられたらせん階段が、玄関へと続き、ポーチ照明としてイミテーションの馬車ランプを使っている。ガレージはその片側の下にあった。扉は巻き上げ式になっていて、ポーチ照明の明かりが巨大戦艦じみた車をぼんやり照らしている。縁はすべてクローム仕上げ、コヨーテの尻尾がラジエーターキャップ上の翼の生えた勝利の女神像につながっていて、エンブレムがあるべきところにイニシャルが彫られている。右側ハンドル車で、家よりもこっちのほうが高価そうだ。

おれはらせん階段を上がり、呼び鈴を探して、虎の頭の形をしたノッカーを使った。その叩く音は早晩の霧に飲み込まれた。家の中からは何の足音もしない。湿ったシャツが背中中で冷えてアイスパックのように感じられた。扉が静かに開き、向かいに立っていたのは背の高いブロンド男、白のフラシ天シャツを着ていて、首にすみれ色のサテンスカーフを巻いている。

白ジャケットの襟にヤグルマギクが挿してあり、その淡い青い目はそれと比べて色あせて見えた。すみれ色のスカーフはかなりゆるく、ネクタイはしておらず、首が太くて柔らかく茶色で、強い女の首みたいなのが見えた。顔立ちは少し重たげだが、ハンサムで、おれより三センチほど背が高く、だから身長百八十三センチというわけだ。そのブロンドの髪は、加工によるのか天然なのかはわからないが、三つの厳密なブロンドの崖に成形されていて、それが階段を思わせたので気に入らなかった。そうでなくても、どのみち気に入らなかつただろうが。こうしたすべて以外にも、この御仁は白いフラシ店のスーツを着て首にすみれ色のスカーフを巻き、襟にヤグルマギクを挿すような人物の全般的な様相を持ち合わせていた。

彼は軽く咳払いをして肩越しに暗くなる海を眺めた。その冷たい尊大な声が言った。「何か？」

「七時。ぴったりです」とおれ。

「おおそうだった。ええと、確か君の名前は——」彼は間を開けて、思い出そうと努力しているかのよう顔にしかめた。その結果は中古車の宣伝文句並に嘘くさいものだった。おれはしばらく相手が頑張るに任せてから、こう言った。

「フィリップ・マーロウです。この午後と同じですよ」

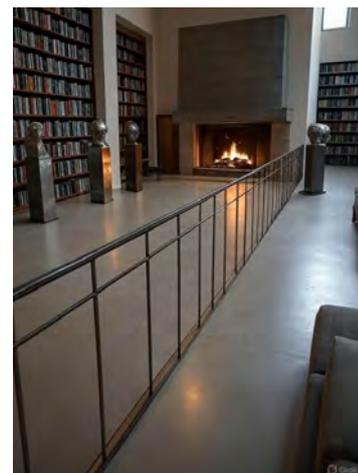
彼はすばやく一瞥するようなしかめっ面をしてみせ、まるでそれについてどうにかすべきだとも言いたげだった³²。それから一步退いて冷たくいった。

「ああ、そうだった。いやはや。入りたまえ、マーロウ。ハウスボーイは今晚は暇を取っている」

32 as if perhaps something ought to be done about that. 村上春樹訳「そんな真似は赦しがたいぞといわんばかりに」。そんな真似ってどんな真似？これはマーロウが、自分の名前は午後の電話のときから変わっていないと言った嫌味について、変わっているようにすべきだとも言いたげだった、ということ。

彼は扉を指先で広く開いた。まるで自分でドアを開けると自分が少し汚れてしまうとも言いたげだった。

男の横を歩いて家に入ると香水の香りがした。彼は扉を閉じた。入り口を入ると低いバルコニーに出て、そこについた手すりは巨大なスタジオ式居間の三面をずっと走っている。四面目は大きな暖炉と扉二つがついていた。暖炉では火がパチパチとはじけている。バルコニーには本棚が並び³³、テカった金属製のような彫刻がいくつか台座に載っている。



三段下りて居間の中心部分のフロアに下りた。絨毯はほとんど足首をくすぐるほどだ。コンサート・グランドピアノがあって、閉じられていた。その片隅には背の高い銀色のかびんが桃色のビロードの帯に乗っており、そこに黄色い薔薇が一輪だけ挿してある。素敵なふかふかの家具がたくさんあり、大量のフロアクッションも置かれ、一部は金の房飾りがつき、一部はむき出しだ。素敵な部屋だ、乱暴な真似をしなければ。影になった隅には、幅広のダマスカス織りに覆われた寝椅子がある。配役の見返りに関係を迫るときの寝椅子さながら³⁴。人々があぐらをかいてすわり、角砂糖をのせたアブサンをすすり、感極まった声で話してときには歓声をあげるだけの部屋だ。何でもありだが仕事だけではない部屋。

リンゼイ・マリOTT殿は、グランドピアノの曲線に身をおさめ、身を傾けて黄色い薔薇を嗅ぎ、フレンチエナメルタバコケースを開けて、黄金の吸い口を持つ、長い茶色のタバコに火をつけた。おれはピンクの椅子にすわって、跡がつかなければいいがと願った。キャメルに火をつけ、鼻から煙を吹き出して、台座にのった黒くピカピカの金属片を眺めた。滑らかな丸い曲線の浅い切れ目が入っており、曲線上に二つ突起がついている。おれはそれを見つめた。マリOTTは見つめるおれを見た。そしてさりげなく言った。

「おもしろい作品だ。ほんのこないだ手に入れたんだがね。アスタ・ディアル『暁の精神』だ」

「クロプスタインの『おケツのいぼ二つ』かと思いましたよ」

リンゼイ・マリOTT殿は、ハチを飲み込んだような顔をした。そして何とかそれを押し殺した。

33 バルコニーというと外向きのベランダという印象がまっ先にくるので、バルコニーに本棚が並ぶというイメージがつかめなかったが、三面が本棚で、その本棚の手前に幅一メートルくらいの通路があって、それが50センチくらい居間のフロアから上がってるってことね。これが三面にあるってことはかなり巨大な居間。AIに作らせてみたが、壁一面しかできんかった。

34 like a casting couch. 村上春樹訳「ハリウッドの配役担当重役の部屋に、日くありげに置いてありそうな寝椅子だ」。意味は分かっているようだが、いささか訳文を創作しすぎでしょう。

「いささか特異なユーモアのセンスを持っているようだね」

「特異、じゃない。単に遠慮がないだけで」

彼はすさまじく冷たく言った。「そうだな——もちろんそうだ。そうだろうとも……とにかく、君を呼び立てたのは、実のところ、かなりつまらない話ではあるんだ。君を呼び立てる必要もほとんどないくらい。今夜、男たちに会ってお金を払うことになっている。いっしょにだれかいたほうがいいかと思ってね。銃は持ってるか？」

「ときには、ええ」。おれはその幅広いたるんだあごのくぼみを眺めた。そこにビー玉を入れたらなくしてしまいそうだ。

「それを持ち歩くのは遠慮していただきたい。その手の話ではまったくないのだからね。純粋な商談でしかないんだ」

「ほとんどだれも撃ったりはしないんですがね。強請かなんかですか？」

彼は顔をしかめた。「そんなことがあるものか。私は人に強請られるような真似をしたりはしないのだよ」

「すごくいい人にでも起こることですよ。むしろいい人ほど強請られやすいとさえ言える」

彼はタバコを振った。そのアクアマリンの目にかすかに思慮深げな表情が浮かんだが、唇は笑った。絹の絞首ひもがついてくるような微笑だ。

彼はさらに煙を吹き、頭を後ろに傾けた。これがのどの柔らかくしっかりした線を強調した。その目がゆっくりと下がっておれを観察した。

「この男たちと会うのは——おそらくではあるが——かなり人気のない場所だ。どこかはまだわからない。詳細を伝える電話を待っているところだ。即座に出発する用意をしておかないと。ここからあまり遠くはない場所のはずだ。そういう取り決めになっている」

「もうしばらくこの交渉を進めてきたんですか？」

「実のところを言えば、三日か四日にわたり」

「ボディガード問題はぜひぶん後回しにしたんですねえ」

彼は考え込んだ。タバコから黒い灰を少し飛ばした。「確かにそうだ。腹がなかなか決まらなかったんだ。一人で行ったほうがいいんだろうが、だれかがいっしょにくることについては、何もはっきりした話はないんだ。その一方で、私もそこまで勇敢じゃない」

「向こうは見ればあなたがわかるんですね、もちろん」

「それは——わからない。大金を運んでいて、しかも私の金じゃ無いんだ。友人の代理だ。それを手元から離すのは道理にあわないとは思っているがね」

おれはタバコをもみ消して、ピンクの椅子で後ろにもたれ、両手の親指をもてあそんだ。「いくらです——そして何のために？」

「うん実は——」いまの男の微笑はそこそこいい感じだったが、まだ気に食わなかった。「それは話せない」

「単についてって帽子を持ってると？」

彼の手がまた跳び上がり、白い袖口に灰が少し落ちた。彼はそれを振り落とし、それがあった場所を見つめた。

「言いたくはないが、君の態度は気に入らん」と彼は声にトゲをこめた。

「そういう苦情は初めてじゃありませんがね。しかしいい材料がまったくない。この仕事をちょっと見て下さいよ。ボディガードがほしいけど、銃はだめ。手助けがほしいけれど、何をすべきかは教えられない。おれにずいぶんと危険を冒すよう求めつつ、その理由もその危険が何なのかも教えてもらえない。それでこれだけのために、いくら払ってくれるんです？」

「そこまでは実のところ、まだ考えがまわっていなかった」。彼の頬骨は睨みみた赤色となった。

「いま、そこまで考えをまわしていただけないもんですかねえ」

彼は優雅に身を乗り出して、歯をむきだしてにっこりしてみせた。「君の鼻に一撃くらわしてやるというのはどうかね」

おれはニヤリとして立ち上がり、帽子をかぶった。じゅうたんを横切って玄関に向かったが、あまり急がなかった。

背中でピシヤリと声が響いた。「数時間ほどで百ドル提供しよう。足りなければ言いたまえ。危険はない。友人から宝石がいくつか奪われたんだ——それを買い戻すだけだ。すわれ、そうカリカリしないでくれ」

おれはピンクの椅子に戻ってまたすわった。

「わかった。話を聞こうじゃないか」³⁵

おれたちは丸十秒間にらみあった。「本翡翠は知ってるかね？」と彼はゆっくり尋ね、茶色いタバコもう一本に火をつけた。

「いいや」

「翡翠でまともに価値がある唯一のものだ。他の翡翠も、材料としてある程度の価値はあるが、主に職人の細工のおかげで価値が出る。本翡翠はそれ自体に価値がある。わかっている埋蔵量はすべて何百年も前に掘り尽くされた。友人がそれぞれ六カラットの玉を六十個使った首飾りを持っている。すべて入念に彫られているんだ。八、九万ドルはする。中国政府はほんの少しだけ大きなやつを持っていて、それが十二万五千ドルの値がついている。友人の首飾りが数晩前に、ホールドアップで奪われた。私もその場にいたが、まったく手出しできなかった。その友人をイブニングパーティーに車で連れて行き、その後トロカデロに行って、そこから彼女の家に戻るところだった。車がこちらの左前フェンダーをこすって、停車した。謝りにくるんだろうと私は思ったんだ。ところがそれは、きわめてすばやく手際のいいホールドアップだった。三人か四人いて、本当に見えたのは二人だけだが、別にもう一人がまちがいなく車の運転席にいて、さらに後部シートにもう一人がチラリと見えたと思う。友人がこの翡翠の首飾りをしていた。連中はそれと、指輪二つと腕輪を奪ったんだ。そのリーダー格は小さな懐中電灯を持って、特に急ぐ様子もなくすべての宝石を検分した。そして指輪を片方返してよこすと、これで相手にしているのがどんな連中か見当がつくだろうと言って、警察や保険会社に連絡する前に、電話を待てと言う。そこでその指示に従ったんだ。この手の話はいくらでも起きているんだ、もちろんね。この一件を表沙汰にせず身代金を払うか、さもなければ二度と宝石にお目にかかれない。全額保険がかかっていたら、それでもいいかもしれない。だが珍しい宝石なら、むしろ身代金を払うほうがいい」

おれはうなずいた。「そしてその翡翠の首飾りは、そこらですぐ買えるような代物じゃない」

35 ここで両者の関係は変わっていて、相手は尊大に指図する立場から、事情をきちんと話して相談せざるを得ない関係となる。それを反映して、この訳ではマーロウは、それまでの御用聞き敬語から、だんだんタメ口になる。村上春樹訳は一切口調が変わらない。それもまあ、一つの選択ではあるが、場面の雰囲気伝える意味では変えたほうが良いとぼくは思う。

彼は夢見るような表情を浮かべてピアノの磨かれた表面に指を走らせた。まるで何かすべすべしたものに触れると心地よいとでも言うようだった。

「まったくもってその通り。二つとない代物だ。彼女はあるなものを身につけて外出すべきじゃないかった——決して。だが無謀な類の女なんだよ。他の宝石は、いいものだが普通だ」

「ふーん。いくら払うんです？」

「八千ドル。はした金だ。だが友人が同じような首飾りを買えないということは、この暴漢どももそれを簡単には処分できないってことだ。おそらく業界中に知れ渡っているだろう、全国的に」

「そのご友人とやらだけ——名前があったりします？」

「ここで言うのは遠慮しておこう」

「手筈はどんな具合？」

彼は色の淡い目でおれを見た。何か怯えているようだと思ったが、この男のことはまだあまりよく知らない。単なる二日酔いかもしれない。茶色いタバコを持つ手はじっとしてられないようだった。

「数日にわたり電話で交渉してきた——私を通じて。すべて話がついていて、あとは受け渡しの時間と場所だけだ。今夜中のいつかのはずだ。間もなくそれを伝える電話がくるはずなんだ。あまり遠い場所ではないと向こうは言っていて、電話がきたらすぐに出発できるよう用意しておけとのこと。たぶんこれは、何か細工を仕掛ける余裕がないようにするためなんだろう。警察と、ということだが」

「ふーん。金は印をつけてある？ 本物の現金ではあるんだろうね？」

「もちろん法定通貨だ。二十ドル札。いいや。印なんかついていない。何のために？」

「ブラックライト³⁶でないと検出できない印をつけられる。理由はないですよ——ただオマワリはそういう強盗団を始末したいと思っている——何か協力が得られればね。その現金の一部が、前科のある誰かの手元に流れてくるかもしれない」

彼は考え込むように眉根にしわを寄せた。「残念ながらブラックライトというのが何だか知らない」

「紫外線ですよ。ある種の金属インクは、それを当てると暗い中で光る。やっときましましょうか？」

「残念だがそんな暇はないだろう」と彼は即座に答えた。

36 Black light. 日本語でもふつうブラックライト。村上春樹訳は「黒い光」。ちょっとわかんないよ。変なところはカタカナのままにするくせに、こういうところは無理に日本語化するのは意味不明。

「それもまた懸念の一つでね」

「というと？」

「どうしてやっと今日の午後になっておれに電話したのか。なぜおれを選んだ。おれのことはだれに聞いた？」

彼は笑った。いささかがきっぱい笑いだだが、かなり歳のいったガキだ。「いや実はね、正直言うと、電話帳でいい加減に選んだだけだったんだ。ご明察の通り、だれもいっしょに連れて行くつもりはなかったんだよ。そして午後になって、連れがいるのもいいかと思ってね」

おれは自分の潰れたタバコにもう一本火をつけて、彼ののどの筋肉を観察した。「どんな手筈で？」

彼は手を広げた。「言われた通りの場所にいて、札束を渡し、翡翠の首飾りを取り戻すだけだ」

「ふーん」

「その表現がお気に入りのようだな」

「どの表現？」

「ふーん」

「おれはどこにいるんだ——車の後部座席か？」

「そうだろうなあ。でかい車だ。後部座席なら簡単に隠れられる」

おれはゆっくりと言った。「なあ。おれを車に隠して、今晚電話で伝えられる目的地に行こうってわけだ。現金八千ドルを持って、その十倍だか十二倍だかの価値がある翡翠の首飾りを買戻すという話だ。たぶんどうなるかといえば、包みを渡されて、その場では開けるなど言われる——そもそもそれですら取り戻せるかはわからない。むしろ金だけあっさり取られて、向こうがそれをどっかで数えて、首飾りは後日郵送ってほうがありそうだが、向こうが鷹揚ならな。連中があんたを裏切らない保証は一切ない。おれが何をしようと、連中を止められないのはまちがいない。強盗団だ。タフだ。あんたの頭をぶん殴るかもしれん——手加減はするだろう——自分たちが逃走する間にあんたを足止めする時間を稼ぐためだ」

「うん、実のところ、そんなことが起こるんじゃないかとちょっと怖れていてね」静かにそう言う彼の目がひくついた。「だからこそ、だれかにいっしょに来て欲しかったんだろう」

「ホールドアップのときには、懐中電灯で顔を照らされたのか？」

彼は首を振った。ノー。

「まあいい。その後であなたの顔を見る機会はいくらでもあつただろう。どうせたぶんそれ以前から、あなたのことは全部調べ上げていたはずだ。こういう事件は下調べしてある。歯医者が金の詰め物を作るために歯を調べるみたいに入念に調べてあるんだ。そのご婦人とはよく外出するの？」

「いやあ——まあそこそこは」と彼はぎこちなく言った。

「既婚？」

「おい、ご婦人はこの話から一切外してもらえないか」彼はピシャリと言った。

「わかったよ。だが情報が多ければ多いほど、ヘマも少なくなる。マリオット、おれはこんな仕事、断るべきなんだ。ほんとうに断りたい。この連中がきっちり取引したいなら、おれなんかいない。もしおかしな真似をするつもりなら、おれにはどうしようもない」

「いっしょに来てくれればいいだけだ」彼はすばやく言った。

おれは肩をすくめて両手を広げた。「わかった——でも運転するのはおれで金を運ぶのもおれだ——そして後ろで隠れるのはあんただ。二人とも背丈は同じくらいだ。何か訊かれたら、あっさり本当のことを言う。それで失うものはない」

「そうだな」彼は唇を噛んだ。

「何もしないで百ドルもらおうってんだ。だれかが殴られるなら、おれであるべきだろう」

彼は顔をしかめて首を振ったが、かなりたってからその顔が元に戻り、にっこりしてゆっくりと言った。

「いいだろう。たぶんそれで話は変わらないはずだ。いっしょにいるんだから。ブランデーでも一杯いかがかね？」

「ふーん。それとおれの百ドルも持ってきてくれてはいかが。お金をこの手で触りたいので」

彼はダンサーのように離れていった。その身体は腰から上はほぼ不動だ。

部屋を出ようとしたところで電話が鳴った。電話は居間の本体をちょっとはずれて、バルコニーに切り込まれた小さなくぼみにあつた。だがおれたちが思っていた電話じゃなかった。返事をする男の声があまりに愛情のこもったものだった。

しばらくして彼は、踊るような足取りマーテルのファイブスターのボトルと、素敵な二十ドルのピン札を五枚持ってきた。おかげですてきな晩となった——それまでのところは。

[9]

家はまったく動きがなかった。遠くでは、打ち寄せる波か高速道路をかつ飛ばす車か、あるいは松林を吹く風のような音がした。もちろんそれは、はるか下で割れる海の音だ。おれはそこにすわってそれを聞きつつ、長く慎重な思索にふけた。

その後一時間半にわたり、電話は四回鳴った。本命は十時八分過ぎにやってきた。マリオットは手短かに、きわめて小さな声でしゃべり、まったく無音で受話器を置いて、何やら密やかな動きで立ち上がった。その顔は考え込むようだった。いまや暗い服に着替えていた。静かに部屋に戻り、ブランドグラスできつい一杯を自分に注いだ。それを一瞬、奇妙で不幸そうな微笑をもって光にかざし、いったんすばやく中身を回すと、頭を傾けてのどに流し込んだ。

「じゃあ——準備はできたぞ、マーロウ。用意はいいか？」

「この晩ずっとそうだったんだ。行き先は？」

「プリッシマ峡谷というところだ」

「初耳」

「地図を持ってこよう」彼はそれを持ってきて、すばやく広げた。その上に身を屈めた彼の真鍮色の髪に灯りがきらめいた。そして彼はその場所を指さした。丘の麓を通る、ベイシティ北の海岸高速道路から町に入る大通りはずれの、数多くの峡谷の一つだ。場所の大まかな見当はつくが、厳密にはわからない。カミーノ・デ・ラ・コスタという通りの突き当たりらしい。

マリオットは早口に言った。「ここからは十二分かからない。すぐに出発する。二十分しか余裕がないんだ」

彼は明るい色のコートを手渡してくれた。いい標的になるだろう。サイズはほぼぴったり。帽子は自分のをかぶった。脇の下に拳銃を持っていたが、そのことは話さなかった。

おれがコートを着ている間にも、彼はあの明るい心配そうな声でしゃべり続け、八千ドルの入った分厚いマニラ封筒の上で手を踊らせ続けた。

「ブリッシマ峡谷は内側の端のところに、何か平らな柵みたいなものがあるそうだ。角材の白い柵で道から仕切られているが、もぐりこめばいいそうだ。未舗装道路がくねって小さな空き地に出るので、我々はそこで灯りをつけずに待っているとのこと。まわりに家屋はない」

「我々？」

「いやまあ、『私』ということだ——理屈の上では」

「ほう」

彼はマニラ封筒を渡してよこした。開いて中身を確認した。確かに金だ。巨大な現金の札束。数えはしなかった。また輪ゴムをパチンとはめて、その袋をコートの内ポケットに入れた。ほとんどあばら骨が一本折れそうになった。

戸口に向かい、マリオットが電気をすべて消した。玄関を慎重に開き、霧の空気を覗き見た。外に出て、塩でやられたらせん階段を街路まで降りてガレージに向かった。

ちょっと霧がかっていた。ここらじゃ夜はいつもそうだ。しばらくは窓のワイパーをかけねばならなかった。

その大きな外車は勝手に走ってくれたが、それっぽく見せるためだけにハンドルは持った。

二分にわたり山肌をくねくねと8の字状に走ると、あの歩道カフェの真横に飛び出した。いまならなぜマリオットが階段を歩けと言ったのかわかる。この曲がりくねった街路を何時間も走っても、釣り餌の缶に入った餌のミミズほども前進できなかったことだろう。

高速道路上では、流れる車のヘッドライトが双方向にほとんどまっすぐの光束を作り出していた。でっかいトラックが北へと向かい、うなりを上げつつ全身に緑と黄色の装飾灯をぶら下げている。それが三分続いてから、巨大なガソリンスタンドの脇を内陸部に向かい、丘陵部ふもとに沿ってぐねぐねと進んだ。静かになった。寂しさと海藻の匂いと丘からは野生セージの匂いがした。あちこちに黄色い窓が、単独で、最後のオレンジのように見えた。車が通過し、舗装に冷たい白光をぶちまけ、そして再び暗闇の中へうなりをたてて消える。霧のかたまりが星を空から追い落とす。

マリオットは暗い後部シートから身を乗り出した。

「あの右手の灯りがベルヴェデール・ビーチクラブ。次の峡谷がラス・プルガスで、その次のやつがブリッシマ。二番目の坂を登り切ったところで右折だ」。それはひそひそ声で緊張していた。

おれはうなって運転を続けた。そして肩越しに言った。「頭を出すな。道中ずっと見張られている可能性もある。この車はアイオワのピクニックでのスパッツみたいに目立つ。連中が、あんたに双子がいるのを気に食わない可能性だってある」

峡谷の内側端にある空き地へと車を乗り入れ、そして高台へと上がり、もうしばらくするとまた下がってから上がった。するとマリオットの厳しい声が耳元でこう言った。

「次の通りを右だ。四角い尖塔のある家だ。その横を曲がれ」

「あんた、この場所を選ぶ手伝いでもしたのか？」

「いやいや」と彼は陰気に言って笑った。「たまたまここらの峡谷はかなり詳しく知ってるんだ」

おれは車を右にまわして、四角い白い尖塔に丸いタイルがてっぺんに貼られた、でかい角の家を通り過ぎた。ヘッドライトが一瞬、標識を照らした。カミノ・デ・ラ・コスタ。作りかけのシャンデリアや雑草まみれの歩道が続く広い通りを車はすべり下りた。どこぞの不動産業者の夢が、そこで二日酔いにかわっていた。草ボウボウの歩道の向こうでは、暗闇の中でコオロギがさえずり、ガマガエルがゲコゲコ鳴いている。マリオットの車はそのくらい静かだった。

最初は一街区あたり家が一棟、次に二街区ごとに一棟となり、その後は家はまったくなくなった。ぼんやりと窓が一つ二つ、まだ照明がついてはいたが、ここらの人々はニワトリと同じ時間に就寝するらしい。そして舗装道路がいきなり終わって、乾燥した気候の中でコンクリート並みに硬くなった泥道に変わった。その泥道が狭まり、茂みの壁の間で緩い下り坂になった。ベルヴェデール・ビーチクラブの照明が右手の空中にぶら下がり、動く水のきらめきが遠い前方に見えた。セージの鼻を刺す匂いが夜を満たした。すると、泥道を横切る白塗りのバリケードが道を塞ぎ、マリオットがまたおれの肩越しに話しかけた。

「通り抜けるのは無理そうだ。あのすき間はそんなに広くなさそうだ」

おれは無音のエンジンを切り、ヘッドライトを暗くしてそこにすわり、聞き耳をたてた。何もなし。ヘッドライトを完全に切り、車を降りた。コオロギが鳴き止んだ。しばらくは沈黙があまりに完全すぎて、二キロ近く離れた崖下の高速道路のタイヤ音さえ聞こえた。それから、一匹また一匹と、コオロギたちが鳴き始め、やがて夜がその声で満たされた。

「すわってる。動かないで。ちょっと下まで行って様子を見てくる」とおれは自動車の後部に囁いた。

上着内側の銃床に触れ、前進した。車から見たよりも、茂みと白いバリケードの端までは距離があった。だれかが茂みを切り開いていて、泥の中に轍があった。たぶん温かい夜にガキどもがここにきてネッキングするのだろう。おれはバリケードを越えて進んだ。道が下がってカーブになった。その下に暗闇と、漠然と遠くの海の音がした。そして高速道路の車の灯り。おれは進んだ。道の果ては浅い盆地で、完全にしげみに囲まれている。空っぽだった。おれが来た道以外の入り口はなさそうだ。無音の中、そこに立って聞き耳をたてた。

一分、また一分と過ぎたが、おれは相変わらず何か新しい音を待ち続けた。何もなし。その空き地は完全におれしかないようだった。

灯りのついたビーチクラブに目をやった。その上階の窓からなら、よい暗視鏡を持った人物がここをかなりしっかり見張れるはずだ。車がやってきて走り去るのも、だれが車を降りたか、それが集団か一人だったかもわかる。暗い部屋でよい暗視鏡を持ってすわっていると、不可能と思えるくらい細かいところまで見て取れるものだ。

おれはきびすを返し、丘をまた上がり始めた。茂みの根本でコオロギがさえずり、それがあまりに大きく飛び上がりそうになった。そのまま上がり続けてカーブをめぐり、白いバリケードを越えた。まだ何もなし。黒い車は、暗がりとも灯りとも言えない灰色を背景にぼんやりと停まっていた。そこまで行くと、運転席隣のランボードに片足を乗せた。

「お試しだったようだ」とおれは、息の下で、だが車の後ろのマリオットには聞こえるくらいの大きさで言った。「こっちが向こうの言う通りにするか試しただけだ」

背後で何やら動きがあったが、マリオットは答えなかった。おれはそのまま、茂み以外に何か見えないか探し続けた。

だれだか知らないが、おれの後頭部は実に簡単に一撃をくらわされたようだ。後になって棍棒が風を切る音が聞こえたようにも思った。いつもそう思うものなのかも——後になって。

[10]

「四分」と声は言った。「五分か、六分かも。素早く静かに動いたんだな。こいつは叫び声さえあげなかった」

目を開けてぼんやりと冷たい星を見た。仰向けに転がっているのか。気分が悪かった。

その声は言った。「もうちょっと長かったかも。全部で八分になっていた可能性さえある。茂みの中にいたんだろう、ちょうど車を停めたあたりに。あいつは簡単に怯える。たぶん顔を小さな懐中電灯で照らすかなんかただけで気絶したんだろう——パニックだけで。あの軟弱野郎が」

無音。おれは片膝をついて起き上がった。後頭部から足首まで苦痛が走った。

「そして一人が車に乗り込んだ。おまえが戻ってくるのを待ったんだ。ほかの連中はまた隠れた。たぶんあいつが一人で来るには怯えすぎていると見当をつけたんだな。あるいは電話でしゃべったときに、あいつの声に何か怪しいものを感じたのか」

おれは手のひらをついてぐらぐらしつつ身体のバランスをとり、聞き耳をたてた。

「そうとも、そんな感じだったはずだ」と声。

自分の声だった。意識を回復する間に、自分で自分に話しかけていたのだ。無意識のうちに何が起きたか突き止めようとしていたのだった。

「だまれ、この抜け作が」とおれは言って、自分に話しかけるのをやめた。

エンジンのうなる音のはるか向こう、コオロギの鳴き声近くで、独特な長く尾を引くアマガエルのイー、イー、イーという鳴き声。もうこういう音は気に食わなくなるだろうな。

おれは片手を地面から持ち上げて、そこから粘つくセージの匂いを振り払おうとして、そして上着の横でそれをぬぐった。いい仕事ぶりだよ、百ドルにしちゃ。手がコートの内側に飛び込んだ。マニラ封筒はもうなかった、当然だが。手は自分の上着の内側に飛び込んだ。財布はまだそこにあった。

あの百ドルがまだそこにあるだろうかと思った。たぶんない。左脇に何か重いものが当たった。ショルダーホルスター入りの銃だ。

なんともご親切。銃は残してくれた。何というか、ご親切至極——刺し殺した男の目を閉じてやるみたいな。

後頭部に触れて見た。帽子はかぶったままだった。それを脱ぐのも一苦勞で、その下の頭に触ってみた。なかなかいい古い頭で、ずっと昔から持っているものだ。それが今やちょっと柔らかく、ぶよぶよして、ちょっとどころではなくぐにやりとしている。だが混紡で殴ったにしてはかなり軽い。帽子が役に立った。まだこの頭は使える。少なくともあと一年くらいは。

右手を地面に戻し、左手を地面から挙げてそれをひねり、時計を見た。照明つきのダイヤルは 10 : 56 を示していた。少なくとも目の焦点があう限りそう見えた。

電話は 10:08 にきた。マリオットは二分も話していただろうか。さらに四分で家から出た。本当に何かやっているときには、時間はとてもゆっくりと過ぎるものだ。つまり、ほんの数分で実にたくさん動きがこなせる。おれが言いたいのはそういうことか？ 自分が何を言いたいかなんて、気にする必要はあるか？ わかったわかった、おれよりマシな人間でももっと意味のないことを言ったりはする。つまり、おれが言いたいのは、それだと家を出たのは 10:15 あたりってことだ。この場所は十二分ほど離れていた。車を降りて、空き地を歩いて、うろうろして戻ってくるのに最大でも八分で頭に処置を受けた。10:35。倒れて顔から地面に激突するのに一分。顔から倒れたのがわかる理由は、あごにすり傷がある。痛い。すり傷の感じ。だから擦り傷を受けたのがわかる。いや見えはしない。見るまでもない。自分のあごで、すり傷があるかくらいわかる。それを何か大事にしたいのか。わかった。だまって考えさせてくれ。何がどうして？……

腕時計は 10:56 p.m.を指していた。つまりおれは二〇分気絶してたことになる。

二〇分おねんね。それだけの時間で仕事をしくじり、八千ドルを失った。ふん、そのくらいは起こるか。二〇分あれば戦艦を沈め、飛行機を三、四機撃墜し、二人処刑できる。死んで、結婚し、クビになり、新しい仕事を見つけ、歯を抜いてもらい、扁桃腺の除去手術も受けられる。二〇分あれば朝に起きることも可能だ。ナイトクラブで水を一杯もらうことだってできる——かも。

二〇分おねんね。長い時間だ。特に寒い夜、吹きさらしでは。おれは身震いしはじめた。

まだ膝立ちだった。セージの匂いがカンに障り始めた。野生のハチが蜂蜜を集める、ベトベトの粘液。蜂蜜は甘く、あまりに甘すぎる。腹がうごめいた。必死で歯をくいしばり、なんとかそれをのど

までで押さえ込んだ。額に冷や汗が玉となって吹き出したが、それでも身震いした。片足で立ち上がり、次いで両足、よろよろしつつ身を起こした。切断された脚のような気分だ。

ゆっくりと後ろを向いた。車は消えていた。泥道は空っぽのまま続き、低い丘を戻ってあがり舗装路へ、カミノ・デ・ラ・コスタの終端へと続いていた。白塗りの角材のバリケードが左手に浮かびあがった。茂みの低い壁の向こうに見える、空の淡い光はベイシティの灯りだろう。そしてさらに右のもっと近場に見えるのがベルヴェデーレ・ビーチクラブの照明だ。

車の停まっていたところにでかけて、ポケットから万年筆型の懐中電灯を取り出し小さな光で地面を照らした。ツチは赤いローム土で、乾燥した気候ではとても硬くなるが、いまの気候はカラカラではなかった。空中には少しキリがあり、その湿気のある程度が地表に落ち着いたので、車のあったところに跡がついていた。ごくかすかに、重い十層式ヴォーグタイヤの跡が見えた。それに光を当てて身をかがめると、痛みで頭がぼんやりした。おれはそのタイヤ跡をたどった。四メートルほどまっすぐ続き、そして左に大きく曲がっている。向きを変えたりはしていない。白いバリケードの左端のすきまのほうに向かっている。そこでもうたどれなくなった。

おれはバリケードのところに行って、しげみを小さな灯りで照らした。折れたばかりの小枝。その隙間を超えて、曲がった道を下った。ここらの地面はさらに柔らかかった。あの重たいタイヤ跡がさらに続いている。おれは道を下り、カーブを曲がり、茂みで閉ざされた空き地のふちにやってきた。

車はそこにあった。クロームとピカピカの塗装が暗闇の中ですら少し輝いている。そしてテールライトの赤いリフレクターガラスが、鉛筆型懐中電灯の光を反射している。そこにあった。沈黙し、ライトもなく、ドアはすべて閉まっている。おれはゆっくりとそれに向かい、一歩ごとに歯をくいしばった。後部ドアを開けて、懐中電灯の光で中を照らした。空っぽ。全部シートも空っぽだ。エンジンは着られている。キーは細いチェーンをつけて鍵穴からぶら下がっている。シートに破れた後もない、ガラスに傷もない、血もない、死体もない。すべてきれいできちんとしている。おれはドアを閉めて、ゆっくりと車のまわりをまわり、何か徴を探しつつ何も見つけられなかった。

音でおれは凍りついた。

茂みの縁の上でエンジンがドクドクと鳴った。おれは飛び上がったが三十センチで抑えた。手の中の懐中電灯を消した。銃が勝手に手の中に滑り込んだ。するとヘッドライトのビームが空に向かって傾き、それからまた下に向いた。エンジン音は小さな車のような音だった。大気中の湿気に伴う、あの満足げな音をたてていた。

光がさらに下を向いてさらに明るくなった。車が未舗装路のカーブを下りてくる。三分の二までやってきて停車した。スポットライトがかちりと点灯し、片側にサッと向けられ、そこに長いこと保持されてから、また消された車はさらに丘を下ってきた。おれは銃をポケットから取り出して、マリオットの車のエンジンを盾にしてしゃがんだ。

色も形も特に目立つところのない小さなクーペが空き地にすべりこみ、回り込んだので、そのヘッドライトがセダンを端から端までサッと照らした。おれは急いで頭を下げた。ヘッドライトはおれ頭上を刀のようになぎ払った。クーペは止まった。エンジンが切られた。ヘッドライトも消えた。沈黙。そしてドアが開き、軽やかな足が地面に立った。さらに沈黙。コオロギすら沈黙した。すると光の束が暗闇を低く切り裂いた。地面と平行に、高さほんの十センチほどのところだ。光があたりを照らし、足首をそこから間に合うように引っ込めるのは不可能だった。光束はおれの足で止まった。沈黙。光束が上がり、再びボンネットの上をなぎ払った。

そして笑い声。娘の笑い声だ。緊張した笑いで、マンドリンの弦のように張り詰めている。場違いな奇妙な音だった。白い光束が再び車の下を照らして、おれの足下で止まった。

その声は、決してキンキン声とは言えない声でこう言った。「ほらそこのあなた。両手を挙げて、あと手にはとにかく何も持たないで出てらっしゃい。きっちり狙ってるから」

おれは動かなかった。

光は少しゆれた。それを持っている手が揺れたかのようなだった。それが改めてゆっくりとボンネットに沿って動いた。声が再びおれを突き刺した。

「だれだか知らないけどその人。十連発の自動拳銃を持ってるのよ。狙いは外さない。あなた、両足とも丸見えよ。さあどうする？」

「銃をしまえ——さもないとこっちがあんたの手から吹っ飛ばしてやる！」おれはイキった。その声は、ニワトリ小屋の板を引きむしっている人間のように聞こえた。

「あら——ハードボイルド紳士ですか」。その声には震えがあった。ちょっとした素敵な軽い震えだ。そしてまた厳しくなった。「出てくるの？ 三つ数えるわよ。どんな見込みがあるか考えてごらんなさいよ——その車は立派な十二気筒、下手すると十六気筒かな。弾よけにはなるわよ³⁷。でも足は隠せないし痛むわよ。それに足首の骨は、直るのにホントに何年もかかるし、ときには完全に治らないことも——」

37 エンジンの話が出てくる意味が少しわかりにくいので、この訳では言葉を足している。

おれはゆっくりと身を起こして懐中電灯の光をまっすぐ見据えた。

「怖いと口数が多くなるのはおれも同じだ」

「ちょっと——ちょっと動かないでよ！あなた何者？」

彼女に向かい、車の正面に回った。懐中電灯の向こうのスリムな黒い姿から二メートルところでおれは立ち止まった。懐中電灯はしっかりとおれを照らしつけた。

「そこを動くんじゃないわよ」おれが止まってから、娘は怒ったようにぴしゃりと言った。「あなた何者？」

「銃を見せてくれ」

彼女はそれを光の中に差し出した。まだおれの腹に狙いをつけている。小さな銃で、小型のコルトベストポケット自動拳銃のようだった。

「ああそれか。おもちゃだな。十発も入らない。六発だ。ほんのちっちゃな銃、チョウチョ銃だ。チョウチョ撃ちに使うヤツ。そんな露骨なウソをつくなんて、よくないなあ」

「頭どうかしてんの？」

「おれが？ ホールドアップのヤツにぶん殴られたからなあ。ちょっとおかしくなってるかも」

「あれは——あれはあなたの車？」

「いや」

「あなた何者？」

「あんたはあそこで懐中電灯で何を見てたんだ？」

「そういうことか。質問は自分がするんだってことね。男の常として。ある男を見てたのよ」

「そいつは波打つブロンドの髪をしたか？」

彼女は静かに答えた。「いまはしてないわ。してたかも——以前は」

これはガツンときた。なぜだか不意打ちされた。「そいつは見えないんだ」と言ったが、見え透いていた。「懐中電灯でタイヤ跡を追って丘を下りてきたんだ。そいつの怪我はひどいのか？」おれはもう一步彼女のほうに踏み出した。小さな銃がはねあがっておれを狙い、懐中電灯はしっかりと保持された。彼女は静かに言った。

「落ち着いて。よーく落ち着いて。お友だちは死んでるわ」

おれは一瞬何も言わなかった。「よしわかった。じゃああいつを見に行こうじゃないか」

「さあその場に立ち上がって動かないで。何者か、何が起きたのか話して」はっきりした声だった。怯えはなかった。本気で言っている。

「マーロウ。フィリップ・マーロウ。探偵。私立」

「そういう人なのね——本当なら。証拠は」

「財布を取り出させてくれ」

「そうはイカのなんとか。手はいまあるその場所においといて。とりあえずは証拠はあとまわしにしましょう。何があったの？」

「この男、まだ息があるかも」

「ないわね。顔に脳みそがかかっている。さあ、何があったの。手短かに」

「言ったように——まだ死んでないかもしれない。確かめよう」おれは一步踏み出した。

「動いたら風穴が開くよ！」彼女はピシャリと言った。

おれは反対側の足を動かした。懐中電灯がちょっと跳ねた。たぶん彼女が一步下がったんだと思う。

「ずいぶんとヤバイ橋をわたるのね、旦那」と彼女は静かに言った。「わかったわ。先に行って。あたしは後ろからついていくから。あなた、具合悪そうね。そうでなかったら——」

「撃ってた、だろ。おれは棍棒で殴られたんだ。いつもそうになると目の下に隈ができる」

「ユーモアのセンスはあるのね——死体置き場の番人並に」彼女はほとんど嘆くかのようだった。

おれは懐中電灯から目をそらし、するとそれはすぐにおれの前の道を照らした。おれは小さなクーペの前を通り過ぎた。ごく普通の小型車で、霧混じりの星明かりの中で、きれいでピカピカだ。そのまま進んで未舗装路を上がり、カーブを回った。足音がすぐ後ろに続き、懐中電灯が道を照らした。聞こえるのは二人の足音と娘の呼吸だけ。自分の呼吸は聞こえなかった。

[11]

丘を半ばまで上がったところで、右手を見るとやつの足が見えた。彼女は懐中電灯をそちらに向けた。すると全身が見えた。下りてきたときに見てしかるべきだったが、おれはかがみ込んで、地面を万年筆懐中電灯で見つめ、二五セント玉の大きさの光でタイヤ跡を読もうとしていたのだ。

「懐中電灯を」とおれは後ろに手を伸ばした。

彼女は一言もなしにそれをよこした。おれはひざまずいた。地面は布越しに冷たく湿気ていた。

やつは地面におしつけられるように、仰向けで、茂みの根本に横たわり、そのぐにやりとした姿勢が意味するものは常に同じことだ。その顔は以前に見たことのない顔だった。髪は血で黒くなり、あの美しいブロンドの髪は血と何やら濃い灰色じみた粘液が、原始的なスライム状に絡み合っている。

背後の娘は粗い息をしたが、何も言わなかった。懐中電灯で男の顔を照らした。徹底的にぶちのめされていた。片手は凍りついた身ぶりで投げ出され、指が曲げられている。そのコートが身体の下で半分よじられ、まるで倒れながら転がったかのような。脚は交差している。口の端からは汚いエンジンオイル並に黒いものが垂れている。

おれは懐中電灯を彼女に戻した。「灯りをこいつに当てといてくれ。気分が悪くならなければだが」

娘はそれを受け取り、無言で保持した。まるで古参殺人課刑事のようにしっかりした手つきだ。おれは自分の万年筆懐中電灯を再び取りだして、死体を動かさないようにしつつ、彼のポケットを探りはじめた。娘は厳しい声で言った。

「それはやらないほうがいいわよ。警察くるまで触っちゃいけない」

「その通りだ。そしてパトカーのおまわりたちは、でかい車の刑事たちが車で触っちゃいけないし、刑事たちは検屍官の検分がすんでカメラマンが写真を取って指紋担当が指紋を採るまでさわっちゃいけない。そしてそれだけのことがここで起こるのにどのくらいかかると思う？ 二時間かそこらだ」

「わかったわ。自分がいつも正しいつもりね。どうしてもそういう人間になりたいんでしょう。この人の頭をそんなふうに叩き潰すなんて、よっぽど嫌われてたのね」

おれはうなった。「私怨じゃないと思う。頭を叩き潰すのが好きなだけの奴もいる」

「あたしは何があったのかわからない以上、なんとも言えないわ」と彼女は辛辣に言った。

おれはそいつの服を調べた。ズボンの片方のポケットには小銭と札が何枚か、もう片方のポケットには細工をした革のキーケース、それと小さなナイフがあった。左の尻ポケットは、小さな札入れにずっと多くの現金、保険カード、運転免許、レシート何枚かがあった。上着にはばらけた紙マッチがいくつか、ポケットにクリップで留まった黄金の小型ペン、乾燥したパウダースノーなみに細かく白い薄手の白麻ハンカチ二枚。さらに茶色で吸い口が黄金のタバコを取り出すところを見た、エナメルのタバコケース。南米はモンテビデオからのものだ。そしてもう片方の内ポケットからは、それまで見たことのない二つ目のタバコケース。刺繍のついた絹製、両側に龍が描かれ、あまりに薄くてほとんどないも同然の模造べっ甲のフレームでできている。留め金をちょっと開いて中を見ると、ゴム環の下にロシア製の大きすぎるタバコが三本見えた。一つをつまんで見た。古く乾いて崩れそうだった。吸い口はフィルターがない。

おれは肩越しに行った。「他のはこいつが吸ったんだ。こいつらは女友だちのためだろう。女友だちにはいろいろとあげるような人物だろうから」

女は身をかがめ、いまやおれの首筋に息をかけていた。「知り合いじゃなかったの？」

「今夜初めて会っただけだ。ボディガードで雇われたんだ」

「大したボディガードね」

それに対しては何も言わなかった。彼女はほとんど囁いた。

「ごめんなさい。もちろんあたしには状況がわからないものね。これ、大麻だと思う？ 見せて」

おれは刺繍つきケースを彼女に戻した。

「昔、大麻を吸う人を知ってたけど。ハイボール三杯とマリファナたばこ三本で、テコでもシャンデリアから下りてこなくなったわ」

「灯りを動かさないで」

カサカサと衣擦れつきの間があった。そして娘はまた口を開いた。

「失礼」と彼女は再びケースをこちらに渡し、おれはそれを元通りポケットに入れた。それだけのようだ。わかったのは、身ぐるみはがれていないということだけだ。

おれは立ち上がり自分の財布を取り出した。二十ドル札五枚はまだそこにあった。

「高級な連中だな。大金しか盗っていかなかった」

懐中電灯が地面のほうに下がっていた。おれは財布を再びしまい、自分の小さな懐中電灯をポケットにクリップで留めると、いきなり彼女が懐中電灯と同じ手で持っていた小さな銃に手を伸ばした。彼女は懐中電灯を落としたが、おれは銃を奪った。彼女はすばやく後退し、おれは懐中電灯に手を伸ばした。それを彼女の顔にしばらむ向けてから、パチリと切った。

彼女は肩パッド入りの長いラフなコートのポケットに手をつこんだ。「手荒なことをしなくてよかったのに。あなたがこの人を殺したとは思ってなかったから」

その声のクールで静かな感じが気に入った。その度胸も気に入った。二人して暗闇の中で向き合い、しばし無言だった。茂みと空の灯りが見えた。

彼女の顔に懐中電灯を向けると、彼女はまばたきした。小さく整った活気ある顔で、目が大きい。肌の下に骨があり、肌はクレモナ・バイオリンのように張りがある。とても素敵な顔だ。

「赤毛だな。アイルランド系に見える」

「名前もリオーダン。それが何か？ 懐中電灯を消してよ。赤じゃないわ。赤褐色よ」

消した。「ファーストネームは？」

「アン。アニーとは呼ばないで」

「こんなところで何をしてる？」

「ときどき夜にドライブするの。落ち着かなくて。一人暮らしだし。孤児だから。このご近所のことは何でも知り尽くしてるわ。たまたま車で通りかかったら、下の空き地で灯りがちらついているのが見えたわけ。若いカップルにしてはちょっと寒いようだったし。それにそういうカップルは灯りなんか使わないでしょう？」

「おれは使わなかった。きみはえらく危険な真似をするんだな、リオーダンさん」

「それはお互い様。あたしは銃を持っていた。怖くはなかった。下にいっちゃいけないという法律はないわ」

「ふーん。自己保存の法則はあるがな。今夜は頭がまわらないようだ。この銃、もちろん許可証はあるんだろうね」とおれは、銃床を先にそれを彼女に差し出した。

女はそれを受け取ってポケットに突っ込んだ。「好奇心は抑えられないものよね。あたし、ちょっと物書きもするの。ニュース記事とか」

「儲かるのか？」

「雀の涙。あなた何を探してたの——この人のポケットで？」

「特にこれというわけでもない。嗅ぎ回るのが得意でね。ある女性のために、盗まれた宝石を買い戻すので八千ドルを持っていたんだ。それを襲われた。なぜこいつが殺されたのかはわからん。特に腕っ節の強そうなやつには見えなかった。それに争う気配もなかった。こいつが殺されたとき、おれは下の空き地にいたんだ。こいつは上のほうの車の中だった。空き地まで来るまで下りるはずだが、すき間がなくてこの車で通ろうとした傷がつく。だから歩いて下まで行って、その間に連中がこいつを殺したんだろう。そして一人が車に乗り混んで、おれに一撃をくらわせたわけだ。おれはもちろん、こいつがまだ車の中だと思っていた」

「まあさほど愚かってわけでもないけど」

「この仕事、最初っから何かおかしかった。そういう感じがした。でも金が必要だったんだ。これでサツにだって取り調べを受けないと。モンテマー・ヴィスタまで乗せてってくれないか？ 自分の車をそこに置いてきたんだ。こいつがそこに住んでいた」

「いいけど。でもだれかがここにいたほうがいいんじゃない？ あたしの車を使っていいわよ——あるいはあたしが行って警察を呼ぶけど」

おれは腕時計の盤面を見た。かすかに輝く針は、真夜中近いと示していた。

「いや」

「どうして？」

「どうしてかはわからん。そういう気がするだけだ。一人でやる」

彼女は何も言わなかった。二人で丘を下りて、彼女の小さな車に乗り、ヘッドライトなしでくねくねと道を進み、丘の上まで戻ってゆっくりとバリケードを通過した。一街区離れたところで彼女はヘッドライトをつけた。

頭痛がした。舗装路の最初の家と並ぶところにくるまで、どちらも口をきかなかった。そして彼女は言った。

「一杯要りそうね。うちに来て一杯やったらどう？ そこから警察に電話すればいいでしょう。どのみち西ロサンゼルスから来るしかないんだし。ここには消防署しかないよの」

「とにかくこのまま湾岸部まで行け。おれは一人でやる」

「でもどうして？ やつらなんか怖くないわ。あたしの話があなたの役にたつかもしれないし」

「助けはいらない。考えないといけないことがある。しばらく一人になりたい」

「でも——わかった」と彼女。

女はのどで漠然とした音をたて、それから大通りへと曲がった。沿岸ハイウェイでガソリンスタンドにやってきて、北にまがりモンテマー・ヴィスタとその歩道カフェに向かった。豪華客船みたいに煌々と灯りがついている。娘は路肩に車を止め、おれは降りてドアを開けたままそこに立った。

おれはおぼつかない手つきで財布から名刺を取りだし、彼女へと渡した。「いつか強い後ろ盾がいるかもしれないからね。その時は呼んでくれ。だが頭脳作業なら呼ぶな」

彼女はハンドルをその名刺ではたいて、ゆっくりと言った。「あたしはベイシティの電話帳に出てるわ。25番通り819。いずれ寄って、余計な口出しをしなかったあたしにおもちゃの勲章でも留めてちょうだいな。まだ頭を殴られてふらふらしてるみたいよ」

ハイウェイで彼女は車を急旋回させて、おれはそのツインの尾灯が闇の中に消えるのを見守った。

おれはアーチを歩いて越え、歩道のカフェを通り過ぎて駐車場に入り、自分の車に乗りこんだ。真ん前に酒場があり、おれはまた身震いしていた。だが西ロサンゼルス警察署に自分から出向くほうが賢く思えたので、二十分後にまさにそうした。カエルのように寒く、まっさらな一ドル札のように緑色の顔色をして。

[12]

一時間半後のことだった。死体は運び去られ、地面は検分され、おれは自分の話を三、四回した。おれたち四人は、西ロサンゼルス署の当直室にすわった。建物は静かで、ただトラ箱に酔っ払いが一人いて、夜明けのダウンタウンに法廷へと向かうのを待つ間に、オーストラリアのブッシュの雄叫びを聞かせ続けていた。

リンゼイ・マリオットのポケットからやってきたものが広げられた、平らなテーブルの上を、ガラス反射板の中の強い白光が照らしていた。マリオットの持ち物はいまやその持ち主と同じくらい死んで行き場がなさそうに見えた。向かいにすわった男はランドールという名前で、ロサンゼルス中央殺人課からきていた。五十歳のやせた物静かな男で、クリームのような灰色の髪、冷たい目、疎遠な態度をしていた。その暗い赤のネクタイについた黒の斑点が、おれの目の前で踊り続けていた。その背後、円錐状の光の向こうには、二人の屈強な男がボディガードみたいにすわり、それぞれが片耳をおれのほうに向けている。

おれは指の中でタバコを落としそうになり、火をつけたが味が気に入らなかった。指の間でそれが燃えるのを見つめてすわっていた。八十歳の気分で、しかも急激に衰えつつあるような気分。

ランドールが冷たく言った。「その話をあんたがすればするほど、ますます馬鹿げて聞こえるんですがねえ。このマリオットという男は、この受け渡しについてまちがいなく何日も交渉していたんでしょう。それが最終的な面会のほんの数時間前になって、まったく知らない人物に電話をして、ボディガードとして同行するよう雇った、と」

「ボディガードというのは正確じゃないですね。おれは銃を持っていることさえ伝えていない。単に同行を求められただけです」

「どこであんたのことを聞いたんですか、やっこさんは？」

「最初は、共通の知り合いから聞いたと。それから、単に電話帳からおれの名前を選んだだけだと」

ランドールはテーブル上の品物を軽くつつきまわし、白い名刺をつまみあげた。まるで何か完全にきれいじゃないものに触れるような感じだった。それをテーブルの天板越しにこちらに押しやった。

「あんたのを持ってたましたよ。あんたの名刺」

おれはその名刺を見た。札入れから出てきたもので、他におれがプリッシマ峡谷の盆地でわざわざ検分しようとしなかった他の多数の名刺に混じっていた。確かにおれの名刺だ。それも、マリオットのような男が持つにしては、いささか汚らしかった。一つの隅に、輪染みがついている。

「そりゃそうでしょう。そういうのは機会あるたびに渡すから。当然ながら」

「マリオットは現金をあんたに持たせた。八千ドル。ずいぶんと他人を信用する御仁ですねえ」

おれはタバコを盗りだして煙を天井のほうに吹き出した。光で目が痛かった。後頭部が痛い。

「その八千ドルなら、おれは持ってませんよ。すみませんねえ」

「そうですね。その金を持ってたら、ここに来たりしなかったでしょう。いやどうかな？」その顔にはいまや冷たいせせら笑いが浮かんでいたが、わざとらしく見えた。

「八千ドルのためならかなりのことはしますがねえ。でも棍棒でだれかを殺したいなら、せいぜい殴るのは二回ですよ——後頭部を」

彼はかるくうなずいた。背後のおまわりの一人がゴミ箱にツバを吐いた。

「それが不思議な点の一つでねえ。素人の仕事みたいに見える。が、もちろん素人仕事に見せかけたかったのかもしれない。金はマリオットのじゃなかったんでしょう？」

「はっきりとはわからない。ちがうんじゃないかという雰囲気ではあったけれど、単なる印象ですから。この事件の女性がだれだかは教えてくれなかった」

ランドールはゆっくりと述べた。「マリオットのことは、何もわからない——今のところ。たぶんやっこさんが、自分でその八千ドルを盗むつもりだったというのも、あり得なくはないな」

「え？」おれは驚いた。たぶん驚いて見えただろう。ランドールの滑らかな顔は何も変わらなかった。

「金は数えました？」

「まさか。あいつが袋をポンと渡したんです。中には現金が入っていて、かなりの額に見えました。八千だと言っていました。おれが登場する前にすでに手元にあったんだから、それをわざわざおれから盗む理由なんかないでしょう」

ランドールは天井の片隅を見上げ、口をへの字に曲げた。そして肩をすくめた。

「ちょっと戻ってみよう。だれかがマリオットとご婦人をホールドアップして、翡翠の首飾りやらなんやらを奪い、後でその価値とされるものに比べるとずいぶん少額に思える金額で、買い戻さないかと持ちかけた。マリオットが受け渡しをすることになった。一人でやろうと思って、相手方がそれを指定したのか、そういう話が出たのかどうかはわからない。普通はこの手の事件だと、そういうところにはずいぶんこだわるもんだけどねえ。だがマリオットはどうやら、あんたを連れて行っても大丈夫だと思ったと。あんたたち二人とも、相手が組織ギャングだと判断し、相手はその商売の範囲内でフェアにふるまうと思ったわけだ。マリオットは怯えていた。そりゃ当然だろうな。同行者がほしかった。あんたが同行者だ。だがまったくの見知らぬ人物で、だれも知らないだれかさ、共通の知り合いなる人物から渡された名刺に書いてあった名前にすぎない。そして最後の最後になって、マリオットはあんたに金を持たせて、交渉させることにして、自分は車に隠れていることにした。それを言い出したのは自分だとあんたは言うけれど、でもあんたがそう言い出すのを期待していたのかもしれないし、もし言い出さなければ、自分でそれを思いついたかもしれない」

「最初はこっちが言ったら気に入らないようでしたよ」

ランドールはまた肩をすくめた。「気に入らないふりをしたんだ——結局は承知したろ。最後に電話を受けて、二人でやっこさんが説明した場所に行くわけだ。すべてマリオットの話だ。あんたが独立に知った話は何もない。そこについたら、だれもいないようだ。その空き地に来るまで下りるはずが、でかい車で入れる余裕はなさそうだ。それは実際問題としてその通りだった。というのも車の左側にかなりひどい傷がついていたからね。そこであんたは下りて空き地に歩いて、何も見聞きしなかった。数分待って車に戻ると、車の中のだれかに後頭部をぶん殴られる。さてマリオットが金をほしくて、あんたに罪をなすりつけたかったら——まさにそういうふうふるまうんじゃないかな？」

「大した理論ですねえ。マリオットはおれを殴り、金を奪い、それから後悔して自分の脳みそをふっとばしたけど、その前に金は茂みの下に埋めたってわけですか」

ランドールは無表情におれを見つめた。「もちろん共犯者がいたんだ。あんたら二人とも気絶させるはずで、共犯者が金を持って消える。ただその共犯者がマリオットを裏切って殺した。あんたはそいつを知らないから殺す必要はなかった」

おれは崇拜するように彼を見て、タバコの吸いさしを木の灰皿でもみ消した。それはかつてガラス張りだったようだが、もうガラスは残っていなかった。

「事実には合う——わかっている範囲の事実はね。いま思いつく他のどれと比べても、同じくらいの馬鹿げぶりだ」

「一つ合わない事実がありますよ——おれが車から殴られたってことです。そうでしょう？ そんなことをしたら、おれはマリオットに殴られたんじゃないかと疑うことになる——他の話が同じなら。とはいえ、あいつが殺された後ではそんな疑いは消えましたが」

「あんたの殴られ方が何よりも当てはまる。マリオットに銃を持ってるとは言わなかったが、脇の下の膨らみを見たか、少なくとも銃を持ってるのではと疑っただろう。それなら、怪しまれないうちに殴るだろう。そしてあんたは車の後部シートから何かがあると夢にも思わない」

「わかりましたよ。あんたの勝ち。いい理屈ですよ、金がマリオットのものじゃなくて、それをあいつが盗み取ったというのが前提ですね。すると計画では、二人とも頭にたんこぶ作って目を覚まし、金は消えていて、二人とも残念至極だと言っておれはおうちに帰り、すべてを忘れる、と。そういう結末ですか？ つーか、あいつはそういう結末のつもりだったんですか？ あいつから見ても、もっともらしい話じゃなきゃいけないんですよ？」

ランドールは苦笑いした。「自分でも気に入ってるわけじゃない。検討してただけだよ。事実にはあう——こっちの知ってる限りではってことだが、あまり大してわかってないし」

「理論を考えるほどのネタもないでしょうに。あいつが本当のことを言っていて、ひょっとするとホールドアップした相手がだれだか気づいたのかもしれないと思ってもいいんじゃないですか？」

「争う音も、叫びも聞かなかったんだよな？」

「ええ。でもすばやくのどを捕まれたのかもしれない。あるいは襲われたときに怯えて声が出なかったのかも。ひょっとして、茂みの中から見ている、おれが丘を下るのを見たんだ。だってかなりの距離を下りましたからね。優に三十メートルは下りたかな。そこで車に行って中を覗くとマリオットがいる。だれかが銃を突きつけて、外に出ろという——静かに。それから殴り殺される。でも何か言ったか、その目つきかなんかで、連中は自分たちが正体に気づかれたのではと思った」

「暗闇の中だよ？」

「ええ。なんかそんなことだったんでしょう。記憶に残る声ってのがあつた。暗闇の中でもだれだかわかってしまう」

ランドールは首を振った。「宝石泥棒の組織ギャングなら、よほど挑発されない限り殺したりはしない」。彼はそこで突然口を止め、目が遠くを見るようになった。口をととてもゆっくり閉じて、きつく閉めた。何か思いついたのだ。「ハイジャックか」

おれはうなずいた「たぶんそうじゃないかと」

「あともう一つ。あんた、ここまでどうやってきた？」

「車で」

「車はどこにあった？」

「モンテマー・ヴィスタに。歩道カフェの横の駐車場」

彼は考え込むようにおれを見た。背後のおまわり二人は疑わしそうにおれを見た。トラ箱の酔っ払いはヨーデルしようとしたが、声が割れたので諦めた。そして泣き始めた。

「ハイウェイまで歩いて戻ったんですよ。手を上げて車を停めたんだ。女の子が一人で運転してた。停まって乗せてってくれたんです」

ランドールは言った。「どこかの女の子ねえ。夜遅く、人気のない道で、停まってくれたと」

「ええ、そういうことをする娘だっていますよ。お知り合いにはなれなかったけど、いい娘みたいでしたよ」おれは彼らを見つめ、絶対に信じてもらえないとわかっていて、なぜそんなウソをつくのか自分でも不思議に思った。

「小型車でした。シボレーのクーペ。ナンバープレートは見なかった」

「ケッ、ナンバープレートは見なかったとよ」おまわりの一人が言って、再びゴミ箱にツバを吐いた。

ランドールを身を乗り出して、慎重におれを見つめた。「もし何かを隠していて、自分がちょっとばかり有名になりたいからって、この事件を自分で捜査しようとか思ってるなら、そいつはやめといたほうがいいな、マーロウ。あんたの証言はすべて気に入らない話だらけだから、一晩じっくり考えさせてやるよ。明日になったら、宣誓付の証言を求めることになるだろうね。それまで、一つ教えといてやろう。これは殺人で警察の仕事だから、あんたの手伝いは入らないよ、それが優れたものだったとしてもね。あんたに求めるのは事実だけだ。わかったか？」

「ええもちろん。帰っていいですか？ あんまり気分もよくないもので」

「帰っていいよ」その目は氷のようだった。

おれは立ち上がり、まったく無言で戸口に向かった。四歩進んだところで、ランドールが咳払いをしてさりげなく言った。

「ああそうそう、一つつまらない話だけど、マリオットがどんなタバコを吸ってたかわかる？」

おれはふり返った。「ええ。茶色いの。南米産でフランス製エナメルケース入り」

彼は身を乗り出して、テーブル上のがらくたの中から刺繍入り絹のケースを押し出し、自分のほうに引き寄せた。

「こいつを前に見たことは？」

「ええ、さっきからずっと見てましたが」

「今晚、もっと前に見たかってことだけど」

「確か見たような。どこかに転がっていたはず。なぜです？」

「やっこさんの身体検査はしなかったの？」

「わかりましたよ。はい、ポケット探りました。そいつもポケットの一つに入っていました。すいません。職業的な好奇心ってやつで。何も取ったりはしてない。なんといっても、お客ですから」

ランドールは刺繍入りケースを両手で持って開いた。すわって中をのぞきこんだ。空っぽだ。タバコ三本は消えていた。

おれは歯をきつく食いしぼり、疲れた表情を維持するようにした。そう簡単じゃなかった。

「やっこさんがここから出したタバコを吸うのは見た？」

「いや」

ランドールは冷ややかにうなずいた。「見ての通り空っぽ。だがそれでもあいつのポケットにあったんでね。少し粉が入ってるな。顕微鏡で調べてみないと。確信はないがマリファナじゃないかという気がする」

「もしあいつがそんなものを持っていたなら、今夜何本か吸ったはずじゃないですか。元気を出すために何か必要だったろうから」

ランドールはケースを慎重に閉じてそれを押しやった。

「それだけ。それと変な真似はしないように」

おれは外に出た。

外の霧は晴れ、星は黒ビロードの空の上クローム製の偽の星並にまばゆかった。おれは車を飛ばした。ひどく酒が必要だったが酒場はみんな閉まっていた。

[13]

九時に目が覚め、ブラックコーヒーを三杯飲み、後頭部を氷水に浸して、アパートの戸口に投げつけられた朝刊二紙を読んだ。ヘラ鹿マロイについて一段落チョイの記事が、第2部に出ていたが、ナルティーの名前は出してもらえなかった。リンゼイ・マリオットの話はまったくないが、社交欄にはあったのかもしれない。

着替えて半熟卵を二つ食べ、コーヒー四杯目を飲んで、鏡で自分の様子を見た。まだ目の下にちょっと隈がある。出かけようとドアを開けたところで電話が鳴った。

ナルティだった。陰険な調子だ。

「マーロウか？」

「そうだけど。捕まえた？」

「もちの論だよ。捕まえたとも」と彼はそこで切って歯を剥いた。「ヴェンチャーラ線でな、前も言ったように。いやあ、実に楽しかったぜ！身長二メートル、土木隔壁並の頑丈な身体で、おまつり見物にフリスコ行きの途中ってわけだ。レンタカーのフロントシートにウイスキー五リットル持って、運転しながらもう一本をあおり、静かに時速110キロだ。そいつを相手にするのに、こっちの装備は田舎おまわり二人が銃と特殊警棒だけでね」

彼は間を置いたので、おれは頭の中で気の利いたことを言おうといくつか考えたが、その瞬間はどれもおもしろいとは思えなかった。ナルティーは続けた。

「んでもって、そいつはおまわりどもと捕り物を演じて、おまわりが疲れ切って寝ちまうと、そいつはパトカーの片方のドアをねじきって、無線をドブに投げ込み、新しいウイスキーのボトルを開けて、ご当人も寝ちまったんだ。しばらくしてうちの連中が正気に戻り、十分ほど特殊警棒でそいつの頭をぶん殴ったら、向こうもさすがに気がついた。それで機嫌を損ねたところで、なんとか手錠をかけたんだな。実に簡単。いまやブタ箱に入れたよ、飲酒運転、車両内での飲酒、職務遂行中の警官への暴

行が二件、公共資産への悪意を持った損傷、捕縛からの逃走未遂、身体障害未満の暴行、風紀紊乱、州立高速上の駐車。実に楽しいだろう、え？」

「オチはなんだい？ 自慢するためにそれだけ話をしたわけじゃないだろ？」

ナルティーは荒っぽく言った。「別人だったんだよ。この野郎はストヤノフスキーってやつで、ヘメットに住んで、サンジャック・トンネルの潜函労働者をちょうど終えたところだ。奥さんに子供四人。その奥さんはまったくカンカンだぜ。おまえ、マロイの件で何してる？」

「何も。頭痛がしてね」

「ちょっと暇があるようなら――」

「ねえよ。だが聞いてくれてありがとう。黒んぼの検屍陪審はいつだい？」

「どうでもいいだろ」ナルティーはせせら笑って電話を切った。

ハリウッド大通りまで車を走らせ、建物横の駐車場に車を入れて、おれの階までエレベーターで上がった。自分の小さな待合室へのドアを開けた。いつも鍵をかけたりしない。万が一お客が来るかもしれない、その客が待つ気になるかもしれないからだ。

アン・リオーダン嬢が雑誌から目を上げてにっこりした。

タバコ色の茶色のスーツを着て、中にはネックの高い白セーターを着ている。昼の光で見る彼女の髪の毛は、純粋な赤茶色で、その上に被っている帽子のてっぺんはウィスキーグラスほどの大きさで、つばは一週間分の洗濯物をくるめそうなほどだ。それをおよそ四十五度の角度でかぶっていたので、そのつばの端がちょうど肩をかすめるくらいだ。にもかかわらず、それは賢そうに見えた³⁸。それだからこそ、と言うべきか。

二十八歳くらいか。おでこの幅がいささか狭くて、エレガントとされるよりも縦に広がった。鼻は小さくて詮索好きで、上唇はちょっと長すぎ、口はちょっととは言えないくらい広すぎた。目は灰色がかかった青で金の斑点がある。素敵な笑顔だ。よく眠れたようだ。素敵な顔で、時間をかけて好きになる顔だ³⁹。きれいだが、きれいすぎて外に連れ出すたびに、寄ってくる男どもを撃退するプラスナックルが要るほどじゃない。

38 Smart. 英語解釈のまちがいよく指摘される単語で、日本語化しているスマートか、賢いのスマートか。ニュアンスとしては、つばがやたらに広くてバカみたいなのに、というのの半後で、ここは賢いのスマートと解釈。

39 A face you get to like. 村上春樹訳「好意を抱かずにはいられない」。そうじゃなくて、一目惚れするような美女じゃないってこと。ゆっくり時間をかけて好きになるということ。

「営業時間がまるでわからなかったの。だから待たせてもらったわ。どうも秘書さんは今日はいないみたいね」

「秘書なんかいない」

おれは待合室を横切り内側の扉の鍵を開け、外側の扉についたブザーのスイッチを入れた。「おれの私的な思索パーラーに入ろう」

彼女はおれの前を、かすかにきわめてドライな白檀の香りを放ちつつ通り過ぎて、緑のファイリングケース五つ、ボロボロのサビ赤色のじゅうたん、ほこりを払いきっていない家具、あまりきれいとは言えないネットカーテンを立ったまま眺めた。

「電話の対応にだれかいたほうがいいんじゃないの？ それとたまにカーテンをクリーニング屋に出すためにも」

「聖スウィシンス記念日になったら選択に出すよ。すわってくれ。いくつかどうでもいい仕事は逃すかもしれない。それと美脚もたくさんお目にかかれなかも。でも金の節約になる」

「なるほどね」と彼女はすましかえり、大きなスエードのハンドバッグを、ガラスストップの机の片隅に慎重に置いた。後ろにもたれると、おれのタバコを一本取った。それに火をつけてやるのに、紙マッチで指先を火傷した。

彼女は煙を扇状に吹き出して、それ越しににっこりした。素敵な歯で、ちょっと大きめ。

「こんなにすぐ再会するとは思ってなかったでしょう。頭の具合はいかが？」

「ひどいね。いや思ってなかった」

「警察は優しくしてくれた？」

「まあいつもながら」

「何か大切なご用をお邪魔したりはしてないわよね？」

「いいや」

「それでも、なんだか会えてあまり嬉しそうじゃないようなんだけど」

おれはパイプを詰めて紙マッチの束に手を伸ばした。パイプに慎重に火をつけた。彼女はそれを好もしそうに見つめた。パイプ吸いはしっかりした男⁴⁰と相場が決まっている。おれにはがっかりすることだろう。

「なんで君の話を出さなかったのか、自分でもはっきりわからん。どのみちこれは、もうおれには関係ない話になったんだ。昨晚一撃くらって酒をあおってなんとか寝付き、いまやこれは警察の事件だ。手を出すなと警告されたよ」

彼女は平静に言った。「あたしの名前を出さなかった理由だけど、単なる退屈しのぎの好奇心だけで昨晚あたしがあの空き地に下りていったなんて、警察が信じないと思ったせいなの？何か怪しい理由があると思って、あたしがボロボロになるまで締め上げられると思ったから？」

「おれだって同じことを考えてないとなぜわかる？」

「サツだってただの人間よ」彼女は一蹴するように言った。

「最初はそうらしいな、噂では」

「あら——今朝はシニカルときましたか」彼女は事務室を、漠然と、だが何も見逃さずに見回した。

「ここは結構繁盛してるの？儲かるってことだけど。つまりお金は入ってくるの——こんな家具で？」

おれはうなった。

「それとも余計なことは言わず、出しゃばったことは訊かないほうがいい？」

「そうして見ていただくことは可能だろうかね？」

「今度は二人して嫌みの言い合い？ねえ、なぜ昨晚はあたしをかばってくれたの？あたしの赤っぽい髪と美しい体つきのおかげかしら？」

おれは何も言わなかった。

彼女は嬉々として言った。「じゃあこんなのはどうかな。あの翡翠の首飾りがだれのものか、お知りになりたくはありませんこと？」

40 Solid men. 村上春樹訳「身持ちが堅い」。別に一穴主義とか身持ちが堅いなんて話をしてるわけじゃない。単にしっかりした男というだけの話。このあと村上訳は「遠からずがっかりするだろう」と続くので、すぐにアンちゃんを口説いたりセクハラしたりするのかと思ったよ。

顔が硬直するのがわかった。一生懸命考えたが、はっきりとは思い出せなかった。そして突然、思い出せた。この娘には翡翠の首飾りのことなんか一言も言ってない。

おれはマッチに手をのぼしてパイプに火を付け直した。「いいやそれほど。なぜ？」

「だってあたし、知ってるんですもん」

「ふーん」

「なんだかしゃべりたくてたまらないときにはどうするの——足指をもじもじさせるとか？」

おれはうなった。「降参だ。それを話に来たんだろう。話してくれ」

彼女の青い目が見開かれ、しばらくそれがちょっと潤んで見えたような気がした。下唇を噛み、そのままにしつつ机を見下ろした。そして肩をすくめて唇を話、いたずらっぽくにっこりして見せた。

「ええ、自分がただの詮索好きな小娘なのはわかってるわ。でも警察犬の血筋が入ってるのよ。お父さんが警官だったの、クリフ・リオーダンと言って、ベイシティ警察署長を七年務めたわ。あたしが変なもたぶんそのせいね」

「なんか聞き覚えがある名前だ。何があったんだっけ？」

「クビになったのよ。それで心が折れたの。レイアード・ブルネットっていう男が率いる博打打ち集団が市長に成り上がったのよ。そこで連中はパパを記録身分証局の局長にしたんだけど、ベイシティでは吹けば飛ぶようなところよ。だからパパはやめて、何年かぶらぶらして、それで死んじゃったの。そしてお母さんもすぐに後を追ったわ。だから二年にわたり一人きり」

「それはお気の毒に」

彼女はタバコをもみ消した。口紅はついていない。「こんな退屈な話をしている唯一の理由は、そのおかげで警官たちとは仲がいいからよ。昨晚のうちに言っとけばよかったのかも。それで今朝になって、だれがこの事件の担当かを調べて、会いにいったわけ。最初はあなたのこと、かなり怒ってたわよ」

「仕方ないだろう。すべての点について本当のことを言ったとしても、どうせ信じちゃくれなかっただろうし。せいぜいおれの片耳を食いちぎるくらいしかできない」

彼女は傷ついたようだった。おれは立ち上がり、もう一つの窓を開けた。大通りからの車の音が波となって、吐き気のようにやってきた。陰鬱な気分だった。おれは机の深い引き出しを開けて事務室用のボトルを取りだし、自分に一杯注いだ。

リオードン嬢は不満げにおれを眺めた。もはやおれはしっかりした男じゃないのだ。何も言わなかった。おれはそれを飲み干し、ボトルをしまってすわった。

「あたしには勧めてくれないのね」と彼女は冷ややかに言った。

「悪いね。まだ十一時にもなってない。そういうタイプには見えなかった」

彼女の目尻にシワがよった。「それ、ほめてるの？」

「おれの業界ではそうだ」

彼女はそれを聞いて考え込んだ。彼女には何の意味も持たなかった。考えて見れば、おれにも何の意味もないせりふだった。だが一杯やって気分はグッとよくなった。

彼女は身を乗り出し、手袋をゆっくりと机のガラスの上ですべらせた。「助手を雇いたいとは思わないわよねえ？ ときどき優しいことばをかける以外に費用がかからなくても？」

「思わない」

彼女はうなずいた。「まあそうだろうと思ったわ。情報だけ提供して、おうちに帰ったほうがよさそうね」

おれは何も言わなかった。おれは再びパイプに火をつけた。何も考えていないと、思慮深く見えるものだ。

「まず、そんな翡翠の首飾りは博物館級のものだから有名だろうと思いついたわけ」

おれはマッチを宙に掲げた。まだ燃えている。炎が指にじわじわ近づいてくるのを眺めた。それから、それをゆっくり吹き消して、灰皿に落とし入れた。

「おれは翡翠の首飾りのことなんか、君に何も話してない」

「ええ、でもランドール警部が話してくれた」

「だれかあいつの口にボタンを縫い付けるべきだな」

「お父さんの知り合いだったの。あたしはだれにも言わないからと約束したのよ」

「おれに言ってる」

「バカね、あなたは元々知ってたでしょう」

彼女の手はいきなり舞い上がり、口を覆おうとしかけたようだったが、半ばで停まってゆっくりと下がり、目が丸く見開かれた。よくできたお芝居だったが、おれは彼女について別のことを知っていたから、その芝居も効かなかった。

「知ってたわよねえ、あなた？」と彼女はその言葉を、ひそひそと息を吐くように発した。

「ダイヤモンドかと思っていたよ。腕輪、イヤリング、ペンダント、指輪三つ、指輪の一つはエメラルドもあった」

「おもしろくない。気も利いてないわよ」

「本翡翠だ。きわめて珍しい、それを彫った、一つ六カラットほどの玉が六十個。八万ドルの価値だ」

「あなたって、本当にすてきな茶色の目をしてるのね。そのくせタフなつもりなんだ」

「だから、それがだれのもので、どうやって調べたんだ？」

「ごく単純な話よ。この街最高の宝石屋ならたぶん知ってると思ったから、でかけてブックスの支配人に訊いたの。ライターで、珍しい翡翠についての記事を書きたいんだと言ったわけ——ありがちな台詞よ」

「そしてそいつは、君の赤毛と美しい体つきのおかげで信用したと⁴¹」

彼女はこめかみまで真っ赤になった。「まあとにかく、教えてはくれたわ。ベイシティに住む金持ちのご婦人のものなんですって。峡谷の邸宅にいる人。リュイン・ロックリッジ・グレイル夫人。旦那は投資銀行家かなんかで、すさまじい金持ちで、総資産二千万ドルほど。以前はビバリーヒルズでラジオ局を持っていたのよ、KFDK局。グレイル夫人はそこで働いていたそうよ。五年前に結婚。華やかきわまるブロンド。グレイル氏は高齢で気難しく、家にこもって下剤を飲んでいる間に、グレイル夫人はあちこちでかけてお楽しみってわけ」

「そのブックス宝石店の支配人ってのは、えらく耳ざといよだな」

41 ここでマーロウは、p.76でアンが自分について言った表現をそのまま繰り返して嫌みを言っているのだから、そろえないとだめ。村上春樹訳はそろえていない。

「あら何言ってんの、全部その人から訊いたんじゃないわよ。首飾りの話だけ。後はギディ・ガートー・アーボガストから訊いたのよ」

おれは深い方の引き出しに手をつっこんで、事務所用のボトルをまた取り出した。

「あなた、あの手の飲んだくれ探偵だったりしないでしょうねえ」と彼女は心配そうに言った。

「いけないか？ 必ず事件は解決するし、何の苦労すらしない連中だろうに。話の続きを」

「ギディ・ガートーは『クロニクル』の社交欄編集担当よ。長年の知り合い。体重百キロでヒトラー口ひげしてるの。グレイルスの、追悼記事用のファイルを出してきてくれたのよ。見て」

彼女はバッグに手をつっこんで、机越しに写真をすべらせてよこした。光沢仕上げのL版スチルだ。

ブロンド。枢機卿でもステンドグラスを蹴破って飛びつきそうなブロンド。街行きの装いで白黒の服らしく、それにマッチした帽子もかぶり、ちょっとお高い感じだが、極端ではない。どこであれ、男が求めるものはすべて——彼女は持っていた。三十歳ほど。

おれはすばやく酒を注ぎ、のどを焼きつつそれを飲み干した。「あっちにやってくれ。飛び上がりたくなる」

「あら、あなたのために手に入れたのに。だって会いたいですでしょう？」

おれはまた写真を見た。そしてそれを吸い取り紙の下にすべりこませた。「今夜十一時でどうだい？」

「ちょっと、くだらないギャグ飛ばしてる場合じゃないわよ、マーロウさん。あたし、この人に電話したんだから。会うって。仕事で」

「仕事から何に発展しますやら」

彼女は苛立った身ぶりをしたので、おれはふざけるのをやめて歴戦の仏頂ヅラを取り戻した。「何の用でおれに会いたいんだ、その人は」

「首飾りに決まってるでしょ。こんな感じ。電話かけたら、本人と話をするまでいろいろ手間だったんだけど、やっとのことでそれを実現したのよ。それで、ブックス宝石店の優しい人に話した御託を話したんだけど、通じなかったわ。何だか二日酔いかなんかみたいな感じだった。秘書と話せとかなんとか。でもなんとか電話での話を続けて、本翡翠の首飾りを持っていると聞いたけれど本当かと訊いたの。しばらくして、持っていると言うので、見せてもらえないかと頼んでみたわ。すると、何のために？ というから、またさっきの作り話をして、最初と同じくらい効き目はなかったわ。彼女

があくびをして、受話器の外のだれかに、こんなやつの電話を取り次いだことで怒鳴っているのが聞こえたわ。そこで、フィリップ・マーロウの下で働いているんだと言ったの。すると『それが何よ』ですって。すごい言い方じゃない？」

「驚くね。だが社交界のご婦人は最近じゃみんな売女みたいな口ぶりだから」

「あたしは知りませんが」とリオーダン嬢はかわいげに言った。「本物の売女もいるんでしょうね。そこで、子機じゃない⁴²直通電話があるか訊いたの。そしたら、あんたの知ったことじゃないと言うんだけど、不思議なことに電話を切らないのよ」

「翡翠のことが念頭にあって、君がどこに話を持っていく気かわからなかったんだろう。それとランドールからすでに連絡を受けていたのかも」

リオーダンはクビを振った。「いいえ。その後で電話したけど、あたしが話すまで首飾りの持ち主は知らなかったわ。あたしがそれを突き止めたので、ずいぶん驚いてた」

「あいつも君に慣れるだろうよ。そうせざるを得まい。それで？」

「そこでグレイル夫人に言ったわけよ。『まだ取り戻したいと思いませんか？』とそんな具合に。他に言い方がわからなかったんですもん。何か向こうをつつくようなことを言うしかなかった。でも効いたわ。彼女はすぐに、急いで別の番号⁴³を教えてくれたの。そしてその番号に電話して、お目にかかりたいと言ったわ。驚いたみたい。そこで話をするしかなかった。お気には召さなかったみたい。でもなぜマリオットから連絡がないのか不思議がっていたのね。たぶんお金を持ち逃げされたとかそんなことを思ってたんでしょう。だから二時に会うことになったのよ。そしたらあなたの話をして、あなたがいかに素敵で秘密厳守かを話して、首飾りを取り戻すチャンスがあるならあなたが最適だって話すわ。すでに興味はあるみたいだし」

おれは何も言わなかった。ただ彼女を見つめた。彼女は傷ついたようだった。「どうかした？ なんかいけないことやったかしら？」

「これがいまや警察の事件で、おれが近づくなと言われてたってのがまだわからないのか？」

「ゲイル夫人は、もしお望みならあなたを雇う完全な権利があるわ」

「何をさせるために？」

42 phone with no extension. 村上春樹訳「立ち聞きされない」。意味的にはそういうことなんだが、昔は構内で同じ回線に複数の電話がつながっていて、子機で親機の電話(またはその逆)が聞けたのだ。この邸宅も、親機はまず使用人が出て、それを子機の奥様や旦那様につなぐ形式になっていたわけ。

43 村上春樹訳「秘密の番号」。秘密だとはどこにも書いていない。

彼女は落ち着かない様子で、バッグを閉じては開けた。「あらまあ、なんてこと——こんな女性なら——こんな美女なら——ほらわかるでしょう——」と間をおいて唇を囁んだ。「マリオットってどんな人だったの？」

「ほとんど知らない。気取った野郎だと思ったがね。あまり気に入らなかった」

「女性にとって魅力的な男？」

「女性によるがね。他の女性なら唾棄したくなるだろう」

「まあ、どうやらグレイル夫人にとっては魅力的だったのかもしれないわね。二人でデートしてるし」

「たぶん百人とデートしているだろう。もう首飾りを取り返せる可能性はほとんどない」

「なぜ？」

おれは立ち上がり、オフィスの反対側まで歩いて、手の平で壁を強く叩いた。壁の向こうでカタカタ鳴るタイプライターが一瞬止まり、そして再開した。おれは開いた窓から、うちのビルとマンションハウス・ホテルとの間のすき間をのぞき込んだ。コーヒー店の匂いがすさまじく濃くて、その上に車庫でも建てられそうだ。おれは机に戻り、ウィスキーのボトルを引き出しに戻すと、引き出しを閉めてまたすわった。八回目か九回目のパイプに火をつけ、半分ほこりを払いかけのグラス越しに、リオーダン嬢の深遠で正直な小顔を慎重に見つめた。

こういう顔は、ずいぶん気に入るようになるもんだ。派手に化粧したブロンドなんか一山いくらだが、この顔は見飽きない。おれはそれになっこりして見せた。

「なあアン。マリオットを殺したのは馬鹿なまちがいだった。このホールドアップの背後にいるギャングは絶対にそんなことはしない。たぶん何が起こったかという、そいつらが用心棒がわりにつれてきたヤク中あがりの暴漢かなんかが過敏に反応したんだ。マリオットが下手な動きをして、そのチンピラが殴り倒し、それが急すぎてだれも止められなかった。ここにあるのは組織ギャングで宝石についてのインサイダー情報とそれを身につける女の動きを把握していた。こいつらはそこその儲けを要求し、ルール通りにふるまう。だがぜんぜんこの図式にあてはまらない、裏通り殺人も起きている。おれの考えでは、それをやったのがだれにせよ、もうとっくの昔に殺されていて、足首に重石をつけられ、太平洋の底深くに沈められたはずだ。そして翡翠はその道連れになったか、あるいはその本当の価値について見当がついたから、それをどこかにしまって、そのまま当分はそこにあるだろう——また取り出すまで何年もかかるかも。あるいはそのギャングが十分に大きいなら、世界の裏がわに顔

を出すかもしれん。要求額の八千ドルは、この翡翠の価値を本当に知っているならえらく低い。だが転売もむずかしい。一つだけおれが確信しているのは、だれも殺す気はなかったってことだ」

アン・リオーダンは唇をうっすら開け、うっとりした表情を浮かべておれの話聞いていた。まるでダライ・ラマを見ているかのようだった。

ゆっくりと唇を閉じて、一回うなずいた。そして優しく言った。「あなた、すばらしいわ。でもイカレてるわね」

彼女は立ち上がり、バッグを引き寄せた。「彼女に会いに行くの、行かないの？」

「ランドールに留め立てされる義理はないな——彼女が呼んだんなら」

「わかった。あたしは別の社交欄編集者に会って、できればグレイル家のネタをもっと探るわ。愛人関係とか。一人くらいいるわよねえ？」

赤茶色の髪に取り巻かれたその顔はせつなそうだった。

「いないやつなんかいないよ」おれはせせら笑った。

「あたしは一度もないわ。本当の意味では」

おれは手を上げて、口を覆って見せた。彼女はキッと睨むと、ドアに向かった。

「一つ忘れてる」とおれ。

彼女は立ち止まってふり返った。「何よ」と机の上をすべて見渡した。

「自分でも何かはご承知だろうに」

彼女は机のところに戻ってきて、本気で身を乗り出した。「どうして連中は、マリオットを殺したヤツを殺すの？ その人たちは殺人が仕事じゃないんでしょう？」

「そいつはいつか捕まって口を割るようなヤツだからだ——ヤクを取り上げられたら。だって連中はお客を殺したりはしない」

「その殺し屋がヤクをやっていたって、なぜそんなに確信できるの？」

「確信なんかない、言っただけだ。ほとんどのチンピラはやってる」

「ああ」彼女は身を起こし、うなずいてにっこりした。「これのことかしら」と言うと、すばやくバッグに手を入れて、机の上に小さなちり紙ケース入りのパッケージを置いた。

おれはそれに手を伸ばし、慎重に輪ゴムを外して、髪を開いた。その上には、紙製の吸い口がついた三本の太いロシアタバコが転がっていた。おれは無言で彼女を見た。

「盗っちゃいけないのはわかってたのよ」彼女はほとんど息もつかずにまくしたてた。「でもそれが大麻なのはわかってた。普通は無地の紙で巻くんだけど、最近ベイシティ近辺ではこんな巻き方をするの。何本か見たことがある。かわいそうなあの人が、死んでるのを見つけたときにマリファナ煙草がポケットに見つかるのはひどいと思ったのよ」

おれは静かに言った。「ケースごと持ってくるべきだったな。粉が残ってた。それに空っぽだとかえって怪しい」

「それは無理よ——あなたがその場にいたし。戻って戻しておこうかと思いかけたのよ。でもそれほど度胸がなかったの。何かそれでまずい目にあった？」

おれはウソをついた。「いいや。どうしてそんなことになる？」

「それはよかった」彼女はせつなそうに言った。

「なぜ捨てなかった？」

彼女はそれについて考えつつバッグを脇につかみ、つばの広い馬鹿げた帽子が傾いたので片目が隠れた。そしてようやく言った。

「警察の娘だからなんじゃないかしら。証拠をあっさり捨てたりしないの」。その微笑は弱々しく、後ろめたそうで、紅潮していた。おれは肩をすくめた。

「えーと——」という言葉が、閉じた部屋の煙のように宙に漂った。それを言った後でも彼女の唇は開いたままだった。おれはそれを漂うに任せた。彼女の紅潮が深まった。

「本当にごめんなさい。あんなことやるべきじゃなかった」

おれはそれも無視した。

彼女はとてもすばやく扉を抜けて出ていった。

[14]

長いロシアたばこの一つを指でつついてみた。それからきれいに横一列に並べて、椅子をきしらせた。証拠を簡単に捨てちゃいけない。つまりこれは証拠ってことだ。何の証拠？ ある人物がたまたま大麻たばこをすったという証拠、なんでも多少なりともエキゾチックな感じがあれば惹かれそうな人物だ。その一方で、タフガイの多くもマリファナを吸うし、多くのバンドマンや高校生や、もう諦めてしまった素敵な女子たちも。アメリカのハッシーシ。どこにでも生える雑草。いまや耕作は違法。これはアメリカ合州国ほど大きな国ではかなり大きな意味を持つ。

おれはそこにすわってパイプをふかし、自分の事務室の壁向こうでカタカタ鳴り続けるタイプライターの音と、ハリウッド大通りで変わる交通信号のボンボンと言う音⁴⁴と、コンクリートの歩道に沿って吹き飛ばされる紙袋のように、空中をうずまく春に聞き耳をたてた。

かなりでかいタバコだが、多くのロシア人もでかいし、マリファナは粗い葉だ。インドのヘンプ。アメリカのハッシーシ。証拠。まったく、女どもがかぶる帽子ときたら。頭が痛い。イカレてる。

ペンナイフを取り出して、小さく鋭い刃を開いた。パイプ掃除に使わないやつだ。それで一本を調べた。警察の化学者ならそうする。手始めの一つを真ん中で切り開き、中身を顕微鏡で調べる。何かたまたま、予想外の部分があるかもしれない。可能性は低いだが、それがどうした、化学者は月給をもらっているんだから。

おれは一つを真ん中で切り開いた。吸い口部分はかなり切りづらかった。オッケー、おれはタフなやつだから、それでも切り開いた。止められるもんなら止めてみな。

吸い口部分から、丸めた薄手の厚紙⁴⁵のキラキラした部分が少し開いてきて、そこに何か印字されていた。おれは身を起こし、それをつかもうとした。そして机の上にきちんと広げようとしたが、机の上であちこちすべった。おれはタバコをもう一本つかんで、吸い口の中をのぞいた。それから、ポ

44 当時の交通信号は音をたてたのか？ いろいろ調べてもはっきりしないが、そういう変則的な信号も一部ではあったかも、というのが AI くんの手紙。

45 rolled thin cardboard 村上春樹訳「くるくると丸まった薄い紙片の切れ端」。そうじゃない。大麻たばこの吸い口は、名刺くらいの薄手の厚紙を使う（後で実際に名刺だとわかる）。薄い紙片ではダメなのよ。

ケツナイフの刃を別の形で使ってみた。タバコをつまんで、指先で吸い口の始まるまで絞った。巻紙はずっと細かったのその下にあるものの粒まで感じられた。そこで吸い口を慎重に切り離し、さらに身長に吸い口を長手方向に切ったが、ほんの少し切るだけにとどめた。それが開き、下にはまた別のカードがあった。丸まって、こんどは無傷だ。

おれは嬉々としてそれを開いた。名刺だった。薄く淡い象牙色、少しくすんだ白。そこにエンボスされているのはデリケートに影をつけた言葉だった。左下隅にはスティルウッド・ハイツの電話番号。右下隅には「予約のみ」との凡例。真ん中には、少し大きめだが、やはり控えめに「ジュールス・アムサー」。その下にもう少し小さく「サイキック・コンサルタント」⁴⁶。

おれは三本目のタバコを手を取った。こんどは、かなり苦勞しつつも、何も切らずに名刺を取り出した。同じものだ。おれはそれを元の場所に戻した。

腕時計を見て、パイプを灰皿に入れ、そして改めて腕時計を見て時間を見なければならなかった。切り開いたタバコ二本と切った名刺をティシューペーパーの一部に巻いて入れ、完全な名刺が中に入ったものを同じティシューペーパーの別のところにいれ、両方の袋を机に入れて鍵をかけた。

すわって名刺を見つめた。ジュールス・アムサー、サイキック・コンサルタント、予約のみ、スティルウッド・ハイツの電話番号、住所なし。そんなのが三枚、大麻たばこ三本の中にロールさえれていて、それがにせのベツ甲フレームを持つ、中国か日本の絹製タバコケースに入っている。どこにでもあるようなケースで、そこらの東洋ショップでなら三五セントから七五セントで売ってる——フーイー・シングとか、ろん・しん・トンとかその手の名前の店で、礼儀正しいジャップがシーシーと息を吐きかけ、このアラビアの月というお香はフリスコ・セイディの裏部屋にいる女の子みたいな匂いがすると言っても、心から笑ってくれるような店だ。

そしてそれがすべて、まったくもって死んでいる男のポケットにあった。しかもそいつは、別のまったくもって高価なタバコケースを持ち、そこには彼が実際に吸うたばこが入っていた。

忘れたにちがいない。筋が通らない。もともと彼のものじゃなかったのかもしれない。それをホテルのロビーで拾ったんだ。持っているのを忘れた。それを届けるのを忘れた。ジュールス・アムサー、サイキック・コンサルタント。

46 このジョイントの構造、いささか腑に落ちない。吸い口部分に使うボール紙なんて幅1センチ未満だが、このチャンドラーの描写だと名刺をまるごと使っていた感じになってしまう。あるいは calling card というのが、電話番号だけ書いた細長いものだったのか？ 次の段落では、それを取り出して元に戻したと書かれているが、普通はそんなこと無理。出来合の紙巻きタバコから煙草の葉を取りだして大麻を詰め直したような代物なのか？ づらい。

電話がなり、おれはぼんやりと出た。その声は、自分が有能だと思ってるおまわりの冷たい堅さをもっていた。ランドールだ。怒鳴らなかった。冷やかなタイプなのだ。

「あんた、あの昨夜の娘がだれだか知らなかったと言ったな？ その娘が大通りであんたを拾って、そこまで歩いたと。たいしたウソだな、マーロウ」

「もし娘さんがいたら、新聞のカメラマンが茂みから飛び出して顔の前でフラッシュ炊いたりしたくないんじゃないか」

「私にウソをついた」

「どういたしまして」

彼は一瞬だまり、何か腹を決めようとしているかのようだった。「それは不問にしよう。彼女に会った。署に来て状況の話をしてくれたんだ。実は私が知って尊敬している人物のお嬢さんだった」

「彼女も話し、あんたも彼女に話した」

彼は冷たく答えた。「少しね。理由がある。いま電話しているのも同じ理由だ。この捜査は秘密捜査になる。この宝石ギャングを潰すチャンスだし、それをやるつもりなんだ」

「おや、今朝はギャング殺人になったんですか。まあいいや」

「ちなみに、あのへんなたばこケースにはマリファナの粉が入ってた——龍のついてたヤツだ。そっちからたばこを吸ったのは見てないのは確かか？」

「それは確実だ。おれの前ではもう一つのほうからしか吸わなかった。だがずっとおれの前にいたわけじゃないから」

「そうか。まあそれだけだ。昨夜言ったことを忘れるなよ。この事件について変な考えを起すな。こっちがあんたに求めるのは沈黙だけだ。さもないと——」

彼は口を止めた。おれは送話口にあくびをした。

「聞こえたぞ」彼はびしゃりと言った。「ひよっとすると、私がそんな脅しをできる立場にないと思ってるのか。できるぞ。あんたが一つ動きをまちがえたら、重要証人として拘置所行きだ」

「すると新聞にはこの事件は出ない？」

「殺人は載せる——でもその背後にあるものは出ない」

「それはおたくも同じこと」

「二度目の警告だぞ。三振したらアウトだ」

「手札を持ってるにしては、ずいぶんしゃべりますねえ」

それに対しては電話をたたき切られた。よし、あんなヤツ知るか。勝手にするがいい。

おれは事務室の中を少しうろついて頭を冷やし、自分に一杯ドリンクを買って、また腕時計をのぞいたが時間をきちんと水に、もう一度机の前にすわった。

ジュールス・アムサー、サイキック・コンサルタント。予約のみの相談。そいつに十分な時間と金をやれば、冷たい夫から蝗害までなんでも直してさしあげましょう。恋の悩みも、独り寝が寂しい女性も、家に手紙も書かないさまよう少年少女も、物件をいま売るかもう一年様子を見るべきかも、この役柄は世間のイメージを損なうかそれとも多才に思われるか、なんて話もお手の物。男たちもこっそりやってきますぜ、オフィス周りでライオンまがいに吠えるのに、実はベストの下では震え上がっているような大きな強い連中も。だがほとんどは女性だろう、息をきらすデブ女性に、心焦がすヤセ女、夢見る老女に自分がエレクトラ・コンプレックスを抱いているのではと思う若い女性、大きさも形も年齢もまるでちがう女性たちだが一つだけ共通点がある——金だ。ジュールス・アムサー氏は郡病院で木曜の無料診察なんぞはいたしませんの。きっぱり現金払い。牛乳の代金はせつつかれないと支払わない金持ち女どもでも、彼になら即金払い。

インチキ詐欺師、でまかせ広め屋、死人が持ってる大麻たばこの中に名刺が丸まってるヤツ。

おもしろくなりそうだ。おれは電話に手を伸ばし、0をまわして交換手を呼び、そのスティルウッド・ハイツの電話番号につないでもらった。

[15]

女の声が出た。乾いた、かすれたような外国人の声だ。「アロー」

「アムサーさんはおいでですか？」

「あー、ダメね残念。とてもひどく残念す。アムサー、絶対電話はなさない。わたし、あの人の秘書ね。伝言、おつたえするですけど」

「そこの住所は？ お目にかかりたい」

「ああ、アムサーに仕事で相談なさるたい？ アムサー、とても喜ぶです。でもとても忙しい、ありません。いつ会いたい思いますか？」

「すぐだ。今日中に」

向こうの声は残念がった。「ああ、それありえまえせん。来週ならあるかも。本を見るます」

「おい、本はいいから。鉛筆、持ってるある？」

「はいもちろん鉛筆持ってるあります。わたし——」

「書き留めて。私の名前はフィリップ・マーロウ。住所はハリウッドのカフエンガビル615。アイヴァー近くのハリウッド大通りにある。電話番号はグレンビュー7537」。むずかしい単語は綴りも言って待った。

「はいだんなさん、書き留めました」

「アムサーさんに、マリオットという人のことで会いたい」。それも綴った。「ものすごく急ぎなんだ。生死に関わる話だ。急いでお目にかかりたい。い・そ・い・で——急いで。いきなり、とも言う。わかるか？」

「あなた、とっても変な話し方」と外国の声が言った。

おれはロウソク電話機のスタンド部分をつかんで揺すった⁴⁷。「そんなことない。大丈夫。いつもこういう話し方なんだ。これはとても奇妙な一件なんだ。アムサーさんは絶対に会いたがる。私は私立探偵だ。でも会うまで警察には行きたくないんだ」

声はカフェテリアの夕食なみに冷たくなった。「ああ、あなた警察の人です、ちがう？」

「話をきけ。警察の人です、ちがう。おれ私立探偵。秘密まもる。それでもすごく急ぐんだ。折り返す、わかった？ 電話番号あるね？」

「シー。電話番号、ある。ミースター・マリOTT——病気ある？」

「まあ、起きてうろうろはできないな。あいつを知ってるのか？」

「いえ知らない。命にかかわる言いました。アムサー、たくさん人治す——」

「今回ばかりはそうはいかないぜ。じゃあ電話を待ってるので」



おれは耳当てをかけると、事務室の酒瓶に飛びついた。まるで肉挽き機にかけられたような気分だった。十分が過ぎた。電話が鳴った。声があった。

「アムサー、六時にお目にかかります」

「大丈夫。住所は？」

「車を迎えに出します」

「自分の車がある。住所だけ——」

「車を迎えに出します」と声が冷たく述べ、耳元でかちりと電話が切れた。

もう一度腕時計を見た。昼飯時をとくにまわっている。腹はさっきの一杯で焼けていた。腹は減っていなかった。タバコに火をつけた。配管工のハンカチみたいな味がした。オフィス向こうのレンブラントさんにうなずいてみせてから、帽子に手を伸ばして出かけた。エレベーターまでの道半ばで、ハッと思いついた。何も理由もきっかけもなく、レンガが落ちてくるように思いついたのだ。おれは立ち止まり、大理石張りの壁にもたれて頭の帽子をぐるりとまわし、いきなり笑い出した。

47 Phone standard. この記述から、マーロウの机の上の電話が、黒電話型ではなく写真のようなロウソク型の、当時(1930年代末)としてもかなり古いものだったことがわかる。これまでの電話場面の具体的イメージがかなり変わるので重要だとぼくは思うため、ここではそれを少し補った。村上春樹訳「電話台」は、わかっているかどうかは不明だがイメージにくい。もちろん、そんなのどうでもいいと思うなら、そこまで説明しない選択もある。

エレベーターから職場に戻ろうとすれちがった女子がふりむき、背骨をストッキングのほつれみたくに感じさせる、あの手の目つきを向けた。おれはその娘に手を振り、自分の事務所に戻って電話をつかんだ。登記会社の地籍簿で働く知り合いに電話をしたのだ。

「所在地だけで物件探せる？」

「もちろん。対応表がある。どこだ？」

「西五番街一六六四。登記の状態についてちょっと知りたいんだ」

「折り返したほうがいいな。番号は？」

三分ほどで折り返してきた。

「鉛筆用意しな。メープルウッド地番4号のキャラデイ追加造成11番8号敷地。所有者はいくつか条件つきだがジェシー・ピアス・フロリアン、未亡人」

「わかった。条件って？」

「固定資産税下半期分、十年街路改良積み立て金二期分、同じく十年排水管調査積み立て金一期分が未納だが、まだどれも滞納にはなっていない。あと二千六百ドル分の一番信託抵当権が設定されている⁴⁸」

「それって、通告さえすれば十分で売り飛ばせるってやつ？」

「そこまですぐは無理だが、住宅ローン組むよりはずっとはやく処理できるな。別におかしなところは何かないよ、金額以外は。このご近所にしては高いな、新築でもない限り」

「すごい古屋で、しかもひどいおんぼろだ。見たところ千五百ドルで買えそうな物件」

「じゃあ明らかに不審だなあ。借り換えはたった四年前に行われてるんだから」

「うん、その抵当権はだれが持ってる？ どこかの投資会社？」

「いや、個人。リンゼイ・マリオットという人、独身男性。これでいい？」

自分が何と言ったか、どんなお礼を言ったかは忘れた。たぶん言葉になりきっていなかっただろう。そこにすわって、ひたすら壁を見つめた。

48 税金等は、未納だけれどまだ期限はきてないので、滞納にはなっていない。最後のだけは一番抵当権が設定されているが、普通の住宅ローンで担保になるのと同じ(売り飛ばすとか二人が言ってるのはちょっと意味不明)。結局、マリオットは四年前に、この家を担保にフロリアン夫人に2600ドル貸したということ。購買力だと現在の6万ドル弱に相当。村上春樹訳は、あんまりわかってない感じだが極端にまちがってはいない。

急に腹の具合が回復した。腹が減った。おれはマンションハウスのコーヒー店に下りて昼飯を食い、ビル隣の駐車場から車を出した。

おれは南へ、そして東へと車を走らせ、西五十四番街に向かった。今回は酒は持参しなかった。

[16]

その街区は前日とまったく同じ様子だった。道は氷配達トラック、車寄せにフォード二台、角ですばやいほこりの渦巻き以外、何もなかった。おれはゆっくりと一六四四番を通り過ぎ、少し先に駐車して、左右の家屋を観察した。歩いて戻り、家の前で立ち止まり、タフなヤシの木と陰気な水やりの足りない貧相な芝生を眺めた。家は無人に見えたが、おそらくだれかいるだろう。単に無人に見えるだけだ。フロントポーチの寂しい揺り椅子は、昨日とまったく同じところに置かれていた。玄関までの歩道には、投げ込まれた新聞が転がっていた。それを拾って脚に叩きつけたところで、隣家のカーテンが動くのが見えた。こちらに近い正面の窓だ。

また老いぼれ詮索屋か。おれはあくびをして、そちらに帽子を傾けてみせた。鋭い鼻が窓ガラスの内側にほとんど鼻をぺしゃんこに押しつけた。その上の白髪、そしておれの立っているところからは目にしか見えない目。歩道をゆっくり歩くと目がおれを見つめた。おれは彼女の家のほうに曲がった。そして木製階段を上がり、呼び鈴を鳴らした。

扉はまるでバネ仕掛けのようにパタンと開いた。背の高いばばあであごはウサギのようだ。間近で見たその目は、静かな水面に映る灯りのように鋭い。おれは帽子を取った。

「フロリアン夫人について警察に通報した方ですか？」

彼女は冷ややかにおれを見つめ、何一つ見逃さなかった。おそらくおれの右肩甲骨下のほくろまで見通されただろう。

「そうだとも言いませんよ、お若いの。そうでないとも言わないよ。あんた、だれだい？」甲高い鼻にかかった声で、八人同時通話回線でもみんなを制するためにある声だ。

「警察のほうから来ました⁴⁹」

49 I'm a detective. detective は探偵の意味と刑事という意味があって、マーロウは以前もフロリアン夫人に対してそれをわざと混同させるような使い方をしている。日本語ではその二重の意味はないので定番のごまかし方で。

「いやはやまったく。早くそう言っとくれよ。あの女、こんどは何をやらかしたんだい？ あたしや何も見てないけど、一分たりとも目を離してないからね。店に行ったりとかは全部ヘンリーがやってくれるんだよ。ここじゃ物音一つもないよ」

彼女は網戸のフックをぱちりと開き、おれを引き込んだ。廊下は家具オイルの匂いがした。そこにはかつて流行りの様式だった色の濃い家具がたくさんあった。象嵌パネルを使い、角に扇形装飾がついた家具だ。客間に行くと、そこはピンを刺せるものすべてに手当たり次第、綿レースの背覆いがピン留めされていた。

「ちょっと、あんたどっかで見たことなかったっけ？」と彼女はいきなり尋ね、その声には疑惑の色がとぐろを巻き始めた。「いや絶対見たことあるよ。あんた、昨日の——」

「その通り。それでも警察のほうから来たんですよ。ヘンリーってだれです？」

「ああ、使い走りしてくれる、黒人坊やだよ。で、何が知りたいんだね、お若いの？」と彼女はきれいな紅白エプロンを叩いて、食い入るような目つきをくれた。そして小手調べに入れ歯を何回かカチカチさせた。

「昨日の警官たちはフロリアン夫人の家に行ったあとでここに寄りましたか？」

「警官って？」

「制服警官です」とおれは辛抱強く言った。

「ああ、一分ほど来たよ。何にも知りやしなかった」

「でっかい男はどんなヤツでした——銃を持っていてあなたが通報したヤツ」

彼女の描写は正確極まるものだった。確かにマロイだ。

「どんな車を運転してました？」

「小さいの。ほとんどあいつが乗り込めないくらい」

「それだけですか？ こいつは殺し屋なんですよ！」

彼女はあんぐりと口を開いたが、目は嬉しそうだった。「いやはやまったく。話してあげられるといいんだけどねえ、お若いの。でもあたし、車のことなんか前からわかんないのよ。殺し屋だって？ この街じゃみんな一分たりとも安全じゃないねえ。ここに二十年前にきたときには、ほとんど玄

関に鍵もかけなかったよ。それがいまや、ギャングだの汚職警官だの政治家たちだのが機関銃で撃ち合ってたって話じゃないの。まったくとんでもない話だよ、お若いの」

「そうねえ。フロリアン夫人について何か知ってます？」

小さな口が突き出された。「近所づきあいは悪いね。深夜にラジオを大音量でかける。歌う。だれとも話さない」そしてちょっと身を乗り出した。「はっきりしないけど、お酒を飲んでるよ」

「お客は多い？」

「全然お客なんかいないよ」

「もちろんあなたならまちがいありませんよね、えーとお名前は——」

「モリソン。モリソン夫人。いやはやまったく、窓から外見る以外することもないからねえ」

「さぞ楽しいことでしょうね。フロリアンさんはもうここは長いんですか？」

「十年くらいだと思うねえ。昔は旦那さんがいたよ。なんだか悪漢みたいだったけど。死んだよ」そこで口を止めて考えた。そして付け加えた。「普通に死んだはず。他の話は聞いたことない」

「お金を遺した？」

彼女の目が後退し、あごがそれに続いた。そして激しく匂いを嗅いだ。「あんた、お酒を飲んでたね」と冷たく言った。

「歯を抜いたばかりなんですよ。歯医者がくれまして」

「あたしゃ賛成しないね」

「ひどいもんです、薬として以外は」

「薬としても賛成しないね」

「おっしゃる通り。その人、遺産は遺したんですかね？ 彼女の旦那は？」

「知らないねえ」彼女の口はスモモの大きさと同じくらい何もなかった。手がかりなし。

「警官がきてから、他にだれかきました？」

「見てない」

「ありがとうございます、モリソンさん。お騒がせするのはもうこのくらいにしておきます。本当にご親切にありがとうございます。参考になりました」

おれは部屋を出て扉を開けた。彼女は後からきて咳払いし、歯をさらに何度かカチカチさせた。

「どの番号にかければいいんだい？」彼女は少し優しげになった。

「ユニバーシティ 4-5000。ナルティー警部につないでもらって。あの人、生活費はどうしてるの——生活保護？」

「ここは生活保護区じゃないんだよ」彼女は冷たく言った。

「あの食器棚、かつてはスー・フォールズの羨望の的だったでしょうねえ」とおれは、居間におさまり切らないので廊下に置かれている木彫りの食器棚を眺めた。端は丸められ、細く彫られた脚があり、いたるところ象嵌細工で、正目には果物バスケットが描かれている。

「メイソンシティ」と彼女は優しく言った。「ええそうですとも、かつては素敵な家を持ってたんだよ、あたしとジョージは。最高のやつをね」

網戸を開いて通り抜け、お礼を言った。いまや彼女は笑っている。その笑顔は目と同じくらい鋭い。

「毎月一日に書き留め郵便がくるね」いきなり彼女は言った。

おれはふりむいて待った。彼女は身を乗り出した。「郵便配達が戸口まで行ってサインをもらってるのが見えるんだよ。毎月一日。すると着飾って出かけるんだ。夜遅くまで帰ってこない。夜中まで歌ってる。ときどきそれがうるさすぎて警察を呼ぼうかと思ったくらい」

おれはその細い悪意に満ちた腕を叩いた。

「あなた、一騎当千ですよモリソンさん」とおれは帽子をかぶり、彼女に向けて傾けると立ち去った。歩道を半ばまできたところで、ふと思いついてきびすを返した。彼女はまだ網戸の中に立って、家の扉は背後で開けたままだった。おれはまた階段を登った。

「明日は一日だ。四月一日、エイプリルフールだ。彼女がその書留便を受け取るか、しっかり見といてくださいよ、モリソンさん」

目がおれに向けてギラついた。彼女は笑い出した——甲高い婆さん笑い。「エイプリルフールね」と彼女はクスクス笑った。「ひょっとすると届かないかもしれないねえ⁵⁰」

50 原文「Maybe she won't get it.」は、エイプリルフールだから届かないかも、という純粋な冗談なのか、「夜道に気をつけろよ」的な「あたしが盗んでしまうかも」といったほめかしなのかはっきりしない。もちろんその書留はマリOTTからの口止め料で、彼が死んだらもう届かないのをマーロウは知っているが、この婆さんはそんなことは知るよしもない。村上春樹訳は「待ち人来たらず、てなことになりそうだね」で何を言いたいのかはっきりしないが、彼女は届くかどうか何も事情を知らないので、届かないだろう、と匂わせるような発言はしない/できないので、これはまちがっている。「なるかもね」くらいにしておけばいいのに。さらにこの婆さんは本当に下世話で卑

おれは笑う彼女を後にした。その音はニワトリのしゃっくりみたいだった。

しい人物として描かれているので、ここで急にこんな気の利いた (少なくともそういう努力のあとの見られる) キザったらしい故事成句混じりの台詞を言うのは違和感がある。

[17]

呼び鈴にも扉のノックにも、だれも応えなかった。もう一度やってみた。網戸のフックはかかっていた。家の扉を試した。鍵はかかってない。おれは中に入った。

何も変わっていない。ジンの臭いすらも。相変わらず床に死体はない。昨日フロリアン夫人がすわっていた椅子の横にある小さなテーブルに、汚いグラスが立っていた。ラジオは切つてある。おれは寝椅子のところにいて、クッションの背後に手を入れてみた。同じ空いた酒瓶があり、いまやもう一本お仲間が増えていた。

読んでみた。返事なし。そのとき、長くゆっくりした、不幸そうな半分うめき声のような呼吸音が聞こえたような気がした。アーチを通り抜けて小さな廊下にコソコソ出た。寝室のドアが開きかけで、うめくような音はその向こうから聞こえていた。おれは頭を突っ込んで見回した。

フロリアン夫人はベッドの中だった。仰向けに寝転がり、綿の掛け布団をあごまで引き上げている。その掛け布団についている小さな飾り玉の一つがほとんど口の中に入りかけていた。その長い黄色い顔は力が抜け、死にかけだった。汚い髪が枕の上でもつれている。目がゆっくりと開いて、無表情におれを見た。部屋は睡眠、酒、汚れた服の、胸の悪くなる匂いがした。六九セントの目覚まし時計が、食器棚のはがれかけた灰白色のペンキの上でカチカチ鳴っている。そのカチカチが大きくて壁が揺れるほどだ。その上に鏡があり、女の顔がゆがんで映っている。彼女があの写真を撮りだしたトランクはまだ開けっぱなしだった。

おれは言った。「こんにちは、フロリアンさん。病気ですか？」

彼女は唇をあわせてもぐもぐさせ、上唇を下唇にこすりつけると、舌をすべり出させてそれを湿らせ、そしてアゴの運動を始めた。その口から出てくる声は、すりきれたレコードのようだった。いまやその目はこちらを認識したと示してはいたが、喜んではいなかった。

「捕まえたかい？」

「マロイ？」

「当然」

「まだ。もうすぐ、と願いたい」

彼女は目をつぶったまま天を仰ぎ、そしてそれをパチッと開いて、まるで目にかかった膜を取りのぞこうとしているかのようだった。

「家に鍵をかけておいたほうがいい。あいつが戻ってくるかもしれませんよ」

「あたしがマロイを怖がってると思ってるのかい、え？」

「昨日話していたときには、そんなふうにはふるまっていたね」

彼女はそれについて考えた。考えるのは気が滅入る作業だった。「酒ある？」

「いや今日は持ってきてません、フロリアンさん。ちょっと手元不如意で」

「ジンは安いよ。ガツンとくる」

「しばらくしたら、出かけて買ってくるかもしれない。じゃあマロイは怖くないと？」

「なんで怖がるんだい？」

「わかった、怖くない、と。じゃあ何が怖いんです？」

彼女の目にパッと光が戻り、一瞬続いたが、またかき消えた。「まったくうるせえよ、あんたらオマワリと話すとかツが痛くなるだけだよ」

おれは無言だった。戸口にもたれてタバコを口に入れ、それをずっと上まで傾けて鼻の頭を叩こうとした。これは見かけよりむずかしい。

彼女はゆっくりと、独り言のように言った。「サツどもは、絶対あいつを捕まえられないよ。いいヤツだし金もあるし友人もいるんだ。時間の無駄だよ、ポリ公」

「定型仕事ですから。どのみちほぼ正当防衛ですよ。どこにいますかねえ？」

彼女は鼻でせせら笑い、綿の掛け布団で口をぬぐった。

「こんどはおだてかい。甘い手口か。サツの浅知恵。いまだにそんなもので釣れると思ってやがる」

「マロイは気に入ったんです」

女の目に興味が走った。「知ってたのかい？」

「昨日いっしょでした——セントラルであの黒んぼを殺したときに」

彼女はでっかく口を開き、大笑いしたが、パンの棒を折るときほども音を立てなかった。その目から涙が流れ出て顔をつたった。

「でっかい強い男。心にヤワな部分を抱えてる。自分のヴェルマを必死で取り戻したい」

目が曇った。「あの娘を探してたのは親戚じゃなかったのかい」と柔らかく言った。

「その通り。でも彼女は死んだって言いましたね。だからそれはもうない。どこで死んだ？」

「テキサス州ダルハート。風邪引いて、それが胸にきてあの世行き」

「その場にいたの？」

「いやまさか。聞いただけ」

「おや。だれに聞いたんです、フロリアンさん？」

「どっかのダンサー。名前は今出てこない。いいキツイ酒でもありゃ思い出すかもねえ。いまはデスバレーみたいな気分だよ」

「そういうあんたは死んだロバみたいだ」と思ったが口には出さなかった。「あともう一つだけ。そしたら出かけてジンを買ってくるかも。おたくの登記簿を調べたんですよ、ふと思いついて」

彼女はベッドの中で硬直し、木彫り女みたいになった。そのまぶたすら、目の濁った瞳孔を半ば隠した状態で凍りついた。呼吸が静かになった。

「かなり巨額の担保抵当権が設定されてますね、ここらの物件の低い価値からすると。それを持っているのがリンゼイ・マリオットという男」

彼女は激しく瞬きしたが、他は何も動かなかった。おれを見つめた。そしてやっと口を開いた。

「昔、あの人の下で働いてたんだよ。一家の召使いだった。今も少し面倒をみてる、みたいな」

おれは火をつけていないタバコを口から取りだして、ぼんやりとそれを眺めてまた口に戻した。

「昨日の午後、お目にかかって数時間後に、マリオットさんが事務所に電話をくれたんですよ。仕事を頼みたいといって」

「どんな仕事だい？」その声はいまやひどくしわがれていた。

おれは肩をすくめた。「それは言えない。秘密です。昨日会いにいきましたよ」

「あんた、小利口な青二才だね」と彼女はだみ声で言うと、掛け布団の下に手をすべりこませた。

おれは無言で彼女を見つめた。

「サツの浅知恵」と彼女はせせら笑った。

おれは戸口の枠に片手を上下に走らせた。べとついている。触っただけで風呂を浴びたくなる。

おれは滑らかに言った。「じゃあ、それだけです。ただ理由が知りたかっただけで。なんでもなかったのかもしれない。ただの偶然かも。なんか意味がありそうに思えたもので」

彼女は空疎に言った。「サツの浅知恵。しかも本物のサツですらない。安手の探偵」

「まあそうだ。じゃあ、さようなら、フロリアンさん。ちなみに、明日の朝の書留便はないと思いますよ」

彼女は掛け布団をはねのけ、燃えるような目つきでパッと身体を起こした。何かが右手で輝いている。小さなリボルバー、コルトのバンカーズ・スペシャルだ。古くてぼろぼろだが、見えそうだ。

「吐きな。さっさと」と彼女は歯を剥いた。

おれは銃を見て、銃はおれを見た。あまり安定していない。それを持つ手が震え始めたが、目はまだ燃えている。女の口の端から泡が吹いている。

「お互い協力し合おうじゃありませんか」

銃と女のアゴが同時に下がった。おれは扉までほんの数センチだった。銃がまだ下がっている間に、おれはそこを滑り抜けて、開口部の向こうにいた。

「考えてみてくださいよ」おれは背後に怒鳴った。

音はなかった。何の音も。

おれはすばやく、廊下を抜け食堂を通り家を出た。歩道を下る間も背中がむずむずした。筋肉がびくつく。

何も起きなかった。おれは道を下り車に乗りこんで走り去った。

三月最終日でもう夏のような暑さ。運転しつつ上着を脱ぎたい気分だった。七七番通り署の前では、パトカー警官二人が曲がったフロントのバンパーを検分していた。おれはスイングドアに入り、手すりの向こうで受け入れ書を検分している征服姿の巡査部長を眺めた。そいつに、ナルティーが上にい

るか尋ねた。いると思う、おまえあいつの友人か、と尋ねる。そうだと応えた。オッケー、上に行けと言う。そこでおれはぼろぼろの階段を上がり、廊下を下って扉をノックした。声がどなりおれは中に入った。

彼は歯をせせっていて、椅子にすわって別の椅子に脚をのせていた。左の親指を見ていた。腕をのばしてそれを目の前に掲げている。問題なさそうな親指に見えたが、ナルティーの視線は陰気で、それが回復しないとでも思っているようだった。

彼はそれを太ももまでおろし、脚を床に下げると、親指ではなくおれを見た。ダークグレーのスーツを着て、かみつぶされた葉巻の端が机の上で、爪楊枝作業の終了を待っていた。

おれは彼が脚を乗せていた椅子の、ストラップがどこにも結わえられていないフェルト製シートカバーをひっくり返し、すわり、タバコをくわえた。

「おまえか」とナルティーは爪楊枝を眺め、それが十分に噛まれたかを検分した。

「首尾は？」

「マロイのこと？ もう担当じゃねえよ」

「だれが担当？」

「だれも。なんで？ ヤツはずらかったよ。テレタイプで連絡して手配書もまわしたんだ。まったく今頃はとっくにメキシコだろうよ」

「まあどうせ、黒んぼを殺しただけだからねえ。ただの軽犯罪なんだろう？」

「まだ興味あるのか？ なんか仕事があるんじゃないの？」 その淡い目がぬらりとおれの顔を眺めた。

「昨夜は仕事があったんだが、長続きしなかった。まだあのピエロの写真はあるか？」

彼はあたりをガサゴソして、吸い取り紙の下に手を伸ばした。それを差し出した。いまもきれいだった。おれはその顔を見つめた。

「これ、ホントはおれのですよね。ファイル用にいないなら、返してもらいますよ」

「ファイルに入れるべきなんだろうな。忘れてたよ。いいよ、おまえが持つとけ。もうファイルはしまちゃったし」

おれは写真を胸ポケットに入れて立ち上がった。「じゃあ、それだけですか」と言ったが、いささか言い方が軽すぎた。

「なんか匂うな」ナルティーが冷たく言った。

おれは彼の机の縁にある縄の切れ端を見た。彼の目がおれの視線をたどった。彼は爪楊枝を床に投げて、噛んだ葉巻を口に突っ込んだ。

「これも行き詰まりでねえ」

「ぼんやりしたヤマ勘はある。もっとがっちりした話になったら、恩は忘れませんよ」

「このところキツくてね。おれも何か当たりがいるんだよ」

「あんたほど頑張って働く人なら、当たりが来るのも当然でしょうよ」

彼は親指の爪でマッチをつけ、一発目で成功したのでご満悦で、葉巻からの煙を吸い込みだした。

「おもしろえよ」おれの出がけにナルティーは悲しげに言った。

廊下は静かで、建物全体が静かだった。下の建物前ではパトカーの警官がまだ曲がったフェンダーを見ていた。おれはハリウッドに来るまで戻った。

事務所に入ると電話が鳴っていた。おれは机にかがみ込んで「もしもし？」と言った。

「こちらはフィリップ・マーロウ様でよろしいでしょうか？」

「はい、マーロウですが？」

「こちらはグレイル夫人宅でございます。リュイン・ロックリッジ・グレイル夫人です。グレイル夫人が、可及的速やかにこちらでお目にかかりたいと申しております」

「場所は？」

「所在地はベイシティのアスタードライブ八六二号でございます。一時間以内に起こしいただけるといふことでよろしいでしょうか？」

「あなたはグレイル氏？」

「いいえまさか。執事でございます」

「呼び鈴が鳴ったらそれはおれだ」

[18]

そこは海に近く、空気にも海が感じられるが、そこの正目からは水面は見えない。アスター街はそこで長くなめらかなカーブとなっていて、陸側の家はただのすてきな家だったが、谷側は巨大で無言の邸宅ばかり、高さ四メートルの壁と錬鉄の門と装飾的な生け垣、内側は、もし内側に入ればだが、特別なブランドの日差しがある。とても静かで上流階級専用防音コンテナ入りのヤツだ。

紺色のルバシカとピカピカの黒い⁵¹ゲートル、フレア付半ズボンの男が、開きかけた門のところに立っていた。色の黒いハンサムな若者で、肩が盛り上がりピカピカで滑らかな髪、しゃれた帽子のてっぺんが目の上に柔らかい影を落としている。口の角にタバコをくわえ、頭を少し傾けて、鼻に煙が入らないのが好きだとでも言うようだ。片手は滑らかな黒い長手袋で、もう片方はむき出しだ。中指には重たい指輪をしている。

家番号は見あたらなかったが、これが八六二番のはずだ。おれは車を止め、身を乗り出して尋ねた。彼が答えるまでにはえらく時間がかかった。おれをずいぶん慎重に検分しなきゃならなかった。それとおれが運転している車も。おれのところにやってきて、近づく間にさりげなく手袋のないほうの手を腰に落とした。実にこれ見よがしのさりげなさだ。

彼は車から一メートル弱の距離まで離れて、改めておれを上から下まで見た。

「グレイル邸を探しているんですが」

「ここだ。みんな留守だ」

「約束がある」

彼はうなずいた。目が水のようにきらめいた。「名前は？」

「フィリップ・マーロウ」

「そこで待って」彼は急がずゆっくりと門のほうに歩き、その巨大な柱の一つに仕込まれた鉄のドアを開錠した。その中に電話があった。彼は手短かにそれに話し、パタンとドアを閉めると戻ってきた。

51 村上春樹訳はなぜかブルーになっている。

「何か身分証は？」

おれはステアリングコラムについて各種ライセンスを見せた。「そんなの何の証明にもならない。あんたの車だとどうしてわかる？」とのこと。

おれはイグニッションからキーを引き抜き、車のドアをばたんと開けて外に出た。これで相手とは三〇センチほどの距離となった。素敵な息だ。最低でもヘイグ&ヘイグのウィスキーを飲んでる。

「あんた、また酒棚に行ってたな⁵²」

彼はにっこりした。その目がおれを値踏みする。おれは言った。

「おい、あの電話で執事と話をさせろ。おれの声がわかるから。それで入れるか、それともあんたにおんぶしてもらわなきゃ入れないのか？」

「おれは仕事でやってるだけだよ。そうでなかったら——」彼は柔らかく言うとその後は宙に浮かせて、微笑を続けた。

「あんた、悪い奴じゃないな」とおれはそいつの肩を叩いた。「ダートマスか、ダンネモラか？」(訳注：一流校のダートマス大出身か、それともダンネモラの刑務所出身か、ということ)

「うわっ、あんたサツかい。それならさっさとそう言ってくれよ」

おれたち二人ともニヤリとした。彼は手を振り、おれは開きかけの門を通して中に入った。進入路はカーブしていて、深い緑の背の高い生け垣が、それを街路からも家からも完全に覆い隠していた。緑の門越に、ジャップの庭師が巨大な芝生の雑草取り作業をしているのが見えた。巨大なビロードの広がりから雑草を一本抜いて、ジャップ庭師ども流のやりかたでその草を冷笑していた。そしてその生け垣がまた閉じて、三〇メートルほどまた何も見えなかった。そこで生け垣が終わって大きなサークルに出て、そこに車が半ダース停めてあった。

その一つは小型クーペだった。最新モデルの実にすてきなツートンカラーのビュイックが二台ある。郵便局まで郵便を取りに行くにも十分使えるほどのものだ⁵³。黒いリムジンがあり、鈍いニッケルメッキの放熱口と、自転車ホイール並にでかいハブキャップを備えている。車体の長いスポーツフェート

52 You've been at the sideboy again. Sideboy は酒を入れてある棚のこと。その前のヘイグ&ヘイグはウィスキーで、息にそのにおいがあったからわかった。それまで対決ムードなのを、おまえ酒飲んでるな、と指摘することで相手の弱みをつつき、共犯っぽい色を出して対決色を少し抑えているのがポイント。村上春樹訳「門番仕事は楽しいか」で、意味もニュアンスもまったくちがう。相手にケンカ売ってかえって険悪になるじゃん！

53 Go for the mail in. 村上春樹訳は「玄関まで郵便を取りに行く」だが、ピンとこなかったので調べたところ、1940年頃のロサンゼルスではまだ郵便の個別配達特に郊外部では一般的ではなく、郵便局の私書箱まで取りに行くのが普通だった、とのこと。村上訳は、つまらない作業というニュアンスは正しいが、訳としてはまちがいの。

ン型オープンカーがあって、トップを下ろしてある。短いがきわめて幅の広い全天候型コンクリートの車回しが、それらから家の入り口に続いていた。



1940 スポーツフェートン(デュイック)

左側の、駐車スペースの外れには一段下がった庭があり、その四隅それぞれに噴水がある。その入り口は錬鉄製の門でふさがれ、その門の真ん中には空飛ぶキューピッドがついている。細い柱には胸像が置かれ、その両端には石座にグリフィンがしゃがんでいる。細長い池には石製の睡蓮が浮かび、その葉の一つに石製のガマガエルがすわっている。さらに遠くにはバラの列柱が何か祭壇のようなものに続いている。その両側には生け垣があるが、完全に覆い隠すほどではなく、太陽がアラベスク模様となって祭壇の階段沿いに降りかかっている。そしてずっと左手には野生庭園があった。あまり大きくはなく、廃墟のように見えるよう作られた壁の一角に近い片隅には日時計があった。そして花があった。何百万もの花。

家そのものは大したことはなかった。バッキンガム宮殿よりは小さかったし、カリフォルニアにしてはいささか地味で、おそらくクライスラービルよりも窓の数は少ない。

おれは横手の入り口にこっそりと近づき、呼び鈴を鳴らすと、どこかで一連のチャイムが深く優しい教会の鐘のような音をたてた。

縞々ベストと金メッキボタンの男が扉を開け、おじぎをして、おれの帽子を預かり、それでそいつの一日の仕事は終わりだった。その背後の暗がりの中で、ナイフのような折り目がついた縞々ズボンと黒い上着とウィングカラーにグレーの縞々ネクタイの男が、その灰色頭を一センチほど傾けた。

「マーロウ様でいらっしゃいますか？ こちらにおいでください——」

おれたちは廊下を下った。とても静かな廊下だ。ハエ一匹たりともブンブンしていない。床は東洋風のじゅうたんで覆われ、壁沿いには絵画が並ぶ。角を曲がるとさらに廊下だった。フランス窓が遠くの青い水面の片鱗を見せ、おれはここが太平洋近くでこの家が峡谷の一つの縁にあるのだと思い出してほとんど衝撃を受けた。

執事は扉にたどりついて、声の響くその扉を開き、脇に立ち、おれは中に入った。素敵な部屋で大きなチェスターフィールド式ソファと安楽椅子が淡い黄色の皮で仕上げられ、それが暖炉のまわりに配置されて、その前には、ピカピカだが滑ることはない床の上に、絹のように薄くイソップのおばさんまがいに古い敷物があった。はじけるような花束が隅で輝き、別のが低いテーブルにのり、壁はくすんだ色合いの塗られた羊皮紙のようで、快適さ、広さ、居心地の良さがあり、非常に現代的な要

素と非常に古風な要素が少しづつ混ざり合い、三人がすわって突然押し黙り、おれが床を横切るのを見た。

その一人がアン・リオーダンで、前回見たときとまったく同じ様子だったが、こんどは琥珀色の液体のグラスを片手に持っている。一人は背の高く痩せた悲しい顔の男で、石のようなあごと深い目、顔には不健康な黄色以外の色が何もない。優に六十歳、六十歳にしても劣った六十と言うべきか。黒いビジネススーツに赤いカーネーションを身につけ、控えめな様子だった。

三人目があのブロンドだった。外出用の装いで、淡い緑がかった青の服。おれはその服装にはあまり注意を払わなかった。デザイナーが彼女用にデザインしたもので、彼女ならまともなデザイナーに行くだろう。その効果は、彼女をととても若く見せ、そのるり色の目をとても青く見せることだった。その髪は古い絵画の黄金で、ほどほどにセットされていたが⁵⁴、やりすぎなほどではない。身体の曲線の見事さはあらゆる部分がこれ以上改良の余地がないくらい。ドレスはいささか地味だがのどのところにダイヤのかたまりがある。手は小さくはないが、きちんとした形で、爪はありがちな不協和な色合い——ほとんどマゼンタに近い。彼女はおれに、お手持ちの微笑の一つを投げかけた。まるでごく自然に微笑したかのようだが、目は固く、まるでゆっくり慎重に考えているようだ。そしてその口は官能的だった。

「お越し頂きまして本当にご親切なこと。こちら ^{わたくし} 妾 の夫ですの。あなた、マーロウさんにドリンクを作ってさしあげて」

グレイル氏はおれと握手した。その手は冷たく少し湿っていた。目は悲しげだった。彼はスコッチとソーダをまぜて渡してくれた。

それから隅にすわって何も言わなかった。おれはドリンクの半分を飲み、リオーダン嬢にニヤリとしてみせた。彼女は何やらぼんやりとした表情を浮かべておれを見た。何かほかの手がかりでもあるかのようだ。

ブロンドは自分のグラスを見下ろしつつゆっくり尋ねた。「^{わたくし} 妾 どものために、何かおできになるとお思いでしょうか？ もしそうお考えでしたら ^{わたくし} 妾 としてはこの上ない歓びでございます。でも損失はいささか小さなものですわ、これ以上ギャングだのひどい連中ともめることに比べたら」

「本当に、あまりこの件がよくわかっていないんです」とおれ。

54 Fussed 村上春樹訳「ほつれていた」。正反対。手を加えてセットしたということ。あとこの部分全体、村上春樹訳はやたらにことばを足してこねまわしているが、それで何か効果的な結果が得られているわけではない。

「ああ、助けていただけるとありがたいわ」と彼女は、尻がむずむずするような微笑をよこした。

おれは自分のドリンクの残り半分を飲み干した。くつろいだ気分になってきた。グレイル夫人は革のチェスターフィールドの腕に仕込んだベルを鳴らすと、従僕が入ってきた。彼女はお盆を漠然と指さした。彼は辺りを見回しドリンク二杯をミックスした。リオーダン嬢はまだかまととぶって一杯目の途中で、グレイル氏はどうやら飲まないらしい。従僕は出ていった。

グレイル夫人とおれはグラスを手を取った。グレイル夫人は脚を組んだが、いささか裾の配慮がなかった。

「お役にたてるかわかりません。どうでしょうね。材料がそもそもないでしょう」

彼女はまたもやにっこりしてみせた。「もちろんたてるでしょうに。リン・マリOTTはどこまで打ち明けましたの？」

彼女は横目でリオーダン嬢を見た。リオーダン嬢はちょうどその視線をかわした⁵⁵。そのまますわり続けた。反対側を横目で見ている。グレイル夫人は夫を見た。「あなた、こんな話にかまける必要もないでしょうに」

グレイル氏は立ち上がり、お目にかかれて光栄と述べて、ちょっと失礼してしばらく横になると言った。気分がすぐれないそうだ。申し訳ないがお許しいただきたいとのこと。あまりに礼儀正しかったので、こちらの謝意を示すためだけに彼を部屋から抱え上げて運び出したくなった。

彼は去った。扉を静かに閉め、寝ている人を起こしたくないとでも言わんばかり。グレイル夫人はしばし扉を見てから顔に微笑をつけなおし、おれを見た。

「リオーダン嬢には全幅の信頼をおいてらっしゃるのね、もちろん」

「おれはだれも全幅の信頼を置いたりしませんよ、グレイルさん。彼女はたまたまこの事件について知ってるだけだ——知り得ることを一通り」

「そうね」彼女は一口二口するり、それから一気にグラスを空けて横に置いた。

いきなり彼女は言った。「こんなかしこまった飲み方なんかもうたくさんよ。もっと腹を割って話しましょうよ。あなた、こんな稼業にしてははずいぶんとハンサムな方ね」

55 Miss Riordan just couldn't catch the look. 単純に didn't ではないことに注意。その後「そのまますわり続けた」とあることから、グレイル夫人の視線は「あんた、気を利かせて席を外してよ」という意味合いのものだったことがわかる。彼女は、もちろんその視線もその意味も気づいていたけれど、気がつかないふりをしたのだ。村上春樹訳「ミス・リオーダンはその視線にきがつかなかった」ではその逆のニュアンスが完全に死んでいる。

「臭い稼業ですよ」とおれ。

「必ずしもそういう意味で言ったわけじゃないんだけど。儲かる仕事なの——それともこんなことがあって失礼かしら？」

「大して儲かりませんよ。悲しいことも多い。でもお楽しみもたくさんあるんです。それにいつだって、でっかいヤマが当たるチャンスはある」

「どうやったら私立探偵になれるのかしら？ ちょっと詮索させていただいても構いませんわよね？ それと、そのテーブルをちょっとここまで押しただけませんか？ ドリンクに手が届くように」

おれは立ち上がり、巨大なスタンド付きの銀のお盆をピカピカの床越しに彼女の隣まで押した。彼女はさらに二杯ドリンクを作った。おれはまだ二杯目の半分が残っていた。

「ほとんどのヤツは元警官です。おれは地方検察局でしばらく働いてました。クビになりましたが」

彼女はすてきに微笑した。「もちろん、能力不足のせいではありませんわよね」

「いいえ、口答えしたからです。他に電話はありましたか？」

「そうですわね——」彼女はアン・リオーダンを見た。何か言いたげな目つきだ。

アン・リオーダンは立ち上がった。まだ満杯のグラスを持って、お盆のところにきてそれを置いた。「お酒が足りなくなることはないでしょうけど、万が一のときはこれを⁵⁶——それと、わざわざお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました、グレイルさん。何も記事にはいたしませんので。その点は確約いたします」

「あらまあ、もうお帰りですの」グレイル夫人はにこやかに言った。

アン・リオーダンは下唇を歯の間に吸い込み、そこでしばらく保って、それを食いちぎって吐き出すべきか、もうしばらくそのまま残しておくべきかを決めかねているかのようだった。

「すみません、どうしても用がございますの。あたし、マーロウさんの下で働いてはいませんのよ、ただのお友だちなんです。ごきげんよう、グレイルさん」

ブロンド女は彼女に満面の笑みを向けた。「また是非お越し下さいね。いつでも」彼女は呼び鈴を二回鳴らした。それで執事がきた。彼は扉を開けて押さえた。

56 You probably won't run short. But if you do—この部分は、マーロウに言っている。酒がなくなったら、この酒を飲めばいい、ということ、ひいてはあんた飲み過ぎだぞ、という嫌味。村上春樹訳「私にお手伝いできることはもうなさそうです」はまったく意味をとりちがえている。当然、アンちゃんはすでにマーロウとグレイル夫人との間でやりとりされている秋波を読み取っていて、ツンケンしている。

リオードン嬢はすばやく外に出て、扉は閉まった。閉まってもかなりの間、グレイル夫人はそれをかすかな微笑を浮かべて見つめていた。「このほうがずっといいですわ、そう思いませんか？」と彼女はしばし沈黙をはさんでから言った。おれはうなずいた。「たぶん、ただの友だちにしてはリオードン嬢が知りすぎていると不思議に思われたでしょうね。好奇心が強い小娘なんです。一部は自分で掘り起こしてきたんですよ、あなたが何者でだれが翡翠の首飾りを持っているかとか。一部は単なる成り行きです。昨夜彼女は、マリオットが殺された小谷にやってきたんです。ドライブ中に、そこでたまたま灯りを見かけたんで下りてきたわけです」

「まあ」とグレイル夫人はすばやくグラスを手にして顔をしかめた。「考えるだに恐ろしいわ。哀れなリン。いささか悪役ではありましたが、^{わたくし}妾の友人のほとんどは悪者なんですよ⁵⁷。でもあんなふうに死ぬなんてひどすぎます」と彼女は身震いした。その目が大きく見開かれて暗くなった。

「リオードンさんなら大丈夫ですよ。しゃべったりしない。父上はずっとこの警察署長だったから」

「ええ、ご本人もそう言ってたわ。飲んでないのね」

「いまやってるのはまさに飲酒ですが」

「わたしたち、気が合いそうね。リン——じゃなくてマリオットさん——はホールドアップの様子を話したの？」

「こことトロカデロの間のどこかだったと。正確には言わなかった。三、四人」

彼女はその黄金の輝く頭を縦に振った。「ええ。あのホールドアップには何かずいぶん変なところがあつたわ。指輪を一つ返してくれたのよ、それもかなりいい指輪を」

「それも話してくれた」

「そもそも、あの翡翠はほとんど身につけないのよ。なんといっても博物館級の代物で、世界にそれに類するものはあまりないし、すごく珍しい種類の翡翠で。それなのに、やつらはそれに食いついた。たぶん向こうも、大した価値があるとは思ってなかったんじゃないかと。そう思わない？」

「価値がなきゃあなたが身につけないのは知っていたでしょう。他にその価値を知っていたのは？」

57 Most of one's friends are. この one は、スノップな上流階級式の、自分のことを三人称的に述べたもの。だからこれはグレイル夫人が、「自分の友人は悪党ばっかだ」という意味で述べている。村上春樹訳は「あの人の友だちのたいていは似たような連中」で、それがマリオットのことだと解釈しているが、まちがいを。このぶりぶり格調高い話法はもう一つ役割があり、これからグレイル夫人は上流階級夫人から下卑たアバズレにいきなり変身し、話し方も急変する。ここはその上流話法の頂点となる。

彼女は考えた。考える彼女を見るのはすてきだった。まだ脚を組んだままで、まだ裾の配慮はない。

「いろいろいたでしょうねえ」

「でもあなたがその晩にそれを身につけるとは知りませんよね。それを知っていたのは？」

彼女は淡い青い肩をすくめた。おれは視線を適切な場所にとどめようと苦闘した。

「女中。でも彼女はいくらでも機会があります。それに彼女は信用しておりますし——」

「なぜ？」

「そう言われましても。わたし、一部の人はとにかく信用しますの。あなたも信用してるわ」

「マリオットは信用した？」

彼女の顔が少しこわばった。目が少し警戒の色を浮かべた。「ものによりますわ。一部の面では、信用しました。度合いというものがありますのよ」なかなかすてきな話し方だ。クールで、半ばシニカルで、それなのにまだ完全なハードボイルドではない。うまく言葉をとりつくろっている。

「わかった——じゃあ女中以外で。運転手は？」

彼女は首を振った。「あの晩車を運転したのはリンだし、車もあの人のものだったわ。確かジョージはまったくその場に居合わせなかったんじゃないか。あれは確か木曜だったかしら？」

「おれはその場にいなかった。マリオットは、その話をしてくれたときの四、五日前と言っていましたね。木曜なら昨夜からちょうど一週間前になる」

「ええ、木曜だったわ」と彼女はおれのグラスに手を伸ばし、その指がちょっとおれの手に触れたが、触れてもこわばるようなことはなかった。「ジョージは木曜の晩が休みなよ。それが通常の休みということね」。彼女は滑らかに見えるスコッチをたっぷりとおれのグラスに注ぎ、炭酸水を少し注ぎ入れた。それは永遠に飲み続けられると思うような酒で、飲めば飲むほど無謀になるだけ。彼女は自分にも同じ処置を加えた。

「リンはわたしの名前を言ったの？」彼女は優しく尋ねたが、目はまだ警戒していた。

「言わないように細心の注意を払っていた」

「ならあの人は、ちょっと時間についてもあなたをごまかしたのね。手持ちを整理しましょうか。女中と運転手ははずれるわ。共犯者としてはシロってことよ」

「おれから見ればシロじゃない」

「まあ、わたしなりに努力はしてるのよ」と彼女は笑った。「それと執事のニュートン。あの晩、わたしが首にかけてのを見たかもしれない。でもかなり低く垂れ下がるし、晩の包み衣装に白ギツネを着ていたわ。ええ、執事が見たはずはないと思う」

「たぶん夢のような姿だったんだろうね」

「ちょっと、お堅い人になってきたんじゃないでしょうね？」

「いまより素面だったことはあるがね」

彼女は頭を後ろにもたげて大爆笑した。それをやってなお美しく見える女性は、生涯で四人しか知らない。彼女はその一人だった。

「ニュートンは大丈夫だ。ああいう手合いはゴロツキとはつきあわない。だがそれは単なる憶測だ。従僕はどうだ？」

彼女は考えて、思い出しかけたが、首を振った。「あたしのことは見てないわ」

「あの翡翠を着けるようだれかに頼まれました？」

女の目には即座に警戒の色が浮かんだ。「あなたの魂胆なんかお見通しよ」

彼女はおれのグラスに手を伸ばしておかわりを作ろうとした。まだ二センチ以上残っていたが、彼女が取るに任せた。女の見事な首のラインを愛でた。

彼女がグラスを満たし、二人でそれを弄び始めてからおれは言った。「まず状況を整理して、それから一つ話したいことがある。その晩の様子を話してくれ」

彼女は腕時計を見たが、そのために長袖をすべてまくりあげた。「わたし約束が——」

「待たせとけ⁵⁸」

これを聞いて彼女の目がきらめいた。そのほうがおれは気に入った。「押しが強いにもちょっと限度ってものがあるんじゃないかしら？」

「おれの稼業ではないね。その晩の様子を話してくれ。それともおれの耳をつかんで屋敷から放り出してくれてもいいぜ。どっちにする？ その美しい心を決めてくれ」

58 Let him wait. 村上春樹訳は「ご主人は待たせておきなさい」だが、これがご主人のことだと示唆するものはないし、彼女は他の男と夜遊びするのが常なのでおそらくご主人のことではない。

「あなた、こっちにきて隣にすわってよ」

「ずっと前からそうしたいと思っていたよ。厳密に言えば、君が脚を組んでからずっとね」

彼女はドレスの裾を引き下ろした。「このろくでもない代物、いつも首までめくれちゃうのよ」

おれは黄色い皮のチェスターフィールドで、彼女の隣にすわった。「あらあら、あなたってずいぶんと手の早い人みたいね？」と彼女は静かに言った。

それには答えなかった。

「あなたって、いつもこんなことばかりしてるのかしら？」彼女は流し目とともに尋ねた⁵⁹。

「いやいやないも同然だよ。暇なときにはチベット僧さながらでね」

「暇なときなんかなくせに」

「集中しようか。二人の意識の——いやおれの意識か——残った部分を問題に向けよう。いくらお支払いいただけるのかな？」

「ああ問題ってそっちのことなの。あたしのネックレスを取り戻してくれるんだと思ってたのに。少なくとも努力はすると」

「自分なりの仕事のやり方があってね。こういうふうに」とおれはぐいっと飲んだが、それでほとんどクラクラしかけた。少し息をのんだ。

「それと殺人の捜査も」

「そんなのまるで関係ないわ。だってもう警察の事件なんでしょう、ちがう？」

「ああ——だがあの哀れな野郎は面倒を見るのにおれに百ドル払ってくれた——それなのに面倒見切れなかった。それで後ろめたくてね。泣きたくなるよ。泣こうか？」

「一杯どうぞ」と彼女はさらに二人分のスコッチを注いだ。彼女にはスコッチは、水がボウルダーダムに与える程度の影響しかないようだ。

「さてどこまで行ったっけ」とおれは、なんとかウィスキーが中に留まるようにグラスを持とうとした。「女中もなし、運転手もなし、執事も従僕もなし。お次は自分で洗濯までこなすしかないってね。」

59 ここらへん、グレイル夫人は急激に口調が変わり、ずっとマーロウに秋波を送り続けているので、エッチな意味を裏にこめた翻訳にしていかなくはいけないのだが、同じ人の口調を一切変えない村上春樹訳だとそれがまったく出ないので何が起きているのかわかりにくい。

ホールドアップはどんな具合に起きたんだい？ 君の話なら、マリオットが教えてくれなかった細部がいくつかあるかもしれん」

彼女は身を乗り出して、あごに手をあててみせた。真面目そうだがクソ真面目には見えない。

「ブレトンウッド・ハイツのパーティーに二人で行ったの。そしたらリンが、トロックに寄ってちょっと飲んで踊ろうと言って。だからそうしたわ。サンセット大通りでなんだか工事やっててすごくほこりっぽかったの。だから戻ってくるときには、リンはサンタモニカ大通りまで下ったのよ。そのせいで、ホテル・インディオっていうらぶれたホテルの前を通りかかって、そこはつまらないどうでもいい理由でたまたま覚えていたの。その通り向かいにはビール酒場があって、その前に車が一台停まっていたわ」

「たった一台——ビール酒場の前なの？」

「ええ。たった一台。すごく場末じみたところだったのよ。で、その車がエンジンをかけて後からついてきて。もちろんわたしはそれについても何とも思わなかったわ。でもサンタモニカ大通りがアーグエロ大通りに曲がる場所の手前で、リンが『別の道を行こう』と言って、なんだかくねった住宅街の通りに入ったのするといきなり、車が猛スピードで横を通過してこっちのバンパーをかすって、そして脇に寄って停車したわ。コートとスカーフと帽子を目深に被った男が、謝りに戻ってきたの。白いスカーフを束にしたもので、それが目を惹いたわ。その人について見たのはホントにそれだけで、あとは背が高くてやせてたというだけ。近づいたとたん——そして後で、その人がこっちのヘッドライトをずっと避けていたのを思い出したんだけど——」

「それは普通だな。だれもヘッドライトの中をまっすぐ歩くのはいやがる。さあもう一杯。こんどはおれがおごろう」

彼女は身を乗り出し、その細やかなまつげ——マスカラを塗りたくったものじゃない——は考え込んで眉をしかめつつ閉じられている。おれはドリンクを二杯作った。彼女は続けた。

「リンがすわっている側に近づいたとたん、その人はスカーフを鼻まで引き揚げて、銃がこっちを向いていたのよ。『手をあげろ。音さえたてなければすべて上手くいくぜ』するともう一人が反対側にやってきたの」

「ビバリーヒルズでか。カリフォルニア中で最も警備の厳しい25平方キロだぜ」

彼女は肩をすくめた。「だって起こったんですもん。宝石とハンドバッグを寄越せて言うの。スカーフの男がね。わたしの脇にいた男は一度も口をきかなかったわ。わたしは何もかもリン越しに渡

して、そしたらハンドバッグと指輪一つを返してくれたの。しばらく警察や保険会社には電話するなって。すてきですっきりした楽な取引をしようというのよ。ストレートに歩合で仕事するほうが楽なんだって。全然慌ててないみたいだったわ。必要なら保険会社の連中を通じて仕事もできるけど、でもそれだとイカサマ野郎に取り分をやることになるから、それは避けたいって。かなり学のある人みたいな口ぶりだった」

「洒落者エディーだったかもしれない。ただあいつはシカゴで殺されちゃってるが」

彼女は肩をすくめた。二人で飲んだ。彼女は続けた。

「それでそいつらは去って、あたしたちは家にかえって、わたしはリンに、このことは黙ってるように言ったの。次の日に電話が来たのよ。うちには電話が二つあって、片方は子機つきで片方はあたしの寝室で子機なし。電話はそっちにかかってきたわ。もちろん電話帳非掲載なのよ」

おれはうなずいた。「電話番号なんか数ドルで買える。よくあることだ。映画業界の連中の一部は、毎月電話番号を変えなきゃならない」

おれたちは飲んだ。

「電話の人に、リンとかけあってくれと言ったの。あの人があたしの代理で、あまり無茶をいわなければ取引するかもって。相手はオッケーと言って、それからしばらく時間をかせいで、ちょっとあたしたちを見張ってたんだと思うわ。とうとう、知ってるでしょうけど、八千ドルとかで合意したわけ」

「見ればその連中のだれかわかるか？」

「わかるわけないでしょう」

「ランドールはそういうのすべて知ってるんですか？」

「もちろんよ。こんな話、これ以上しなきゃいけないの？ 飽きちゃったわ」彼女はあの美しい微笑を向けた。

「何か言ってた？」

彼女はあくびをした。「たぶん。忘れちゃった」

おれは空っぽのグラスを手に考えた。彼女はそのグラスを奪い取り、また満たし始めた。

おれはおかわりの入ったグラスを彼女の手から取ってそれを左手に映し、彼女の左手を右手で握った。すべすべで柔らかく、温かくて心鎮まる手だ。それがおれの手を握りしめた。その筋肉は強かった。しっかりした作りの女性で、か弱い女なんかじゃない。

「なんか思いついたみたいだけど、何だかは言わなかったのよ、あの人」

「それだけネタがあればだれでも何かしら思いつくだろう」

彼女はゆっくりと頭をめぐらせておれを見た。そしてうなずいた。「まちがえようがないわよね」

「いつからの知り合い？」

「ああ、もうずいぶん長いつきあいよ。夫が持っていた放送局 KFDK のアナウンサーだったの。そこで会ったのよ。夫ともそこで会った」

「それは知ってた。でもマリオットは金があるような暮らしをしていたよ。大金持ちではないが、快適な生活ができるだけの金だ」

「お金が入ってきたのでラジオ稼業を辞めたのよ」

「お金が入ってきたというのは確かなの——それとも本人がそう言っただけ？」

彼女は肩をすくめた。おれの手を握りしめる。

「あるいは大した額じゃなくて、それをずいぶんすばやく使い果たしたのかもしれない」とおれは手を握り返した。「あなたから借金したりした？」

「あなた、ちょっと古風なのね」と彼女はおれが握っている手を見下ろした。

「まだ仕事だからね。それにお宅のスコッチは良すぎて、おれも半分素面のままだ。もちろん女に迫るのに泥酔しなきゃいけないわけじゃ——」

「そうね」と彼女は自分の手を引っ込めてさすった。「ずいぶんとお強いよねえ——お楽しみのおきとにかにも。リン・マリオットはもちろん高級強請屋だったわ。見ればわかるでしょう。女を食い物にしてたの」

「なんかネタを握られてた？」

「話しちゃっていいのかしら」

「賢明とはいえないなあ」

彼女は笑った。「でも話しちゃおうっと。一度、あの人の家でちょっとハメを外して潰れちゃったの。めったにないのよ。あの人、あたしの写真を撮ったわけ——服を首までたくしあげて」

「薄汚い野良犬野郎め。それ手元にあったら見せてよ」

彼女はおれの肘をはたいた。そして柔らかく言った。

「名前は？」

「フィル。君は？」

「ヘレン。キスして」

彼女はふわりとおれの膝に倒れ込み、おれは彼女の顔に身をかがめてそれを眺めはじめた。彼女はまつげをはためかせ、おれの頬に軽いキスを浴びせた。おれが彼女の口までくると、それは半ば開いていて燃えるようで、その舌が歯の間から飛び出すヘビとなっていた。

ドアが開き、グレイル氏が静かに部屋に入ってきた。おれは彼女を抱いていて、離す暇もなかった。顔を上げて彼を見た。埋葬されたときのフィネガンの足ほどの寒さでゾットした。

腕の中のブロンドは動かず、唇を閉じさえしなかった。半ば夢見るような、半ば皮肉な表情を浮かべている。

グレイル氏は軽く咳払いした。「これは失礼、いや本当に」と言って静かに部屋を去った。その目には無限の悲しみがあつた。

おれは彼女を押しつけて立ち上がり、ハンカチを取りだして顔をぬぐった。

女はおれが残したまま、半ば脇で寝椅子に横たわり、片方のストッキングの上で肌が大盤振る舞いされていた。

「だれだったの？」彼女はしゃがれ声で言った。

「グレイルさんだ」

「忘れちゃってよ」

おれは彼女から離れて、最初に部屋に入ってきたときの椅子にすわった。

しばらくして彼女も身なりを整え、身を起こしておれをじっと見つめた。

「大丈夫よ。あの人にはわかってくれるの。あの人にはどうしようもないでしょう？」

「それは本人が知っているだろう」

「あたしが大丈夫だと言ってるのよ。それで十分でしょう？ あの人、病人よ。だいたいねえ——」

「キイキイ言わないでくれ。キイキイ女は嫌いだ」

彼女は横に転がっていたハンドバッグを開いて、小さなハンカチを取りだして唇をぬぐい、そして顔を鏡を見た。

「そうかもしれないわね。ちょっとスコッチが多すぎただけ。今夜、ベルヴェデーレ・クラブ。十時」彼女はおれを見ていなかった。息が速かった。

「いい場所なのか？」

「レアード・ブルネットの所有よ。かなりよく知ってる人なの」

「了解」とおれ。まだゾツとしていた。嫌な気分、まるで貧乏人の財布をすったような気分だ。

女は口紅を取りだし、ごく軽く唇を整えると、横目でおれを見た。そして鏡を放ってよこした。おれはそれをキャッチして自分の顔を見た。ハンカチで顔を直し、鏡を返そうと立ち上がった。

彼女は後ろにもたれかかり、のどをすべてあらわにして、甘い下目づかいでおれを見ていた。

「どうかしたの」

「いや何でもない。ベルヴェデーレ・クラブで十時。あまり豪勢な格好はしないでくれ。おれはディナースーツしか持ってないんだ。バーで？」

彼女はうなずいたが、目つきはまだ甘い。

おれは部屋を横切って、ふり返ることなく出た。従僕が廊下でおれを迎え、帽子を渡してくれたが、ホーソンの描いた大いなる岩の顔みたいだった。

[19]

おれはカーブする車回しを歩いて下り、高く刈り込まれた生け垣の角に迷い込んで、門のところにやってきた。いまや別の人物が持ち場を守っていた。私服の大男で、明らかにボディガードだ。彼はうなずいておれを出してくれた。

クラクションが鳴った。リオーダン嬢のクーペがおれの車の後ろについでいた。おれはそこにでかけて彼女をのぞき込んだ。彼女は冷たく皮肉な様子だった。

彼女は手袋をはめたスリムな手をハンドルにのせてすわっていた。そしてにっこりした。

「待たせてもらったわ。たぶんあたしには関係ないことでしょうけど。彼女、どう思った？」

「たぶんすげえガーターベルトしてるんだろなあ」

彼女は真っ赤になって苦々しげな顔をした。「必ずその手のことを言わなきゃいけないの？ ときどき、男が大っ嫌いになるわ。老人も若者も、フットボール選手もオペラのテノール歌手も、賢い億万長者も、美しい男はジゴロで、ほとんど悪漢に近い——私立探偵どもも」

おれは悲しげに彼女にニヤリとした。「おれが賢しげな話し方をするのはわかってる。最近ではもう息をするようなもんだ。あいつがジゴロだってだれに聞いた？」

「だれが？」

「とぼけちゃって。マリオットだよ」

「ああ、簡単な憶測よ。ごめんなさい。意地悪な言い方するつもりはなかったの。たぶんあなた、彼女のガーターなんていつでも大して苦労せずに外せちゃうのよね。でも一つ確実なことがあるわ——あなた後手に回ってるってこと」

幅の広いカーブする街路が太陽の中で平和にまどろんでいた。美しく塗られたライトバンが音も立てずに通り向かいの家の前に停まり、それから少しバックして車回しをあがって脇の入り口に向かった。ライトバンの横には「ベイシティ幼児サービス」と表示があった。

アン・リオーダンはおれのほうに身を屈めたが、その灰青の目は傷ついて曇っていた。そのちょっと長すぎる上唇が突き出され、そして歯に強く押しつけられた。そして息で鋭い音をたてた。

「たぶんあなた、あたしに首を突っ込むなと言いたいよね、そうでしょう？ それとあなたより先にいろいろ思いつくなって。少しは手助けしてるつもりだったんだけどな」

「手助けなんかいない。警察もおれの手助けなんかいない。グレイル夫人におれがしてあげられることは何もない。車が発車して二人を追い始めたというビール酒場についての糸口はある。でもそれが何になる？ それはサンタモニカ大通りのショボい酒場だ。起きたのは高級ギャング。その中には、本翡翠を見てそれとわかるやつだっていたらうよ」

「だれかに報されたんじゃない限り」

「その線もある」とおれはパッケージからタバコを不器用に取り出した。「いずれにしてもおれにはどうしようもない」

「サイキックの話もダメ？」

おれはちょっとポカンと見つめた。「サイキック？」

「んまあ。大した探偵さんねえ」と彼女は柔らかに言った。

「そこの部分には箱口令がかかってるんだ。おれも足下を気をつける必要がある。このグレイルってやつは大した金持ちだ。そしてこの街では、法律なんて金次第だ。サツがずいぶんとおかしい動きをしてるだろう。盛り上がりもなし、新聞への情報流しもなし、無辜の見知らぬ人物がつまらないネタを持ってきて、それが実はすごく重要だったってなチャンスもない。ただ沈黙と、おれには手を出すなという警告ばかり。まるで気に食わん」

「口紅、だいたい取れてるけどまだ残ってるわよ」とアン・リオーダン。「あたしがサイキックの話をしたのよ。まあ、それじゃさよなら。お知り合いになれて楽しかったわ——ある意味で」

彼女はスターターボタンを押してギヤを叩き込み、ほこりを舞い上げて姿を消した。

おれは彼女が行くのを見送った。消えると、通り向かいを見た。ベイシティ幼児サービスとあるライトバンからの男が来ている制服はあまりに白く、ノリが効いて輝いていたので、それを見るだけで自分まできれいになった気がした。何やらカートンを運んでいる。そしてライトバンに乗り込んで走り去った。

たぶんおむつを換えたのだらうと思った。

おれも自分の車に乗って、エンジンをかける前に腕時計を見た。五時近い。

スコッチは、良質のスコッチの常として、ハリウッドまでの間ずっと残っていた。赤信号ではきちんと停まった。

「すてきな娘だよな、あれは」とおれは車の中で声に出した。「すてきな娘に興味がある男にとってはな」。だれも何も言わなかった。「でもおれはそういう男じゃないんだ」。それに対しても、だれも何も言わなかった。「十時にベルヴェデーレ・クラブで」とおれ。だれかが「やれやれ」と言った。

おれ自身の声のようだった。

また事務所についたときには六時一五分前だった。建物はとても静かだった。壁の向こうのタイプライターも鎮まった。おれはパイプに火をつけ、すわって待った。

[20]

そのインディアンは臭かった。ブザーが鳴ってだれだろうと仕切りの扉を開けたとき、小さな待合室越しにもはっきり匂いがわかった。そいつは廊下のドアを入れてすぐのところに立ち尽くし、まるで青銅で型取りされたかのようなようだった。腰から上は大男で、胸がたくましかった。浮浪者じみていた。

茶色のスーツを着ていたが上着はその肩には小さすぎ、ズボンはおそらく腰回りがきつすぎた。帽子は少なくとも二サイズは小さすぎ、もう少しまともに身体にあっていた人物がやたらにそれを着て発汗していた。彼はそれを、家が風見鶏を着るあたりで着ていた。その襟は馬の襟なみのしっかりしたフィットぶりで、それと同じくらいの汚い茶色の色合いだった。そのボタン留めした上着の外にネクタイがはみだしていて、黒のネクタイでノットがペンチにより豆ほどの大きさにまで絞り上げられている。そのむき出しで巨大なのどのまわり、汚い襟の上に彼は幅の広い黒リボンを結んでおり、まるで首を爽やかにしようとする婆さんのようだった。

巨大で平たい顔をしており、巡洋艦の舳先のように硬く見える、高くで肉々しい鼻を持っていた。目はまぶたがなく、あごはたるみ、鍛冶屋の肩とチンパンジーの短く明らかに不器用な脚を持っていた。後におれは、それが短いだけだと知る。

もう少しきれいにして白いナイトガウンを着たら、えらく邪悪なローマの元老院のように見えたかもしれない。

そいつの匂いは原始人の泥臭い匂いであり、都市の粘つく汚泥の匂いじゃなかった。

「ふん。すぐこい。いまこい」と彼。

おれは事務室へと後退して指を彼に向けてクイクイと動かすと、やつはおれの後についてきたが、壁を歩くハエほどの音もたてない。おれは机の向こうにすわり、回転椅子をプロらしくキイキイ鳴らして反対側のお客用椅子を指さした。すわらなかった。その小さな黒い目は敵意を浮かべている。

「こいって、どこに？」

「ふん。わし、セカンド・プランティング。わし、ハリウッドのインディアン」

「プランティングさん、すわりたまえ」

やつは鼻を鳴らし、すると鼻孔がえらく広がった。そうでなくてもネズミの穴なみに広がったのだ。

「名前セカンド・プランティング。なまえプランティングさんちがう」

「何のご用でしょう」

そいつは声を上げ、胸の奥深くから出る朗々とした爆音で詠唱を始めた。「すぐこいと言ってる。大いなる白人の父上がすぐこいと言う。わしがあんたを、炎の馬車でつれてこいと。そして——」

「そうかい。そのインチキ言葉はやめろ。おれはへび踊り祭りの学童じゃないんだ」

「くだらん」とインディアン。

おれたちは机をはさんでお互いせせら笑った。相手のほうがおれよりせせら笑いがうまかった。さおれからすさまじい嫌悪をうかべて帽子を脱ぎ、それを逆さまにした。汗バンドの下に指を走らせた。これで汗バンドが裏返って見えるようになったが、名前通りのシロモノだった。その縁から紙クリップをはずし、畳んだティッシュを机に投げた。それを噛みまくった爪で怒ったように指さした。その直毛は、高いところに段差ができていた。きつすぎる帽子のせいだ。

そのティッシュペーパーをほどくと中に名刺があった。目新しい名刺じゃない。すでにまったく同じものが三枚、ロシア式に見えるたばこの吸い口の中にあった。

おれはパイプをもてあそび、インディアンを見つめて視線で相手を不安にさせようとした。相手はレンガの壁並で神経質のかけらもみせない。

「わかったよ、そいつは何がほしいって？」

「あの人、あんたすぐきてほしいって。いまくる。炎の馬車で——」

「くだらん」とおれ。

インディアンはそれが気に入った。ゆっくり口を閉じて荘厳に固めでウィンクすると、ほとんどにやりと笑った。

「あと依頼費として百ドルかかるぜ」とおれは付け加え、まるでそれが小銭であるかのようなふりを試みた。

「なに？」また怪しんでいる。基本英語だけにしておこう。

「百ドル。鉄の男。サカナ。百の数字のついたドル。おれ金もらわない、おれ行かない。わかる？」
おれは両手で百を数え始めた。

「ふん。お大尽」とインディアンはせせら笑った。

彼は脂ぎった帽子の汗バンドの下を探って、もう一つ畳んだティッシュの包みを机に投げだした。
おれはそれを手にして開いた。百ドルのピン札が入っていた。

インディアンは帽子を頭に戻したが帽子のバンドを元に戻す手間はかけなかった。その状態でも滑稽さはわずかばかり増しただけだった。おれはすわって百ドル札を、あぐりと口をあけて眺めた。

ようやくおれは言った。「サイキックというのは伊達じゃないな。こんな頭のいいやつは恐ろしい」

「暇じゃないね」とインディアンは、会話調で言った。

おれは机を開けてコルト 38 オートマチック、スーパーマッチと言われる種類を取りだした。リュイ
ン・ロックリッジ・グレイル夫人の訪問には持っていかなかったものだ。上着をぬいで革ハーネスを
つけ、オートマチックをその内側に取めると、下のベルトを締め、また上着を着た。

これはインディアンには、おれが首を掻いた程度の意味しかなかった。

「車ある。でかい車」

「おれ、もうでかい車は好きじゃないんだ。おれ自分の車ある」

「あんた、おれの車くる」インディアンは脅すように言った。

「おれ、あんたの車くる」とおれは言った。

机と事務所の鍵を締め、ブザーのスイッチを切って出掛け、いつも通り待合室の鍵は開けはなした。

廊下に沿って進みエレベーターで下りた。インディアンは臭かった。エレベーターのオペレーター
さえそれに気がついた。

[21]

車は紺色の七人乗りセダン、最新モデルのカスタム版パッカーカードだった。真珠を束にしたネックレスを着て乗るようなやつ。消火栓の隣に違法停車されていて⁶⁰、色の黒い外国人めいた、木彫りのような顔をした運転手がハンドルを握っていた。内装はキルトのシュニール織物を張ってある。インディアンはおれを後部シートにすわらせた。そこに一人ですわっていると、高級死体のような気分になった。かなり趣味のいい葬儀屋がそこに安置してくれたというわけだ。

インディアンは運転手の隣に乗り込み、車は街区の真ん中でUターンして、通りの向かいにいたおまわりが「おい」と弱々しく、本気じゃないとでもいうように言ってからすぐにかがみこんで靴の紐を結んだ。

おれたちは西に向かい、サンセット大通りへと入ってすばやく無音のままそこを走った。インディアンは運転手の隣で身動きなしにすわっている。ときどき彼の個性が後部のおれのところに漂ってきた。運転手は半分寝ているかのように見えたが、コンバーチブルセダンに乗ったスピード狂の若者たちを、レッカー移動中だともいうように追い越していく。信号はすべて彼のために青になった。そういう運転手もいる。赤信号は一つもない。

ストリップの二、三キロの明るい道をうねうねと走り、有名な映画スター名が掲げられた骨董屋を通り過ぎ、ポイントレース縫いや古い錫食器でいっぱいショーウィンドウを通り過ぎ、有名なシェフと同様に有名な賭博場を備えた洗練されたパープルギャングの卒業生が運営するきらびやかな新しいナイトクラブを通り過ぎ、いまや時代遅れのジョージ王朝コロニアル風の場所を通り過ぎ、ハリウッドの肉体売買業者が金のことばかり話し続けるモダニズム様式のハンサムなビルを通り過ぎ、ドライブインの昼食食堂——そこでは女の子たちが白いシルクのブラウスとドラムメジャレットのシャコー帽を着け、腰から下は光沢のあるキッドレザーのヘシアンブーツだけだなのに、なぜか場違い——を通り過ぎた。このすべてを通り過ぎ、ビバリーヒルズの馬道へと続く広く滑らかなカーブを下り、霧のない夜にすべてのスペクトルの色が透き通る光を放つ南のほうへ、影を落とした邸宅が並ぶ北の

60 ご存じかと思うがアメリカは道端に消火栓がいっぱいあり、その隣は駐車禁止。アメリカ人の相当部分は、うっかりそこに駐車して切符を切られた経験がある。原文では単に「駐車」だがそれを強調するため補った。

丘を通り過ぎ、ビバリーヒルズ自体を完全に抜けて、曲がりくねった丘の麓の大通りへと進み、突然の涼しい夕暮れと海からの風の流れを感じた⁶¹。

暖かい午後だったが、暑さはもう消えていた。おれたちは遠くある灯りをつけたビルの集まりや、道からそれほど近くない無数の灯りつき豪邸を猛スピードで通り過ぎた。巨大な緑のポロ競技場とその隣に同じくらい大きな練習場を迂回するように下り、再び丘の頂上まで登り、山に向かって急なコンクリートの坂道を進んだ。そこにはオレンジ畑があったが、この辺りはオレンジの産地ではないから、きっと金持ちの道楽だろう、そしてやがて、百万長者の家の灯りが少しずつ消え、道は狭くなり、ここがスティルウッド・ハイツだった。

峡谷からセージの匂いが漂い、死んだ男と月のない空を思い出させた。丘の斜面には、平面的に張り付いたような雑然としたスタッコの家々が浮き彫りのように並んでいた。それから家はなくなり、ただ静かで暗い丘の麓が続き、頭上には一番星や二番星が輝いていた。コンクリートのリボンのような道と、片側には急な崖が続き、そこには低木のオークやマンザニータが絡み合っていて、立ち止まって静かに待てば、時にはウズラの鳴き声が聞こえることもある。道の反対側には、生粘土の土手があり、その端には寝ようとしないうんちゃんの子供のように、負けを知らない野生の花がしがみついていた。

すると道はヘアピンカーブとなり、大きなタイヤが緩い石の上できしり、車は野生のゼラニウムが並ぶ長い私道を、以前ほど無音ではなく登っていった。その頂上には、かすかに灯りがともり、灯台のように孤独な、鷲の巣のような、スタッコとガラスブロックでできた角張った建物が建っていた。生々しくモダニズム的でありながら、決して醜くなく、サイキック・コンサルタントが看板を掲げるには実におあつらえ向きの場所だった。叫び声は誰も聞こえないだろう。

車は家の脇へと曲がり、すると頑丈な壁に埋め込まれた黒いドアの上に灯りがぱっとついた。インディアンが唸りながら降り、車の後部ドアを開けた。運転手は電気ライターでタバコに火をつけ、夕暮れの中にタバコのきつい匂いが柔らかく漂ってきた。おれは降りた。

インディアンがうなった。「ふん。おまえ、中いけ、大将」

「お先にどうぞ、プランティングさん」

61 「通り過ぎ」が連続して一文でまさにそのドライブの雰囲気そのものを出したかっこいい文章。村上春樹訳はプチプチに切っていて、ただの普通の文。まちがいというものじゃないけど、文体とか雰囲気大切にするとかいうなら、こういうところも気にして欲しいなあ。

インディアンは威嚇すると中に入り、ドアは開いた時と同じくらい静かかつ不思議な感じで背後で閉じた。狭い廊下の突き当たりで、おれたちは小さなエレベーターに押し込まれ、インディアンがその扉を閉じてボタンを押した。ゆっくりと音もなく上昇した。これまでインディアンが漂わせてきた匂いなど、いまこいつが放つ匂いに比べれば月影でしかなかった。

エレベーターが止まり、ドアが開いた。そこには光があり、踏み出すとそこは小塔状の部屋で、まだ昼の記憶がまだ記憶に残ろうとしていた。部屋はぐるりと窓に囲まれていた。遠くには海がきらめいていた。丘の上には闇がゆっくりと忍び寄っていた。窓のないところにはパネル張りの壁があり、床には古いペルシャ絨毯の柔らかい色合いが広がっていて、受付机は、まるで古い教会から盗んできた彫刻製のように見えた。その机の後ろには、女性がすわっておれに微笑みかけていたが、乾いて引き締まった、しなびた微笑みで、触れたら粉になってしまいそうだ。

彼女は滑らかに巻かれた髪をしていて、暗く、細く、疲れ果てたアジア風の顔立ちだった。耳には重い色の石のイヤリングが揺れ、指には重い指輪がいくつもはめられていた。その中には月長石や、銀の台座にセットされたエメラルドもあった。それは本物のエメラルドかもしれないが、なぜか10セントストアの奴隷ブレスレットのように偽物っぽく見えた。彼女の手は乾いて暗く、若くなく、指輪には似合っていなかった。

彼女はきっちりコイルに巻いた髪と、色の黒い、細く憔悴したアジア系の顔をしていた。耳には重たい色つきの宝石と、指には重たい指輪がはまり、月長石とエメラルドが銀のリングにはめられていて。本物のエメラルドかもしれないが、なぜか十円ショップの奴隷ブレスレット並にインチキに見えた。そして彼女の手は乾き、黒く、若くはなく、指輪のあう手ではなかった。

彼女は口を開いた。おなじみの声。「あ、ミースター・マーロウ、きてなさって、ほんとすごい。アムサー、すごくよろこぶはずでーす」

おれはインディアンがくれた百ドル札を机に置いた。背後を見た。インディアンはエレベーターでまた下に行っていた。

「すまん。ご厚意は感謝するが受け取れない」

「アムサーは、あなた——あなたを雇いたい、ちがう？」彼女はまたにっこりした。その唇はティッシューパーみたいにカサカサいった。

「まずどんな仕事か聞かないと」

彼女はうなずいて、机の向こうからゆっくり立ち上がった。人魚の肌のようにぴったりはりついた、タイトなドレス姿で、シュッシュとおれの前を歩いて行った。いい体つきなのがある——腰の下がいきなり四サイズでかくなるのがお好みならば。

「わたし、あなたを指揮します」と彼女。

パネリングのボタンを押すと、ドアが無音ですべて横に開いた。その向こうには乳白色の輝きがあり、おれは入る前にふりかえって彼女微笑を見た。それはいまやエジプトよりも高齢となっていた。ドアは背後で静かにすべり閉じた。

部屋は無人だった。

八角形で、天井から床まで黒ビロードで覆われ、はるか高くに黒い天井があるがそれもビロード張りかもしれない。真っ黒で光沢のない絨毯の中央に、八角形の白いテーブルが立っていた。ちょうど二組の肘を置くのに十分な大きさで、その中央には黒い台座の上ののった乳白色の球体があった。光はその球体から発していた。どうやってかは分からなかった。テーブルの両側には、テーブルを小さくしたような白い八角形のスツールがあった。壁に沿ってもう一つ同じスツールがあった。窓はなかった。部屋には他に何も、まったく何もなかった。壁には照明器具さえなかった。他のドアがあったとしても、見つけられなかった。入ってきたドアを振り返ったが、それすら見えなかった。

そこに十五秒も立っていただろうか、かすかに、誰かに見られているような曖昧な感覚があった。おそらくどこかに覗き穴があったのだろうが、見つけられなかった。探すのを諦めた。自分の息に耳を澄ませた。部屋はあまりにも静かで、鼻を通る息の音が、まるで小さなカーテンがそよぐように柔らかく聞こえた。

すると、部屋の向こう側にある見えないドアが滑るように開き、男が現れ、ドアがその後ろで閉まった。その男は頭を下げてまっすぐテーブルに向かい、八角形のスツールに座り、見たこともないほど美しい手の一つで流れるような仕草をした。

「おすわりください。私の向かいに。タバコはなし、もじもじもしないでください。リラックスしてみましょう、完全にね。さて、どのようなご用件でしょうか？」

おれはすわり、タバコを口にくわえて火をつけずに唇の上で転がした。彼をじっくり観察した。細く、背が高く、鉄の棒のようにまっすぐだ。これまで見たこともないほど淡く繊細な白髪を持っていた。絹のガーゼで濾したかのようなようだった。肌はバラの花びらのように新鮮だった。三十五歳かもしれないし、六十五歳かもしれない。年齢を感じさせなかった。髪は、バリモアも顔負けの素晴らしい横

顔からまっすぐ後ろにとかさされていた。眉毛は壁や天井、床と同じように真っ黒だった。目は深く、あまりにも深かった。夢遊病者のような、薬に侵された底知れぬ目だった。かつて読んだ井戸のようだった。九百年も前の古い城にあった井戸だ。そこに石を落とし、待つ。耳を澄ませて待つが、待ちきれなくなって笑い、立ち去ろうとしたその瞬間に、井戸の底からかすかで微かな水音が聞こえてくる。あまりに小さく、遠い音で、こんな井戸があり得るのかと信じられないほど。

彼の目はそんなふうに深かった。そして表情のない、魂もない、ライオンが人間を引き裂くのを見ても決して変わらない、男が熱い太陽の下でまぶたを切り取られ、串刺しになって絶叫するのを眺めていられるような、そんな目なのだ。

彼はダブルの黒いビジネススーツを着ていたが、それをカットしたのは芸術家だった。彼は漠然とおれの指を見た。

「もじもじしないで。波動を破り、私の集中に差し障ります」

「場がほぐれるし、バターも溶けるし、ネコも鳴かせられませ」とおれ。

彼はこの世で最もかすかな微笑を浮かべた。「無礼な真似をしにいらしたのではありますまい」

「なぜおれが来たか、そっちこそ忘れてるようだね。ちなみに、あの百ドル札は秘書さんに返しといたよ。おれがきたのは、ご記憶かもしれないが、あるタバコのことだ。マリファナでいっぱいロシアたばこだ。空洞の吸い口にはあんたの名刺が丸めてあった」

「なぜそうなったのか知りたいのですか？」

「そうとも。おれのほうが百ドル払うべきだ」

「それには及びません。答は簡単です。私が知らないこともある。これもその一つです」

一瞬おれはそれを信じかけた。その顔は天使の翼のように滑らかだった。

「じゃあなぜ百ドルを寄越したんだい——それと臭いタフなインディアンも——そして車も？ ちなみに、あのインディアンは、あんな臭くなきゃいけないの？ あんたの下で働いてるなら、なんか風呂に入れてやるとかできなかったの？」

「あの者は天然の霊媒なのです。めったにおりません——ダイヤモンドのようなもので、ダイヤモンドと同じく、ときには汚い場所で見つかるのですよ。あなたは私立探偵だそうですね？」

「そうだ」

「あなたはとてもバカな人だと思います。バカに見えます。バカな商売をしています。そしてバカな任務でここにやってきた」

「なるほど。おれはバカだと、だんだん腑に落ちてきたよ」

「そしてあなたをこれ以上拘束する必要はないと思います」

「拘束しているのはあんたじゃない。おれのほうだ。なぜあの名刺がああタバコの中にあっただか知りたいんだ」

彼は、これ以上はないというほどかすかに肩をすくめた。「私の名刺はだれにでも提供されます。わたしは友人にマリファナタバコを配ったりしない。あなたの質問は相変わらずバカです」

「ひょっとしてこれでピンとくるかな。タバコは安手の中国か日本製の、模造ベッ甲のケースに入っていたんだ。そんなものを見たことはあるかい？」

「いいえ。記憶にありません」

「もうちょっと思い出すネタをやろう。そのケースはリンゼイ・マリオットという名前の男のポケットに入ってたんだ。こいつは聞いたことあるかい？」

彼は考えた。「ええ。カメラの前で引っ込み思案になるのを治療しようとしたことがあります。映画に参入しようとしていたんです。時間の無駄でした。映画のほうはあの方など求めなかった」

「それは見当がつくな。写真写りはイザドラ・ダンカン並だろうから。まだでっかいのが残ってる。なぜ百ドル札を送ってよこした？」

彼は冷ややかに言った。「親愛なるマーロウさん。私は愚か者ではない。私はきわめて微妙な職業に就いております。詐欺師です。これはつまり、セコい怯えた身勝手なギルドの医者たちには達成できないことをやる、という意味です。私は常に危険に曝されている——あなたみたいな人からね。私は単に、危険を相手にする前にその深刻さを見極めたいだけなのです」

「おれの場合はかなり些末ってわけか？」

「ないも同然です」と彼は礼儀正しく言って、左手で奇妙な動きを行い、おれの目はそれに飛びついた。そしてその左手を白いテーブルにとってもゆっくりとおろして、それを見つめた。それから底知れぬ目を再び挙げて、腕組みをした。

「聞こえるのは——」

「匂いがするよ。あいつのことは考えてなかった」

左側を向いた。インディアンは黒ビロード脇の、三脚目の白スツールにすわっていた。

他の服の上から何か白いスモックを着ている。動かずにすわり、目を閉じ、頭は少し前に傾き、まるで一時間寝ていたかのようだ。その黒い強い顔は影に満ちていた。

おれはアムサーに向き直った。あのかすかな微笑を浮かべている。

「いままで未亡人どもは入れ歯も落とすちまうだろうよ。あいつ、本当の稼ぎのためには何をするんだい——あんたのひざにすわってフランスの歌でも歌うのか？」

彼は苛立った身ぶりをした。「要点をどうぞ」

「昨夜、マリオットはおれを雇い、何やら犯罪者どもに連中指定の場所で金を払うという探検につきあえという。おれは頭を殴られた。意識が戻ったらマリオットが殺されてた」

アムサーの顔ではほとんど何も変わらなかった。叫んだり駆け回ったりもしない。だが彼にしては、鋭い反応が見られた。腕組みを解いて、反対方向に組み直したのだ。口は陰気そうに見えた。そして、公立図書館の外にすわっている石造りのライオンみたいにすわった。

「タバコはあいつの持ち物から見つかったんだ」

彼は冷たくおれを見た。「しかし警察が見つけたのではない、ということでしょうね。というのも警察はこちらにきておりませんから」

「その通り」

「百ドルでは足りないくらいですね」と彼はとても柔らかく言った。

「それで何を買いたいか次第だな」

「そのタバコはお持ちですか？」

「一本はね。だが何の証明にもならない。あんたの言ったとおり、だれでもあんたの名刺は手に入る。単に、なぜそれがあそこにあったか知りたいだけなんだ。何か考えは？」

「マリオットさんとはどのくらいの知り合いでしたか？」彼は柔らかく尋ねた。

「まったく知らん。だがどんなヤツかヒントはあった。あまりに露骨すぎて目立つほどだ」

アムサーは軽く白テーブルを叩いた。インディアンはまだあごを巨大な胸に乗せて眠り、重たいまぶたは固く閉じられている。

「ちなみに、グレイル夫人なる人物と会ったことはあるかい、ベイシティ在住の金持ち女性だ」

彼はぼんやりとうなずいた。「はい、あの女性の発話中枢を治療しましたよ。ほんのかすかな障害があったもので」

「見事な仕事ぶりだったよ。いまやおれと同じくらいまともにしゃべれる」

そう聞いても彼は興味を示さなかった。まだテーブルを叩いている。そのタップ音を聞いた。何かそこに気に食わないものがあった。何か信号のように聞こえる。彼はそれを停め、また腕組みして、空中にもたれた。

「この仕事で気に入ってるのは、全員がお互いに知り合いだってことなんだ。グレイル夫人もマリオットを知っていた」

「それはどうやって知ったのですか？」彼はゆっくり尋ねた。

おれは何も言わなかった。

「警察には言わないといけませんね——そのタバコのことは」

おれは肩をすくめた。

アムサーは朗らかに言った。「どうして私がまだあなたを放り出していないのかと不思議に思っているのでしょうか。セカンド・プランティングは、あなたの首をセロリのようにへし折れます。私自身も不思議です。あなたは何か仮説をお持ちらしい。私は強請られても支払ったりしない。払っても何も買えません——そして私には友人も多い。しかしもちろんながら、私にミソをつけたいと思っている手合いは一部にあります。精神分析医、セックス専門家、神経学者、精神異常文献を山と入れたんだなにゴムハンマーを持っている、陰険な小男どもとか。そしてもちろんそいつらはみんな——お医者様です。一方の私は相変わらず——詐欺師。あなたの仮説とは？」

おれはにらみつけて彼をひるませようとしたが、無理だった。自分が唇を舐めているのを感じた。

彼は軽く肩をすくめた。「隠しておきたいと思ったのも責めるわけにはいきません。これは考えて見る必要のある事柄です。ひょっとすると、あなたは思ったよりもずっと知的な方なのかもしれない。私もまたまちがいをしでかします。それまでは——」彼は身を乗り出し、ミルク色の球体の両側に手を置いた。

「マリOTTは女性の強請屋だったと思う。そして宝石ギャングの実行犯だ。だがどの女性をカモにするべきかをあいつに教えたのはだれだろう——その女性たちの動きを知り、親密になり、愛を交わし、宝石を大量に身につけて外出に連れ出し、そして電話をこっそりかけて仲間はどこで仕事をするか伝えられるようにしたのは何者だ？」

アムサーは慎重に言った。「それがあなたの考えるマリOTTの正体ですか——そして私の。少々嫌悪を抱きますね」

おれは身を乗り出し、顔を三十センチ以内に近づけた。「あんたもこの闇商売に入ってる。好きなだけ飾り立ててくれてもいいが、それでも闇商売だ。そして名刺だけじゃないぞ、アムサー。お前の言う通り、あれはだれでも手に入れられる。マリファナじゃない。あんたはそんな安手の商売はしない——いくらでも機会があるんだから。だが名刺それぞれの裏には空白がある。そして空白には、いや文字のあるところにも、ときどき透明インクで書き物がしてあるんだ」

彼はわびしい微笑を浮かべたが、それをろくに見る間もなかった。彼の手がミルク色のボウルの上を動いた。

灯りが消えた。部屋は過激禁酒運動のキャリー・ネーションのボンネット並に真っ黒となった。



[22]

スツールを後ろに蹴り倒して立ち上がり、脇の下のホルスターから銃を引っ張り出した。だが役には立たなかった。上着はボタンをかけてあったので、遅すぎた。だれかを撃つのであれば、どのみち遅すぎただろう。

音もしない空気の乱れがあり、泥臭い匂いがした。真っ暗闇の中でインディアンがおれを背後から殴り、両腕を脇に押さえ込んだ。そしておれを持ち上げはじめた。まだ銃を取りだして、部屋中を盲撃ちすることはできたが、応援が近くにいるような場所じゃない。そんなことはやるだけ無駄そうだった。

銃を放してやつの手首をつかんだ。油まみれでつかみにくい。インディアンはのどから呼吸音をたて、すさまじい衝撃でおれを叩きつけて、頭のとっぺんが抜けそうになった。おれが向こうの手首をつかんだつもりが、いまや向こうがこっちの手首を持っている。それをすばやくおれの背後でねじりあげ、ひざが礎石のように背中に蹴り込まれた。おれを屈服させた。おれは屈服させられる。おれは市役所とはちがう。やつはおれを屈服させた。

まったく理由もなしに叫ぼうとした。息がのどでぜいぜい音をたて、声が出なかった。インディアンはおれを横に投げ、倒れると同時にボディシザーズで締め上げた。おれを樽の中に閉じ込めたようだった。手がおれの首に伸びた。時々、夜中に目が覚める。あいつの手がそこにあるのを感じ、あいつの匂いが蘇る。息が戦い、負け、脂っぽい指が食い込むのを感じる。そして目を覚まして起き上がって酒を飲み、ラジオをつける。

おれがほとんど意識を失いかけていたとき、目の中とその奥に血が滲んでいたせいで、血のように赤い光が再び閃いた。顔がふわふわと浮かび、片方の手がおれを優しく撫でたが、もう片方の手はおれの喉に残ったままだった。

声が柔らかく言った。「息をさせてやりなさい——少し」

指がゆるんだ。おれはそいつから身を振りほどいた。何かギラつくものがアゴの脇を殴った。

声が柔らかく言った。「立たせなさい」

インディアンはおれを立たせた。引っ張って行って壁を背に押しつけ、両方のひねった手首でおれを押しさえつけていた。

「ド素人が」と声は柔らかく言い、死のように固く苦いあの輝くものが再びおれの顔の左右を張り飛ばした。生暖かいものが流れた。舐めてみると、鉄と塩の味がした。

手がおれの財布を探った。手がポケットをすべて漁った。ティシュペーパー入りのタバコが取り出され、包みが開かれた。おれの目の前の霞の中で、それはどこかに消えた。

「タバコは三本あったのですね？」声は優しく良い、輝くものがまたおれのあごを殴った。

「三本」おれはあえいだ。

「他の二本はそもそもどこにあると言いましたっけ？」

「おれの机——事務所の」

輝くものがまたおれを殴った。「たぶんウソをついていますね——だが調べて見ましょう」。鍵が目の前で、変な小さい赤い光に照らされ輝いた。声があった。「もう少し締め上げなさい」

鉄の指がおれののどに食い込んだ。おれは彼に身を押さえつけられ、そいつの匂いに抑え込まれ、固い腹筋に押しさえつけられていた。手を上げてやつの指を一本つかみ、それをひねろうとした。

声が柔らかく言った。「驚いたね。こいつは学習している」

ぐらつくものが再び宙を飛んだ。おれのアゴを殴った。かつておれのアゴだったものだ。

「離してやりなさい。おとなしくなった」と声。

重く力強い腕が離れ、おれは前にふらつき、一步踏み出して体を安定させた。アムサーはおれの前に立ち、ほのかに、ほとんど夢見るように微笑んでいた。繊細で美しい手で私の銃を持ちっている。それをこちらの胸に向けていた。

「教えてあげてもいい」と彼はその柔らかい声で言った。「だが何のために？ 薄汚いセコい世界の薄汚いセコい男。一点だけ明るいところがあっても、あなたはまだ相変わらず同じだ。そうじゃないかね？」彼はにっこりとした。実に美しく。

おれは残った力をすべてこめて、そいつの微笑に拳を繰り出した。

総じて、決して悪くはなかった。彼はよろめき、両方の鼻孔から血が出てきた。そして彼は体勢を立て直し、身を起こしてまた銃を上げた。

「すわるんだ、坊や。これからお客がくるんからね。殴ってくれてよかった。ずいぶん役にたつ」

おれは白いスツールを手探りで見つけ、すわると頭を白いテーブルの、乳白色の球体の横に下ろした。その球体は再び柔らかく輝いていた。おれはそれを横目で、顔をテーブルに乗せたまま見つめた。その光がおれを魅了した。すてきな光、すてきな柔らかい光。

背後とまわりには、沈黙しかなかった。

たぶん眠ったんだと思う。あっさりと、血まみれの顔をテーブルにのせ、やせた美しい悪魔がおれの銃を手に、こちらを眺めてにっこりしている。

[23]

「よおし、時間稼ぎはそのくらいにしろ」とでかいヤツが言った。

おれは目を開けて起き上がった。

「向こうの部屋に行くんだ、相棒」

おれはまだうつらうつらしつつ立ち上がった。ドアを抜けてどこかに行った。そして、それがどこかわかった——窓がまわりにぐるっとある待合室だ。いまや外は真っ暗だった。

あわない指輪をした女が机に向かっていて。男がその横に立っている。

「ここに座れよ、相棒」

そいつはおれを押し下げた。いい椅子で、まっすぐだが快適だが、おれはそんな気分じゃなかった。机の向こうの女はノートを開いていて、それを朗読していた。無表情で灰色の口ひげを生やした背の低い老人がそれを聞いている。

アムサーは窓辺に立ち、こちらに背を向けて彼方の海の静謐な水平線を見ている。波止場の灯りの彼方、世界の彼方の水平線だ。それが大好きだとでもいうようだ。頭を少し回して一度おれを見た。顔から血は洗い流されていたが、鼻は最初に会ったときとはちがい、二サイズ分ほどでかくなっている。それを見てニヤリとしてしまった。こっちは唇が割れたりひどい状態だったが。

「なんか楽しいのか、相棒」

おれはその音をたてたものを見た。おれの前にいるもの、いまいるところに来るのを助けてくれたものだ。そいつは野育ちの体重百キロかそこらのお花畑野郎で、染みだらけの歯にサーカスの呼び込み屋みたいな優しい声。タフで、すばやく、肉の塊。だれもこいつに邪険にはできない。就寝前にお祈りをするかわりに、警棒に唾をかけて磨くようなおまわりだ。だが目はユーモアあふれていた。

そいつはおれの前に脚を広げてたち、片手におれの財布を開いて持ち、右の親指でその革に傷をつけていて、まるで単にモノを台無しにするのが好きとでも言わんばかり。それしかなければ、小さいモノでもいい。だが顔を台無しにするほうがずっと楽しいのだろう。

「覗き屋だな、相棒。でっかい悪い街からやってきたのか、え？ ちょっとした強請のネタか、え？」

彼の帽子が頭の後ろにあった。ほこりっぽい茶色の髪をして、それがおでこの汗で黒ずんでいる。そのユーモラスな目は赤い血管で血走っている。

おれののどは圧延機を通されたような気分だった。手を伸ばして触れてみた。あのインディアン。鋼鉄の工具みたいな指をしてやがる。

色黒女はノートの朗読をやめてそれを閉じた。高齢の小柄な灰色口ひげ男はうなずいてこちらにくると、おれにしゃべっているやつの背後に立った。

「おまわりか？」とおれはアゴを撫でながらたずねた。

「おまえはどう思う、相棒？」

警官流のユーモア。小柄なやつは片目が斜視で、ほとんど見えないようだった。

おれはそいつを見ながら言った。「ロサンゼルスじゃないな。その目だとロスなら退職だ」

でかい男はおれの財布を寄越した。その中を調べた。金はまだ全額残っている。名刺もすべて。その中にあるべきものはすべてある。驚いた。

「なんとか言えよ、相棒。なんかこっちがおまえを気に入るようなことを」とでかいの。

「銃を返せ」

そいつはちょっと身を乗り出して考えた。考えているのがわかった。えらく苦労している。「そうか、銃がほしいか、相棒？」と、灰色口ひげ男のほうを横目で見た。「銃がほしいとよ」と言って、またこれを見た。「そしてその銃で何をするつもりだい、相棒？」

「インディアンを撃ちたい」

「おや、インディアンを撃ちたいか、相棒」

「ああ——たった一人でいい。バキュン」

そいつは口ひげのやつをまた見た。「こいつすげえタフだな。インディアンを撃ちたいとき」

「なあヘミングウェイ、おれの言うことをいちいち復唱しないでくれ」

「こいつ、イカレてるぜ。いまおれのことをヘミングウェイだと。イカレてると思うか？」とでかいのが言った。

口ひげのやつは葉巻を噛んで何も言わなかった。窓辺の背の高い美しい男はゆっくりふりかえり、柔らかく言った。「いささか均衡が乱れている可能性はあるね」

「おれをヘミングウェイ呼ばわりする理由なんか、何も思いつかないんだがな。おれ、ヘミングウェイじゃないし」とでかいの。

高齢の男が言った。「銃は見あたらなかった」

二人はアムサーを見た。アムサーは言った。「中にある。私が持っている。あなたに渡すよ、ブレインさん」

でかい男は腰を折って身をかがめ、少し膝を曲げておれの顔に息を吐きかけた。「なんだっておれをヘミングウェイ呼ばわりしやがったんだ、相棒？」

「ご婦人の前だからな」

そいつはまた身を起こした。「ほらな」と口ひげのやつを見た。口ひげのやつはうなずき、振り向いて部屋を横切り歩き去った。すべるドアが開いた。彼はそれを通り、アムサーがそれに続いて出ていった。

沈黙。色黒女は机のてっぺんを見て顔をしかめた。大男はおれの右眉を見て、ゆっくりと首を振り、思案するようだった。

ドアがまた開き、口ひげ男が戻ってきた。どこかから帽子を取っておれに渡した。おれの銃をポケットから取り出してこちらに寄越した。重さで空っぽなのはわかった。それを脇の下に突っ込んで立ち上がった。

でかい男は言った。「いくぞ、相棒。ここから離れて。ちょっと外の空気を吸ったらしっかりするだろうよ」

「オッケー、ヘミングウェイ」

でかい男は悲しげに言った。「またやってやがる。ご婦人の前だからっておれをヘミングウェイ呼ばわり。なんかこいつお得意の薄汚いあだ名かなんかかかね？」

口ひげ男は言った。「さっさとしろ」

でかい男はおれの腕をつかみ、小さなエレベーターに向かった。それが上がってきた。二人で中に入った。

[24]

エレベーターシャフトの底でおれたちは外に出て、せまい廊下を歩き、黒いドアを出た。そとの空気は新鮮で爽やかだった。そこは十分に高度があり、海からの霧のようなしぶきの漂いより上なのだ。おれは深呼吸した。

でかい男はまだおれの腕をつかんでいた。そこに車が待っていた。飾りのない黒のセダンで、ナンバーは公用車のもものではなかった。

でかい男は前部シートのドアを開けて文句を言った。「おまえなんかには高級すぎる車だがな、相棒。だがちょっと空気を吸ったら気分もよくなる。それで構わんか？ おまえのお望みでないようなことはしたくないからな」

「インディアンはどこだ？」

男は少し首を振っておれを車に押し込んだ。おれは前部シートの右側に乗り込んだ「ああ、インディアンね。あいつは弓矢で射たないとダメなんだ。法律でな。車の後ろに乗ってるよ」

おれは車の後ろを見た。空っぽだ。

でかいヤツが言った。「あら、いないじゃないか。だれかにかっさらわれたんだろう。もう鍵のかがかってない車の中には何も残しておけないな」

「さっさとしろ」と口ひげ男が後部座席に乗り込んだ。ヘミングウェイはぐるっとまわってその固い腹をハンドルの下に押し込んだ。発車させた。Uターンして野生のゼラニウムが並んだ車道を走っていった。冷たい風が海から漂う。星はあまりに遠すぎた。それは何も言わない。

車道のふもとまでやってきて、コンクリートの山道へと曲がって入り、急ぐことなくゆっくりとそこを走り続けた。

「なんであんた、自分の車を持ってこなかったんだい、相棒？」

「アムサーが迎えを寄越した」

「そりやどういうわけだい、相棒？」

「おれに会いたかったにちがいないよ」

「こいつ、やるね。いろいろつきとめる」とヘミングウェイは車の窓から唾をはいて、ゆるやかに曲がると、車にエンジブレーキを利かせつつ丘を下った。「あんたが電話をかけてきて、脅しをかけようとしたんだと聞いたぜ。そこで、相手をしてるのがどんなやつか、一目見ておくほうがいいと思ったんだと——相手をするにしても。そこで自分の車を迎えに出したんだ」

「知り合いの警官に電話するから、おれが帰りに自分の車は要らないと知ってたんだよ。そうだな、ヘミングウェイ」

「うん、またそれかよ。わかった。あいつはテーブルの下に口述録音装置があって、秘書がそれを前部書き留めて、それをこのブレインさんに読み上げるんだよ」

おれはふり返ってブレインさんを見た。葉巻を吸っていて、まるでスリッパ履きのように平穩そのもの。おれを見もしない。

「ふん、そんなはずがあるかよ。むしろあの手の出来事に備えてすべてでっちあげた、出来合のメモの束でもあるんだろう」

「なんであの人に会いたかったか話してくれちゃどうだい」とヘミングウェイが礼儀正しく示唆した。

「まだ顔がまともに残ってるうちにとってことか？」

「おいおい、おれたちその手の連中なんかじゃ全然ないんだぜ」とやつは大げさな身ぶりで言った。

「アムサーはかなりよく知ってるんだろう、ヘミングウェイ？」

「ブレインさんはなんとなく知ってるな。おれは命令に従うだけだ」

「ブレインさんってそもそもだれ？」

「後部シートの旦那だな」

「そして後部シートにすわる以外には、いったい何者なんだ？」

「おやおやまったく、ブレインさんを知らないやつはいないよ」

「わかったよ」とおれはいきなり、どっと疲れてきた。

もうしばらく沈黙、さらにカーブ、さらにくねるコンクリートのリボン、さらに暗闇、さらに苦痛。
でかい男は言った。「さてこれでマブダチになってご婦人もいないし、なんであんたがあそこに
戻っていったかなんて話で時間を潰す気もないが、このヘミングウェイとかいうのはホントにカンに
障るんだよ」

「ギャグだよ。本当に古いギャグ」

「そもそもこのヘミングウェイってのはだれなんだ？」

「同じことをしつこく繰り返すんで、だんだんこっちもそれが上手いにちがいないと思いこんじゃう
ヤツだよ」

「それにはずいぶんと時間がかかるだろうなあ。私立探偵にしちゃあ、おまえの頭はずいぶん寄り道
が多いな。まだ歯は自前のヤツなのか？」

「ああ、詰め物はいくつもあるがね」

「ふん、それはずいぶんとこれまでツイてたんだな、相棒」

後部シートの男が言った。「ここらでいい。次のところで右折だ」

「了解」

ヘミングウェイはセダンを、山の麓をかすめる狭い未舗装路へと入れた。それに沿って一キロ半ほ
ど走った。セージの匂いがやたらに強くなった。

「ここだ」と後部シートの男。

ヘミングウェイは車を停めてブレーキを引いた。おれを越えて身を乗り出すとドアを開けた。

「お目にかかれて光栄だったよ、相棒。だが戻ってくるなよ。少なくとも仕事ではな。出ろ」

「こっから歩いて帰れと？」

後部シートの男が言った。「さっさとしろ」

「うん、こっからは歩いて帰りな、相棒。それで構わんか？」

「ああ、それでいろいろ考える時間もできる。たとえばあんたらはロス市警じゃないな。だが片方は
サツだ。二人ともかもしれない。ベイシティの警察だろうな。なんで管轄区域の外にいるのか不思議
だよ」

「そいつはなかなか証明しにくいんじゃないか、相棒」

「おやすみ、ヘミングウェイ」

そいつは答えなかった。どっちもしゃべらなかった。おれは車から降りようと、片脚をランニングボードにのせて、まだ少し頭がくらくらしたまま身を乗り出した。

後部シートの男が、いきなる電光石火の動きをして、おれはそれを見たというより感じた。足下に暗闇の泥沼が口を開け、それは漆黒の夜よりもはるかに深かった。

おれはそこに飛び込んだ。底なしだった。

[25]

部屋は煙まみれだった。

煙はまっすぐ宙に立ち上り、細い線となって、まっすぐ上下に、小さく透明なビーズのカーテン状になっていた。端の壁には二つ窓が開いているようだったが、煙は動かなかった。この部屋は見たことがなかった。窓には横に鉄格子がはまっている。

ぼんやりして何も考えられない。一年も寝ていたような気分だ。だが煙が気になった。仰向けに横たわりそれについて考えた。長いことたってから、深呼吸したら肺が痛んだ。

「火事だ！」と叫んだ。

それで笑った。何がおかしかったのかはわからなかったが、おれは笑い出した。ベッドに転がって笑った。笑いの音が気に入らなかった。キチガイの笑い声だった。

その叫び一声だけで十分だった。部屋の外で激しく足音が鳴り響き、鍵が錠前につっこまれて、扉がバタンと開いた。男が身体を横にして飛び込んできて、背後で扉を閉めた。右手が腰に伸びた。

背の低いがっしりした男で白衣を着ている。奇妙な目つきで、黒く平板だ。その外側の隅には灰色の皮膚の塊がある。

おれは固い枕の上で頭をまわし、あくびをした。

「そいつはあてにするなよ、ジャック。滑り落ちたみたいだぜ」とおれ。

男はそこで歯をむき、右手は右の腰の上で浮いている。緑がかった悪意ある顔と平板な黒い目とただの上辺だけに見える灰白色の肌と鼻。

「もっと拘束衣を着せてやろうか」彼は歯をむいた。

「大丈夫だよ、ジャック。まったくもって。長い昼寝をただけだ。ちょっと夢を見たのかも。ここ、どこ？」

「おまえのいるべき場所だ」

「すてきなところみたいだねえ。人もすてき、雰囲気もすてき。またちょっと昼寝をしようかな」

「それだけにしとけよ」彼は歯をむいた。

出ていった。扉が閉まった。鍵がカチリとかかった。足音がうなって無音となった。

煙のことは何もしてくれなかった。相変わらず部屋の真ん中に、部屋中すべてにあった。カーテンみたい。溶け去りもせず、漂って消えることもなく動きもしない。室内に空気はあり、それが顔に感じられた。だが煙はそれに影響されなかった。千匹ものクモが編んだ灰色の網だ。どうやってそのクモたちに共同作業をさせたんだろうかと不思議に思った。

綿のフラシ天パジャマ。郡病院で着るようなやつ。前はなし、不可欠な以上は一針たりとも縫っていない。粗くごわごわの素材。首がおれののどを締めている。のどはまだ痛い。いろいろ思い出してきた。手を上げてのどの筋肉に触れた。まだ痛い。インディアンたった一人。バキュン。オッケー、ヘミングウェイ。探偵になりませんか？ しっかり稼げます。簡単なレッスン九回だけ。バッジを送りますよ。追加五十セントで脱腸コルセットもつけませ。

喉が痛かったが、それを触る指は何も感じなかった。指がバナナの束でも同じだったかもしれない。それを見た。指のようだった。役に立たない。通信販売の指だ。バッジや脱腸コルセットといっしょに送られてきたんだろう。そして卒業証書も。

夜だった。窓の外の世界は真っ黒だった。天井の中央から真鍮の鎖三本で吊り下げられたガラスの磁器ボウルがあった。その中に光があった。縁にはオレンジと青の小さな色つき塊が交互に並んでいた。それをじっと見つめた。煙にはうんざりしてきた。見つめていると、それらが小さな丸窓のようにはじけ開き、頭が飛び出した。小さな頭だったが、生きていた。人形の頭のようなのだが、生きている。ヨット帽の男で、ジョニー・ウォーカーの鼻を持ち、絵画のような帽子をかぶったふわふわのブロンドの女、そして曲がった蝶ネクタイの痩せた男がいた。彼はビーチタウンのハエ取りのようなウェイターに見えた。彼は唇を開き、にやりと笑って言った。「ステーキはレアがお好みですか、それともミディアムですか、旦那？」

おれは目をしっかり閉じて、それをきつくウィンクし、再び開けるとそれはただの真ちゅう製鎖三本でぶら下げたインチキ瀬戸物ボウルだった。

だが動く空気の中で煙はまだ動かさずぶら下がっていた。

私は粗いシーツの角をつかみ、通信講座が半額前払いの簡単なレッスン九回の後に送ってきたしびれた指で顔の汗を拭った。アイオワ州シーダーシティ、私書箱 240 万 8969 百と 24 番。イカレてる。完全にイカレてる。

ベッドに腰を下ろし、しばらくすると足が床に届いた。はだしで、針やピンが刺さっている。雑貨売り場は左側でございます、奥様。右側に特大安全ピン。足が床を感じ始めた。立ち上がった。高すぎる。体をかがめ、息を荒くしながらベッドの端をつかんだ。すると、ベッドの下から聞こえてくるような声が繰り返し言った。「お前は譫妄症だ、譫妄症だ……譫妄症だ」

よろめきながら、酔っ払いのように歩き始めた。二つの鉄格子の窓の間に、白いエナメル小さなテーブルがあり、ウイスキーのボトルが置いてあった。いい形に見えた。半分くらい残っているようだった。それに向かって歩いた。世の中には、いろんなことがあっても、いい人がたくさんいる。朝の新聞に文句を言ったり、映画館で隣の席のやつのすねを蹴ったり、気分が落ち込んで政治家をせせら笑ったりしても、世の中にはやっぱりいい人がたくさんいる。その半分のウイスキーボトルを置いていったやつを考えてみる。あいつの心はメイ・ウェストのヒップみたいにでっかいぜ。

それに手を逃して半分感覚のない手を両方ともそれに置き、口まで抱え上げ、まるで金門橋の片端を持ち上げているかのように汗をかいた。

長々とぶざまに飲んだ。ボトルをまた、おそろしく慎重に下に置いた。自分のあごの下をなめようとした。

ウイスキーは変な味がした。それが変な味だと気がついている途中で、壁の隅に洗面台が突っ込んであるのを見た。ギリギリ間に合った。吐いた。ディジー・ディーンだってこれほどきついものを吐き出したことはない。

時間が過ぎた——吐き気とよろめきと立ちくらみと洗面台のふちにしがみついて助けを求めて動物のような音をたて続ける苦悶の時間。

過ぎ去った。よろめきながらベッドに戻り、再び仰向けに横になって、息を切らしながら煙を見つめた。煙はあまりはっきりしなくなった。あんまりリアルじゃない。もしかしたら、自分の目の奥にある何かにすぎなったのかもしれない。そしていきなり、煙が全くなくなった。そして、瀬戸物の天井照明からの光が部屋をくっきりと照らし出した。

私は再び起き上がった。ドアの近くの壁に、重い木製の椅子があった。白衣の男が入ってきたドアのほかに、もう一つドアがあった。おそらくクローゼットのドアだ。自分の服があるかもしれない。

床は緑と灰色の四角いリノリウムで覆われていた。壁は白く塗られていた。清潔な部屋だ。すわっているベッドは、通常より低めの狭い鉄製の病院ベッドで、男の手首や足首の位置あたりに、バックル付きの太い革製のストラップが取り付けられていた。

すごい部屋だぜ——逃げ出すには。

全身の感覚が戻ってきた。頭とのどと腕が痛い。腕のことは思い出せない。綿のパジャマっぽいもののでをめぐって、ぼやけた目でそれを見た。肘から肩までの肌の到るところに注射針の痕だらけだった。それぞれのまわりには変色したパッチがあり、それぞれ二十五セント玉の大きさだ。

ヤクだ。おれは口封じで山ほどヤクを射たれたんだ。ひょっとすると、しゃべらせるために自白剤のスコポラミンも。一時にあまりに多すぎるヤク。そのせいで譫妄症が起こってる。そうなる人もいれば、ならない人もいる。すべてはその人の身体づくり次第。ヤク。

それで煙や天井の照明縁の小さな頭や、声やろくでもない考えや、拘束ベルトや麻痺した指や足の説明がつく。ウィスキーはおそらくだれかの48時間アル中治療の一部だったんだらう。それを単に残しておいて、おれが何も逃さないようにしたんだ。

おれは立ち上がり、ほとんど反対側の壁を腹で打った。おかげでおれは寝転がり、かなり長い間とても穏やかに呼吸をすることとなった。いまや全身がチリチリして発汗している。おでこに小さな汗の玉ができて、それがゆっくりと慎重に鼻の脇をすべり落ちて口の端にたどりつくのが感じられた。舌はそれを愚かしくなめた。

もう一度身体を起こし、足を床に貼り付かせて立ち上がった。

「オッケー、マーロウ」とおれは歯を食いしばりつつ言った。「おまえはタフなやつだ。身長180センチの鋼鉄の男。裸で顔を洗うと体重86キロ。固い筋肉でガラスのあごなんかじゃない。十分耐えられる。二回棍棒で殴り倒され、のどを締め上げられ、銃のバレルでむちゃくちゃにあごを殴られてる。ヤクを山ほど打たれてそのまま、踊る二匹のネズミになるくらいイカれるほどその状態を続けられた。そしてそのすべてが結局はどうなった？いつものことでしかない。さあ今度はおまえが本当にタフなことをやるのを見せてもらおう、ズボンを履くとか」

おれはまたベッドに横たわった。

時間がまた過ぎた。どのくらい長くかはわからない。腕時計はなかった。どのみち腕時計ではその手の時間はわからない。

おれは身体を起こした。これはだんだん決まり切った動きになってきた。立ち上がり歩き出した。歩いても楽しくない。心臓が神経質な猫みたいにはね上がる。寝っ転がって眠りに戻ったほうがいい。しばらく休んだほうがいい。あんた、酷い状態だぜ、相棒。オッケー、ヘミングウェイ。おれは弱い。花瓶ですら倒せない。爪も割れない。

そんなことはやんない。おれは歩いてる。おれはタフだ。ここから出る。

おれはまたベッドに横たわった。

四回目は少しマシだった。おれは部屋を横切って戻るのを二回やった。洗面台にでかけてそれをきれいにゆすぎ、そこにもたれて手の平から水を飲んだ。それを吐き出さずにいた。少し待ってさらに飲んだ。ずっといい。

歩いた。歩いた。歩いた。

三十分歩いて、膝ががくがくしたが頭ははっきりした。もっと水を飲んだ、たくさんの水を。飲んでる間に、ほとんど洗面台で泣きそうになった。

ベッドに歩いて戻った。美しいベッドだ。バラの葉でできている。この世で最も美しいベッドだ。キャロル・ロンバードから手に入れたんだ。彼女には柔らかすぎたんだ。その中で二分横になるだけで、おれの余生すべての価値があった。美しく柔らかいベッド、美しい眠り、美しい目が閉じてまっげが落ちて呼吸の優しい音に暗闇であとは深い枕に沈み……

おれは歩いた。

連中はピラミッドを作りそれに飽きて引き倒して石を削ってボウルダーダムコンクリートにしてそれを作りサニー・サウスランドに水をもたらしてそれを洪水に使った⁶²。

おれはそのすべての中を歩いた。そんなものはおれにはどうでもよかった。

おれは歩くのを止めた。だれかに話をする用意が整った。

62 この章、チマチマというんな部分の解釈が村上春樹訳はちがうと思うが、ヤクの譫妄状態の妄想なのでどれがちがうとははっきり断言できない。

[26]

クローゼットの扉は鍵がかかっていた。重い椅子はおれには重すぎた。そういうふうに行っているのだ。おれはシーツとパッドをベッドからはぎ取り、マットレスを片側に引きずった。その下にはメッシュのスプリングが下であり、そのてっぺんと底が全長25センチほどの黒いエナメル金属のバネで固定されていた。おれはその一つに取り組み始めた。これまでやったもっともつらい作業だった。十分後に、血の流れる指二本とはずれたバネが手に入った。おれはそれを振った。いいバランスだ。重たい。しなりがある。

そしてこれがすべて終わると、おれは部屋の向こうのウィスキーボトルを見た。これでもまったく遜色なかっただろうが、そのことはすっかり忘れていた。

もっと水を飲んだ。むき出しのバネの横にすわって、少し休んだ。それから扉のところに行って、そのちょうつがい側に口を当ててどなった。

「火事だ！ 火事だ！ 火事だ！」

待ち時間は短く快適だった。そいつは外の廊下を必死で入ってやってきて、鍵を激しく鍵穴につっこんで強くひねった。

扉がバタンと開いた。おれは開く側の壁に身体をぴったりつけていた。彼は今回は棍棒を取りだしていた。十五センチほどのすてきな道具で、編んだ茶色い革で覆われている。むきだしになったベッドを見て目が飛びだし、そして棍棒をふりまわしはじめた。

おれはクスクス笑ってそいつを殴った。コイルバネをそいつの頭に叩きつけると、そいつは前につんのめった。さらにそいつの膝を殴る。さらに二回殴った。うめき声をあげた。棍棒をその脱力した手から奪った。そいつは泣き声をあげた。

そいつの顔に膝を叩き込んだ。膝が痛んだ。それで顔が痛んだかどうか、そいつは教えてくれなかった。まだそいつがうめいている間に、棍棒で殴って気絶させた。

扉の外側から鍵を取って、内側から鍵をかけ、そいつの身体を探った。もっと鍵を持っていた。その一つがクローゼットに適合した。中におれの服がぶら下がっていた。自分のポケットを探った、財布の金はなくなっていた。白衣の男のところに戻った。こんな仕事にしてはやたらに金を持っていた。自分がもともと持っていた金額だけいただき、そいつをベッドに押し上げて、手首を足首のベルトを縛り、シーツ五十センチほどを口につめこんだ。鼻がつぶれていた。かなり長いこと待って、そいつがそのシーツ越しに呼吸できることを確認した。

こいつがかわいそうになった。単純でしっかり働く小男、なんとか仕事を維持して週ごとの給料をもらおうとしているだけなのに。妻子もあるかもしれない。仕方ない。そして手助けになるものといえば棍棒しかない。不公平に思えた。おれはヤク入りウイスキーを、彼の手の届くところにおいた——その手が縛られていなければだが。

そいつの肩を叩いた。ほとんどそいつのために涙した。

おれの服はすべて、銃のホルスターに銃も、だが銃の弾はない状態で、そのクローゼットにぶら下がっていた。おれは震える指でそれを着て、やたらにあくびをした。

ベッドの上の男は休んだ。そいつをそこに残して、外から鍵をかけて閉じ込めた。

外には広く静かな廊下があり、閉じた扉が三つあった。どの扉の向こうからも音は聞こえなかった。ワイン色の絨毯が廊下の中央を這い、家の他の部分と同じくらい静かだった。廊下の突き当たりには屈曲部があり、そこから直角に別の廊下が伸び、古風な大きな階段の頭部があった。白いオークの手すりがあり、優雅に下の薄暗い廊下へと曲がっていた。下の廊下は二つのステンドグラスの内扉で終わっていた。床はモザイク模様で、厚いラグが敷かれていた。ほぼ閉まったドアの縁から光の筋が漏れていた。しかし、音はまったくなかった。

古い家だ。かつてはそんな家を建てていたが、今はもう建てない。静かな通りに建っていて、横にはバラのアーチがあり、正面にはたくさんの花があるのだろう。カリフォルニアの明るい日差しの中で、優雅で涼しく、静かだ。そして中のことなんか誰が気にするもんか、そいつらがあまり大声で叫ばなきゃいいんだ。

階段を下りようと足を踏み出したとき、男の咳の音が聞こえた。それで振り返ると、廊下のもう一方の端に半分開いたドアがあるのが見えた。おれはランナーの上を爪先で歩いた。半開きのドアの近くで待ったが、ドアの中には入らなかった。光の楔が足元の絨毯に落ちていた。男がまた咳をした。深い胸から出る深い咳だった。穏やかで落ち着いた音だった。おれの知ったことじゃない。おれの仕

事はここから出ていくことだ。でも、その家でドアを開けばなしにできる男はだれであれ気になった。そいつは地位のある男だろう、ごあいさつしておく価値のある男だ。おれは光の楔に少し忍び込んだ。新聞がカサカサと音を立てた。

ある部屋の一部が見え、その内装は部屋らしく、独房ではなかった。帽と少し雑誌の乗った黒い衣装だながあった。レースのカーテンつきの窓、よいじゅうたん。

ベッドのスプリングが重々しくきしんだ。咳の音と同じく、大きな男だ。おれは指先を伸ばし、ドアを四、五センチ押した。何も起こらなかった。どんな動きよりもゆっくりと、おれの頭がその中を覗き込んだ。やっと部屋が見えた。ベッドと、その上の男、灰皿には吸い殻が山盛りで、ナイトテーブルに溢れ、そこから絨毯にこぼれていた。ベッドには十二枚ものぐちゃぐちゃの新聞が散乱していた。そのうちの一枚が、巨大な顔の前で巨大な両手で持たれていた。緑の新聞の端の上に髪が見えた。黒い、縮れた、たっぶりの髪だ。その下に白い肌の線。新聞が少し動き、おれは息を止め、ベッドの男は顔を上げなかった。

無精髭がひどい。いつも剃らないとダメなタイプだ。こいつは以前に見たことがある。セントラル街のフロリアンズという黒人専用店で。派手なスーツに白いゴルフボーが上着についていて、ウイスキーサーバーを手にしていた。そしてこいつの拳の中ではアーミーコルトが玩具のように見え、それを持ったこいつが壊れたドアをそっと通り抜けるのを見た。こいつの仕事ぶりも見たことがあり、それは一発で完全に仕上がるような仕事ぶりだった。

また咳をして、ケツをベッドのうえで転がし、苦々しくあくびをして、ナイトテーブルにあるくしゃくしゃのタバコの箱に横手を伸ばした。その一本が彼の口に入った。親指の端で火が躍った。そいつの鼻から煙が出てきた。

「ああ」とそいつは入って、新聞がまたそいつの顔の前にやってきた。

おれはそいつをそこに残し、脇の廊下を戻っていった。ヘラ鹿マロイ氏はずいぶんとよい世話を受けているらしい。おれは階段に戻って下に行った。

そのほとんど閉じかけた扉の向こうで声がつぶやいた。それに答える声を待った。何もなし。電話の会話だ。おれは扉の近くまで行って、聞き耳をたてた。低い声、単なるつぶやき。何ら意味あることは聞こえてこなかった。ようやく乾いたカチツという音が聞こえた。その後、部屋の中では沈黙が続いた。

これぞ立ち去る頃合い、遠くに行く頃合いだ。そこでおれは扉を押し開けて静かに中に入った。

[27]

それはオフィスだった。小さくもなく、大きくもない、整然とした専門的な雰囲気だった。ガラス扉の書棚には分厚い本が並んでいた。壁には救急キットのキャビネットがあった。白いエナメルとガラスの滅菌器には、たくさんの注射針と注射器が入っていて、煮沸されていた。広い平らな机には、吸い取り紙、青銅のペーパーカッター、ペンセット、予定表があり、他にはほとんど何もなかった。そこには、両手で顔を覆って物思いにふける男の肘だけがあった。

広がった黄色い指の間から、濡れた茶色の砂のような色の髪が見えた。頭蓋骨に塗られたように滑らかだった。さらに三歩進むと、男の目はデスクより先を見て、おれの靴が動くのに気づいたに違いない。顔を上げ、おれを見た。羊皮紙のような顔に、沈んだ無色の目。手をゆっくりと離し、背をそらして、まったく無表情にこっちを見た。

それから、何やら無力ながら不満そうな身振りで手を広げ、それをまた下ろしたときには、片手が机の隅にとても接近していた。

おれはさらに二歩進み、棍棒を見せた。その人差し指と中指は相変わらず机の隅に向かって動いていた。

「そのブザーは今夜は何も得られない。あんたのタフな小僧にはおねんねしていただいた」

目が眠たげになった。「あなたはずいぶんひどい状態だったんですよ。とてもひどい。まだ起き上がってうろつくのは推奨できません」

「右手」とおれは棍棒でそいつを叩いた。けがをしたヘビのようにシュルシュルと引っ込んだ。

おれはニヤニヤしつつ机の向こうに回ったが、特にニヤニヤすべきものがなかったわけじゃない。もちろん男は引き出しに銃を持っていた。こいつらはいつも引き出しに銃があり、いつも手遅れになってからそれを出そうとするし、そもそも取り出さないことも多い。おれはそれを取り出した。38口径自動拳銃、標準的なモデルでおれのやつほどはよくないが、銃弾は使える。引き出しには弾はないようだった。そこで銃のマガジンを取り出し始めた。

彼はぼんやりと動き、その目はまだ沈んで悲しげだ。

「じゅうたんの下に別のブザーがあるのかもな。それが本部の署長の事務所で鳴るのかもしれない。使うなよ。この一時間だけは、おれはとてもタフな男なんだ。あの扉から入ってくるやつは棺桶に入ることになる」

「じゅうたんの下にブザーはない」男の声は、ごくわずかに外国訛りらしきものがあつた。

彼の弾倉を取り出し、自分の空の弾倉を出して交換した。彼の銃身に入っていた弾を排出し、それを転がったままにした。弾を一つ自分の銃身に送り込み、また机の反対側に戻った。

扉にはバネ錠がついていた。おれはそっちに後ずさりして、押し閉める、鍵がカチリとかかる音が聞こえた。かんぬきもあつた。それもまわした。

机のところに戻って椅子にすわった。それだけで残った力を使い果たした。

「ウィスキー」とおれ。

そいつはまた手をふりまわし始めた。

「ウィスキー」とおれ。

彼は薬棚に行き、緑の酒税証明印紙つき平らなボトルと、グラスを一つ取り出した。

「グラスは二つだ。あんたらのウィスキーは一回飲んでみた。ほとんどカタリーナ島にまでぶっ飛ばされたよ」

彼は小さなグラスを二つ持ってくると、ボトルの封を切り、グラス両方に注いだ。

「あんたから先に」とおれ。

彼はかすかに微笑むとグラスの片方を掲げた。

「あなたの健康に——残った健康に」と飲み干した。おれも飲んだ。ボトルに手を伸ばし、酒の熱が心臓に到達するまで待った。心臓が脈を取り戻したが、またおれの胸におさまっていて、もうギリギリでぶら下がった状態ではなかった。

「悪夢を見たんだ。馬鹿な思いつき。自分が寝台に縛り付けられ、やまほどヤクを撃たれて鉄格子つきの部屋に監禁された夢だ。すごく身体が弱った。おれは寝た。食べ物はなかった。病人だった。頭を殴られて、そういう目にあわせた場所に連れてこられたんだ。えらく手間をかけたもんだ。おれえはそんな重要人物じゃない」

彼は何も言わなかった。おれを観察した。目の奥のほうで計算している様子がうかがえた。おれがあとどのくらい生きられるだろうと値踏みしているようだ。

「起きたら部屋は煙まみれだった。ただの幻覚、視神経の障害とかなんとか、あんたみたいなヤツが何というか知らんが。ピンクのヘビのかわりにおれは煙だった。そこで怒鳴ったら、白衣のタフな野郎が入ってきて棍棒をみせてくれたんだ。それを奪う準備をするにはずいぶん時間がかかったよ。そいつの鍵と自分の服を奪い、ポケットからおれの金まで取り返した。で、ここにきたんだ。完全に治った。さっき何と言いかけた？」

「何も言っていないが」

「発言のほうがあんたにしてほしいと思ってるんだ。発言は自分の舌を突き出して、言われるのを待ってるんだ。ここにあるこいつ——」おれは棍棒を軽く振った。「は説得屋なんだ。ある男から拝借しなきゃならなかったんだぜ」

「それをすぐ私によこすんだ」と彼は、次第に愛するようになる微笑を浮かべて言った。それは死刑用に毒薬の量を量りに独房にやってくる時の、死刑執行人の微笑みたいなものだ。ちょっと親しみ深く、ちょっと尊大、ちょっと慎重が同時に混じっている。十分に長生きする方法が少しでもあれば、その微笑を愛するようになる。

おれは棍棒を彼の手のひらに落とした。左手の手のひらだ。

「こんどは銃も頼むよ」と彼は柔らかく言った。「あなたはとても具合が悪かったんだ、マーロウさん。どうしてもベッドに戻ってくれと頼まざるを得ない」

おれはそいつを見つめた。

「私はドクター・ソンダーボーク。馬鹿なことはよすんだ」

彼は棍棒を自分の前の机に置いた。その微笑は凍った魚のように硬直していた。その長い指は、死にかけのチョウのような動きをした。

彼はやさしく言った。「銃をよこしなさい。強く申し上げておくが——」

「いま何時だい、看守さん」

彼は少し驚いたようだった。おれはもう自分の腕時計をしていたが、ゼンマイが切れて止まっていた。

「ほとんど深夜だ。なぜだ？」

「何曜日だ？」

「おやおや、なんということだ——日曜夜だよ、もちろん」

おれは机の上で身体を支え、考えようとして、銃を十分に男の近くに持って、そいつがそれを奪いにくるように仕向けた。

「すると四十八時間以上か。発作があったのも当然だ。だれがおれをここにつれてきた？」

男はおれを見つめ、左手がじりじりと銃に近づいた。こいつはさまよう手協会の会員だ。女の子たちはこいつで大いにお楽しみだったことだろう。

おれは懇願した。「おれをタフにならせないでくれよ。おれの美しいお作法を台無しにしないでくれ、この立派な英語も変にしないでくれ。おれがどうやってここに来たか話してくれ」

こいつは勇気があった。おれの銃を奪いにきた。だが彼がつかんだところにはもうなかった。おれは深く座って銃をひざにのせた。

彼は顔を赤くして、ウィスキーをつかみ、自分にもう一杯注ぐと、それをぐっとすばやく飲み干した。深く息をのみ、身震いした。彼は酒の味が気に入らなかった。ヤク中はみんなそうだ。

彼は鋭い口調で言った。「ここを離れたら、あなたは即座に逮捕されるぞ。あなたは法執行職員により適切に措置入院を——」

「警官はそんなことできない」

それで彼はひるんだ。少しばかり。その黄ばんだ顔が動き始めた。

「ガタガタ言わずに吐いちまえ。おれをここに入れたのはだれだ、なぜ、どうやって？ おれは今夜、獰猛な気分なんだぜ。泡の中で踊りたいんだ。バンシーの叫び声が聞こえるぜ。もう一週間も人を撃ってない。さっさと吐け、フェル先生。古いバイオリンをつま弾けよ、優しい音楽を奏でるんだ」

彼は冷ややかに言った。「あなたは麻薬中毒に苦しんでいる。ほとんど死にかけた。ジギタリスを三回も投与しなくてはならなかった。暴れ、叫び、拘束しなければならなかったんだ」その言葉はあまりに矢継ぎ早に出てきたので、お互いをカエル跳びで追い越しそうだった。「その状態でうちの病院を立ち去ったら、深刻なトラブルに陥るぞ」

「あんた、ドクターだと言ったな——医者か？」

「もちろん。ソンダーボーク医師だ、すでに言ったが」

「麻薬中毒では叫んだり暴れたりしないんだよ、センセイ。昏睡状態で転がるだけだ。もう一度説明してみろ。それと手短に。おれは要点が知りたいだけだ。この私設気狂い病院におれを入れたのはだれだ？」

「しかし——」

「しかしもクソもない。ミンチにしてやるぞ、マルムジーワインの樽で溺れさせてやる。おれもマルムジーワインの大樽で溺れてみたいもんだよ。シェイクスピア。あいつも酒がわかってた。おれたちの薬を少し飲もうぜ」おれは彼のグラスに手を伸ばして、二人に酒を注いだ。「さあ話せ、カーロフ」

「警察があなたをここに入れたんだ」

「どの警察？」

「ベイシティ警察だよ、もちろん」その落ち着かない黄色い指が眼鏡をひねった。「ここはベイシティだから」

「おや。その警察に名前はあるのか？」

「ガルブレイス警部だったか、普通のパトカー巡査じゃない。彼と別の警部が、金曜夜に呆然とした状態で家の外をうろついているあなたを見つけたんだ。ここが近かったので、あなたを連れてきた。私は、あなたがヤク中で過剰摂取だろうと思ったんだ。でもまちがっていたかも」

「よくできた話だ。ウソだと証明はできない。だがなぜおれをここに置いておく？」

彼はその落ち着かない手を広げた。「何度も言ったようにあなたはとても具合が悪くて、いまもそうだ。私にほかにどうしろと？」

「ならあんたに支払いをしなきゃいけないはずだな」

彼は肩をすくめた。「もちろん。二百ドル」

おれは椅子を少し引いた。「えらく安いな。取り立ててみるよ」

彼は厳しい口調で言った。「ここを離れたら、すぐに逮捕されるぞ」

おれは机越しに身を乗り出して相手の顔に息をかけた。「ここから出るだけじゃそうはならんよ、カーロフ。あの壁の金庫を開けろ」

彼はなめらかな一動作で立ち上がった。「もういい加減に行きすぎだ」

「開けないのか？」

「もちろん絶対に開けたりしない」

「おれが持っているこいつは銃だ」

彼は微笑んだが、わずかで苦々しげな笑みだった。

「ずいぶんでかい金庫だな。しかも真新しい。こいつは立派な銃だ。開けないつもりか？」

彼の表情は何も変わらなかった。

「チクショウ、こっちが銃を持っていたら、みんなこっちの言うことを何でもやることになってるんだが、それが効かないってことか？」

彼は微笑んだ。その微笑はサディスティックな喜びをたたえていた。おれの症状がぶりかえしつつあった。倒れそうだ。

おれは机によろけかかり、男は待って、その唇がゆっくりと開いた。

おれはそこによりかかって長いこと立ち、そいつの目を見ていた。そしてにやりとした。その笑いは、汚れたぼろきれのように男の顔を滑り落ちた。おでこに汗が浮かんでいる。

「じゃあな。おれより汚い手にあんたを任せるとしよう」

おれは扉へと後ずさりして、それを開いて出て行った。

正面入り口の扉には鍵がかかっていなかった。屋根付きポーチがあった。庭は花まみれだった。白い杭垣と門があった。家は角に建っていた。ひんやりした湿気の多い夜で、月はない。

角の標識にはデスカンソ通りとある。家はその街区ずっと灯りがついていた。おれはサイレンの音がしないか聞き耳をたてた。なにもない。別の標識には二十三番通りとある。おれはなんとか二十五番通りまでたどりつき、八百番台の街区を目指し始めた。八一九番がアン・リオーダンの番号だ。聖域。

長いこと歩いてから、まだ手に銃を持っているのに気がついた。そしてサイレンは聞こえない。

歩き続けた。空気で気分はよくなったが、ウィスキーが切れ始めていて、切れるときにあがいていた。街区に沿ってもみの木があり、レンガ造の家があり、南カリフォルニアというよりもシアトルのキャピトルヒルに見えた。

八一九番にはまだ灯りがついていた。白い車寄せの屋根付き玄関があるが、とても小さく、高い杉の茂みに押しつけられている。家の前にはバラの茂みがあった。おれは歩道を家に向かった。呼び鈴を押す前に聞き耳をたてた。まだうなるサイレン音はなし。呼び鈴がピンポン隣、しばらくして、玄関に鍵がかかっているときにも話ができる、あの電気仕掛け経由で割れた声が響いてきた。

「何のご用？」

「マーロウだ」

彼女が息をのんだのか、あるいは電気仕掛けが単に切られるときの音をたてたのか。

扉が大きく開き、アン・リオーダン嬢が淡い緑のスラックススーツ姿でそこに建って、おれを見ていた。その目が見開かれ怯えたようだった。ギラつくポーチ灯の下の彼女の顔は、いきなり蒼白になった。

彼女は詠嘆した。「あらまあ、あなたハムレットのお父さんみたいよ！」

[28]

居間には焦げ茶色の模様つき敷物があり、白とバラ色の椅子、とても背の高い真ちゅう薪乗せ台つきの黒い大理石暖炉、壁につくりつけの背の高い本棚、下げたベネチアブランドに粗いクリーム色のカーテンがかかっている。

その部屋で女らしいものといえば、全身が映る姿見くらいで、そこには前の何もない床がきれいに映っている。

おれは深い椅子に半ばすわり、半ば横になって、脚を足台にのせていた。ブラックコーヒーを二杯、そして酒を一杯、それから半熟卵⁶³を二つとそこにトーストを一枚ちぎって折れたもの、そしてさらにブランデーで割ったブラックコーヒー。これをすべて朝食室で食べたが、もうそこがどんなふうだったか思い出せない。あまりに昔のことだ。

また元気を取り戻した。ほとんど薬は抜け、腹はセンターの旗竿にかっ飛ばそうとするのではなく、三塁方向にバントをするくらいおとなしくなっていた。

アン・リオーダンはおれの向かいにすわって身を乗り出し、そのすてきなあごをすてきな手で覆い、ふわりとさせた赤茶色の髪の下で、その目が暗く影になっている。髪に鉛筆がつっこんである。心配そうだ。てんまつの一部は話したが、すべてじゃない。特にヘラ鹿マロイの話はしなかった。

「飲んだくれてるんだと思ったのよ。飲まなきゃあたしに会いにこられないのかと思った。あのブランドといっしょに出かけてるのかと思った。それと——自分で何思ってたかわからない」

おれはあたりを見回した。「これを全部、文筆業で手に入れたわけじゃないだろう。期待通りの原稿料がもらえたとしてもね」

63 村上春樹訳「柔らかく茹でられた卵」。直訳がひどすぎではないの？ それと最後の文を「遠い昔のこのように思える」と訳しているが、この作品(マーロウのシリーズはすべてだが)は、リアルタイムで語られるのではなく、マーロウが後の時点(いつの時点かははっきりしない)でこれを回想している形で書かれているので、本当に遠い昔なのだ。それをわざわざ言うのは、薬の影響で記憶が遠のいているということと同時に、アンとの思い出が遠い昔のことだという懐かしさもこもっている。

「そして父は、部下の警官たちから賄賂を受け取ってここを買ったわけでもないわ。最近警察署長になってる、あのデブの役立たずとはちがって」

「おれの知ったことじゃない」

「デルレイにいくつか土地を持っていたのよ。だまされて売りつけられた、ただの砂地。でもそこから石油が出たの」

おれはうなずいて、手にしたすてきなクリスタルグラスから飲んだ。その中に入っていたものはすてきな温かい味がした。

「男がここに落ち着いてもいいな。すぐに越してこられる。何もかも用意されてる」

「その人がその手の男ならね。そしてだれかが来て欲しければね」

「執事なし。きついね」

彼女は顔を赤らめた。「でもあなたは——あなたはむしろ、頭をぼこぼこに殴られて、腕をヤクの注射針だらけにされて、あごをバスケットボールのバックボード代わりにされるほうがいいわけ。まったくちょっとやりすぎでしょう」

おれは何も言わなかった。疲れすぎていた。

「少なくとも、あの吸い口を調べるだけの脳みそはあったのね。アスター街であれこれ話したときの言い方だと、まるっきり気がつかなかったのかと思った⁶⁴」

「あの名刺には何の意味もない」

彼女の目がおれをねめつけた。「あなた、そこにすわってよくもそんなことが言えるわねえ。その男はあなたを汚職警官二人にぼこぼこにさせて、二日にわたるヤク漬けにして余計な首をつっこむなと教えたんでしょ。まったく、真相が露骨に突出しすぎてて、一メートルへし追っても野球のバットに使えるくらい残るわよ」

「それはおれが言うべきせりふだな。まさにおれのスタイル。粗野だ。何が突出してる？」

「このエレガントなサイキックっていう人が、ただの高級ギャングだってことよ。見込み客を選んでその人たちの精神を絞り取って、そして手荒な連中に、でかけて宝石を奪うように言うのよ」

64 これ、19章でもちょっと言及されていたけれど、つまりアンちゃんはこっそり持って帰ったジョイントの吸い口を、マールウですら苦勞していたのに三本ともきれいに解体して名刺を取りだして検討し、その後まったく痕跡が残らないように元に戻すという神業をなしとげたことになる。ちょっと無理ありすぎ。

「ホントにそう思うのか？」

彼女はおれを見つめた。おれはグラスを空けて、顔にまた弱々しい表情を浮かべた。彼女はそれを無視した。

「もちろんそう思うわよ。あなただってそうでしょうに」

「おれはもうちょっとややこしい話だと思ってる」

彼女の微笑は心地よくも同時に辛辣だった。「あらすみませんねえ、ちょっとあなたが探偵さんだってこと忘れてたわ。どうしたってややこしくなきゃいけないんでしょうねえ。単純な事件なんて、何やら不穏当なんでございましょうねえ」

「それよりもっとややこしいんだ」

「あらそう。拝聴しましょうか」

「わからん。ただそう思うんだ。もう一杯酒をもらえるか？」

彼女は立ち上がった。「知ってるの？ときどき水ってものを味わってみるといいわよ、物は試しで」とやってきておれのグラスを取った。「これが最後ですからね」と部屋を出て、どこかで氷がカチカチ言って、おれは目を閉じて、その小さくどうでもいい音に聞き入った。おれはこんなところにくるべきじゃなかった。もし連中が、おれの勤ぐってるほどの情報を得ているなら、ここにも探しにくるかもしれない。そうなったら最悪だ。

彼女はグラスを持って戻ってきて、冷たいグラスを持って冷たくなった彼女の指がおれの指に触れ、おれは指をそこにしばし保ち⁶⁵、そしてそれをゆっくりと離れるに任せた。まるで日差しが顔にあたって夢をゆっくりと手放すけれど、それまで魔法の谷にいたときのように。

彼女は赤面し、自分の椅子に戻ってすわり、そこでやたらにせわしなく身繕いしてすわりなおした。

そしてタバコに火をつけて、おれが飲むのを眺めた。

65 her fingers cold from holding the cold glass touched mine and I held them for a moment. 村上春樹訳「私はその指をしばらく握り」。ちがう！！何やってんの。物理的にも、アンの指はグラスを持っているんだから、それを握るわけにはいかないじゃん。それにマーロウはこの章でもずっと、アンに惹かれつつも、おれみたいな男はこない子につき合わないと思って自制して、この先ベッドの誘いまではねつけてるのに、ここでいきなり相手の手を握ったりしたらそのやせ我慢が水泡に帰すじゃん。hold はここでは握るではなく、グラスを受け取るときに指が触れあって、それをしばし動かさずにいた、ということ。held them の them は、その直前の“mine”，つまり「おれの指」。ここは清水俊二も同じまちがいをしているが、彼は直感的におかしいとおもったのか、指ではなく「手が触れ」「手を握った」にしている。が、五十歩百歩。

「アムサーはなかなか無慈悲な野郎ではある。だがなぜだか、宝石ギャングの頭脳には思えないんだ。まちがってるかもしれない。もし彼がそんなギャングで、おれが何かネタを握っていると思ったなら、あのヤク病院から生きて出られたとは思えない。だがあいつは何か恐れるものを持って。おれが透明インクの書き物の話をするまでは、本当にタフなマネはしなかった」

彼女はまっすぐおれを見た。「そんな書き物があったの？」

おれはニヤリとした。「あったとしてもおれは読んでない」

「ある人について、意地悪なことを隠すには変なやり方だと思わない？ 煙草の吸い口なんて。発見されるかどうかもわからないじゃない」

「おれが重要だと思うのは、マリオットが何かを恐れていて、何かが自分の身に起きたら、あの名刺が確実に見つかるようにしたってことなんだ。警察はあいつのポケットにあったすべてを水も漏らさぬように調べ尽くす。それが気になるところなんだ。アムサーが悪者なら、そんな見つかるようなものは一切残さないはずだ」

「つまりアムサーがマリオットを殺した——あるいは殺させたらってこと？ でもマリオットがアムサーについて知っていたことなんて、あの殺人と直接の関係があったかどうかもわからないでしょ」

おれは後ろにもたれて、背中を椅子に埋め、ドリンクを飲み干して、それについて考えているようなふりをした。そしてうなずいた。

「だが宝石泥棒は殺人と関係があった。そしていまはアムサーが宝石泥棒と関係していたと想定しているんだ」

彼女の目が少し小ずるそうだった。「ひどい気分でしょう。ベッドにいかない？」

「ここで？」

彼女は髪につけ根まで真っ赤になった。あごを突き出す。「そのつもりだけど。子供じゃないんですからね。あたしが何をいつ、どうやろうと、だれにもあれこれ言わせないんだから」

おれはグラスを脇に置いて立ち上がった。「珍しくデリカシーなるものがおれにやってきつつある。もしお疲れでなければ、おれをタクシー乗り場まで乗せてってくれないだろうか？」

「このうすらボケ」と彼女は怒ったように言った。「ボコボコに殴られて、得体の知れない麻薬を山ほど射たれてるのに、一晩ぐっすり寝たら、朝早く元気に起きて、また探偵仕事に乗り出せるつもりなんでしょうね」

「少し朝寝はするつもりだった⁶⁶」

「ホントは入院すべきなのよ、このバカ！」

おれは身震いした。「なあ、今夜のおれはあまり頭がはっきりしてないし、あまりここに長居すべきだと思わないんだ。この連中について、証明できるようなネタは何一つ持ってないが、向こうはおれを嫌ってるようだ。おれが何を言っても、おれの証言対警察ってことになりそうで、この町の警察はかなり腐ってるようなんだ」

「いい町じゃないの」と彼女は鋭く、少し張り詰めた言い方をした。「ほんの数人——」

「いやいい街ではあるよ。でもシカゴだってそうだ。そこに長いこと暮らしても機関銃にお目にかからずにすむかもしれない。確かにいい街だろうよ。ロサンゼルスより特に腐敗してるわけじゃないんだらう。でも、大都市だとほんの一部しか買収はできない。だがこの規模の町なら丸ごと買収できてしまう。オリジナルの箱入りティッシュ込みでね。そこがちがう。そしてだからこそ、おれはいたくないんだ」

彼女は立ち上がり、あごをおれのほうに押し出した。「いますぐここでベッドに行くのよ。空いてる寝室があるから、すぐに寝て——」

「部屋に鍵をかけると約束しろ？」

彼女は赤面して唇を噛んだ。「ときどきあなたって、凄腕に思える。そしてときどき、これまで会った中で最悪のゲスに思えるわ」

「そのどっちかに免じて、タクシーが拾えるところまで送ってもらえないか？」

「ここにいるのよ。具合が悪いでしょう。病人よ」彼女はピシヤリと言った。

「脳みそをほじられるほど病気じゃない」おれは陰険に言った。

彼女はすさまじい勢いで部屋を駆け出したので、居間から廊下への階段二段でつまづきかけた。一瞬長いフランネルのコートをスラックススーツの上に羽織って戻ってきた。帽子はかぶらず、赤みがかった髪は彼女の顔と同じくらい激怒しているように見えた。彼女は脇のドアを開け、勢いよく押し開けると、そのまま飛び出していった。足音がドライブウェイでカタカタと響いた。ガレージのドア

66 "I thought I'd sleep a little late."アンが「朝早く起きて」と言っているのに対して「いや、朝寝するつもりだ」と切り返してる。村上春樹訳「むしろ長く眠りすぎたような気がしていたんだがな」はまるっきりかんちがい。

が上がるかすかな音がした。車のドアが開き、再びボタンと閉まった。スターターがうなり、エンジンがかかり、ライトが居間の開いたフレンチドアを通り過ぎて輝いた。

おれは椅子から帽子を取り出し、いくつか灯りを消して、フレンチドアにイェール錠がついているのを見た。ドアを閉じる前におれはしばらくふり返った。すてきな部屋だ。ここでスリッパを履いたらすてきだろう。

おれはドアを閉じ、小さな車がおれの横にやってきて、おれは後ろからその向こう側にまわって乗った。

彼女はずっと家まで運転してくれたが、唇を固く引き締めて怒っていた。復讐の女神のような運転だ。おれのアパートの前で下りると、霜の降りたような声でおやすみなさいと言って、道の真ん中で小さな車をUターンさせ、家の鍵をポケットから出すよりはやく走り去ってしまった。

ロビーのドアは十一時で施錠される。おれはその鍵を開けて、いつもむさくるしいロビーの中に入り、階段とエレベーターへと向かった。自分のフロアまで上がった。荒涼とした照明が輝いている。サービスドアの前に牛乳瓶が並んでいた。奥に赤い消防ドアがそびえている。そこには開いたスクリーン窓があり、怠惰な空気をチョロチョロと吸入していたが、料理の匂いを完全に消すことはなかった。おれが戻ってきたのは眠る世界であり、眠るネコ並に無害な世界だった。

自分のアパートのドアを解錠し、中に入ってその匂いを嗅いだ。灯りを点ける前に、ドアにしばらくもたれてただそこにしばらく立ってから、家らしい匂い、ほこりと煙草の煙の匂い、男の住む、そして住み続ける世界の匂い。

服を脱いでベッドに言った。悪夢を見て、冷や汗をかきつつ目をさました。だが朝にはまた元気な男になっていた。

[29]

ベッドの脇にパジャマですわり、起きようかなと思いつつ、まだ行動に移してはいなかった。気分はあまりよくなかったが、本当にあるべきほど気分が悪いわけじゃない。サラリーマン稼業をやるときほど気分が悪くはなかった。頭は痛くてふくれて熱くて、下は乾燥して砂利が乗っているようで、のどは硬直してあごは柔軟にはほど遠かった。だがもっとひどい朝だってあった。

高い霧の灰色い朝で、まだ温かくはないがこれからそうなりそう。おれはなんとかベッドから起き上がり、吐きすぎて痛くなっていた腹のくぼみを揉んだ。左足は問題なかった。痛むところはない。だがよりによって、その足でベッドの隅を蹴飛ばしてしまった。

また呪詛のことばを吐いているときに、扉に鋭いノックがあった。ドアを五センチほど開けて、思いつきあかんべーをしてから⁶⁷バタンと閉めたくなるような、威圧的なノックだ。

おれは五センチよりはちょっと広めに開けた。ランドール警部がそこに立っていた。茶色いギャバジンのスーツを着て、ポークパイ型軽量フェルト帽を頭に乘せ、とても小ざれいで清潔で荘厳で、嫌な目つきを浮かべている。

彼は扉を軽く押し、おれは後ろに下がった。彼は入ってきて扉を閉じ、あたりを見回した。「あんたを二日間も探し回ったんだぞ」と言いつつおれを見なかった。目が部屋を調べている。

「病気だったんだ」

彼は軽いはずむような足取りで歩き回り、そのクリームのようなグレーの髪が輝き、いまや帽子は脇の下で、手はポケットに突っ込まれている。おまわりにしては、あまり大男ではない。片手をポケットからだし、帽子を新調に雑誌の上に置いた。

「ここでじゃないな」

「病院だよ」

67 Emit the succulent raspberry. 舌をラズベリーに見立てて、それを思いっきり突き出す、ということ。村上春樹訳「べたべたするラズベリーを投げつけ」。なんでそんなの投げつけるのよ。

「どの病院？」

「動物病院」

彼はひっぱたかれたかのように身を引いた。その肌の下に鈍い色が浮かんた。

「その手のネタにはまだ時間が早すぎるんじゃないか。朝も早いのに」

おれは何も言わなかった。タバコに火をつけた。深く吸い込んで、すばやくまたベッドにすわった。

「あんたみたいな野郎につける薬はないってか。監獄にぶちこむしかないか」

「おれは具合が悪くて、朝のコーヒーもまだなんだ。あまり高級なウィットを期待されてもね」

「この事件に首を突っ込むなど言っただろう」

「あんたは神様じゃない。キリスト様ですらないんだ」おれはまたタバコを深く吸い込んだ。体内のどこかがむき出しな感じだったが、少しは前より気に入った。

「おまえをいくらでも面倒な目にあわせてやれるんだぜ」

「そうだろうな」

「なぜ今のところそれをやってないかわかるか？」

「わかる」

「なぜだ？」彼は少し身を乗り出し、テリア犬のようにシャープで、刑事が遅かれ早かれ身につけるあの石のような目つきをしていた。

「おれを見つけられなかったから」

彼は後ろにもたれ、椅子を傾けて踵で身体を揺らした。その顔が少し明るくなった。「おまえが別のことを言うんだと思った。それを言ったら、ぶん殴ってやろうと思ってた」

「二千万ドルでもあんたはビビらないだろう。だが上から命令がくることもあるだろう」

彼は口を少し開けて、きつく呼吸した。きわめてゆっくりとタバコのパックをポケットから取り出し、ラッパーを破った。指が少し震えている。タバコを唇にくわえ、おれのマガジンテーブルのほうに紙マッチを探しにいった。タバコに慎重に火をつけて、マッチを床に落とさず灰皿に入れ、吸い込んだ。

「こないだ、電話で少し助言をしてやったな。木曜日に」

「金曜」

「そうだった——金曜日。聞く耳持たなかったな。理由はわかる。だがそのときは、おまえが証拠を隠蔽してるとは知らなかった。私は単に、この場合にはいい考えに思えた行動方針を推奨してただけだ」

「証拠って何のことだ？」

彼はだまっておれを見つめた。

「コーヒーでもいかが？ もう少し人間らしくなれるかもよ」

「結構」

「おれは飲む」とおれは立ち上がって小台所へと向かった。

ランドールがぴしゃりと言った。「すわれ。話は全然終わってない」

おれはそのまま小台所へと向かい、水をやかんにいれてコンロにかけた。蛇口から冷水を飲み、さらにもう一杯飲んだ。三杯目のコップを手に戻ってきて戸口に立ち、ランドールを見た。身動きもしていない。彼のタバコの煙のヴェールは、彼の片側でほとんど固体のようだった。彼は床を見つめていた。

「グレイル夫人からお呼びがかかったときに、なぜ行っちゃいけなかったんだ？」

「その話じゃない」

「そうだが、ついさっきはその話だったろう」

「彼女が呼んだわけじゃないだろう」彼の目が上げられ、まだあの石のような目つきだった。そしてその鋭い頬骨をいまだに紅潮が染めていた。「おまえは無理矢理乗彼女に迫って、スキャンダルの話をして、ほとんど強請も同然に自分の仕事にしたんだろうに」

「変だな。おれの記憶だと、仕事の話すらしなかったんだが。彼女の話には何もないとしか思えなかった。つまり、何かおれのとっかかりになるようなものはね。糸口がない。そしてもちろん、おそらく彼女はすでにその話をしたんだろうに」

「したよ。あのサンタモニカ大通りのビール酒場は犯罪者の隠れ家だ。でもそんなのは何の意味もない。そこでは何も手がかりがなかった。向かいのホテルも臭い。私たちの求めるヤツは一人もいない。安手のゴロツキばかり」

「おれが彼女に無理矢理迫ったと言われたのか？」

彼は少し目を落とした。「いや」

おれはニヤリとした。「コーヒーいかが？」

「結構」

おれは小台所へと戻り、コーヒーを淹れてドリップが終わるのを待った。ランドールは今回はおれの後についてきて、自分が戸口に立った。

「この宝石ギャングはハリウッドとその周辺で、おれの知る限り優に十年は活動してきたんだ。今回はやりすぎた。人を殺した。その理由は見当がつく」

「そうか、ギャング仕事であんたがそれを解決したら、おれがこの街で暮らしてから解決した初のギャング殺人になるな。一ダースくらいは名前を挙げて説明できるぜ」

「そう言ってくれるとはうれしいね、マーロウ」

「まちがっていたら訂正してくれ」

「ちくしょう、まちがっちゃいない。記録の上では二件ほど解決はしているが、単なる身代わりだ。どっかのチンピラが上層部のために罪を被ったんだ」

「そうだな。コーヒーどう？」

「飲んだら、まともに腹をわって話をしてくれるか、変な聞いた風な口をきかずに？」

「やってみよう。考えをすべて話すとは約束しないぜ」

「それはなくてもまったくかまわん」彼は辛辣に言った。

「よいスーツをお召しで」

彼の顔がまた紅潮した。「二十七ドル五十セントの安物スーツだ」とピシャリと言う。

「おやおや、感じやすいおまわりとはね」とおれはコンロに戻った。

「いい匂いだな。どうやって作るんだ？」

おれは注いだ。「フレンチドリップだ。紙フィルターなし」。砂糖を戸棚から取って、冷蔵庫からクリームを取った。朝食くぼみで向かい合ってすわった。

「あれはギャグが、病気で病院にいたとかいうのは？」

「ギャグじゃない。ちょっとしたトラブルに遭ったんだ——ベイ・シティで。ぶちこまれた。拘置所じゃない。私営のヤクとアル中治療院だ」

彼は遠い目をした。「ベイ・シティだと？ おまえ、面倒なのがお好きなんだな、マーロウ」

「面倒なのが好きなわけじゃない。ただそうなっちゃうだけなんだ。だがこんなのは初めてだ。二回棍棒で殴られ、しかも二度目は警官かそれっぽいやつで、自分でもそう名乗ったやつだった。自分の銃で殴られタフなインディアンに締め上げられた。なんかヤク病院に気絶して放り込まれて、監禁され、その一部はおそらく拘束されてたんだろう。そしてそれをどれも証明できない。ただかなりすてきな青あざコレクションが本当であって、左腕は注射針の痕だらけという以外は」

彼はテーブルの隅をきつく見据えた。「ベイ・シティ、だと」とゆっくり言う。

「歌みたいな名前の町だ。汚い風呂桶で歌う歌」

「あんなところで何してた？」

「自分で出かけたわけじゃない。そのオマワリどもがおれを市境界越えて釣れてったんだ。おれはスティルウッド・ハイツの男に会いに行った。そこはロサンゼルスだ」

「ジュールス・アムサーという男だな。なぜあのタバコをかつぱらったんだ？」と彼は静かに言った。

おれはコップに目を落とした。あのバカ娘が。「なんか場違いだったんだよ、あいつ——マリオット——が余計な煙草ケースを持ってるなんて。しかもマリファナたばこ入り。どうやらベイ・シティではそれをロシアたばこみたいに作って、吸い口を空にしてロマノフ王朝の紋章とかをつけるらしい」

彼は空っぽのコップをおれのほうに押し出したので、おかわりを入れた。その目はおれの顔をしわ一本一本、赤血球一つ一つ検分し、虫眼鏡を持ったシャーロック・ホームズか、ポケットレンズを持ったソーンダイクさながらだった。

「私に話すべきだったな」と彼は苦々しげに言った。コーヒーをすすり、アパートでナプキン代わりにくれる、あの縁模様つきの代物で唇をぬぐった。「だがあんたがかつぱらったんじゃない。あの子が話してくれたよ」

「ああ、いや、そうか。もういまやこの国では、野郎は何もさせてもらえない。いつも女だ」

「あの子はおまえが好きだ」とランドールは、映画に出てくる礼儀正しいFBI捜査官のように、ちょっと悲しげに、だがとても男らしく言った。「あの子の親父は、失職したなかでこれ以上はない

ほどまっすぐな警官だった。あの子はあるなものを盗んだりするべきじゃなかった。おまえが好きなんだ」

「いい子だよな。おれのタイプじゃない」

「いい子が嫌いなのか？」彼はもう一本タバコを吸っていた。煙を手で顔から扇いでいる。

「おれは口のうまいピカピカした女がすきでね。ハードボイルドでズブズブの悪女」

「尻の毛までむしられるぞ」ランドールは無関心に言った。

「そうとも。いつだってそうだ。今日のこの取り調べだって似たようなもんだろう」

彼は今日初めてにっこりした。おそらく一日に四回までと決めているんだろう。

「大した話を聞かせてもらってないな」

「おれの仮説は話すが、たぶんそっちがこの件ではずっと先を行ってるだろう。このマリオットってやつは女の強請屋なんだ、グレイル夫人がまさにそう話してくれた。だがそれ以上の存在でもあった。宝石ギャングの実行犯だったんだ。社交界の実行半、被害者を丸め込んで舞台を整える役目。連れ出す女を思い通りに仕込み、ねんごろになる。この木曜から一週間前のホールドアップを見てみる。臭いだろう。マリオットが車を運転していなかったら、あるいはグレイル夫人をトロカデロに連れて行かなけりゃ、あるいはあのルートで家に帰らなけりゃ、あのビール酒場の前を通らなけりゃ、ホールドアップは実現しようがない」

ランドールは、当然の疑問を述べた。「運転手が運転してたかもな。だがそうなっても話はあまりかわらない。運転手は、ホールドアップの連中に鉛弾を突きつけられたりしたがらない——月九十ドルじゃね。だがマリオットが女と二人きりのときにホールドアップがたくさん起こるはずもない。そんなことになったら噂になる」

「この手の強請のそもそものポイントは、噂にならないってことだろうに。宝石が安く買い戻されるということを考えればね」

ランドールはうしろにもたれて首を振った。「私に興味を持たせたいなら、もうちょっとなんとかしようぜ。女なんてやたらに口が軽いんだから。マリオットはデート相手としてはなんかヤバイなんて話はすぐに広まる」

「広まったんだろう。だから始末されたんだ」

ランドールは無表情におれを見た。スプーンは空っぽのコップの中で空中をかき混ぜている。おれが手を伸ばすと、彼はポットを脇へ振り払った。「その線で続けてみてくれ」

「もう使い果たされちゃったんだな。有用性が尽きたんだ。そろそろあんたが示唆したとおり、噂になる頃合いだった。だがこういう悪行では足抜けはできないし時間ももらえない。だからこの最後の仕事はまさにあいつにとって、本当に最後の仕事だったんだ。なあ、この翡翠の価値を考えたら、要求金額はあまりに低い。そしてマリオットがその連絡役を務めた。だがそれでもマリオットは怯えていた。最後の最後になって、一人で行かない方がいいと思ったんだ。そして何かが自分の身に起きたら、身につけた何かがある人物を示すような小技を考案した。その種のギャングの頭脳になれるほど無慈悲で賢い人物で、金持ち女について情報を得る、ちょっと異様な立場にいる人物だ。子供っぽい小技ではあったが、それがうまく機能した」

ランドールは首を振った。「ギャングならそいつを裸に剥いただろう、身体ごと海に持ち出して沈めたかもしれない」

「いや、素人仕事に見せたかったんだ。その稼業は続けたかった。別の実行犯をすでに用意してあるんだろう」

ランドールはまだ首を振った。「このタバコが示す男はそういうタイプじゃない。独自の実入りのいい詐欺を持ってるんだ。私は調べたぞ。あいつをどう思う？」

彼の目はあまりにも無表情で、あまりにも無表情すぎた。「かなり危険な奴に見えたよ。そして、お金ってのは多すぎるなんてことはないよな？ それに、あいつのサイキック詐欺は、どの場所でも長続きはしない。流行があって、一時はみんながあいつのところへ行くけど、しばらくすると流行が衰えて、商売は靴を舐めるような状態になる。ただしそれは、あいつがただのサイキックだけで他に何もなければの話だ。映画スターと同じだよ。五年はもつかもつかかもしれない。そのくらいは続けられる。でも、女たちから得る情報を使える別の方法が二つくらいあれば、大儲けできる」

ランドールは無表情のまま言った。「あいつをもっと徹底して洗ってみよう。だがいまのところはマリオットのほうにもっと興味がある。もっとさかのぼろう——ずっと前まで。お前があいつと知り合いになったところまで」

「いきなり電話してきたんだ。電話帳から名前を選んだ。少なくともあいつはそう言った」

「おまえの名刺を持ってたぞ」

おれは驚いたふりをした。「そうだった。忘れてた」

「なんでおまえの名前をやつが選んだのか不思議に思わなかったか——おまえが忘れっぽいのはさておき？」

おれはコーヒーカップの上から彼を見つめた。こいつが気に入り始めた。ベストの裏に、シャツ以外にいろいろ持ってやがる。

「すると、本当はそれがききたくてここに来たな？」

彼はうなずいた。「それ以外は、ほれ、ただのおしゃべりだ」と礼儀正しく微笑して待った。

おれはもっとコーヒーを注いだ。

ランドールは横に身体を伸ばして、テーブルのクリーム色の表面に沿って眺めた。「ちょっとほこりがたまってる」とぼんやり言ってから、身を起こしておれを真っ正面から見つめた。「もしかすると、ちょっとちがうやり方でやったほうがいいのかもしれない。たとえば、マリオットについてのおまえの直感はたぶん正しいと思う。あいつの銀行金庫には二万三千ドル入ってた——ちなみにそれを見つけるのにはえらく時間がかかったよ。さらにかかなりの額の債権と、東五十四番の物件の担保証書もあったんだ」

彼はスプーンを手にとって、ソーサーのふちをそれで軽く叩いてにっこりして、穏やかに尋ねた。

「これ、興味を覚えないか？ 番号は西五十四番一六四四だぜ」

「ああ」おれはダミ声で言った。

「あ、それとマリオットの貸金庫には、かなりの宝石もあった——なかなかいいものだ。だが盗んだものとは思わない。おそらく、もらった可能性がずっと高い。それはおまえの判断次第。それを売るのは怖かったんだな——あいつ自身の頭の中での連想があったから」

おれはうなずいた。「盗品のような気分になるわけだ」

「そういうこと。さてその担保証書、最初はまるで興味をおぼえなかったんだが、こういう仕組みになってる。警察の仕事でおまえたちみたいな連中が相手にするものだ。我々は、周辺地区からもあらゆる殺人や不審死の報告が入ってくるんだ。その日のうちにそれを読むことになっている。それが規則だ。たとえば令状なしに家宅捜査ができないとか、適切な理由なしに銃を持っているか身体検査はできないとかいうのと同じだ。だが我々は規則を破ることもある。そうせざるを得ないんだ。一部の報告には今朝まで目を通せなかった。すると、先週木曜日にセントラルで黒人殺しの報告だ。ヘラ鹿

マロイというタフな元受刑者による。そしてそいつを同定した目撃者がいた。そしてオドロキモノキ、その目撃者はおまえだった」

彼は柔らかく笑った。今日三度目の微笑。「気に入ったか？」

「続けてくれ」

「これがやっと今朝になってからなんだよ。そこでその報告を書いたやつの名前を見たら、知ってるやつだ。ナルティー。そこでこの事件が未解決で終わると悟った。ナルティーってのがどういうやつかって言うと——えーと、クレストラインに行ったことあるか？」

「あるけど？」

「うん、クレストライン近くに、古いボックスカーをたくさん小屋にした場所があるんだ。おれもそこに小屋を持ってるが、ボックスカーじゃない。こういうボックスカーは、信じられないだろうがトラックで運ばれてきて、そこに車輪なしで置かれるんだ。さてナルティーは、そういうボックスカーのブレーキ係にすると実に優秀だろうってなヤツなんだ」

「ずいぶんひどいなあ。同僚の警官だろうに」

「そこでナルティーに電話したら、エヘンだのオホンだのあちこち唾を吐いたりだのを何度かやってから、おまえがヴェルマなんとかとかいう女の子について何かピンとくるものがあるのかなんとか。その子はずっと前にマロイがホの字で、おまえはその殺しがあった店が白人専用店で、マロイと娘が二人とも働いてた頃にそこを所有していたやつの未亡人に会いに行ったっていうじゃないか。そしてその住所は西五十四番街一六四四、マリOTTが担保証券を持っていた場所だ」

「ほほう」

「そこで、一日の朝だけにしちゃあ偶然が多すぎると思ったわけだ。そこでここに来た。そしていまのところ、ずいぶんと下手に出たつもりなんだが」

「困ったことに、どうもそれ以上のものがありそうなんだ。フロリアン夫人によれば、このヴェルマって娘は死んだ。彼女の写真がある」

おれは居間にいってスーツの上着に手をつっこみ、手がまだ空中にあるうちから、妙な感触がして空っぽのように思えた。だが連中は写真を奪いもしていなかった。それを取り出し、台所に持って行って、ピエロ娘をランドールの前に放り投げた。彼は慎重にそれを調べた。

「見たことがない人物だ。別のだれかか？」

「いや、これはグレイル夫人の新聞スチル写真だ。アン・リオーダンが手に入れた」

彼はそれを見てうなずいた。「二千万ドルなら、おれだって彼女と結婚する」

「話しておくべきことがあるんだ。昨晩はあまりにイカレてて、あそこに出かけて一人で解決してやろうなんていう狂った考えを抱いちゃった。この病院はベイ・シティの二十三番通りとデスカンソ街の交差点にある。ソンダーボークってやつが運営していて、医者だと名乗ってる。脇では犯罪者の隠れ家をやってる。昨晩そこでヘラ鹿マロイを見たんだ。一室で」

ランドールはまったく動かずにすわっておれを見つめていた。「確かか？」

「あいつはまちがえようがない。でっかいヤツで、巨大だ。あんなやつはこれまでお目にかかったことがない」

彼はすわっておれを見続け、動かなかった。そしてとてもゆっくりとテーブルの下から足を動かして立ち上がった。

「そのフロリアンさんに会いに行こう」

「マロイは？」

彼はまたすわった。「すべて話せ。慎重に」

おれは語った。彼はおれの顔から目を離さずに聞いた。まばたきさえしなかったと思う。口をわずかに開けて呼吸した。身体は動かなかった。指はテーブルの縁を静かにタップした。語り終わると彼はこう言った。

「このソンダーボーク先生ってやつだが——風体は？」

「ヤク中で、おそらくヤク売人」とおれはランドールに精一杯説明した。

彼は静かに別室に行って、電話の前にすわった。自分の番号を回して、長いこと静かに話していた。そして戻ってきた。おれはちょうどコーヒーをもっと淹れて、卵を二つ茹で、トーストを二きれ作り、バターを塗っているところだった。すわって食べ始めた。

ランドールはその向かいにすわり、手にアゴをのせて身を乗り出した「州の麻薬捜査官をそこに送りこんだ。でっちあげの苦情を持って、中を見せるように頼むんだ。なんかつかめるかもしれない。マロイは無理だ。マロイは昨夜あんたがそこを出た十分後に出ていった。これは賭けてもいいくらいの確かな話だ」

「ベイシティ警察になぜ頼まない？」おれは卵に塩をかけた。

ランドールは無言だった。見上げると、その顔は真っ赤で不快そうだった。

「おまわりにしては、あんたほど繊細な人は見たことがない」

「早く喰っちまえ。行くぞ」

「このあとシャワーとひげ剃りもあるんだけど」

「パジャマで来りゃいいだろ」彼は辛辣に言った。

「じゃああの町はそんなに腐敗してるのか？」

「レアード・ブルネットの町だよ。市長選出に三万出したそうさ」

「ベルヴェデーレ・クラブの持ち主か？」

「それと博打船二隻」

「だがうちの郡内だろうに」

彼は自分のきれいでピカピカの爪に目を落とした。

「あんたの事務所にいて、その他の大麻タバコ二本を取ってこよう。まだそこにあればな」と彼は指を鳴らした。「鍵を貸してくれたら、私一人で行くから、その間にヒゲ剃って着替えろよ」

「いっしょに行く。郵便も来てるかも知れない」

彼はうなずき、一瞬後にはすわって別のタバコに火をつけた。おれはヒゲを剃り、着替えて、二人でランドールの車ででかけた。

郵便は来ていたが、読む価値はなかった。机の引き出しの切り刻んだタバコ二本は無事だった。事務所は家捜しされたような痕跡はなかった。

ランドールはロシアたばこ二本を手にとって、それを嗅ぐと、ポケットにしまい、つぶやいた。

「あいつはお前から名刺を一枚取り返した。その裏に何か書いてあったはずはないから、他の二枚についてもわざわざ取り返す手間はかけなかった。たぶんアムサーは大して怖れちゃいない——単におまえが何かたくらんでると思っただけだ。行こう」

[30]

詮索ばあが正面玄関から鼻を二センチ突き出し、早めのスマレの開花があるかもともいうようにあたりを嗅いで、通りを上から下まで何も見逃さない視線で眺め、白髪頭でうなずいた。ランドールとおれは帽子を取った。このご近所ではそれで二人はヴァレンチノ並の存在となっただろう。彼女はどうかやおれを覚えていた。

「おはようございます、モリソンさん。ちょっと入れて頂けますか？ こちら本署からのランドール警部です」

「いやはやまったく、あたしは手一杯なんだよ。山ほどアイロンがけがあるんだから」

「一分ですみますから」

彼女は戸口から退いて、おれたちはその横を通って玄関口に入った。メイソンシティだかなんだかからの食器棚があるところだ。そして玄関口から窓にレースのカーテンがついた、きちんとした居間に入った。家の奥からアイロン掛けのにおいがしてきた。彼女はその奥への扉を、それがパイ皮でできているかのようにそっと閉じた。

今朝は青と白のエプロンだった。その目は前と同じく鋭く、あごはまったく成長していない。

三〇センチほど離れたところに立ち止まり、顔を突き出しておれの目を見る。

「あの人、受け取らなかったよ」

おれは賢そうな顔をした。うなずいてランドールを見て、ランドールもうなずいた。彼は窓のところに行ってフロリアン夫人宅の脇を見た。そっと戻ってきた彼はポークパイを脇の下にはさみ、大学演劇のフランス人伯爵並に上品だ。

「受け取らなかった」とおれ。

「そうです。土曜が一日。エイプリルフールの日。へっへっ！」彼女は口を止めて、目をエプロンで拭おうとしたが、そこでそれがゴムエプロンだと思い出した。それでちょっと気落ちした。口元があ
のしわくちなな感じになった。

「郵便配達がきて、自分の歩道を上がってこないと、あの人は駆け出して呼びかけたんだ。郵便屋は
首を振ってそのまま行ったんだよ。あの、家の中に戻ったよ。ドアをすごい音で叩きつけて、窓が
割れるかと思った。怒ってるみたいだったんだよ」

「なんとまあ」とおれ。

詮索ばばあはランドールにきつく言った。「バッジを見せてちょうだいな、お若いの。こっちの若
い衆はこないだウィスキーの匂いをさせてたんだよ。だから絶対に完全には信じてないんだ」

ランドールはポケットから金と青のエナメルバッジを取りだして見せた。

「本物の警察らしいね、確かに」と婆さんは認めた。「で、日曜日は何もなかったよ、あの女、酒を
買いに出たんだ。四角いびんを二つ持って戻ってきたよ」

「ジンですね。お里が知れるってもんです。まともな人はジンなんか呑まない」

「まともな人はそもそも酒なんか飲まないよ」詮索ばばあはつけんどんに言った。

「そうですねえ。月曜が来たら、ってのは今日のことですが、郵便屋はまた素通り。今度はさぞおか
んむりでしょうねえ」

「あんた、小利口に先回りしたがるヤツだね。他の人が口を開くの待てないんだろ」

「すみませんね、モリソン夫人。これは私どもには重要でして――」

「こっちの若い衆は、口をしっかりと閉じてても平気なようだけどね」

「既婚者ですんで。訓練積んでますから」

婆さんの顔は紫がかってきて、それが不愉快にもチアノーゼを思わせた。「とっとと出ておいき、
さもないと警察呼ぶよ！」

ランドールが即座に言った。「警察ならここに一人立っていますよ、マダム。何の危険もありませんから」

「確かにそうだね」と彼女は認めた。紫色がその顔から薄れはじめた。「こいつには口きかないか
ら」

「私がついていますから、マダム。フロリアン夫人は書留便を今日も受け取らなかったと——そういうことですか？」

「そうだよ」その声は鋭く短かった。目は何か隠し事をしていた。話し方も速くなった。速すぎる。「あそこに昨晚だれか来たんだよ。私は見なかったんだけどね。親戚が映画につれてってくれたんだよ。ちょうど戻ってきたとき——いや、親戚が車で帰った直後に——隣から車が立ち去ってね。すごい速さでライトもつけてない。ナンバープレートは見えなかったのよ」

そのコソコソした目つきから、おれのほうに鋭い一瞥をくれた。なぜこそこそしているのか不思議に思った。おれは窓のほうに言ってレースのカーテンを持ち上げた。公式の青灰色の制服姿が家に近づいていた。それを着ている男性は、肩に重い革袋を提げていて、ひさし付きの帽子を被っていた。

おれはニヤリとして窓から向き直った。そして無礼に彼女に言った。

「あなた、腕が落ちてますねえ。こんな調子だと来年はCリーグでショートやる羽目になりますよ」

「それはちょっと感心しないぞ」ランドールが冷たく言った。

「窓から外を見てごらん」

外を見たランドールの顔がこわばった。じっと立ち尽くしてモリソン夫人を見つめた。何かを待っている。この世に二つとない音。それがすぐにやってきた。

何かが玄関の郵便口から押し込まれる音だった。チラシかもしれなかったが、そうじゃなかった。歩道を戻る足音がして、それが通りに出て、ランドールはまた窓のところに行った。郵便屋はフロリアン夫人の家には泊まらなかった。そのまま歩き続け、青灰色の背中では重たい革袋をかついでも傾かずにしっかりしていた。

ランドールは頭をまわして、すさまじく礼儀正しく尋ねた。「モリソンさん、この地区では朝に何回郵便配達があるのでしょうか？」

彼女は虚勢で切り抜けようとして、鋭く言った。「一回だけです。朝に一回、午後一回」

その目がキョロキョロした。ウサギのようなアゴが何か崖っぷちで震えている。手は青と白のエプロンを縁取るゴムのフリルを握りしめた。

「朝の配達はどういま来たばかりですねえ」ランドールは夢見るように言った。「書留便は普通の郵便屋さんが持ってくるんですか？」

「いつも特別配達の人があるよ」歳寄りの声はしわがれていた。

「ほほう。でも土曜日には駆け出して、家に立ち寄りなかった郵便配達に話をしたんですね。特別配達とはまったくおっしゃいませでしたね」

彼が問い詰めているのを観るのはすてきだった——その相手が他の人のときは。

婆さんの口が大きく開き、その歯は一晩溶液入りコップに浸かっていたおかげで、きれいでぴかぴか輝いていた。突然、彼女は甲高い奇妙な音を上げ、エプロンで頭を覆い部屋から走り出た。

ランドールは婆さんが去った、アーチの向こう側のドアを見つめた。そして微笑んだ。少し疲れた微笑みだった。

「見事なもんだ。派手なところもない」とおれは言った。「次はあんたが強面役をやってよ。おれは婆さんに荒っぽい真似をするのは好きじゃないんだ——ゴシップ屋の嘘つきでもね」

彼は微笑み続けた。「よくあることだよ」彼は肩をすくめた。「警察仕事でね。やれやれ。事実から始めはしたんだ、事実は知っていたからね。でも、事実が思ったほどすぐに出てこなかったり、思ったほど面白くなかったりしたんだ。そこで話を盛ってみたんだ」

ランドールはきびすを返し、二人で玄関口に出た。家の奥からかすかなすすり泣きが聞こえてきた。どこかの辛抱強い、とっくに他界したある男性に対しては、それは敗北の最終兵器だったのだろう。おれにはただ年寄りのすすり泣きに過ぎなかったが、決して楽しいものじゃない。

おれたちは静かに家を出て、玄関のドアを静かに閉め、網戸がバタンと閉まらないように注意した。ランドールは帽子をかぶり、ため息をついた。それから肩をすくめ、クールで手入れの行き届いた手を体から遠くに広げた。家の奥から、まだかすかにすすり泣きの音が聞こえていた。

郵便配達員の背中を通りを二軒下ったところだった。

「警察仕事だから」とランドールは静かに、歯をくいしばってつぶやき、口をゆがめた。

おれたちはその空間を横切って隣家に向かった。フロリアン夫人は洗濯物をまだ取り込んですらいなかった。洗濯物は脇の庭の物干しづなにぶら下がったままで、硬直して黄色っぽく揺れていた。おれたちは階段を上がって呼び鈴を鳴らした。応答なし。ノックした。応答なし。

「前は施錠されてなかったよ」とおれ。

ランドールは体で動きを隠しながら慎重にドアを試した。今度は施錠されていた。二人でポーチを降りて、詮索ばばあから離れた側から家を回った。裏のポーチにはフック付きの網戸があった。ランドールはそこをノックした。なにもなし。彼はペンキがほとんどはげかけた二段の木製階段を降り、使われず雑草だらけの車道を進み、木製ガレージを開けた。扉は軋んだ。ガレージの中は空っぽだった。古い時代物のボロボロのトランクがいくつかあったが、薪にする価値もなかった。錆びた園芸道具、古い缶がたくさん箱に入っていた。ドアの両側、壁の角には、気ままに乱雑な巣をかけた立派な太った黒い女郎蜘蛛が座っていた。ランドールは木片を拾って無造作にそれらを殺した。再びガレージを閉め、雑草だらけの車道に戻り、詮索ばばあの反対側にある階段を上がった。呼び鈴にもノックにも、だれも応答しなかった。

彼は肩越しに通りの向こうを見ながらゆっくり戻ってきた。

「裏口がいちばん楽だ。隣の婆さんなもう何もしないだろう。ウソをつきすぎた」

彼は裏の二段を上がり、ドアのすき間にきれいにナイフの刃を差し込んでフックを持ち上げた。これで蚊帳つきポーチに入った。缶だらけで、一部の缶はハエまみれだった。

「まったく、ひでえ暮らし方だな！」とランドール。

裏口は簡単だった。安物のスケルトンキーで鍵は開いた。だがかんぬきがかかっていた。

「気に食わん。ずらかったらしい。こんなふうには鍵をかける女じゃない。だらしなさすぎる」

ランドールは裏口のガラスパネルを見た。「おまえの帽子のほうが古いな。貸せ。ガラスを破るから。もっときれいにやろうか？」

「蹴破れよ。ここらじゃだれも気にしない」

「それじゃ行くぞ」

彼は一歩下がり、脚を床と平行にして鍵を蹴飛ばした。何かが鈍く割れるような音をたて、ドアが何センチから開いた。それを二人で押し開けて、折れた鋳鉄のかけらをリノリウムから拾い上げ、それを礼儀正しく合板セメントの流しに、九本ほどのジンの空き瓶の隣に置いた。

台所の閉まった窓にハエがぶんぶんたかっていた。家中が臭い。ランドールは床の真ん中に立って、慎重に見回していた。

そしてスイングドアを、ごく低いところをつま先で、開いたままになるまで押す以外は触れることなく通り抜けた。居間はおれの記憶とほぼ同じだった。ラジオは消えている。

「すてきなラジオだな。金がかかっている。買ったものならな。何かあるぞ」

彼は片膝ついてじゅうたん沿いに目を走らせた。そしてラジオの脇に行き、ゆるいコードを足で動かした。プラグが見えてきた。彼はかがんでラジオ正面のつまみを観察した。

「そうだな、すべすべでかなりでかい。かなり賢いな、それ。電灯線では指紋はとれないよな」

「差し込んで、電源入ってるか見てみるよ」

彼は裏に手を回して幅木のコンセントに差し込んだ。いきなり点灯した。おれたちは待った⁶⁸。ラジオはしばらくぶーんとうなってから、いきなり大音量のサウンドがスピーカーから流れ始めた。ランドールはコードに飛びついて引っこ抜いた。音は即座に切れた。

身を起こした彼の目は輝いていた。

おれたちはすばやく寝室に入った。ジェシー・ピアス・フロリアン夫人がベッドに対角線状に横たわり、くしゃくしゃの綿の部屋着をきて、頭がフットボードの片端に近いところにあった。ベッドのコーナーポストは、何かハエたちが気に入るものが黒くまとわりついていていた。

死んでかなりたっていた。

ランドールは女に触れなかった。長いことそれを見下ろして、それからオオカミのように歯をむき出しておれを見た。

「顔に脳みそ。この事件ではそれがテーマソングらしいな。だがこいつは素手でやられている。とはいえ、なんという素手だ。見ろよ、この首のあざ、この指の跡の間隔を」

「あんたが見ろ」とおれは顔を背けた。「哀れな老ナルティー。もうただの黒んぼ殺しじゃない」

68 歳寄りしか知らないことですが、当時のラジオは真空管式なので、真空管のヒーターが温まって音が出るまで時間がかかるんですねー。

[31]

ピンクの頭とピンクの斑点を持つ光沢のある黒い虫が、ランドールの机の磨かれた表面をゆっくりと這い、飛び立てるかそよ風を試すかのように二本の触角を動かしていた。虫は這う途中で少しよろめき、荷物が多すぎる老婆のようだった無名の刑事が別の机に座り、古風なハッシュ・ア・フォンの秘話電話送話口⁶⁹に話し続けていたため、声はトンネルの中でささやくような音に聞こえた。そいつは目を半分閉じて話し、机の前に置いた大きな傷だらけの手で、指の第一と第二関節の間に火のついたタバコを持っていた。



虫はランドールのデスクの端に達すると、空中にまっすぐ飛び出した。床に背中から落ち、細くて摩耗した脚を弱々しく空で振った後、死んだふりをした。誰も気にしなかったので、再び脚を動かし始め、ついに顔を下にして這い始めた。何を目指すでもなくただ隅に向かい、ゆっくりどこへ行くでもなく這い進んだ。

壁に取り付けられた警察の拡声器が、サンペドロ通り四四番南での強盗事件について速報を流した。強盗は中年の男性で、暗灰色のスーツと灰色のフェルト帽を着用しているところ。最後に四四番通りを東に走り、その後二軒の家の間に隠れたのが最後の目撃報告。「接近は慎重に」とアナウンサー。「容疑者は32口径のリボルバーを持ち、サウスサンペドロ通り三九六六のギリシャ料理店の店主を強盗したばかり」

カチリと音がしてアナウンサーが放送を終え、別のアナウンサーが登場し、盗難車一覧をゆっくり単調な声で読み上げ始めた。すべてを二回ずつ繰り返していた。

扉が開き、ランドールがタイプライターで書かれたレターサイズの紙の束を持って入ってきた。部屋を素早く横切り、机でおれの向かいにすわり、紙を何枚かこっちに押しやった。

「四部署名して」

69 こんな格好の代物だというのは、古い電話好きならばもしらなんだ。ハッシュ・ア・フォンというのは実は会社名だが、ここでは小文字で、当時は一般名詞化していた模様。

おれは四部署名した。

ピンクの虫は部屋の隅に達し、飛び立つのに良い場所を探して触角を伸ばした。少しがっかりしたようだ。幅木沿いに別の隅へ進んでいった。おれはタバコに火をつけ、ハッシュ・ア・フォンを使っていた刑事が突然立ち上がり、事務所から出て行った。

ランドールは椅子にもたれかかり、前とまったく変わらない様子だった。相変わらずクールで、相変わらず滑らかで、相変わらず状況に応じて意地悪にも優しくもなれそうだ。

「いくつか教えてやるが、それはこれ以上おかしなことを思いつかないようにしてもらうためだ。あたりを独断で動き回らないようにしてもらうためだ。この一件を頼むから放っておいてくれると願ってのことだ」

おれは待った。

「あのゴミためからは指紋が出なかった。どのゴミためかは分かるな。電灯線を引っぱってラジオを消したが、音量を上げたのはおそらく彼女自身だ。それはあまり疑問の余地もない。酔っ払いは大音量のラジオが好きだからな。殺人用に手袋をはめて、銃声かなんかを消すためにラジオの音量を上げたなら、ラジオを消すのも同じ方法でできる。でも、そうしなかった。そして女の首は折れてる。ヤツが頭を小突き回し始める前にすでに死んでたんだ。さて、なんだってヤツは女の頭を小突き回し始めたんだらう？」

「おれは聞くだけだよ」

ランドールは顔をしかめた。「たぶん女の首を折ったとは知らなかったんだ。女にむかつ腹をたてたんだ。演繹したわけだ」と渋い微笑を浮かべた。

おれは煙を吐き出して、それを顔から扇いだ。

「では、なぜむかつ腹をたてたのか？ オレゴンの銀行強盗で逮捕されたときには、巨額の懸賞金が出た。それを受け取った三百代官はもう死んだが、おそらくフロリアン夫妻もいくらかもらったはずだ。マロイはそれを勘ぐったんだ。いや、それを事実として知っていたのかも。そしてその金を女から巻き上げようとしていたのかもしれない」

おれはうなずいた。うなずくに値するように聞こえた。ランドールは続けた。

「音あの首を一息につかんで、指はすべらなかつた。捕まえたら、指の跡の感覚からあいつの仕業だと証明できるかも。できないかも。医者によれば昨晚かなりはやい時間のできごとだと。映画の時間

ではあるな。いまのところ、マロイが昨晚あの家にいたと結びつける証拠はない。少なくともご近所の目撃報告はない。だが確かにマロイに思える」

「そうだな、どう見てもマロイだ。だがたぶん殺すつもりはなかったんだろう。単に力が強すぎるだけだ」

「それで罪が軽くなるわけじゃない」ランドールは陰気に言った。

「まあね。ただマロイは殺し屋タイプに見えないと言いたかっただけだ。追い詰められたら殺す——でも殺しが好きだったり金のために殺したりはしない——そして女のためにも」

「それは重要なポイントなのか？」ランドールはドライに尋ねた。

「もうあんたは情報を十分持ってるから、何が重要かはわかるだろう。そして何が重要でないかも。おれにはわからん」

ランドールは、あまりに長いことおれを見つめたので、警察のアナウンサーがサウスサンペドロのギリシャレストランでのホールドアップについて、また速報を流せたほどだった。容疑者はいまや拘束された。後にわかったのは、それが十四歳のメキシコ人で、銃は水鉄砲だったとのこと。目撃者なんてそんなものだ。

ランドールはアナウンサーが止まるのを待ってから続けた。

「今朝は仲良くできたな。それを続けよう。家に帰って横になって、しっかり休め。顔色がかなり悪いぞ。マリオットの殺人事件やヘラ鹿マロイの捜索なんかは、私と警察に任せておけ」

「マリオットの件では報酬をもらってるんだ。仕事に失敗した。グレイル夫人に雇われた。どうしろってんだ——引退して太った体で暮らせてるか？」

ランドールはまたおれをじっと見つめた。「分かってるよ。私も人間だ。君たちに免許を与えるってことは、ただ事務所の壁に飾るためじゃなくて、それを使って何かしろと期待されてるってことだ。とはいえ機嫌の悪い現場の巡査ならだれでもおまえを潰せる」

「グレイル家の後ろ盾がある限りは無理だよ」

ランドールはそれを検討した。おれが少しでも正しいと認めるのは嫌だった。だから眉をひそめて机を叩いた。

「お互い話をきっちり整理しておくのだな」と彼は一呼吸置いてから言った。「もしこの事件を台無しにしたら、おまえは窮地に陥るぞ。今度はなんとか抜け出せるかもしれない。それは分からん。だが、少しずつこの部署から敵意が積もることになって、仕事をするのがえらく難しくなるぞ」

「それはあらゆる私立探偵の日々の宿命ってやつだ——離婚専門じゃない限り」

「殺人事件には関われないぞ」

「あんたは言いたいことを言ったな。その言い分は拝聴したよ。おれも、でかい警察ができないことを成し遂げられるとは思ってない。もしちょっとした個人的な考えを思いついても、それはまさにそういうもの——ちょっとした個人的なものでしかない」

ランドールはゆっくりと机の上に身を乗り出した。細くて落ち着かない指がトントンと叩いた。ジェシー・フローリアン夫人の正面壁に叩きつけるポインセチアの芽のように。そのクリームめいた灰髪が輝いていた。クールで落ち着いた目がこっちの目を見つめていた。

「先を続けようか。大したネタはないがな。アムサーは出かけてる。その奥さん——兼秘書——はどこに言ったか知らないか、言わないだけか。インディアンも姿を消した。この連中に対する苦情申し立てに署名するか？」

「いや、裏付けがない」

ランドールは安堵したように見えた。「奥さんは君のことなんか聞いたこともないそうだ。ベイ・シティの警官二人ってのが本物なら、それについては——私の手に負えない。もうこれ以上ややこしくしたくないんだ。一つ確信してるのは、アムサーはマリオットの死とは無関係ってことだよ。あいつの名刺が入ったタバコはただの罨だったんだ」

「ソンダーボーク先生は？」

彼は手を広げた。「全部逃げちゃったよ。地区検事の事務所の連中がこっそり行ったんだ。ベイ・シティとは一切接触せずにね。家は施錠されて空っぽだ。もちろん中に入った。慌てて尻拭いしようとした形跡はあるけど、指紋は残ってる——たっぷりと。一週間かかってやっと分かるだろう。壁に金庫があって、今作業中だ。たぶん麻薬が入ってたんだろう——他にもいろいろ。私はソンダーボークには前科があるとにらんでる。地元じゃなくて、どこか他の場所で、中絶とか銃創治療とか指紋改ざんとか、麻薬の違法使用でね。連邦法に引っかかるなら、かなり助けが得られる」

「当人は医者だと言ってたよ」

ランドールは肩をすくめた。「昔はそうだったかもな。有罪になったことはないだけかもしれない。パームスプリングスの近くで今も医者をやっている奴がいるんだ。五年前、ハリウッドで麻薬密売で起訴された。罪は死ぬほど明らかだった——でも保護が効いた。無罪放免。ほかに気になることは？」

「ブルネットについてわかることは——話せる範囲で？」

「ブルネットは博打屋だ。大儲けしている。もっと楽な儲け方で」

「分かった」とおれは立ち上がり始めた。「それはもっともだな。だがマリオットを殺した宝石強盗団には一歩も近づけてないな」

「全部は教えられないんだよ、マーロウ」

「そんなことは期待してないよ。ところで、ジェシー・フローリアンが教えてくれたんだが——二回目に会ったときだけ——あの女、かつてマリオット一家の使用人だったそうなんだ。だからあいつは彼女に金を送っていたんだと。何か裏付けはある？」

「あるよ。貸金庫に彼女からの手紙があって、あいつに感謝して同じことを書いていた」。ランドールはもうかんしゃくを爆発させそうだった。「今度こそ神にかけて家に帰って、余計な手出しはしないでくれないか？」

「手紙をそんなに大事に保管してくれたのはえらく優しいと思わんか？」

ランドールは目を上げ、おれの頭のとっぺんで視線を止めた。それから虹彩の半分が隠れるまでまぶたを閉じた。その状態で十秒間じっとおれを見た。それから微笑んだ。その日のランドールは笑いすぎだ。一週間の分の笑いをすべて使い果たしていた。

「それについては持論がある。ばかばかしいが、人間の性ってやつだ。マリオットは人生の状況からして、脅かされる立場にいた。すべての犯罪者はおおむね博打屋だし、博打屋ってのは迷信深いもんだ——おおむね。ジェシー・フローリアンはマリオットの幸運のお守りだったんじゃないかな。彼女の面倒を見ている限り、自分には何も起こらないってね」

おれは振り向いて、あのピンク頭の虫を探した。いまや部屋の隅を二つ試して、いまやわびしげに3つ目に向かっている。おれはそこに出向き、ハンカチでつまみあげて机まで持ち帰った。

「見ろよ。この部屋は地上十八階だ。そしてこのちっちゃな虫ははるかここまで上がってきた。ただ友だちを作るためにね。おれだ。おれの幸運のおまもり」。おれはその虫を慎重にハンカチの柔らかか

いところに折りこみ、そのハンカチをポケットに入れた。ランドールは目をひんむいた。口が動いたが、何も言わなかった。

「マリオットはだれの幸運のおまもりだったのかね」

「おまえのじゃないな、相棒」ランドールの声は辛辣だった——冷たく辛辣。

「あんたのでもなさそうだな」おれの声はただの声だった。部屋を出ると扉を閉めた。

急行エレベーターでスプリング通りの入り口に出て、市役所の前のポーチへと出ると、何段か階段を下りて花壇のところに行った。ピンクの虫をそっと茂みの後ろに放した。

帰りのタクシーで、あいつが殺人課に戻るにはあとどのくらいかかるだろうかと思案した。

アパート棟の裏の車庫から車を出して、ハリウッドで昼飯を食ってからベイ・シティへと向かった。ビーチでは、美しく涼しい天気の良い午後だった。アークエロ大通りを離れて、おれは市役所へと向かった。

[32]

こんなに繁栄した町にしては、安っぽい建物だった。まるで儉約節制が信条のバイブルベルト地域にありそうなものだ。ホームレスたちが、前庭の芝生——今ではほとんどバミューダグラス——が道路に落ちないようにする擁壁に長い列を作って、邪魔されずにすわっていた。建物は三階建てで、頂上に古い鐘楼があり、鐘がまだ吊るされていた。おそらく、噛み煙草を噛んで吐き出していた古き良き時代には、ボランティア消防隊のためにその鐘を鳴らしていたのだろう。

ひび割れた歩道と前部の階段は、開いた二重ドアへとつながり、そこでは一見してわかるような市役所のフィクサーどもが、何かが起こるのを待ってたむろしている。そうすればそいつらが、それを利用して別の何かを引き出せるからだ。そいつらはみな、よく肥えた胃、注意深い目、立派な服、借り物のマナーを備えていた。やつらはおれが入るのに十センチのすきましか空けてくれなかった。

中は、マッキンリー大統領就任日⁷⁰にモップ掃除されたきりのような、長く暗い廊下だった。木製の看板が警察署の情報デスクの場所を指していた。制服を着た男が、傷だらけの木製カウンターの端に作り付けの電話交換機の後ろでうとうとしていた。背広を脱いだ私服警官が、肋骨に沿って消火栓のように見える脇のでかい拳銃を見せつつ、夕刊から片目だけを離し、三メートル離れた痰壺に唾を吐き、欠伸をしながら、署長の部屋は二階の奥だと教えてくれた。

二階は一階よりは明るくて清潔だったが、それでも清潔で明るいとは言いがたい。海側の扉は、廊下のほぼ端にあり、「ジョン・ワックス、警察署長。お入りください」と文字が刻まれていた。

中には低い木製の柵があり、その後ろで制服を着た男が、二本の指と一本の親指でタイプライターを叩いていた。そいつはおれの名刺を受け取り、欠伸をしながら確認すると言い、「ジョン・ワックス、警察署長。私室」と書かれたマホガニー製のドアを歩いて行った。そして戻ってきて、柵のドアをおれのために開けてくれた。

70 1897年就任です。数十年前というニュアンス。

中へ入って内側の事務所のドアを閉めた。そこは涼しくて広く、三方向に窓があった。染みのある木の机が、ムツリ二の机のように奥に配置されていて、そのためそこにたどりつくには青い絨毯の広い空間を渡って行かなければならず、その間に鋭い視線を浴びることになる。

おれは机まで歩いた。傾いたエンボス加工のプレートには「ジョン・ワックス、警察署長」と書かれていた。名前を覚えられるかもしれないと思った。デスクの後ろにいる男を見た。髪に藁がくっついてるようなヤツじゃなかった。

頑丈なヘビー級で、短いピンク色の髪と、その下に輝くピンクの頭皮を持っていた。小さくて貪欲そうな、垂れ下がった目は、ノミのように落ち着きがなかった。淡い茶色のフランネルスーツ、コーヒー色のシャツとネクタイ、ダイヤモンドの指輪、襟にダイヤモンドが付いたフリーメーソンのピン、そして外側の胸ポケットから必要とされる八センチより少し突き出た硬いハンカチの端を三つのぞかせている。

彼のふっくらした片手がおれの名刺を持っていた。それを読んで、裏返して空白の裏面も読み、再度表面を読み、机に置いて、ブロンズ製のサル型文鎮をその上に置いた。まるで紛失しないようにとでもいうようだった。

署長はピンクの手の平を突き出した。握手すると、彼は椅子を示した。

「お座りください、マーロウさん。あなたもおおむね同業者のようですね。どういったご用件で？」

「ちょっとしたトラブルでして、署長さん。あなたなら一分かからずに解決していただけるかと」

「トラブル。ちょっとしたトラブルですか」と彼は柔らかく言った。

彼は椅子を回転させ、太い脚を組むと、一方の対になった窓を思慮深く見つめた。それで、手編みのリールソックスと、ポートワインに漬け込んだような英国ブローグが目にとまった。見えないものを計算し、財布の中身は考えないとしても、五百ドルは身につけている。奥さんがお金持ちなんだろう。

「トラブルねえ」と彼は相変わらず静かに言った。「うちの小さな町ではあまり見かけないものですねえ、マーロウさん。うちの町は小さいけど、とても、とても、清潔なんです。西側の窓から外を見ると、太平洋が見えます。あれより清潔なありますか？」彼は五キロ境界線のすぐ外で真鍮色の波に隠れている二隻の賭博船については言及しなかった。

おれも言及しなかった。「その通りですね、署長」

彼は胸をさらに五センチほど張った。「北側の窓から見ると、アーグェロ大通りのがやがやした賑わいと、すてきなカリフォルニアの丘陵が見えます。そして手前の前景には、だれもが行きたがる最高の小さな商業地区が一つあります。南側の窓——今私が眺めている窓です——そこからは、世界で最も素晴らしい小さなヨットハーバーが見えます、小さなヨットハーバーとしてはね。東側に窓はないけど、もしあったら、よだれの出そうな住宅街が見えますよ。いいえ、トラブルはうちの小さな町であまり手元にないものなんです」

「ええ、このトラブルは私がかかえてきたものなんでしょうね、署長。少なくともその一部は、ガルブレイスという警官はいますか、私服警官です」

「ええ、おりますが」と彼はこちらに目を向けた。「彼が何か？」

「こんな感じの警官もいますか？」おれはもう一人を描写して見せた。ほとんど口をきかず、背が低く、口ひげがあっておれを棍棒で殴ったやつだ。「ガルブレイスと組んでいる可能性がとても高い。だれかがそいつをブレインさんと呼んでましたが、偽名っぽかった」

「いやいや全然。そいつはうちの巡査部長ですよ。ブレイン部長」と太った署長は、太った人間にできる限りの謹厳さで言った。

「この二人にあなたの事務室でお目にかかれませんかねえ？」

署長はおれの名刺を手にとって改めて呼んだ。それを置いた。柔らかくぎらつく手を振った。

「これまでお聞かせいただいたよりマシな理由がなければ、無理ですなあ」と彼は愛想よく言った。

「まあそうだと思ってましたよ、署長。ジュールス・アムサーという男をひよっとしてご存じですか？サイキック顧問を名乗っています。スティルウッド・ハイツの丘のてっぺんに住んでいるんです」

「いいえ。それにスティルウッド・ハイツはうちの管轄じゃない」という署長の目は、もう心ここにあらずという感じだった。

「それが面白いところでしてねえ。実は、ある顧客の件でアムサーさんを訪ねたんですよ。アムサーさんは、こっちが彼を脅迫してるって誤解しちゃいまして。おそらくあの手の商売に携わる奴らは、ついそんな考えを抱いてしまうんでしょうねえ。タフなインディアンのボディガードもいて、私には手に負えなかった。で、インディアンに抑え込まれて、アムサーに私の銃でポコポコにされたんです。

その後、アムサーは警官を二人呼びました。それがなんと、ガルブレイスとブレンさんだったんですよ。これに少しでも興味ありませんか？」

ワックス署長はデスクの上で手をそっと叩いた。目をほとんど閉じたが、完全にではない。厚いまぶたの間から涼しい光沢の目が輝き、その目はまっすぐ私を見つめた。聞き耳をたてるように、とても静かにすわっていた。それから目をあけて微笑んだ。「で、その後はどうなった？」と彼は尋ねた。ストーククラブの用心棒のような礼儀正しさだ。

「そいつらは私を調べ、車で連れ去り、山の側に捨てて、降りる時に棍棒で殴ったんですよ」

彼はうなずいた。おれの言ったことがこれ以上ないほど普通のことだとも言わんばかり。「そしてそれがスティルウッド・ハイツで起きた、と」と静かに言った。

「そうそう」

「私があなをどんな輩を思っているかわかりますか？」彼は少し机に身を乗り出したが、腹がじやまであまり大きくは乗り出せなかった。

「ウソつき、ですか」

「お帰りはあちら」と彼は、左手の小指で指し示した。

おれは動かなかった。署長を見つめ続けた。向こうが怒ってブザーを押しかけたとき、おれは言った：「同じ間違いを二人とも犯さないようにしよう。あんたはおれがケチな私立探偵で、自分より格がはるかに上の相手と対決して、何やら警官に対して糾弾し、しかもその糾弾がたとえ本当だったとしても、その相手の警官は絶対に証明できないように念を入れているような話を持ちかけていると思ってるんだろう。全然そんなんじゃない。別に苦情を申し立ててるんじゃない。誤解は無理もないことだ。アムサーときっちり話をつけたくて、あなたの部下ガルブレイスにそれを手伝ってほしいんだ。ブレンさんは必要ない。ガルブレイスだけで十分だ。そして、後ろ盾なしでここに来たわけじゃない。重要な人々が後ろについてるんだ」

「どれくらい後ろに？」署長はユーモラスに笑いながら尋ねた。

「アスター・ドライブ八六二、マウイン・ロックリッジ・グレイル氏の住所までどれくらいある？」

署長の顔があまりにも完全に変わったので、椅子にすわっているのが別人のようだった。「実はグレイル夫人が顧客なんだ」とおれは言った。

「扉に鍵をかけろ。君は私より若い。ボルトのつまみを回せ。この件については友好的に始めよう。マーロウ、君は正直な顔をしている」

おれは立ち上がり、扉に鍵をかけた。青絨毯を渡って机に戻ると、署長は見栄えの良いボトルとグラスを二つ取り出していた。吸い取り紙にカルダモンシードを一握り投げ込み、両方のグラスに酒を注いだ。

二人で飲んだ。彼はカルダモンの種をいくつか割って、二人でそれを黙って噛み、お互いの目をのぞきこんでいた。

「なかなかいい味だ」と署長はグラスを満たし直した。今度はおれがカルダモンの種を割る番だ。彼は殻を吸い取り紙から床に払い落とし、にっこりして後ろにもたれた。

「じゃあ話といこうか。君がグレイル夫人のためにやっているという仕事は、アムサーと何か関係があるのか？」

「つながりはある。だがおれが本当のことを言ってるか確かめた方がいいんじゃないか」

「それもそうだ」と署長は電話に手をのぼした。そしてベストから小さな本を取り出して、電話を調べた。「選挙の献金者だからね」とウィンクした。「市長はあらゆる便宜を図るよう念を押している。おお、ここにあった」と電話帳をしまってダイヤルを回した。

執事相手におれと同じ面倒に直面していた。それで耳まで真っ赤になっていた。やっと彼女につながった。耳は赤いままだった。かなりきついことを言われたのだろう。「君と話がしたいとき」と電話を広い机越しにこっちに押した。

「フィルです」とおれは、いたずらっぽく署長にウィンクした。

冷たい挑発的な笑いが聞こえた。「そのグズのデブと何してるのよ」

「ちょっと飲酒などをね」

「相手はそいつじゃなきゃダメなの？」

「この瞬間は、その通り。仕事なんだよ。繰り返すけど、何か目新しいことは？ 言いたいことはわかるはずだ」

「わかるもんですか。ちょっとお兄さん、こないだあたしに一時間も待ちぼうけくわせたのわかってるの？ このあたしが、そんな真似されて平気な女に見えた？」

「面倒に出くわしたんだ。今夜はどうだい？」

「ちょっと待って——今夜は——そもそも今日って何曜日よ？」

「掛け直す。今日は行けないかもしれない。金曜だよ」

「ウソつき」柔らかくハスキーな笑いが再び。「月曜じゃないの。同じ時間に、同じ場所で——今度はふざけた真似なしよ」

「電話したほうがいい」

「こんどは来なさいよ」

「確実なことが言えない。電話するから」

「じらしてるつもり？ わかったわ。こんなことやるほうがバカだった」

「実際、その通り」

「なぜよ？」

「おれは貧乏人だけど、自分の道は自腹で進む。そしてそれは希望するほど楽な道じゃない」

「このろくでなし、あんたがそこにいなかったら——」

「だから電話するって」

彼女はため息をついた。「男なんてみんな同じ」

「女だってそうだよ——最初の九人を過ぎれば」

彼女は呪詛のことばとともに電話を切った。署長の目はあまりに頭から飛びだしすぎて、まるで竹馬にでも乗っているかのようなようだった。

署長は震える手で二つのグラスを満たし、一つをこちらに押しやった。

「そういうことか」ととても思慮深げに言った。

「旦那さんは気にしないからね。だからおれも気にしない」

署長はドリンクを飲みつつ、傷ついたようだった。カルダモンの種をととてもゆっくり割り、とても考え込みながら割った。二人でお互いの青い目に乾杯した。残念そうに署長はボトルとグラスを見えないところにしまい、呼び出しボックスのスイッチを入れた。

「ガルブレイスをここに寄越してくれ、建物内にいるなら。そうでなければ、何とか連絡を取ってくれ」

おれは立ち上がり、扉の鍵を外してまたすわった。あまり待たずに済んだ。横のドアにノックがして、署長が返事をして、ヘミングウェイが部屋に入ってきた。

彼はドスドスと机のところまで歩いてきて、その端で止まり、ワックス署長をタフな謙虚さという適切な表情で見つめた。

署長は愛想良く言った。「こちらフィリップ・マーロウさんだ。ロサンゼルス私立探偵」

ヘミングウェイはおれが目に入るだけ顔を回した。これまでおれを見たことがあったとしても、顔にはそんな様子はまったく浮かばなかった。手を差し出し、おれも差し出し、そして彼はまた署長を見た。

「マーロウさんがいささか不思議な話をしてくれたんだよ」という署長は、リシュリュー卿が腕組みするように賢しらに言った。「アムサーという名前の人物で、スティルウッド・ハイツに家を持っているそうなんだよ。なんだか占い師かなんかだそうだが。マーロウがその人に会いにいったら、おまえとブレインがたまたま同じ頃にそこにいる、何やら口論があったとか。細かい話は忘れた」彼は、細かい話を忘れる人間の表情を浮かべて窓から外を見た。

「なんかのまちがいでしょう。この人には会ったことがない」とヘミングウェイ。

「確かに、なにかまちがいがあった。かなりつまらないことだが、それでもまちがいはまちがいだ。マーロウさんは、それが大して重要でないとお考えだ」と署長は夢見るように言った。

ヘミングウェイはまたおれを見た。まだ石の顔のようだった。

署長は夢見続けた。「実のところ、この方はそのまちがいにすらご関心はないんだ。だがスティルウッド・ハイツに住むというこのアムサーなる人物を訪問するにはご関心がある。だれかに同行してほしいそうだ。それで君を思い浮かべたわけだ。きっちり相手をしてもらうよう確認できる人が欲しいんだと。どうやらアムサー氏には、とてもタフなインディアンのボディガードがいて、マーロウさんは手助けなしにその状況を扱い切れるか、ちょっと疑念を抱かないでもないとのこと。このアムサーの住んでいるところを探し出せると思うかね？」

「そりゃあもちろん。でもスティルウッド・ハイツは管轄外ですぜ、署長。これはご友人への個人的な便宜ってことですか？」

署長は左の親指を見ていた。「そういう言い方をしてもいいな。厳密に法に従っていないことはしたくないからね、もちろん」

「そうですね」とヘミングウェイ。そして咳き込んだ。「したくないですね。いつ出発です？」

署長は慈愛に満ちておれを見た。「いますぐで。ガルブレイスさんの都合さえよければ」

「おおせの通りに」とヘミングウェイ。

署長は彼を、細々と検分した。目で毛の一本一本まで調べ上げた。「今日はブレイン巡査部長はどんな具合だね」とカルダモンの種を頬張りつつ尋ねた。

「ちょっとひどいです。虫垂破裂で。命に関わりかねない」

署長は悲しげに首を振った。それから自分の椅子の腕をつかんで、立ち上がった。机越しにピンクの手の平を押し出す。

「ガルブレイスがしっかり面倒を見てくれるでしょう、マーロウ。あてにしてください」

「ええ、いや何から何まで手配していただきまして恐縮です、署長。お礼の言い様もない」

「なんのなんの！ 礼など入りませんよ。友人の友人とでも言うべき方のお役にたつのはいつも嬉しいものです」と署長はおれにウィンクした。ヘミングウェイはそのウィンクを見たが、それをどう解釈したかは口にしなかった。

おれたちは出かけた。署長の礼儀正しいつぶやきがほとんどおれたちを事務所から運び出すかのようだった。扉が閉まった。ヘミングウェイは廊下を隅から隅まで見渡してから、おれを見た。

「ずいぶんと賢いたちまわりだったな、ベイビー。おれたちの報されていないネタを何か持ってるな」

[33]

車は静かな住宅街を、静かに走って行った。アーチ状のコショウボクがほとんどてっぺんで出会い、緑のトンネルを作っていた。そのてっぺんの枝と、細く軽い葉を通して日差しがきらめいた。角の標識に、十八番通りだと書いてあった。

ヘミングウェイが運転し、おれはその横だった。とてもゆっくり運転して、その顔は重たく考え込んでいた。

やっと腹を決めて彼は尋ねた。「どこまで話したんだ？」

「ブレインとあんたがあそこに行って、おれを連れ去って車から放り出し、後頭部をぶん殴ったとね。それ以上は話してない」

「二十三番とデスカンソの交差点の話はなしか、え？」

「うん」

「なんで？」

「言わないほうが、もっとあんたから協力を得られやすいと思ってね」

「一理あるな。本当にスティルウッド・ハイツに行きたいのか、それともあれは口実か？」

「口実だ。本当にほしいのは、なぜおれをあのキチガイ病院に入れて、なぜそこに監禁されたかってのを話してくれることだ」

ヘミングウェイは考え込んだ。考え込みすぎて頬の筋肉が灰色っぽい肌の下で小さな結び目になったほどだ。

「ブレインの野郎、あのろくでもない肉の塊野郎が。あいつがあんたをぶん殴るとは思ってなかったんだよ。あとホントに家まで歩いて帰れなんてつもりもなかった。少なくとも本気じゃなかった。ただのお芝居だよ、このスワミ野郎と友だちで、みんなが野郎にちょっかい出すのを防ぐってだけの話なんだ。こいつにちょっかい出す連中がどれほど多いか、信じられないほどだぜ」

「驚くね」

彼は首を回した。その緑の目が氷の塊のようだ。それからまたほこりっぽいフロントガラス越しに見て、さらに考え込んだ。

「あの手の老いぼれ警官は、たまに棍棒が恋しくなるんだよ。どうしても頭をかち割りたくなる。まったく、おれはビビったよ。あんた、セメント袋みたいに倒れたもんな。ブレインには散々言ったんだよ。そしてちょっと近かったからソルダーボグのところに運んで、あいつはいいやつだからあんたの面倒を見てくれると思ったんだ」

「アムサーは、あんたらがおれをそこに運んだって知ってるのか？」

「いやまさか。おれたちの思いつきだよ」

「ソルダーボグが実にいいヤツで、おれの面倒を見てくれるから連れてったと。キックバックなしか。おれが苦情を申し立てても、医者がある苦情の裏付け証言をする可能性はないと。このすてきな小さな町ではそもそも苦情が通りそうにないがな、おれが申し立てたとしても」

「タフなマネをするのか？」ヘミングウェイは考え深げに尋ねた。

「おれはしないね。そして一度でいいから、あんたもしない。だってあんたはあと一歩でクビになりかねない。署長の目を見てそれはわかったはずだ。おれはあそこに乗り込むときに、それなりの後ろ盾は用意していったんだ。今回ばかりはね」

「オッケー」とヘミングウェイは窓からツバを吐いた。「もともとタフになるつもりなんてなかったよ、ただのお決まりのでかい口を叩く以外は。お次は何だ？」

「ブレインは本当に病気になるのか？」

ヘミングウェイはうなずいたが、なぜか悲しそうな様子は見せなかった。「マジだよ。おととい腹痛を起こして、虫垂切除する前にそれが破裂だ。見込みはある——ただし決して高くはない」

「失うにはあまりに惜しい方ですからなあ。あんな人物はどんな警察にとっても大きな財産だ」

ヘミングウェイはそいつを咀嚼してみて、車の窓から吐き出した。

「オッケー、次の質問」とため息をつく。

「なぜソルダーボグのところに連れて行ったかは話してくれた。なぜそこに四十八時間もいさせたのか、監禁させてヤクをしこたま射たせたのかは聞いてないぞ」

ヘミングウェイは車にゆっくりとブレーキをかけて、路肩につけた。その大きな手をハンドルの下の端でぴったりくっつけ、優しく親指をこすりあわせた。

「見当もつかんなあ」と、遠くを見るような声で言う。

「おれは私立探偵免許があるのを示す書類を持っていた。鍵も、金も、写真二枚も。あいつがあんたらをかなりよく知っていなかったら、頭の一撃なんかただの作り話で、あの場所に入り込んであたりを調べる口実だと思うかもしれない。だがどうもあいつは、それにはお二人をよく知りすぎていたらしい。それが不思議なんだ」

「不思議でいろよ、相棒。ずっと安全だぜ」

「そうだろう。だがそれじゃ納得がいかない」

「この件でロス市警が後ろについてるのか？」

「この件って？」

「ソンダーボークについてのあれこれ」

「いや厳密には」

「それはイエスかノーか」

「おれはそんな重要人物じゃない、LA市警はその気になればいつでもここに来られる——まあ、その三分の二はね。保安官事務所と地方検察局の連中は。おれは検察に友人がいる。昔働いてた。バーニー・オールズというんだ。主任捜査官」

「この件をそいつに渡すのか？」

「いいや。この一月連絡してない」

「渡そうと思ってるのか？」

「やってる仕事の邪魔になるようなら渡さない」

「民間仕事？」

「そうだ」

「オッケー、おまえ何がほしいの？」

「ソンダーボークの本当の稼業って何なの？」

ヘミングウェイはハンドルから手を離して窓の外に唾を吐いた。「ここはいい通りだろ？ いい家、いい庭、いい気候。汚職警官の話はよく聞く、いやどうかな？」

「時々はね」

「オッケー、この程度でもいい芝生と花がある通りで暮らす警官が何人いると思う？ 俺は四、五人知ってるよ、みんな風紀班の連中だ。彼らは甘い汁をやたらに吸ってるんだ。おれみたいな警官は町のヤバい地域の、ちっぽけな木造家に住んでるよ。おれの住むところ見たいか？」

「それが何の証明になるんだ？」

でかい男は真剣に言った。「なあ相棒。あんたはおれを何やら操ってるけど、その糸は切れるかもしれない。警官は金のために腐るんじゃない。いつもそうじゃないし、よくあることですらないんだ。みんな、仕組みにとらわれちゃうんだ。従うか、さもなければってところに追いやられる。そして、いいスーツを着て、いい角部屋のオフィスにすわって、プンプン酒臭くて、種をかじってれば自分はずみれの香りがすると勘違いしてるけど、でも実はそんなことない奴——あいつが命令を出してるわけでもない。分かるか？」

「ここの市長ってどんなヤツ？」

「どこだろうと市長がどんなヤツかなんてわかるもんかよ。政治家だ。そいつが命令を出してると思うのか？ ばーか。この国の何がいけないかわかるか、ベイビー？」

「凍結資産が多すぎるとか」

「正直でいたくても、そうさせてもらえないってことだよ。それがこの国のいけないところだ。正直でいようとしたらジワジワとまるごと剥ぎ取られちゃう。汚え手口に手を染めないと、食ってもいけねえんだよ。ろくでもねえ連中はみんな、きれいな襟とブリーフケースを持った FBI 捜査官が九万人いればすむと思ってやがる。ばーか。歩合の仕組みで、そいつらだって他のおれたちと同じにやられちゃうわな。おれの考えを言ってやろうか？ この小さな世界を一から作り直さないと。それで道徳再武装運動ってのがあろう。あれはなかなかのもんだ。MRA⁷¹。あれはなかなかのもんだぜ、ベイビー」

「ベイ・シティがその仕組みの見本だっていうのなら、おれはアスピリンのほうがいいね」

71 道徳再武装運動、MRA は、本書の舞台となる 1938 年にアメリカで誕生した運動で、四つの絶対（絶対的正直、絶対的純血、絶対的非利己性、絶対的愛を旨とする。性活動の後悔懺悔などをして大騒ぎとなるが大学などに浸透しかなりの広がりを見せ、いまも一部は続いている。

「小賢しいだけになるぞ。自分ではそう思わないだろうが、でもそうなっちゃうこともあるんだ。小賢しくなって、賢しらになることしか考えられなくなるんだ。おれはね、ただの馬鹿なおまわりだよ。命令を受ける立場だ。女房に子供二人がいて、おえらいさんの言う通りにするんだ。ブレインならいろいろ話してくれるだろう。おれは無知だ」

「ブレインは本当に虫垂の病気なのか？ 陰険すぎて自分の腹を撃っただけじゃないだろうな？」

「そういう言い方をしてやるなよ」とヘミングウェイは苦情を言って、ハンドルを両手でぴしゃびしゃ上から下まで叩いた。「なるべく人のいい面を見ようぜ」

「ブレインについて？」

「あいつも人間だよ——ほかのみんなと同じに。罪人だ——でも人間なんだ」

「ソルダーボークの稼業は何だ？」

「だからあ、いま話してただろうに。おれがまちがってるのかもしれん。いいアイデアなら買ってくれるやつだと見込んだんだが」

「あいつの稼業を知らないんだ」

ヘミングウェイはハンカチを取り出して顔を拭いた。「なあ旦那、認めたくはないんだがね。もしおれやブレインが、ソルダーボークに裏稼業があるなんて知ってたら、あんなところにあんたを放り出したりしなかったか、あるいはあんた、あそこから二度と出てこれなかったかもしれないんだぞ、少なくとも自分の脚ではね。それはあんただって十分にわかってるはずだろう。おれの言ってるのは、本当に悪どい裏稼業のことだよ、もちろん。婆さんの運命を水晶玉で読むとかいううわつついた話じゃない」

「自分の脚で出てくるはずじゃなかったんだろう。スコポラミンっていう薬があるんだ、自白剤ってやつで、時々人は自分でも気がつかないうちに本当のことを話しちゃうんだ。催眠術と同じで、確実じゃない。でも時々効くんだ。おれはそこで絞られて、何を知ってるか調べられてたと思う。だがソルダーボークが、自分に害を及ぼしそうな何かをおれが知ってるかもと悟る方法は三つしかない。アムサーが言ったか、おれがジェシー・フローリアンを訪ねたことをヘラ鹿マロイがあいつに話したか、またはおれをそこに入れたのが警察の策略だとあいつが思ったかのどれかだ」

ヘミングウェイは悲しげにおれを見つめた。「何のネタの話かもわからんよ。ヘラ鹿マロイってだれ？」

「数日前にセントラル街で男を殺したデカブツだ。あんたの指名手配テレタイプでも流れてたぞ、そんなものを読むならな。そしてたぶん、人相書きもそろそろ出回ってるはずだ」

「それがどうした？」

「どうしたってソルダーボーグがそいつをかくまってたんだ。そいつがそこにいるのを見たんだ。ベッドで新聞を読んでいた。おれが脱走した夜に」

「どうやって出たんだ？ 監禁されてたんじゃないのか？」

「当直をベッドのスプリングで殴り倒した。運がよかった」

「そのデカブツはあんたを見たのか？」

「いいや」

ヘイングウェイは車のギヤを入れて路肩を離れ、顔にははっきりした笑みが浮かんだ。「回収といこうか。これで読めた。つじつまがあう。ソルダーボーグはやばい連中をかくまってたんだ。そいつらに金があればの話だが。あいつの場所はそれにうってつけだ。しかも儲かる」

彼は車を加速させ、角を猛スピードで曲がった。

「まったく、おれはあいつが大麻売ってるんだと思ったんだ。ちゃんと保護の後ろ盾つきで。でもちくしょうめ、そんなの小物商売だよな。吹けば飛ぶような悪事」

「宝くじ詐欺って知ってるか？ あれも小物商売だ——一部だけ見れば」

ヘイングウェイは別の角を鋭く曲がり、重たい頭を振った。「そうだな。ピンボールゲームやビンゴハウスや競馬場も。だがそれを全部足し合わせて一人に支配権を与えると筋が通ってくる」

「その一人ってだれ？」

彼はまた木のように押し黙った。口をきつく閉じ、その中で歯を食いしばっているのが見えた。おれたちはデスカンソ街を東へ走った。夕方遅くでも静かな通りだった。二十三番通りに近づくにつれて、何となく静けさが薄れてきた。男二人がヤシの木を見つめ、移動方法を考えているようだった。ソルダーボーグ医師の家の近くに車が停まっていたが、中には何も見えなかった。街区半ばで、男が水道メーターを読んでいた。

その家は日光の下では明るい場所だった。ティーローズベゴニアが前窓の下に固い淡い塊を作り、パンジーが白いアカシアの咲く基部周辺に色鮮やかなぼやけた模様を作っていた。扇形のトレリスに、

緋色のつるバラがつぼみを少し開き始めていた。冬のスイトピーの花壇があり、ブロンズグリーンのハチドリがその中を繊細に突ついていた。家は園芸を楽しむ裕福な高齢夫婦の住まいのように見えた。夕方遅くの太陽が当たるその家には、静かで不気味な静けさがあった。

ヘミングウェイはその家をゆっくりと通り過ぎ、口の端に小さな引きつった笑みが浮かべた。鼻が嗅いだ。次の角を曲がり、バックミラーを見ながら車の速度を上げた。

三街区走ってから、また路肩でブレーキをかけて、おれを正面からしっかり見据えた。

「ロス市警。ヤシの木のところにいるやつはドネリーってやつだ。知ってるんだ。あの家を探査してる。それでダウントウンのお仲間に話さなかったって？」

「話してないと言っただろう」

「署長は大喜びだろうよ。ここにやってきてガサ入れかけるってのに、こっちに一言のあいさつもない」

おれは何も言わなかった。

「そのヘラ鹿マロイってのは捕まったのか？」

おれは首を振った。「おれの知る限りまだだ」

「あんたの知る限りってのはどのくらいなんだい、旦那」と彼はとても静かに尋ねた。

「まだまだ不十分くらいだな。アムサーとソルダーボーグには何かつながりがあるのか？」

「おれの知る限りはない」

「この町を仕切ってるのは？」

沈黙。

「レアード・ブルネットってやつが三万ドル出して市長を選出したって聞いたぜ。なんでもベルヴェデール・クラブと、海に出てる博打船を二つとも持ってるとか」

「かもな」ヘミングウェイは礼儀正しく言った。

「ブルネットはどこで会える？」

「おれに訊いてどうするよ、ベイビー」

「この町で隠れ家を失ったらどこへ向かう？」

「メキシコ」

おれは笑った。「わかった。一つ頼みをきいてくれるか？」

「喜んで」

「都心にまで乗せてってくれ」

彼は車を出して路肩から離れ、それをきれいに海に向かう陰になった通り沿いに走らせた。車は市役所について、警察の駐車場へとすべりこみ、おれは車を降りた。

「いつか会いに来てくれよな。たんつぼ掃除でもさせられてるだろう」とヘミングウェイ。でかい手を差し出した。「恨みっこなしだぜ？」

「M.R.A.」と言っておれは握手した。

彼は満面の笑みを浮かべた。歩み去ろうとしたおれを呼び戻した。四方八方を注意深く見回して、身を乗り出して口を耳に近づけた。

「あの博打船は、うちの町や州の管轄外だってことになってる。パナマ船籍。もしおれが探すなら——」そこでピタリと口を止め、荒涼とした目が不安げになった。

「わかるよ。おれも似たようなことを考えてた。なぜあんたにも同じ思いつきを持ってもらおうとこんなに手間をかけたのか、自分でもわからんよ。だが無理だな——たった一人でやるのは」

彼はうなずき、にっこりした。「M.R.A」と言う。

[34]

水辺のホテルのベッドに仰向けに寝転がり、暗くなるのを待った。小さい正面の部屋で、硬いベッドと、かぶさっている綿の毛布よりわずかに厚いマットレスがあった。ベッドの下のスプリングが折れて、背中左側に突き刺さる。そこに横たわり、突かれるままにしていた。

赤いネオンの光が天井に反射して輝いていた。部屋全体が赤くなったら、外に出られるくらい暗くなる。外では、スピードウェイと呼ばれる路地を車がクラクションを鳴らしながら走っていた。窓の下の歩道では足音が滑るように響いていた。空気には出入りする人々のざわめきとつぶやきが漂っていた。錆びた網戸から流れ込む空気は、古くなった揚げ油の臭いがした。遠くで、遠くまで聞こえるような声が叫んでいた：「お腹を空かせてね、みんな。お腹を空かせて。うちのホットドッグは美味しいよ。お腹を空かせて」

暗くなってきた。考えこむと、頭の中では何かしらが苦々しくサディスティックな目で見られているかのように、鈍くこっそりと考えが動いた。月のない空を見上げる死んだ目や、その下の口の端ににじんだ黒い血を考えた。汚いベッドの柱に叩きつけられて死んだみすぼらしい老婆を思った。自分で何を恐れているのかよく分からず、敏感すぎて何かおかしいと感じてはいるが、虚栄心か鈍感さからその正体を推測できない明るい金髪の男を思った。自分がモノにできる美しい金持ちの女たちを考えた。別の方法でモノにできる、すてきでスリムで好奇心旺盛な一人暮らしの女の子たちを思った。警官たち——ヘミングウェイのように、賄賂は受け取るが決して悪いヤツじゃないタフな警官たちを思った。ワックス署長のような商工会議所の声を持つ肥え太った警官たちを思った。ランドールのような細身に賢く恐るべき警官たちを思った——その賢さや恐るべき能力をもってしても、清廉に正しい方法で仕事をする自由はなかった。その努力すら諦めたナルティーのような、陰気な老いぼれを思った。インディアンやサイキック、ヤク医者を思った。

いろんなことを考えた。暗くなってきた。赤いネオンのサインの光が天井でますます広がった。ベッドにすわり直して足を床につけ、首の後ろをこすった。

立ち上がり、隅にある洗面台まで行って、冷水で顔を洗った。しばらくするとちょっと気分が良くなったが、ほんのちょっとだけだった。酒が必要だった。大量の生命保険が必要だった、休暇が必要だった、田舎の家が必要だった。持っていたのはコートと帽子と拳銃だけだった。それを身につけて部屋を出た。

エレベーターはなかった。廊下は臭く、階段の手すりは汚れていた。階段を下り、鍵をデスクに投げてもう出ると告げた。左目のまぶたにイボがある事務員がうなずき、カリフォルニアで最も埃っぽいゴム植物の陰から出てきたポロポロの制服を着たメキシコ人のベルボーイが荷物を取りに来た。荷物はなかったのが、メキシコ人であるそいつはそれでもドアを開けてくれて、礼儀正しく微笑んだ。

外の狭い通りは煙まみれ、歩道は太った腹の持ち主で溢れていた。通り向かいではビンゴパーラーが全力で稼働中で、その隣では水兵二人が女たちと写真館から出てきていた。そこではおそらくラクダに乗った写真を撮ったのだろう。ホットドッグ商人の声が夕暮れを斧で切り裂くように響いた。大きな青いバスが通りを走り、かつて路面電車がターンテーブルで旋回していた小さな円形広場に向かった。そっちへ歩いた。

しばらくすると、かすかな海の匂いが漂ってきた。あまり強くはないが、かつてここが波が寄せては白く砕け、風が吹き抜け、熱い油や冷たい汗以外の匂いがする清らかで開けたビーチだったことを人々に思い出させる程度の匂いだった。

小さな歩道電車が広いコンクリートの歩道をガタゴトとやってきた。それに乗って終点まで行き、降りて静かで冷たいベンチにすわった。足元には大きな茶色の昆布の山が積まれていた。沖では博打船の灯りが点っていた。次に歩道電車が来たときにまた乗り込み、ホテルを出た場所までほぼ戻った。もし誰かが私を尾行してにしても、動かずに尾行していたわけだ。尾行されているようには思えなかった。その清潔な小さな町では、探偵が優れた影になるほどの犯罪は少ないだろう。

黒い栈橋は全長をきらめかせてから、夜と水の暗い背景に消えていった。まだ熱い揚げ油の匂いはしたが、海の匂いも感じられた。ホットドッグの男はうなり声を上げ続けた。

「お腹を空かせてね、みんな、お腹を空かせて。美味しいホットドッグだよ。お腹を空かせて」

そいつは白いバーベキュー台で長いフォークでウィンナーをいじっていた。一年のこの時期にしては良い商売をしていた。だれもいないときにそいつと話をするには、しばらく待つことになった。

「いちばん沖合のやつはなんていうんだ？」とおれは鼻で示した。

「モンテシート号」彼はあの正直な安定した視線を寄越した。

「それなりに金があったらそこで楽しめるかな」

「どんなお楽しみ？」

おれはせせら笑い、タフにふるまった。

「ホットドッグだよ」と彼は唱えた。「おいしいホットドッグ」そして声を落とした。「女か？」

「いらん。素敵な海風といい食べ物でだれにもじゃまされない場所を探してた。休暇みたいなもんで」

そいつは遠ざかった。「何言ってるのか聞こえないなあ」というと、詠唱に戻った。

さらに客がきた。なんでこいつなんかにかまけてるのか、自分でもわからなかった。ただその手の顔をしているというだけだ。ショーツ姿のカップルがやってきてホットドッグを買い、男が女のブラジャーに手をまわし、お互いが相手のホットドッグを食べていた。

男は一メートルほどこっちにすべってきて、目で近づくよう合図した。「いまおれは『ピカルディのバラ』を口笛で吹いてるべきなんだ」と言って口をとめた。「金がかかるぜ」

「いくら？」

「五十ドル。それ以下じゃだめだ。連中があんたを何かで探してない限り」

「ここは昔はいい町だったのになあ。身体を休めるような町だ」

男は間延びするように言った。「今もそうだと思ったが。でもなんでおれに訊くね？」

「見当もつかんよ」とおれは一ドル札をカウンターに投げた。「赤ちゃん銀行にいれときな。あるいは『ピカルディの薔薇』でも口笛で吹けよ」

彼は札をひったくり、長手方向に折り、横に折って、さらに折った。それをカウンターにのせて、中指を親指の後ろにやって、パチンとやった。畳んだ札がおれの胸に軽く当たり、音もなく地面に落ちた。おれはかがんでそれを拾うとすぐにふり返った。だが背後には探偵らしき人物はだれもいなかった。

おれはまたカウンターにもたれて、その一ドル札をそこに置いた。「おれに金を投げつけるヤツはいない。手渡してくれるもんだ。気をつけてくれよな」

彼は札を受け取り、開いて、のばして、エプロンで拭いた。レジのボタンを押してその札を引き出しに入れた。

「金に匂いはないって言うがな、ときどきホントかなと思うぜ」

おれは何も言わなかった。お客がさらにきて取引をして帰って行った。夜は急速に冷え込んだ。

「おれなら、レッドクラウン号はやめとくね。あれは善良な小者のリスども向けだよ、自分の手持ちだけで賭をするような。おまえ、ろくでもないやつに見えるが、それがとっかかりだ。泳ぎが得意だといいな」

おれはそいつを後にして、そもそもなぜあんなやつのところに行ったのかと思案した。勘で動け。勘で動いて刺されろ。しばらくすると、起きたら口が勘の山だ。コーヒーを注文するにも、目を閉じてメニューを突き刺す。勘で動け。

おれはうろついて、だれかが決まったやり方でおれの背後を歩くかどうか調べた。それから、揚げ油の匂いがしないレストランを探し出して、紫のネオンサインと葦のカーテンの向こうにカクテルバーのある店を見つけた。ヘンナ染めの髪をした男のかわいこちゃんが、バンガロー・グランドピアノでうなだれて、鍵盤を淫らにくすぐりつつ「星への階段」を、段の半分が抜けたような声で歌っていた。

おれはドライマティーニをがぶ飲みすると、急いで葦のカーテンをくぐって食堂に戻った。

85セントの夕食は放棄された郵便袋みたいな味で、それを持ってきた給仕は25セントのためならおれをぶん殴り、75セントのためならのどを搔き切り、1ドル半に売り上げ税⁷²つきのためならコンクリートの樽に詰めておれを海に沈めかねないように見えた。

72 ちなみに売り上げ税は当時のカリフォルニアは3%。

[35]

25セントにしては長い乗船だった。水上タクシーは、古い発動機船で、塗装されて全長の3分の2ほどがガラスで覆われている。それが碇を下ろしたヨットを抜け、防波堤の端である大きな石の山の周りを滑るように進んだ。突然うねりが襲い、ボートをコルクのように跳ね上げた。だがその夜の早い時間帯には、船酔いしても十分なスペースがあった。同乗者はカップル三組とボートを操縦する男だけで、彼はタフそうな人物で、右の尻ポケットに黒い革製のホルスターが入っているため、少し左に寄って腰をかけていた。カップル三組は岸を離れるとすぐに互いの顔を貪り始めた。

ベイシティの灯りを振り返り、夕食を吐きそうになるのを意識しすぎないように努めた。散らばった光の点が集まり、夜のショーウィンドウに並べられた宝石のブレスレットのように見えた。やがて明るさが薄れ、うねりの端に現れては消える柔らかなオレンジ色の輝きとなった。白波のない、長い滑らかで均一なうねりで、夕食をバーのウイスキー漬けにしなかったことを感謝したい揺れ具合だ。タクシーは今やうねりを上下に滑り、踊るコブラのような不気味な滑らかさで動いた。空気には冷たさが漂い、船員が関節から抜け出せない湿った冷たさだった。ロイヤル・クラウン号を縁取る赤いネオンペンシルが左に薄れ、漂う灰色の海の亡魂の中で暗くなり、それから再び新品の大理石のように明るく輝いた。

この船にはかなり大回りして近づいた。遠くから見ると素敵に見えたのだが。かすかな音楽が水面を越えて伝わり、水面越しの音楽は美しいくないためしがない。ロイヤル・クラウン号は四本の係留索でしっかりと固定され、栈橋のように安定して浮かんでいた。その乗船栈橋は劇場の看板のように明るく照らされていた。そしてこれらがすべて遠くに薄れ、別の古くて小さい船が夜の中から忍び寄ってきた。見栄えのしない船だった。改造された海上貨物船で、錆と汚れが付いたプレート、船室が船の甲板の高さに切り詰められ、その上にぎりぎり無線アンテナを支えられる高さのずんぐりしたマスト二本があるだけだった。モンテシート号にも光があり、湿った暗い海を越えて音楽が漂っていた。愛を囁き合うカップルたちは互いの首から歯を離し、船を見つめてくすくす笑った。

タクシーは大きくカーブを描き、乗客にスリルを味わわせる程度に傾きながら、ステージ沿いの麻の防護クッションに近づいた。タクシーのモーターはアイドリングし、霧の中でバックファイアを起こした。怠惰な探照灯の光が船から五十メートルほどの円を描いて海面を掃いている。

タクシー操縦士が栈橋にフックをかけると、青いイートンジャケットに明るいボタン、明るい笑顔とギャングらしい口元の、目尻の上がったあんちゃんが、女たちを手助けしてタクシーから下ろした。最後がおれだった。そいつがおれをさりげなく、きちんと観察した様子はその正体をうかがわせた。彼が私の肩のホルスターを探り当てる、さりげなくきちんとしたやり方は、もっと多くをうかがわせた。

「ダメ。ダメだ」と彼はそっと言った。

その声は滑らかでハスキーで、屈強なハリーが絹のハンカチ越しに苦労している感じだ。タクシー操縦士にあごをしゃくった。操縦士は短い輪を係柱に落とし、ハンドルを少し回して、栈橋に上がってきた。おれの背後についた。

「チャカは船上では禁止だよ、あんちゃん。すみませんねえ云々」とイートンジャケット野郎が優しくに言う。

「預けてもいいよ。服の一部ってだけだ。おれは仕事でバーネットに会いたいただけなんだ」

彼はちょっとおもしろがるようだった。「聞いたことないねえ」とにっこりする。「さあ帰ってくれ」

操縦士はおれの右腕に手首を通した。

「ブルネットに会わせろ」おれの声は弱くはかなく、婆さんの声のようだった。

目尻の上がったあんちゃんは言った。「ごちゃごちゃ言わないでくださいよ。もうベイ・シティにいるわけじゃないし、カリフォルニア州ですらない。一部のよい見解では、ここはもうアメリカですらないんだ。さあ失せろ」

背後でタクシー操縦士がうなった。「ボートに戻ってくださいよ。25セントは返す。行きましょう」

ボートに戻った。メスジャケットの男は静かで滑らかな笑顔で私を見ていた。その笑顔を見つめ続けたが、やがて笑顔ではなく、顔ではなく、ただ上陸灯の前にある暗い人影にしか見えなくなった。

それを見つめ、渴望した。帰り道はより長く感じられた。タクシー運転手に話しかけず、彼も私に話しかけなかった。栈橋で降りるとき、彼は私に25セントを渡した。そして嫌そうに言った。

「こんどまた別の夜にな。あんたを海に放り込むだけの余裕があるときに」

乗船を待つ半ダースほどの顧客がそれを聞いて、おれを見つめた。そいつらの前を通り過ぎ、浮栈橋の小さな待合室の扉を過ぎて、陸側の端にある浅い階段を目指した。

でかい赤毛の荒くれ野郎、汚れたスニーカーとタールで汚れたズボン、そして破れた青いセーラージャージの残骸を着て、顔の横に黒い筋が走ったヤツが、手すりから身を起こしてさりげなくおれにぶつかった。

おれは立ち止まった。こいつはどうも大きすぎた。おれの身長より八センチ高く、15キロは重い。だがおれは、もう誰かの歯に拳をぶつけたくてたまらなくなっていた。たとえそれで逆にボコボコにされようとも。

光は薄暗く、主にこいつから逆光になっていた。「どうしたい、相棒？」と彼は引き伸ばした声で言った。「地獄船で石鹸が効かなかったか？」

「シャツの繕いでもしてろよ。腹がはみでてるぞ」

「それよりひどい話もある。ハジキはそんな薄手のスーツの下だとふくらみが目立つ」

「なんで鼻をつっこみたがる？」

「おいおい、別になんでってことはないよ。ただの好奇心。悪気はないぜ、相棒」

「ふん、ならさっさとそこをどけ」

「いいとも。ここで休んでただけだ」

彼はゆっくりと疲れた微笑を浮かべた。声は柔らかく夢見るようで、巨漢にしては繊細すぎてひるむほどだった。不思議と気に入った、別の声のやわらかい大男を思わせた。

「あいさつがなっていないな。レッドと呼んでくれ」と彼は悲しげに言った。

「そこをどけ、レッド。最高人間でもまちがいをする。いま、おれの背中をまちがいが這い上っている感じがするぞ」

彼は考え深げにあちこちを見回した。浮栈橋の小屋の片隅におれを追い詰めていた。どうやらおれおむね二人きりらしい。

「モンティ号に乗りたいのか？ できるぜ。理由があるならね」

陽気な服と陽気な顔をした連中が横を通り、水上タクシーに乗った。おれはそいつらが通過するのを待った。

「その理由ってのはいくら？」

「五十ドル。おれのボートで血を流したら十ドル追加だ」

おれはそいつを迂回しようとした。

「二十五」とそいつは柔らかく言った。「友達をつれて戻ってきたら十五」

「おれに友達なんかいない」とおれは立ち去った。そいつは止めようとはしなかった。

小さな電気列車が行き来するコンクリートの歩道を右に曲がった。そういう列車はベビーカーのようにガタゴタと動き、妊婦を驚かささないような小さなクラクションを鳴らしていた。最初の棧橋の足元には、すでに人で溢れている派手なビンゴパーラーがあった。おれは中に入り、プレイヤーの後ろの壁に寄りかかって立ち、他の多くの人々と一緒にすわる場所が空くの待った。

電気表示器にいくつかの数字が表示されるのを見て、テーブルマンがそれらを読み上げるのを聞き、この賭場に雇われたプレイヤーを探してみたが見つけれず、立ち去ろうと振り返った。

でかい青の塊がタールの匂いをさせておれの横に結実した。「金を持ってないのか——それとも財布のひもが固いだけか？」と優しい声が耳元で尋ねた。

おれは彼をあらためて見つめた。そいつは、本では読むが実際にお目にかかることはない目をしていて。紫色の目だ。ほとんど紫に近い。少女のような、愛らしい少女の目だった。彼の肌は絹のようにすべすべ。軽く赤みを帯びていたが、決して日焼けはしないだろう。繊細すぎる。ヘミングウェイより大きく、歳もずっと若かった。ヘラ鹿マロイほど大きくはなかったが、足はとても速そうに見えた。髪は、金色にきらめくような赤だった。しかし、目以外は平凡な農夫のような顔で、舞台映えするような端正さはなかった。

「あんたの稼業は？ 私立探偵か？」

「なんであんたに話さなきゃならんのだ」おれは歯をむいた。

「なんかそう思っただけだ。25じゃ多すぎる？ 必要経費もない？」

「ない」

彼はため息をついた。「まあおれのも、どうせろくでもない思いつきではあったがな。あそこに行ったらあんた、めちゃくちゃに引きちぎられるぞ」

「まあそうだろうな。あんたの稼業は？」

「あちらこちらで小銭稼ぎ。昔は警察でね。追い出された」

「なぜそんな話を？」

彼は驚いたようだった。「ホントだぜ」

「正直にやってたからだな」

彼はかすかに微笑した。

「ブルネットって男を知ってるかい？」

かすかな微笑は彼の顔にとどまった。三連続でビンゴが成立した。中の連中は作業がす速やい。痩せた頬がくぼみ、しわだらけのスーツを着た背の高いくちばし顔の男がこっちに近づき、壁にもたれかかり、こっちを見なかった。レッドはそっと彼のほうに身体を傾け、「何か知りたいことがあるかい、旦那？」と尋ねた。

背の高いくちばし顔の男はニヤリと笑って立ち去った。レッドもニヤリと笑い、壁にもたれかかってまた建物を揺らした。

「君を倒せる男に会ったことがある」とおれは言った。

「もっといてほしいね」と彼は重々しく言った。「大男は金がかかる。物事が自分に合わせて調整されてないんだ。食うのも、着るのも費用がかかり、足をベッドに収めることもできない。仕組みはこうだよ。ここの場所が話をするのにいいとは思わないかもしれないけど、実はいいんだ。スパイが近づいてきても、おれはそいつを知ってるし、他の群衆はあの数字だけを注視してるから他に何も見えない。おれには水中バイパスのあるポートがある。いや、借りられるんだ。線路沿いに明かりのない栈橋がある。モンティ号の積み荷口をおれは開けられる。時々荷物をそこから運び出すんだ。甲板下にはあまり人がいないよ」

「探照灯に見張りもいるぞ」

「なんとかなる」

おれは財布を取り出して、腹の上で二〇ドル札と五ドル札を取り出し、それを小さく畳んだ。紫の目は、こっちを見ないようなふりをしつつ、見ていた。

「片道か？」

「十五と言っただろう」

「急に相場が跳ね上がったんだよ」

テーブルで汚れた手が札をのみこんだ。彼は静かに離れていった。扉の外の暑い暗闇の中に消えた。くちばし顔の男がおれの左側にいきなり姿をあらわして、静かに言った。

「あの水兵服のやつは見たことがあると思う。お友だちかね？ 前に見覚えがあるんだ」

おれは身を起こして壁から離れ、口もきかずにそいつから離れ、扉を出て、そして去った。おれの前三十メートルのところを、電飾から電飾へと動く飛び出した頭を見つめた。数分して、おれは二つの屋台にはさまれた隙間へと曲がって入った。くちばし顔の男が登場し、地面に視線を落としている。おれはそいつの横に踏み出した。

「こんばんは。二十五セントで体重をあてて差し上げましょうか？」とおれはそいつによりかかった。しわくちやのコートの下に銃があった。

そいつの目はおれを無感動に眺めた。「逮捕されたいのか？ おれはこの一帯に、法と秩序を守るために配備されてるんだぞ」

「だれかいま、それを乱してますか？」

「おまえの友人に何か見覚えがあった」

「そりゃそうだ。警官だからね」

くちばし顔の男は辛抱強く言った。「おやこりゃまた。それで見覚えあるのか。じゃあおやすみ」

彼はきびすを返し、来た道に戻った。背の高い頭はもう見えなくなった。心配はしていない。あの野郎のどんなことも、決しておれを心配させたりはしない。

おれはゆっくり歩き続けた。

[36]

電飾の彼方、小さな歩道列車のビートと警笛の彼方、熱い揚げ油とポップコーンと甲高い子供と覗きショーの呼び込み屋の彼方、海の匂い以外のすべての彼方、そしていきなり海岸線のはっきりしたラインと、クリーム状に波が打ち寄せ砂利の中に泡となるところへ。いまやおれはほとんど一人きりで歩いていた。騒音は背後で消え、熱く不正直な灯りがおぼろなギラつきとなった。それから、光のない指のような黒い栈橋が海に向かい暗闇の中へと突き出している。こいつだ。おれは曲がってその栈橋に出ようとした。

杭の始まりにもたせた箱からレッドが立ち上がり話しかけた。「よし。おまえは舷側昇降段に出ろ。おれは船にいて暖機する」

「水際のおまわりに着けられた。あのビンゴパーラーのやつ。止まって話をしなきゃならなかった」

「オルソン。スリを捕まえる役だ。優秀なんだぜ。ただしときどき、自分で革財布を盗んでそれを他人に仕込み、逮捕記録を維持しようとする。それは優秀にしてもいささかひどいだろう、ちがうか？」

「ベイ・シティならそんなもんだろう。さあ行こうか。風が強まってる。この霧が吹き飛ばされたくない。大した霧に見えないかもしれないが、かなり役にたつ」

「探照灯をごまかすくらいまでは消えない。あの船の甲板には機関銃もある。おまえは栈橋に出ろ。おれも行く」

彼は暗闇の中に溶け込み、おれは暗い板の上に出て、魚の粘液まみれの板ですべった。いちばん端に、低く汚い手すりがあった。カップルがその片隅で身を倒していた。二人は立ち去った。男のほうが悪態をつきながら。

十分間、水が杭を叩く音を聞き続けた。夜の鳥が暗闇で羽ばたき、羽の薄い灰色が視界を横切り、消えた。高い空で飛行機が低く唸っていた。すると遠くでモーターが唸り、轟き続け、まるで六台のトラックエンジンのようだった。しばらくすると音が和らぎ、減衰し、突然無音になった。

さらに数分が過ぎた。海の階段に戻り、濡れた床を歩くネコのように慎重に下りた。暗闇から黒い形が滑り出し、何かドスンと音を立てた。声が言った。「準備OKだ。乗れ」

おれはボートに乗り込み、彼の隣のスクリーンの下に座った。ボートは水上を滑り出した。今や排気音はなく、ボートの両側に沿って怒ったような泡立ちだけが聞こえた。ベイ・シティの灯りが再び、異質な波の上下を超えて遠くにぼんやりと光るものとなった。ロイヤル・クラウン号のけばけばしい灯りが再び片側にずれ、その船が回転台のファッションモデルのように身を飾ったようだった。そして、再びよき船モンテシート号の窓が黒い太平洋から現れ、探照灯のゆっくりと安定した光が灯台のビームのようにその周りを回った。

「こわいよ」とおれはいきなり言った。「ビビりまくってる」

レッドはボートのスロットルを落とし、波の上で上がったり下がったりするに任せて、水が下で動くのにボートが同じ場所にとどまるかのようにした。こっちを向いておれを見つめた。

「おれは死と絶望がこわいんだ。暗い水と溺死者の顔と眼窩が空っぽの骸骨とがこわい。死ぬのがこわい、無になるのがこわい、ブルネットという男が見つからないのがこわい」

レッドは笑った。「一瞬マジかと思ったぜ。本当に自分でつまらんおしゃべりをするなあ。ブルネットはどこにいるともわからん。二つの博打船のどれか、所有するクラブか、東部のリノに戻ってるか、スリッパはいて自宅にいるかも。ほしいのはそれだけ？」

「マロイっていう男を見つけたい。巨大なごつい男で、銀行強盗で八年食らい込んだオレゴン州立刑務所からしばらく前に出てきたんだ。ベイ・シティに身を隠してた」。おれはその話をした。話すつもりがなかったことまで大量に告げた。たぶんレッドの目のせいだろう。

最後に彼は考え込み、ゆっくりしゃべり、その台詞には霧のかけらがからみついでいて、まるで口ひげの水滴のようだった。それでレッドは実際より賢く見えたかも。そうでないかも。

「その話の一部は筋が通ってるし、一部は通ってない。一部は俺には分からないし、一部は分かる。このソルダーボーグが隠れ家を運営して、マリファナを売り、目が血走った金持ちの婦人から宝石を強奪するため男どもを送り出していたとしたら、市政府とつながりがあったのは当然だ。でも、だからといって市政府がそいつの全活動を知っていたとか、警官全員が彼にコネがあると知っていたということにはならない。ブレインが知っていて、おまえがヘミングウェイと呼ぶ奴が知らなかった可能性はある。ブレインは悪い奴だ、他の奴はただタフな警官で、善でも悪でもなく、曲がってるとも正直とも言えず、根性に溢れていて、警官であることがまともな生計の手段だと思うくらいバカだって

だけだ。このおれと同じでね。このサイキック野郎はどっちとも言えない。そいつは最高の市場、ベイ・シティで保護を買って、必要に応じてそれを使った。こういう奴は何を考えてるか分からないから、良心に何かがあるか、あるいは何を恐れてるかも分からない。人間だから、時々顧客に惚れたのかもしれない。金持ちの婦人たちは紙人形より簡単に手に入るからね。だから、おまえがソルダーボグの場所に滞在することになったのは、おれの勘だが、単におまえが誰かを知ったときにソルダーボグがビビると分かっている——そして連中がソルダーボグに伝えた話は、おそらくあいつがおまえに伝えた話と同じ、おまえが頭くらくらでうろついてるのを発見したというものだ——そうになったらソルダーボグはおまえを扱いかねて、放すのも殺すのも怖がって、十分時間が経ったらブレインが現れてもっと賄賂を要求するつもりだったというものだ。ただそれだけの話だ。たまたまおまえを利用できる状況になったので、そうしただけだ。ブレインはマロイについても知ってるかもしれない。あいつならやりかねん」

おれは耳を傾け、探照灯のゆっくりした巡回を眺め、はるか右を水上タクシーが行き来するのを見ていた。

「その連中の考え型は知ってる。警官の困ったところは、やつらがバカだとか腐敗してるとかタフだってことじゃない。自分が警察だってだけで、以前は持ってなかったものがちょっと得られた気になっちゃうことなんだ。かつてはそうだったかもしれないが、いまはもうちがう。トップにあまりに多くのお利口な連中が巣喰ってる。それで話はブルネットに移る。あいつはこの町を仕切ってるわけじゃない。そんな面倒は当人だっただごめんだ。大金を払って市長を選出させて、水上タクシーがちょっかい出されないようにする。何か特にほしいものがあれば、あっさりもらえる。たとえばしばらく前に、ご友人の弁護士が飲酒運転の刑事犯で逮捕されたが、ブルネットはその罪状を無謀運転に下げさせた。逮捕記録まで変えさせたが、そんなの刑事犯罪だ。それでわかるだろう。あいつの手口は博打で、あらゆる罪状は最近ではつながってるんだ。だから大麻を扱ったり、仕事を任せた手下から歩合をぶんどったりする。ソルダーボグは知ってるかもしれない、知らないかもしれない。だが宝石泥棒はありえん。たった八千ドルのためにその連中がやった仕事の量を考えて見ろ。ブルネットがそんなのに関係してたなんて、考えるだにお笑いだ」

「そうか。男も殺されてるのにか——忘れたか？」

「それもあいつはやっていないし、やらせてもいない。もしブルネットがあれをやったら、そもそも死体が見つからない。人が服に何を縫い込んでるかしれたもんじゃない。危険を冒すこともない。二

十五ドルでおれがあんたのために何をしてるかみろよ。ブルネットが使えるような金で、できないことなんかない」

「人を殺させたりするだろうか？」

レッドはしばし考えた。「やるかも。やったことはあるはず。でもあいつはタフガイじゃない。この博打屋たちは新種だ。我々は彼らを昔のイエッグ（強盗）や麻薬をやつれたならず者と同じだと思ってるんだ。ラジオで大口を叩く警察長官どもは、そいつらがみんな臆病な鼠だ、女性や赤ちゃんを殺しても警察の制服を見たら、お慈悲をと叫ぶんだとわめく。でも、そんな話を世間に信じさせるのは考え物だ。臆病な警官もいれば、臆病な殺し屋もいる——でもどっちもごくわずかだ。そしてトップの男たち、例えばブルネットのような連中は、人を殺してその地位にたどり着いたんじゃない。勇気と頭脳でたどり着いたんだ。そして、警官たちが持つ集団的な勇気も彼らにはない。でも何よりもやつらはビジネスマンだ。やることすべて金のためだ。普通のビジネスマンと同じだ。時々、誰かがひどく邪魔になることがある。オーケー。排除だ。でもその前に十分考えるんだ。いったいおれはなんで講義なんかしてるんだ？」

「ブルネットみたいな男はマロイをかくまったりしない。二人殺してるんだし」

「そうだな。ただし金以外の理由があれば別だ。引き返したいか？」

「いや」

レッドは手をハンドルに移した。ボートは加速した。「あのろくでなしどもは気に食わんようだ。性根が気に入らねえ」

[37]

回転する探照灯は、淡い霧にまみれた指で、船から三十メートルかそこらの波をほとんどかすめもしないような光だった。おそらくは何よりも、存在を誇示するためのものなのだろう。特に晩のこの時間では。これらの博打船のあがりハイジャックしようという計画を持っていた人間は、大量の支援が必要だし、群集が少数のご機嫌を損ねたギャンブラー数人にまで減って、船員がみんな疲れ切って鈍くなっている朝の四時に仕事をすることになる。それですら、儲ける手段としてはまずいものだ。以前に試したやつがいるのだ。

タクシーが曲がって棧橋に到着し、だれものせずに岸のほうに戻った。レッドは探照灯の光の届く範囲すぐ外で、モーターボートをアイドル状態にしていた。もし向こうが一メートルほど、気まぐれに光を上げたら——でもそんなことはしなかった。それは物憂げに通り過ぎ、鈍い水がそれで光り、モーターボートは線を越えて二本の巨大で汚れた船尾係船索を通過し、張り出しの下にすばやくすべりこんだ。おれたちはホテルの探偵がロビーから客引きをそっと追い出そうとするときのように、船体の油っぽいプレートにそっと寄り添った。

二重の鉄製扉が頭上高くそびえ立ち、それは届かないほど高く、届いたとしてもあまりにも重くて開けられないように見えた。モーターボートがモンテシート号の古い側面を擦り、足元の船体を緩く叩く波が打ち付けた。おれの横で大きな影が薄暗がりに浮かび上がり、巻かれたロープが空中を滑り上がり、叩きつけられて引っかかり、先端が下に落ちて水しぶきを上げた。レッドはボートフックでそれを水中から取り出し、引っ張って締め、エンジンカバーにある何かに端を固定した。霧は、ちょうどすべてが非現実的に感じられるほどだった。湿った空気は、愛の残り火のように冷たかった。

レッドが近づき、その息が耳をくすぐった。「船が上がりすぎてる。強い風が来たら、スクリューが空中に出ちゃうよ。それでも、あのプレートを登るしかない」

「待ちきれないぜ」とおれは身震いした。

彼はおれに舵輪を握らせ、必要なだけ回転させ、スロットルをセットし、ボートをいまのまま維持するように命じた。プレート近くに鉄ばしごがボルトで留められ、船体とともに曲がっている。その段はおそらくグリースを塗った柱並にすべりやすいはずだ。

登るのは、オフィスビルの屋根の縁を越えるくらい魅惑的だった。レッドは手をズボンで強く拭いてタールを手に付けると手を伸ばした。音もなく、うめき声一つ上げずに体を引き上げ、スニーカーが金属の梯子に届いて、さらに引っ張り上げやすくするために体をほぼ直角に支えた。

探照灯の光は今やおれたちのずっと外側を掃いていた。光が水面に反射し、おれの顔を照明弾のように目立たせていると思ったが、何も起こらなかった。すると頭上から重いちょうつがい鈍く軋む音がした。薄黄色の光が霧の中にわずかに滲み出て消えた。積み荷口の半分の輪郭が見えた。中からボルトで固定されていたはずがない。なぜだろうと不思議に思った。

ささやき声は意味のない音に過ぎなかった。おれは舵を離れて登り始めた。これまで経験したこともないほど過酷な道のりだった。息を切らし、ゼーゼー言いながら、梱包箱や樽、縄の巻き物、錆びた鎖の塊で散乱した酸っぱい船倉にたどり着いた。ネズミが暗い隅で悲鳴を上げていた。黄色い光は反対側の狭いドアから来ていた。

レッドは唇をおれの耳に寄せた。「ここからボイラー室の通路までまっすぐ歩くよ。あいつらはこのチーズみたいな船にディーゼルエンジンを持ってないから、補助ボイラーに蒸気が入ってるはずだ。たぶん下に一人いるだろう。乗組員は博打ツキで別の役割を兼ねてるんだ。テーブルマンや監視員、給仕とかね。みんな船に関係ありそうな役職で登録してる。ボイラー室から、格子がない換気口を見せてやるよ。あれは船の甲板に繋がっていて、甲板は立ち入り禁止だ。でも、あんたの好きにできる——生きてる間はな」

「船上に親戚でもいるのか」

「これより変なことだって起きてる。すぐに戻ってくるのか？」

「甲板から飛び込むとかなりの水音をたてるはずだ」とおれは財布を取り出した。「これはもうちょっと支払いがあるだろう。ほら。その身体を自分の身体だと思って扱ってくれ」

「あれ以上一銭も貸しはないぜ、相棒」

「帰りの便を買ってるんだ——使わないかもしれないが。おれが泣き出してあんたのシャツをびしょ濡れにする前に金を受け取ってくれ」

「上で手助けがいるか？」

「いるのは舌先三寸だが、おれが持ってるのはトカゲの背みたいな下手な口だ」

「金はしまえ。帰りの船賃も受け取ってる。おまえ、怯えてるな」レッドはおれの手を握った。その手は強く、固く、温かく、少しベタベタした。「怯えてるのは知ってるぞ」と囁く。

「なんとか克服する。どんな方法だろうと」

彼は、その光では読み取れない奇妙な表情を浮かべつつ、おれから目を背けた。彼の後を追ってケースや樽の間を抜け、扉の出っ張った鉄の敷居を越え、船の匂いがする薄暗い長い通路に入った。そこから鉄格子製のプラットフォームに出た。そこは油で滑りやすい。つかまりにくい鉄の梯子を下りると、今やオイルバーナーのゆっくりしたヒス音が空気を満たし、他のすべての音を圧倒した。おれたちはそのヒス音に向かって、静かな鉄の山々を通り抜けた。

角を曲がったところに、背の低い薄汚いイタ公が、紫の絹のシャツを来て、針金でつなぎあわせた事務椅子にすわり、ぶら下がった裸電球の下で夕刊を読んでいた。黒い人差し指と、おそらく爺さんのものだった金属縁のメガネの助けを借りている。

レッドは音もたてずにそいつの背後に近づいた。そして静かに言った。

「よう、チビ公。バンビーノどもはみんなどうしてる？」

イタリア人はカチリと口を開いて、紫のシャツの開いたところに手をつこんだ。レッドはそいつのあごの角度を殴って沈めた。床に優しく寝かして、その紫のシャツを細く引き裂き始めた。

「このほうがこいつにとっては、ボタンをつつつくよりもつらいだろう。だが発想としては、換気口のハシゴを上がるやつは、下ではかなりの騒動を引き起こすってことなんだ。上のほうでは何一つ聞こえない」

彼はイタリア人をきれいに縛って猿ぐつわをすると、そのメガネを畳んで安全な場所にいれ、そして鉄格子のない換気口まで進んだ。見上げると、真っ暗しか見えない。

「さよなら」とおれ。

「ちょっと手助けがいるかもよ」

おれは濡れた犬みたいに身震いした。「海兵隊員の集団がいるな。でもおれ一人でやるか、まったくやらないかだ。じゃあな」

「船にはどのくらいいるつもりだ？」その声はまだ心配そうだった。

「一時間かそれ以下」

彼はおれを見て唇を囁んだ。「ときには、やるしかないこともあるな。暇があればあのビンゴパーティーに寄りな」

彼は静かに歩み去り、四歩歩いてから戻ってきた。「あの開いた積み荷口だが、あれが取引材料になるかもしれない。使え」そしてすばやく立ち去った。

[38]

冷たい空気が換気口から流れ込んでいた。てっぺんまではずいぶん距離がありそうだった。三分後、といっても一時間のように感じられたが、おれは慎重にホーンのような開口部から頭を慎重に突き出した。カンバスシートのかかった救命ボートが、近くで灰色のモヤ状に見えた。低い声が暗闇の中でつぶやいていた。探照灯のビームがゆっくりと旋回している。それはさらに高いところからきていて、おそらくは寸詰まりのマストのどれかてっぺんにある、レールつきのプラットフォームだろう。そこには機関銃を持った野郎もいっしょにいて、ひょっとして小型ブローニングさえ持つてるかも。冷酷な仕事だ。そして積み荷口をあんなにすてきに開けばなしにされたら、何の気休めにもなりやしない。

遠くでは音楽が、安物ラジオのインチキな低音みたいに響いていた。頭上ではマストヘッドの照明と、高いところの霧の層越しに、わずかに冷たい星が見下ろしていた。

おれは換気口から這い出し、肩のホルスターから38口径の拳銃を抜き、肋骨に沿って隠し持ち、袖でそれを隠した。静かに三歩歩いて耳を澄ました。何も起こらなかった。つぶやきは止んでいたが、おれのせいじゃなかった。それが二つの救命ボートの間での会話だったとわかった。そして、夜と霧の中から、神秘的に光が一点に集まり、高い三脚に取り付けられて手すり越しに下を狙う機関銃の暗い硬い表面を照らし出した。男二人がその近くに立っていて、動かず、タバコも吸わず、その声が再びつぶやき始めた。言葉にならない静かなささやきだった。

つぶやきの盗み聞きが長すぎた。別の声が背後ではっきりと聞こえた。

「すみませんが、お客は甲板は立入禁止ですよ」

おれは、あまり急にならないようにふりむき、相手の手を見た。軽くぼやけているが銃は無い。

おれはうなずいて脇に寄り、救命艇の端がおれたちを隠した。男はゆっくりと後についてきた。その口は湿った甲板で無音だった。

「迷子になっちゃったかな」

「そのようすな」その声は若々しく、大理石を噛み砕いたような声じゃなかった。「だが甲板昇降口の階段の下には扉があるんだ。スプリング式の鍵がかかっている。しっかりした鍵なんだ。昔は開放式の階段に、鎖と真ちゅうの看板があった。だが元気のいい輩はそれを乗り越えるとわかったもんでね」

長いことしゃべっているのは、愛想がいいのか、あるいは何かを待っているのか。どっちかわからなかった。「だれかが扉を閉め忘れたんだろう」

影になった頭がうなずいた。おれの頭より低い位置にある。

「だがそれでおれたちの立場はどうなるかわかるだろう。だれかが本当に閉め忘れたなら、ボスはこれっぽっちも気に入るまい。閉め忘れじゃなければ、あんたがどうやってここに上がってきたか知りたい。言いたいことはわかるはずだ」

「簡単な思いつきに思えるんだが。下にいて、その人とそのことを話そうじゃないか」

「仲間といっしょにきたのか？」

「すぐくすてきな仲間たちと」

「そいつらといっしょにいるべきだった」

「わかってくれよ——ちょっとよそ見をしたら、他の男が彼女にドリンクをおごってるんだ」

男はクスクス笑った。そしてあごを軽く上下に動かした。

おれは頭を下げて横っ飛びすると、棍棒の音が静かな空気を長い無駄なため息のように切り裂いた。あたりにあるあらゆる棍棒は自動的におれに振り下ろされるようになっているらしい。背の高いやつが悪態をついた。

「これで格好つけられるもんならやってみろ」

おれは銃のセーフティーを大きな音でカチリと外した。

ときにはサル芝居でも劇場が大いに湧く。背の高いやつはそこに凍りついた。棍棒がその手首からぶら下がっているのが見えた。これまで話をしてきた相手は、まるで慌てる様子もなく状況について考えた。そして重々しく言った。

「そんなことをしても何の役にも立たないよ。この船からは決して下りられない」

「それは考えた。だがあんたも困ったことになるとも思いついてね」

相変わらずサル芝居だ。

「要求は？」彼は静かに言った。

「この銃は音がでかいぜ。でも撃つ必要はない。ブルネットに話がしたい」

「仕事でサンディエゴだ」

「その代理でもいい」

愛想のいいやつが言った。「大した野郎だな。下へ行こう。戸口に入る前にチャカはしまえ」

「戸口を確実に入るとわかったところでチャカはしまう」

彼は軽く笑った。「持ち場に戻れ、スリム。これはおれが調べる」

彼はのんびりとおれの前に移動し、背の高いほうは闇のなかにかき消えたように見えた。

「じゃあついてきて」

おれたちは一列縦隊で甲板を横切った。真ちゅう製のすべりやすい階段を下りる。その下には分厚い扉があった。それを開けて鍵を見た。にっこりして、うなずき、ドアをおれのためにおさえてくれたので、おれはそこを通り抜け、銃をしまった。

ドアが閉じて背後でカチリと閉じた。彼は言った。

「いまのところ、静かな夜だ」

目の前には金箔で飾られたアーチがあり、その向こうに博打部屋があった。あまり混んでいない。どの博打部屋とも似たような雰囲気だった。奥には短いガラス製のバーといくつかのスツールがあった。中央には階段があり、音楽が盛り上がり弱まったりしていた。ルーレットの音が聞こえた。男が一人の客にファロを配っていた。部屋の人数は六十人に満たない。ファロのテーブルには、銀行を始めるのに十分なイエローバック紙幣⁷³の山があった。プレイヤーは白髪の年配の男性で、ディーラーに礼儀正しいくらいの注意は払っているようだったが、それ以上ではなかった。

ディナージャケットを着た静かな男が二人、アーチをくぐって歩いてきた。何を見るわけでもない。予想通りだった。そいつらはおれたちのほうへ歩いてきて、おれを連行する小柄で細身の男がそれを

73 豆知識。カリフォルニア/西海岸は長いこと、アメリカの他の部分とはちがう、金本位制に基づくイエローバックのドルという独自通貨を使い、FRBの出す不換紙幣(金と交換しますと書いてはあるけど、裏付けの黄金がないのはみんな知っていた)グリーンバックのドルと並立する二重通貨みたいな変な状況がかなり続いていた。こんなの説明するのもアレだし村上春樹訳は「金証券」としていて、まあまちがってはいない。単純に「紙幣」と言ってもよかったが、カリフォルニアらしさの演出としてチャンドラーは「イエローバック」を敢えて使ってる。

待った。アーチをかなり過ぎたところで、二人はようやく手をサイドポケットに伸ばしたが、もちろんタバコを探しているのだろう。

「これからはちょっとした折り目をつけてもらわんとな」と小柄な男が言った。「あんたも異論はないだろうね」

「あんたがブルネットか」おれは唐突に言った。

彼は肩をすくめた。「もちろん」

「そんなにタフには見えないが」

「そう願いたい」

ディナージャケットの二人がおれをそっと小突いた。

「入れ。腹を割って話せる」とブルネット。

彼がドアを開け、一同はおれを中に連れ込んだ。

その部屋は船室のようでありながら、船室とはちがっていた。真鍮製ランプ二つがジンバルに吊るされ、木ではなくおそらくプラスチック製の暗い色のデスクの上に揺れていた。部屋の端には木目調の二段ベッドがあった。下段はベッドメイクがされ、上段には蓄音機レコードセットの束が六つほど置かれていた。角には大型のラジオと蓄音機の複合機が立っていた。赤い革のチェスターフィールドソファ、赤い絨毯、喫煙スタンド、たばことデキャンタとグラスが置かれた小さなテーブル、ベッドの対角線上には小さなバーが斜めに配置されていた。

「すわれ」とブルネットが言い、机の向こうに回った。机の上には事務書類がたくさんあり、簿記機で作られた数字の列が書かれていた。ブルネットは背の高いディレクターズチェアに座り、それを少し傾けてこっちをねめつけた。それからまた立ち上がり、コートとスカーフを脱いで脇に放り投げ、再びすわった。ペンを手に取り、それで耳たぶをくすぐった。ネコのような微笑みだが、おれはネコ好きだ。

彼は若くもなく老けてもおらず、太っても痩せてもいなかった。海の上や海の近くで多くの時間を過ごしたことで、健康的な良い顔色をしていた。髪はナッツブラウンで自然にウェーブがかかり、海の上ではさらにウェーブが強まる。額は狭く、知的な印象で、目は繊細な脅威を湛えていた。目は黄色っぽい。手はきれいで、手入れが行き届いていたが、軟弱なほどではない。ディナースーツは、あ

まりに黒く見えるから、たぶんミッドナイトブルーだろう。パールは少し大きすぎる気がしたが、それは嫉妬かもしれない。

おれをかなり長い間見つめてから、こう言った。「こいつ、銃を持ってる」

ビロードのようなタフガイの一人がおれの背骨の真ん中に、おそらく釣り竿じゃないものをつきつけた。探索する手が銃を取り上げ、他にないか探した。

「他に何か？」声がたずねた。

ブルネットは首を振った。「いまはない」

ガンマンの一人がおれのオートマチックを机越しにすべらせた。ブルネットはペンを置いてペーパーナイフを取り上げ、その銃を静かに吸い取り紙の上でつつきまわした。

「さて」と彼は静かに、おれの肩越しに見ながら言った。「おれの求めるものは説明するまでもなからう？」

一人が静かに出ていき扉を閉じた。もう一人はあまりに静かでそこにいないも同然。長く気安い沈黙があり、それが遠くのくぐもった声や、深い音調の音楽や、どこか下のほうから聞こえる、鈍くほとんど近くできない脈動で破られている。

「飲むか？」

「ありがとう」

ゴリラは小さなバーで二杯を作った。そのときにグラスを隠そうとはしなかった。そしてそれを机の両側に、黒いガラス製コースターに乗せて置いた。

「タバコは？」

「ありがとう」

「エジプト産でいいか？」

「もちろん」

タバコに火をつけた。飲んだ。よいスコッチのようだ。ゴリラは飲まなかった。

「おれが欲しいのは——」とおれは口を切った。

「失礼、だがそんなことは大して重要じゃないだろうに」

やわらかいネコのような微笑と物憂げな閉じかけた黄色い目。

扉が開いてもう一人が戻ってきて、いっしょにイートンジャケットのやつがいた。ギャング風の口元まですべて揃ってる。おれを一目見て顔が牡蠣のように蒼白となった。

「こいつはおれをすり抜けたりしてません」とすばやく、唇の片端をねじ曲げつつ言った。

ブルネットは言った。「こいつは銃を持ってた。そいつを甲板で、おれの背中に突きつけるような真似までしたんだぜ、大筋ではな」

「おれをすりぬけたりはしてません、ボス」イェールジャケットが同じくらい即座に言った。

ブルネットは黄色い目をかすかに上げておれに微笑んだ。「どうなんだ？」

「放り出しちまえ。どっかよそでボコボコにしてやれよ」とおれ。

「タクシー操縦士に聞けば証明できる」イートンジャケット野郎が歯をむいた。

「おまえ、五時半以来持ち場を離れたか？」

「一分たりとも、ボス」

「それじゃだめだ。一分あれば帝国だって滅びる」

「一秒たりとも、ボス」

「それでもだませる」とおれは笑った。

イートンジャケット野郎はボクサー式のなめらかなすべるステップを取り、その拳が鞭のように飛びだしてきた。ほとんどおれのこめかみに当たった。鈍いドスンという音がした。その拳が空中で溶けるようだった。彼は横に倒れて、机の角をつかもうとして、そして背中から転がった。珍しくほかのだれかが棍棒でのされるのを見るのはすてきだった。

ブルネットはおれに微笑み続けた。

「あんたがこいつに不当な仕打ちをしてないといいんだがな。さらに階段への扉の問題が残ってる」

「偶然開いてたんだ」

「他に何か思いつかないか？」

「こんな人が多いところでは言えない」

「サシで話そう」ブルネットはおれから目をそらさなかった。

ゴリラはイエールジャケットの男の脇をかかえて船室を引きずり、その相棒が内側の扉を開いた。二人はそこを出た。扉が閉まった。

「これでいい。おまえはだれで何の用だ？」

「おれは私立探偵で、ヘラ鹿マロイという男と話がしたい」

「私立探偵だと証明してみろ」

おれは示した。彼は財布を机越しに投げて寄越した。風に曝された唇は微笑を続け、その微笑ががわぎとらしくなってきた。

「殺人捜査をしている。こないだの木曜夜に、あんたのベルヴェデーレ・クラブ近くの崖で起きた、マリオットという男の殺人だ。この殺人はたまたま、別の殺人とも関係してる。マロイってやつが女を殺したんだ。こいつは元受刑者で銀行強盗、全面的なタフガイだ」

彼はうなずいた。「まだ、それがおれに何の関係があるのかとは尋ねてない。たぶんいずれその話もするんだろうな。どうやってこの船に乗ったかまず話したらどうだ？」

「言っただろう」

彼は穏やかに言った。「ウソだった。マーロウとか言ったな？ ウソだったぞ、マーロウ。自分でもわかってるくせに。床で倒れてるあの若僧はウソはついてない。手下は厳選するからな」

「あんたはベイ・シティの一部を懐に入れてる。どのくらい大きな部分かは知らんが、あんたの希望には十分なほどだ。ソルダーボグという男がそこに隠れ家を運営してる。彼はマリファナや強盗を仕切り、危険な連中をかくまってる。当然、そんなことはコネなしじゃできない。あんたなしじゃできないはずだ。マロイがそいつのところに行った。マロイは出てった。マロイは身長二メートル十センチくらいで、隠すのは大変だ。博打船ならうまく隠せるはずなんだ」

ブルネットは静かに言った。「なんたる単細胞だ。仮にそんなやつをかくまいたくても、なぜこの船でそんな危険を冒す必要がある？」彼はドリンクを一口飲んだ。「なんといっても、私は別の商売をしてる。タクシーサービスをうまく運営するだけでも大変なのに、余計なトラブルはごめんだ。悪党が隠れる場所なんて世の中にいくらでもある。金さえあればね。もっと良いアイデアは思いつかないのか？」

「できなくはないが、クソ食らえ」

「お役にはたてんな。さて、どうやって船に乗った？」

「言う義理はないね」

「残念ながら、有無を言わせず言ってもらうしかないな、マーロウ」その歯が真ちゅうの船のランプでギラめいた。「十分に可能なことだぞ」

「教えたら、マロイに伝言してくれるか？」

「何を？」

おれは机の上に転がっていた財布に手を伸ばし、そこから名刺を取って裏返した。財布をしまっかわりに鉛筆を手にした。その名刺の裏に単語を五つ書いて、それを机越しに押しやった。ブルネットはそれを手に取り、おれが書いたことを読んだ。「おれには何の意味もないな」

「マロイには意味があるんだ」

彼は後ろにもたれておれを見た。「おまえというやつがわからんね。危険をおかして隠れ家からここまで出てきて、おれが知りもしないどこぞの暴漢に渡せとって名刺を寄越す。まったく意味がわからん」

「あいつを知らなきゃ意味は通らない」

「なんで銃を岸に残して、普通のやり方で乗船しなかった？」

「最初は忘れた。そしてそのときに、イートンジャケットのタフ野郎が絶対におれを乗船させないと悟ったんだ。そのとき、別のやり方を知ってる野郎に出くわしたんだ」

彼の黄色い目が、新しい炎を点したかのように光を増した。にっこりして何も言わなかった。

「そのもう一人のやつというのは、悪漢じゃないが岸にいて耳を澄ませてたんだ。あんたは内部から鉄格子をはずした積み荷倉庫を持っていて、それとある換気シャフトは鉄格子が外されてるんだ。船の甲板に出るにはたった一人片づければいい。船員一覧を確認したほうがいいぞ、ブルネット」

彼はゆっくりと唇を動かし、片方をもう片方で覆った。そして名刺をまた見た。「マロイってやつはこの船には乗ってない。だがその積み荷場の話が本当なら、信じよう」

「見てこいよ」

まだ彼は視線を落としていた。「マロイに伝える手段があるなら、やっておこう。なんでわざわざそんな手間をかけるのか自分でもわからんが」

「あの積み荷口を調べとけ」

彼はしばらく完全に不動だったが、それから身を乗り出して銃をおれのほうに押しやった。そして独り言のように語った。

「おれのやることときたら。町を仕切る、市長を選ぶ、警察を腐敗させる、ヤクを売る、犯罪者をか
くまう、真珠にからみつかれた婆さんをさらう。なんとも暇な男だ、おれは」そしてちょっと笑った。

「なんとも暇なもんだ」

おれは銃に手をのばして脇の下に元通りおさめた。

ブルネットは立ち上がった。そしておれをじっと見つめた。「何も約束はしない。が、おまえの言
うことは信じる」

「またまたご冗談を」

「こんなわずかな話のために、ずいぶんと危険を冒したもんだ」

「そうだな」

「まあ——」彼は無意味な身ぶりをしてから、机越しに手を差し出した。

「イカレたやつと握手といこう」と彼は柔らかく言った。

おれはそいつと握手した。その手は小さく硬く、少し熱かった。

「この積み荷口についてどうやって知ったか教えてくれないのか？」

「教えられない。だが教えてくれたやつは悪漢なんかじゃない」

「口を割らせることもできる」と言ってから、彼はすぐに首を振った。「いや。一度はおまえを信じ
た。もう一度信じよう。しっかりすわってもう一杯やっていけ」

彼はブザーを押した。奥の扉が開き、すてきなタフガイの一人が入ってきた。

「ここに残れ。こいつに一杯やれ、欲しいと言ったらな。キツイ代物はなしだ」

殺し屋はすわり、おれに平然と微笑んだ。ブルネットはすばやく事務室から出て行った。おれはタ
バコを吸った。ドリンクを飲み干した。殺し屋はおれにもう一杯作ってくれた。おれはそれも飲み干
し、もう一本タバコを吸った。

ブルネットは戻ってきて、角で手を洗い、また机に向かった。殺し屋にあごをしゃくった。殺し屋
は黙って出ていった。

黄色い目がおれを観察した。「あんたの勝ちだ、マーロウ。そしておれは船員一覧に百六十四人を抱えてる。まあ——」と彼は肩をすくめた。「タクシーで帰りな。だれも邪魔はしない。伝言の件だが、いくつかツテがある。それを使おう。おやすみ。たぶんありがとうと言うべきなんだろうな。実証してくれて」

「おやすみ」とおれは立ち上がって出ていった。

栈橋には別の男がいた。おれは別のタクシーで岸まで向かった。そのままビンゴパーラーにでかけて、群集に混じって壁にもたれた。

数分でレッドがやってきて、おれの隣の壁にもたれた。

「チョロかったろ、え？」とレッドは、テーブルの男たちが数字を読み上げる重く明瞭な声を背景に、静かに言った。

「おかげさまで。信じたよ。不安になってる」

レッドはあちこち見回してから唇をもう少しおれの耳に近づけた。「お目当てのヤツは見つかった？」

「いや。だがブルネットが伝言を届ける方法を見つけてくれるはず」

レッドは頭をまわしてまたテーブルのほうを見た。あくびをして身をのぼし、壁から離れた。あのワシ鼻男がまたきていた。レッドは彼のところに近寄った。「いよう、オルソン」と言いつつ、そいつを押しつけて通るときにほとんどそいつを押し倒しそうになった。

オルソンは渋い顔でその後を見て、帽子を直した。そして猛々しく床に唾を吐いた。

そいつが消えたとたん、おれはその場を離れ、駐車場へと向かい車を置いた線路沿いへと戻った。

ハリウッドに車を走らせて、車を片づけるとアパートに戻った。

靴を脱ぎ、靴下でうろついて床を足の指で感じた。ときどきまだ麻痺するのだ。

それから掛け布団をめくったベッドの脇にすわり、予定をたてようとした。だが無理だ。マロイが見つかるまでに、数時間で進むか何日かかるか。警察につかまるまで決して見つからないかもしれない。つかまるかどうかもわからない——生きたままでは。

[39]

ベイシティのグレイル邸の番号に電話したのは十時頃だった。彼女を捕まえるには遅すぎるだろうと思ったが、ちがった。女中に執事とさんざん格闘したあげく、やっと彼女の声が電話で聞こえた。その声は涼しげで、晩に向けての準備万端という感じだった⁷⁴。

「電話すると約束したので。ちょっと遅くなったが、いろいろやることがあってね」

「またすっぽかすつもり？」その声は冷ややかになった。

「そうでもない。運転手はこんな時間でも働くのか？」

「あたしが言えばどんなに遅くても」

「ちょっと寄って拾ってってくれないか？卒業式の礼装がえらくきゅうくつになってるもんで」

「まあすてきね」と彼女は甘ったるく言った。「でもそこまですることもないかも」。アムサーは確かに、彼女の発話中枢を実に見事に仕上げている——それ以前からまったく問題なかったのかもしれないが。

「おれのエッチングを見せてあげるけど」

「エッチングたった一枚？」

「アパートがたった一間だからね」

「そういうアパートもあるらしいわね」とまた甘ったるく言って、そして声色を買えた。「そんなじらすような真似しなくてもいいのよ。あなた、見事な体格してるじゃないの。他の人が何と言おうとね。住所をもう一度教えて」

おれは所在地と部屋番号を伝えた。「ロビーのドアは鍵がかかっている。でも下にいって、掛け金をはずしておくよ」

「それでいいわ。かなてこを持っていかずにすむから」

74 村上春樹訳「夜のこの時間にしては」。そうじゃない。彼女は夜遊び大好きな女だから、夜のほうが元気なのだ。

彼女は電話を切り、おれは実在しない人物と話をしたような奇妙な気分を取り残された。

ロビーに下りて、掛けがねをはずし、シャワーを浴びてパジャマを着るとベッドに横になった。一週間ぶっ続けで眠れそうだった。おれはなんとか再びベッドから自分を起き上がらせて、自分のドアの留め金をかけた。さっき忘れていたのだ。そして深くきつい雪の中を小キッチンまで歩いて、グラスと、きわめてハイクラスな誘惑のためにとっておいたリキュールスコッチ並べた。

またベッドに横になった。そして声に出した。「祈れ。あとは祈るしかない」

目を閉じた。部屋の四つ壁は船の鼓動を持っているかのようで、静かな空気は霧が滴り海風と入り混じるかのようだった。使われていない船倉の、すえた酸っぱい匂いを感じた。エンジンオイルの匂いがして、紫シャツのイタ公が裸電球の下で爺さんのメガネをかけて何かを読んでいるのが見えた。おれはひたすら換気口のシャフトを登り続けた。ヒマラヤ山脈を登り、てっぺんに踏み出すと、機関銃を持った連中がまわり中を囲んでいた。チビの、なぜかきわめて人間的な黄色い目した男と話したが、そいつは闇売人かもっとひどいヤツなのだ。おれは赤毛と紫の目をした巨人のことを考えた。そいつはおそらくおれが会った中で最もすてきな人物なのだろう。

考えるのをやめた。閉じたまぶたの向こうで光が動いた。おれは宇宙の中をさまよった。おれは無駄な冒険から戻ってきた、折り紙つきの抜け作だった。おれは百ドルのダイナマイトの束なのに、一ドルの時計を見る質屋のおやじみみたいな音をたてて爆発したヤツだ。おれは市役所の壁を這い上がる、ピンクの頭のムシだった。

おれは寝落ちた。

ゆっくりと、いやいやながら目を覚まし、目は天井に反射したランプの光を見つめていた。部屋の中で何かが静かに動いていた。

動きはこっそりしたもので、静かで重かった。おれは聞き耳をたてた。そして頭をゆっくりまわすと、ヘラ鹿マロイが見えた。影があり、彼は影の中を動き、かつて見たようにまったく無音だった。その手に握られた銃は暗く油をひいた、実務的な輝きを放っている。その帽子は黒い巻き毛の上に押し被せられ、鼻は猟犬の鼻のように嗅ぎ回っている。

そいつはおれが目を開けるのを見た。静かにベッドの脇にやってきて、立ったままこっちを見下ろした。

「メモは受け取った。このあたりは調べさせてもらうぜ。外におまわりは見あたらなかった。これが罠なら、二人が死体バスケットに入って出ていくことになる」

おれはベッドの上で少し寝返りをうち、マロイはすばやく枕の下を探った。その顔は相変わらず広く青白く、その深くくぼんだ目はまだなぜか優しかった。今夜はコートを着ていた。身体に触れるところはフィットしていた。肩の縫い目が片方破けていて、たぶん単に着ようとしただけでそうなったのだろう。店の最大のサイズだったんだろうが、ヘラ鹿マロイには小さすぎた。

「来てほしかったよ。これについてはおまわりはだれも知らない。あんたに会いたかっただけだ」

「続けろ」

マロイは横に動いてテーブルのところに行くと、銃を置いてコートを脱ぎ捨て、おれのいちばんいい安楽椅子にすわった。きしんだが、壊れはしなかった。ゆっくりと後ろにもたれて銃を置き直し、右手に近いところにもってきた。ポケットからタバコのパックを取り出すと、ゆすって一本抜き出し、指で触れることなく口にくわえた。親指の爪でマッチの火がついた。その煙の鋭い匂いが部屋を横切り漂ってきた。

「あんた病気とかじゃないのか？」

「休んでただけだ。きつい一日だったから」

「ドアが開いてた。だれか来るのか？」

「女だ」

彼は考え込んでおれを見つめた。

「来ないかも。きたら足止めするよ」

「女って？」

「ああ、ただの女だ。きたら、なんとか追い返す。むしろあんたと話がしたい」

そのきわめてかすかな微笑は、ほとんど口を動かさなかった。不器用にタバコをふかし、まるでそれが自分の指では小さすぎて落ち着いて持てないともいうようだった。

「なんでおれがモンティに乗ってると思った？」

「ベイシティのおまわりだ。長い話で憶測があまりに多いがな」

「ベイシティのおまわりがおれを追ってるのか？」

「気になるか？」

マロイはまたあのかすかな微笑を浮かべた。そして頭を軽く横に振った。

「女を殺したな。ジェシー・フロリアン。あれはまちがいだった」

マロイは考え込んだ。そしてうなずいた。「おれならその話はもう止めておくがな」と静かに言った。

「でもそれで話がややこしくなった。おれはあんたなんか怖くない。あんたは殺し屋じゃない。婆さんを殺すつもりはなかったんだ。もう一つの殺人——セントラルでのやつ——あれならあんたも何とか逃げおおせたかもしれない。だが女の頭をベッドの柱に叩きつけて、脳みそが顔にかかるまでやるとなると、逃げられないぜ」

「あんた、ずいぶんヤバい橋を渡るんだな」マロイは静かに言った。

「おれの受けた扱いのおかげで、もう何がヤバいかもわからなくなったよ。あんた、婆さんを殺すつもりはなかった——そうだろう？」

彼の目は落ち着かなかった。頭を傾けて、聞き入っている様子だ。

「いい加減、自分の力の加減を学んだ方がいいぜ」

「今さら手遅れだ」

「婆さんから何か聞き出したかったんだらう。首をつかんで揺すった。ベッドの柱に頭を叩きつけていた頃には、すでに死んでたんだろ」

彼はおれを見つめた。

「何を聞き出したかったかは知ってる」

「言ってみろ」

「婆さんを発見したときには、サツがいっしょだった。おれは全部言うしかなかった」

「全部って？」

「ほとんどすべて。でも今夜のことは言っていない」

マロイはおれを見つめた。「よし、じゃあどうしておれがモンティ号に乗っているとわかった？」これは以前にも尋ねたことだった。忘れてしまったらしい。

「わかってはいなかった。だが逃げるいちばん手軽な方法は船だ。ベイシティに連中が持っている仕組みがあれば、あんたは博打船のどれかに乗って出て行ける。そこから先は、きれいに逃げられる。まともな手助けがあればだが」

マロイは空疎に言った。「レアード・ブルネットはいいやつだ。そう聞いたよ。直接話をしたことはないけど」

「あいつはメッセージをあんたに伝えた」

「くだらん、そんなツテなら何十とあるんだぜ、相棒。あんたが名刺に書いてよこしたことはいつやるんだい？ あんたが本気だという山勘がしたんだ。そうじゃなきゃこんなところにくるような危険は冒さねえ。これからどこへ行く？」

やつはタバコを消しておれを見た。その影が壁に大きく落ちかかった。巨人の影だ。こいつはでかすぎて、ほとんど現実離れしていた。

「なんでおれがジェシー・フロリアンを殺したと思った？」彼はいきなり尋ねた。

「首についた指の跡の感覚。あんたが婆さんから何か聞き出したかったこと、そしてあんたが意図せずして人を殺せるくらい力が強いこと」

「サツはおれの仕業だと思ってるのか？」

「知らん」

「おれがあ婆さんから何を聞き出したかったんだ？」

「ヴェルマの居場所を知ってるかと思ったんだろう」

彼は静かにうなずき、おれを見つめ続けた。

「だが知らなかった。ヴェルマはあ婆さんには賢すぎた」

ドアに軽いノックがあった。

マロイはゆっくり少し身を乗り出し、にっこりして銃を手にした。だれかがドアノブを回そうとした。マロイはゆっくり立ち上がり、身を屈めて前傾すると聞き耳をたてた。そして扉を見て言う状態からおれのほうをふり返った。

おれはベッドで身を起こし、床に足を下ろして立ち上がった。マロイはだまっておれを見つめ、身動きしなかった。おれは戸口まで行った。

「だれだ？」扉に唇を当ててたずねた。

確かに彼女の声だった。「開けなさいよ、バカね。ウィンザー公爵夫人よ」

「ちょっと待って」

おれはマロイをふり返った。彼は顔をしかめていた。おれは彼に近づいて、とても低い声で言った。「他に出口はない。ベッドの裏の更衣室に行って待ってろ。追い返すから」

マロイはそれを聞いて考えた。表情は読めなかった。いまやほとんど失うもののない男だ。怖れなどまったく知らない男だ。あの巨大な身体にはそもそも恐怖など備わっているまい。やっとうなずき、帽子とコート拾って静かにベッドの向こうに行くと、更衣室に入った。ドアが閉まったが、きっちりとは閉められなかった。

おれはマロイの痕跡がないか見回した。タバコの吸い殻だけで、そんなものはだれが吸ってもわからない。おれは部屋の戸口に行ってそれを開いた。マロイは入ってきたときに、留め金をまたかけていたのだ。

彼女はそこに薄笑いを浮かべて立っていた。以前に話してくれた、首の高い白ギツネのクロークを着ている。耳からはエメラルドのペンダントが下がり、それが柔らかく白い毛皮にほとんど埋もれている。彼女の指は、手持ちの小さなイブニング用ハンドバッグの上で柔らかく丸められていた。

おれの姿を見て、その顔から微笑が消えた。おれを頭のとっぺんからつま先まで眺めた。目が今や冷たい。彼女は暗い口調で言った。

「そういうことなのね。パジャマとガウン。美しいエッチングを見せてくれようってわけ。あたしってバカね」

おれは脇に立って扉を押さえた。「そういうことじゃまったくない。これから着替えようってときに、おまわりが立ち寄ったんだ。ちょうど帰ったところだ」

「ランドール？」

おれはうなずいた。うなずくのだってウソはウソだが、お手軽ではある。彼女は一瞬ためらい、そして香りのついた毛皮を翻しつつ、おれの前を通り過ぎた。

おれは扉を閉じた。彼女はゆっくりと部屋を横切り、壁をぼんやりと見つめ、そしてすばやくこちらを見た。

「もっとお互いのことをよく知ってからね。あたしは、こんなに簡単な女じゃないのよ。貧乏一間での情事なんて柄じゃないから。人生でその手のをやりすぎた時期もあったけど。いまはムードあるやりかたが好きなの」

「帰る前に一杯いかが？」おれはまだ、彼女から部屋の反対側にある扉に寄りかかっていた。

「帰るって言った？」

「ここがお気に召さないような印象を受けたもので」

「言うことは言っておきたかったのよ。それをわからせるのに、ちょっと下品になるしかなかった。あたしはあの手の尻軽な売女どもとはちがうのよ。モノになることもある——でもそうお手軽にはいかないわ。ええ、一杯いただくわ」

おれは小台所にでかけて、あまり安定していない手でドリンクを二つミックスした。それを運び一つを彼女に渡した。

洗面室からは何の音もしなかった。呼吸音すらしない。

彼女はグラスを受け取り、味見して、そのグラス越しに遠くの壁を見やった。「男にパジャマ姿でお迎えされるのは嫌いなよ。おかしなものね。あなたが気に入ってたのに。すごく気に入ってたのに。でも克服できるかもね。そんなことなら何度も克服してきたんだし」

おれはうなずいて飲んだ。

「男なんてほとんどが、ただのろくでもないケダモノよ。それを言うなら、この世界自体かなりろくでもないと言わせてもらうけど」

「金は役に立つだろう」

「そう思うでしょう、いつもお金があったわけじゃないときには。でも実際には、新しい問題を引き起こすだけ」と彼女は奇妙な笑みを浮かべた。「それに、昔の問題がどんなに面倒だったか忘れてしまうものよ」

彼女はハンドバッグから黄金のタバコを取り出したので、おれは近寄って彼女にマッチを差し出した。彼女は漠然とした煙のかたまりを吐き出して、それを閉じかけた目で眺めた。

「そばにすわってよ」と彼女はいきなり言った。

「まずちょっと話そう」

「何について？ ああ——あたしの翡翠？」

「殺人について」

女の表情はまったく変わらなかった。また紫煙の雲を吐き出したが、今度はもっと慎重にゆっくりと吐いた。「嫌な話題ね。どうしても話すの？」

おれは肩をすくめた。

「リン・マリOTTは聖人なんかじゃなかった。それでもその話はしたくないわ」

彼女は冷ややかにおれを長いこと見つめ、それから手を開いたハンドバッグに差し込んでハンカチを取り出した。

「個人的には、あの人が宝石ギャングの実行犯だとも思ってないんだ。警察はそう思っているふりをするが、あいつらはそういうふりばかりしたがる。あいつが強請屋だとさえ思わないんだ、本当の意味ではね。笑えるだろう」

「そうかしら？」その声はいまや、とんでもないほど冷たかった。

「うん、まあ本当に笑えるわけじゃない」とおれは同意して、ドリンクの残りを飲み干した。「わざわざここまでお越し頂いて、実にありがたいよ、グレイル夫人。だがお互いまちがった気分には達したようだな。たとえば、おれはマリOTTがギャングに殺されたとさえ思ってないんだ。あいつが翡翠の首飾りを買いにあの峡谷に行ったとは思わない。翡翠の首飾りなんか、そもそも盗まれたとさえ思っていない。あいつはあの峡谷に殺されに行ったんだよ。もっとも当人は、殺人を手伝いにでかけたつもりだったがね。だがマリOTTはきわめてダメな殺人者だった」

彼女はちょっと前のめりとなり、その微笑はほんの少しだけこわばった。いきなり、彼女自身がまったく変化しないのに、彼女はもう美しくなくなった。単に百年前なら危険で、二十年前なら侮れないが、いまやハリウッドB級でしかない女に見えた。

彼女は何も言わなかったが、右手がハンドバッグの金具を叩いている。

「本当に駄目な殺人者だよ、シェイクスピア『リチャード三世』のあの場面での、二人目の殺人者みたいなの。あいつは良心のある種のカスくらいは残っていたのに、それでも金がほしくて、結局は腹が決まらないというだけで、まるで仕事をこなせなかった。こういう殺人者はとても危険だ。絶対に排除しなきゃいけない——ときには棍棒で」

彼女はにっこりした。「そして、あの人はだれを殺すはずだったのか、見当はつく？」

「おれだ」

「それはなかなか信じがたかったでしょうねえ——自分がだれかにそこまで嫌われてるなんて。そしてあたしの翡翠の首飾りが、そもそも盗まれてないと言ったわね。何か証拠はあるの？」

「あるとは言っていない。そういうことを思ったと言っただけだ」

「じゃあそれを口にするなんてよほどのバカじゃない？」

「証拠というのは、いつも相対的なものだ。可能性の圧倒的なバランスだ。そしてそれがどんな形でこっちに効いてくるかも問題となる。おれを殺そうとする動機はずいぶんとつまらないものだった——単におれが、昔のセントラル街の店にいた歌手を探そうとしていて、ちょうどそのとき、ヘラ鹿マロイという受刑者が出所して、そいつも彼女を探してたというだけだ。ひょっとすると、おれはマロイが女を探すのを手伝っていたのかもしれない。明らかに、その女を見つけるのは可能だった。そうでなければ、マリオットに対しておれを殺さねばならない、しかもすばやく殺さなきゃいけないんだ、なんていうふりをするだけの価値はない。そして、もし見つけられるのでなければ、あいつもそんな話を信じなかつたらう。だがマリオット殺しにはずっと強い動機があったのに、マリオットは、虚栄のためか愛のためか貪欲のためか、あるいはその三つすべてのごたまぜのせいで、それを考慮しなかった。あいつはビビってたが、自分の身を心配してのことじゃない。自分が手を貸している暴力と、それで自分が有罪になるのが怖かったんだ。だが一方で、あいつは自分のおまんま代のために闘ってもいた。だから危険を冒した」

おれは口を止めた。彼女はうなずいた。「実におもしろいわね。それが何の話かわかってる人なら」

「そして、お互いわかってる」

おれたちは見つめ合った。彼女はまた右手をハンドバッグに差し入れていた。何を持っているかは十分に検討がついた。だがまだ取り出され始めてはいなかった。どんな出来事も時間がかかる。

「お互い、お芝居はもうよそう。ここじゃ二人きりだ。お互い何を言おうと、相手の言い分より少しでも強い立場にあるわけじゃない。水掛け論に終わる。どん底から出発した女子が、超大金持ちの奥さんになる。その成り上がり過程で、しけた婆さんが彼女に気がつく——たぶんラジオ局でその娘が歌ってるのを聞いて、会いに出かけたんだ——だからこの婆さんは黙らせなきゃならない。でもこの婆さんは安上がりで、つまりは大して知っちゃいない。だが彼女と取引をして、月々の支払いをして、婆さんの家の抵当権を持っていて、変な真似をしたらいつでもドブに投げ込める男——こいつはすべて

知っていた。こいつは値が張った。でもほかにだれも知らない限り、それも問題にはならなかった。だがいつの日か、ヘラ鹿マロイというタフガイが出所して、かつての恋人についていろいろ嗅ぎつけ始める。そのでくの坊は彼女を愛していたからだ——そしていまも愛してる。それで話が変になる、悲劇的なおかしさだ。そしてちょうどその頃、私立探偵も嗅ぎ回り始めた。だから鎖の弱い部分マリオットは、もはや放置しておく余裕がなくなった。脅威となってしまう。いずれこいつにたどりついて、口を割らせようとする。あいつはその手の野郎だった。やばくなれば吐く。だから吐く前に殺された。特殊警棒で。きみに」

彼女がやったのは、ハンドバッグから手を出すだけで、その手に銃を握っていた。やったのは、それをおれに向けて、にっこりすることだった。おれがやったのは、何もしないことだった。

だがやられたのはそれだけじゃなかった。ヘラ鹿マロイが更衣室からコルト 45 口径を持って出てきた。そのでかい毛むくじらの手の平の中では、まだおもちゃに見える。

マロイはおれなんか見もしなかった。リュイン・ロックリッジ・グレイル夫人を見た。身を乗り出し、口が彼女に向けてにっこりして、優しく彼女に話しかけた。

「思った通り、声でわかった。その声を八年聞いてたんだ——思い出せる限りすべてを。でも髪は赤い方が、なんか好きだったな。いよう、ベイビー。久しぶり」

彼女は銃を向け直した。

「近づかないで、このくそ野郎が」

彼は凍りついて、そして銃を脇にだらりと垂らした。まだ彼女から一メートルほど離れていた。その吐息は苦しそうだった。そして静かに言った。

「思いも寄らなかった。いま、いきなりひらめいた。おまえがおれをサツにたれ込んだんだ。おまえが。かわいいヴェルマ」

おれは枕を投げたが遅すぎた。女はマロイの腹を五発撃った。銃弾は手袋に指が入るほどの音も立てなかった。

そして銃を向け直しておれを撃ったが、弾切れだった。床のマロイの銃に飛びついた。二つ目の枕は外さなかった。ベッドを回り、女が枕を顔からどけるまでに、彼女を突き飛ばした。コルトを拾い上げ、それをもってまたベッドを回った。

マロイはまだ立っていたが、ふらついていた。その口がゆるみ、手が震えて身体を押さえている。膝の力が抜け、ベッドの上に顔を下にして横倒しとなった。そのあえぐ呼吸音が部屋を満たした。

女が動く前に、おれは電話をつかんでいた。彼女の目は死んだ灰色で、凍りかけの水のようだった。女はドアめがけて突進し、おれはそれを止めようとしなかった。ドアを大きく開けっぱなしで言ってしまったので、電話を終えるとおれは足を運んでそれを閉じた。彼の頭をちょっとベッドの上でまわして、窒息しないようにした。まだ生きてはいたが、腹に五発くらったら、ヘラ鹿マロイですら、そう長くはもたない。

おれは電話に戻り、ランドールの自宅に電話した。「マロイだ。おれのアパート。グレイル夫人に腹を五発撃たれてる。救急病院には電話した。女は逃げた」

「そんなに小利口にふるまいたかったのか」とだけ言うと彼はすぐに電話を切った。

おれはベッドに戻った。マロイはベッドの横に膝立ちとなり、立ち上がろうとして、片手にシーツを丸ごとわしづかみにしていた。顔は汗だくだった。まぶたがゆっくりと瞬き、耳たぶが黒ずんでいた。

まだ膝立ちで、まだ立ち上がろうとしているときに、救急車が着いた。担架に乗せるのも四人がかかりだった。

出発する直前に救急医が言った。「ギリギリ助かるかもしれない——二五口径なら。体内でどの器官に当たったか次第です。でも助かる可能性はある」

「助かりたいと思ってないよ」とおれ。

助からなかった。その夜のうちに死んだ。

[40]

「ディナーパーティーを開けばよかったのよ」とアン・リオードンは、焦げ茶色の模様つき敷物越しにおれを見た。「輝く銀とクリスタルの織機、まばゆいパリッとしたリネン——ディナーパーティーやるようなところでいまもリネンを使ってればだけど——ロウソクの灯り、女性は最高の宝石をつけて、男は白いネクタイ姿、召使いは包んだワインボトルを持って目立たぬように行き交い、警官たちは借り物のイブニング服でちょっと居心地悪そうで、それはみんなそういうものよね、容疑者たちは引きつった微笑と落ち着かない手をして、あなたは長いテーブルの上座でそのすべてを、小出しにして語るのよ。魅力的な軽い微笑と、ファイロ・ヴァンスみたいないんちきイギリス訛りで」

「そうだよな。君が小賢しくなってる間に、何かこっちが手に持てるようなものはどうだい？」

アンは自分の台所に行って、氷をカチャカチャ言わせて、背の高いグラスを二つ持ってくると再びすわった。

「あなたの女友だちの酒代ってすさまじいものになりそうね」と彼女はドリンクをすすった。

「そしてそこでいきなり執事が卒倒する。だが実は殺人犯は執事ではなかった。彼が卒倒したのは単なる演出効果ってやつだった」

おれはドリンクを少しあおった。「これはその手のお話じゃないよ。巧妙で狡猾な事件じゃないんだ。単に暗くて血まみれなだけだ」

「じゃあ彼女は逃げおおせたの？」

おれはうなずいた。「今のところは。家には二度と帰らなかった。どこかに隠れ家があって、服と外見を変えられるようにしてたんだろう。なんといっても、船員たちと同じく危険な生活を送ってきたんだ。おれに会いにきたときも一人きりだった。運転手なし。小さな車できて、それを数十街区先に乗り捨てていった」

「つかまるわよね——警察が本気を出せば」

「まあそう言うな。検察長官のワイルドは手抜きのないやつだ。一度あいつの下で働いたことがある。だが捕まっても、どうなる？ 相手は二千万ドルときれいな顔に、リー・ファレルかレネンキャンプ弁護士だ。彼女がマリOTTを殺したと証明するのはえらくむずかしい。あるのは強い動機に彼女の過去の人生だけだし、それも検察が追い切れればの話だ。たぶん前科はないだろう。あったらこんな手には出なかったはずだ」

「マロイはどうなの？ 最初からマロイのことを話してくれてたら、彼女がだれかすぐにわかったはずなのに。ちなみに、どうして分かったの？ あの二枚の写真がちがう女のものだってこと」

「いや。あのフロリアン婆さんですら、写真がすり替えられているなんてことは知らなかったんじゃないかな。ヴェルマの写真を鼻面につきつけたら、婆さんはちょっと驚いた様子だったよ——ヴェルマ・ヴァレントとサインのあったやつだ。だが知っていたかもな。単に、後でおれに売りつけようと思って隠しただけかも。マリOTTがすり替えた別の娘の写真だと百も承知で、だから無害だと分かっていたのかも」

「ただの憶測ね」

「そうとしか考えられん。マリOTTがおれに電話して、宝石の身代金支払いについてデタラメを語ったのが、おれがフロリアン夫人を訪ねてヴェルマのことを訊いたせいなのと同じだ。そしてマリOTTが殺されたのは、彼が鎖の中の一番弱い部分だったからにちがいないのと同じだ。フロリアン夫人は、ヴェルマがリュイン・ロックリッジ・グレイル夫人になったことさえ知らなかった。知りようがない。知ってたらあんなはした金で買収できない。グレイルは、結婚のため二人がヨーロッパに行き、彼女は本名で結婚したと言っていた。場所も時期も言わない。実名も言わない。彼女の居場所も言わない。本当に知らないんだと思うが、警察は信じていない」

「なぜ言わないのかしら？」アン・リオーダンは組んだ指の背にのせて、陰のかかった目でおれを見つめた。

「彼女に夢中すぎて、あの女がだれのひざにすわっても気にしないんだ」

「あなたのひざにすわったのはさぞ楽しかったでしょうね」アン・リオーダンは辛辣に言った。

「おれを弄んでたんだ。少しおれを怖がっていた。半分警察みたいな男を殺すのはまずい手口だから、おれを殺したくはなかった。でもおそらく最後には殺そうとしただろう。ジェシー・フロリアンだって、マロイが先回りして手間を省いてくれなければ殺されたはずだ」

「ゴージャスなブロンドに弄ばれるのって、さぞ楽しいんでしょうね。多少のリスクはあっても。もちろんリスクがあるのは当然なんでしょうけど」

おれは何も言わなかった。

「マロイ殺しでは彼女に何の罪も負わせられないんでしょうね、向こうは銃を持っていたから」

「うん。あれだけ後ろ盾のある女じゃね」

金を散りばめた目が荘厳におれを観察した。「あの女、マロイを殺すつもりだったと思う？」

「あいつを怖れてはいたよ。八年前に通報したんだ。それを知っているようだった。でも彼女を傷つけはしなかつたらう。彼女を愛してもいたからだ。うん、あの女は、殺す必要のあるやつは全員殺すつもりだったろう。失うものがあまりに多かった。だがそんなことをいつまでも続けるわけにはいかない。おれのアパートでも、おれを撃とうとした——でも銃が弾切れだった。マリオットを殺したとき、あの岬でおれも殺しておくべきだったんだ」

アンは優しく言った。「あの女、彼女を愛してたのね。マロイのことよ。六年も手紙を寄越していないとか、一度も牢屋に面会に行かなかったとかはどうでもよかった。懸賞金目当てに彼女が密告したのもかまわなかった。出所したら、単にいい服を買って彼女を探し始めたのよね。それをあの女、あいさつ代わりに五発もくらわして。マロイのほうも二人殺していたけれど、それでも彼女を愛していたのね。なんて世の中なのかしら」

おれはドリンクを飲み干し、また飲みたそうな表情を浮かべて見せた。アンは無視した。

「そしてグレイルに、自分の身元を話したけれどグレイルは気にしなかった。身を隠して別名で彼女と結婚して、彼女の知り合いかもしれない連中と一切の関係を絶つためにラジオ局も売り、お金で買えるものは何でも与えて、そしてあの女がグレイルに与えたものは——何なの？」

「そいつは何とも言えない」おれはグラスの底の氷をゆすった。それでも何も思いつかなかった。

「たぶん、彼女はグレイルにある種のプライドをもたらしたんだろう。いささか歳寄りの自分が、美しく華やかな妻を持てるのだからってことで。彼女を愛してたんだ。そんなことを話してどうなる？しょっちゅうあることだろう。彼女のやったこと、乳練り合ってる相手、かつての彼女なんかどうでもよかったんだ。彼女を愛してたんだ」

「ヘラ鹿マロイみたいに」とアンは静かに言った。

「水辺をドライブしよう」

「ブルネットのこととか、あのリーファーに入ってた名刺とかアムサーとかソンダーボーグ医師とか、大いなる解決の糸口になった小さなヒントの話はしてくれてないわよ」

「フロリアン夫人に名刺を一枚渡したんだ。彼女はその上に濡れたグラスを置いた。まさにそんな名刺がマリオットのポケットに入ってた、グラスの輪染み込みでね。マリオットはだらしない男じゃない。それが手がかりだった、ある種のね。いったん何か怪しいと思ったら、他のつながりを見つけるのも簡単だ。たとえばマリオットがフロリアン夫人の家に抵当権を設定しているとか。これは彼女に言うことを聞かせるためだけのものだ。アムサーはといえば、あいつは悪漢だ。ニューヨークのホテルで捕まえたそうだが、国際詐欺師なんだそう。スコットランド・ヤードにヤツの指紋があるし、パリにもある。それだけのことを、一日二日でどうやって調べたかは知らない。警察はその気になればすばやく仕事をするなあ。たぶんランドールはもう何日もそれを隠していたんだろう。そしておれがそれを台無しにするんじゃないかと怖れたんだ。でもアムサーはだれの殺害にも関与していない。ソンダーボーグともね。ソンダーボーグはまだ見つかっていない。たぶんこいつも前科があると思われるようだが、捕まえるまでははっきりわからない。ブルネットはといえば、ブルネットみたいな男はまったく尻尾をつかませない輩だ。大陪審の前に引っ張り出しても、憲法上の権利を持ち出して一切の証言を拒否するだろう。自分の評判なんか心配する必要がないからね。だがここベイシティでは、大した大騒動が起きてる。署長はクビで、刑事の半分はおまわり稼業に降格で、おれを『モンテシート』号に乗る手伝いしてくれた、レッド・ノルガードっていうえらく素敵なヤツは復職した。市長がこのすべてを手配しているよ、危機が去るまで一時間ごとにチビってズボンを替えなきゃならないからな」

「そういうこと、いちいち言わなきゃ気が済まないわけ？」

「シェイクスピア風味だよ。ドライブに行こう。もう一杯やったら」

「あたしのを飲めば」とアン・リオーダンは立ち上がり、手をつけていないドリンクをこっちに持ってきた。おれの前にそれを持ったまま立ち、目は見開かれて少し怯えている。

「あなたって本当にすごいね。すごく勇敢、決意に満ちて、しかもはした金で働く。みんなあなたの頭を殴り、締め上げ、アゴに一撃加え、モルヒネまみれにするのに、タックルとエンドゾーンの間でひたすらヤードを稼ぎ続けて、相手がみんな力尽きちゃう。どうしてそんなにすばらしいの？」

「続けろよ」とおれはうなった。「さっさと吐き出せ」

アン・リオーダンは思慮深げに言った。「さっさとキスしてよ、この鈍感男！」

[41]

ヴェルマを見つけるのには三ヶ月以上かかった。彼女の居場所をグレイルが知らず、逃亡を手助けしていないとはみんな信じなかったのだ。そこで全国のあらゆるサツとブン屋どもは、金の力が彼女を隠していそうな場所をすべて探し回った。そして金の力が彼女を隠したりはまったくしていなかった。いったん見つかると、彼女の隠れ方は本当にわかりやすすぎるほどだった。

ある夜、ピンクのシマウマ並に珍しいカメラ的な目を持ったボルチモアの刑事が、あるナイトクラブにふらりと入り、バンドに耳を傾け、黒髪で眉も黒い派手な歌手に目を留めた。まるで心絞るような歌い方だった。彼女の顔の何かにピンときた。そしてそのピンがそのまま続いた。

本署に戻り、指名手配者ファイルを取りだして、手配書の山をめくっていった。お目当てのものにたどりつくつと、それを長いこと見つめた。それから頭の麦わら帽子を整えると、ナイトクラブに戻って、支配人を捕まえた。二人で楽屋裏の更衣室に戻り、支配人がドアの一つをノックした。鍵はかかっていなかった。刑事は支配人を押しのけ、中に入ると鍵をかけた。

マリファナの匂いはわかったはずだ、彼女が吸っていたからだ。だがそんなものには目もくれなかった。彼女は三面鏡の前にすわって、髪とまつげの付け根を調べていた。それはつけまつげじゃなかった。刑事はニコニコして部屋を横切り、手配書を彼女に渡した。

彼女はおそらく、本署で刑事が見つめたのと同じくらい、その手配書の顔を見つめたことだろう。見つめながら、いろいろ考えるところがあったはずだ。刑事はすわり、脚を組んでタバコに火をつけた。いい目はしていたが、専門特化しすぎていた。女のことは十分にわかっていなかった。

とうとう彼女はちょっと笑った。「あんた、賢いわねえおまわりさん。自分では、印象に残る声をしてるつもりだったのよ。一度なんか友だちが、ラジオで聞いただけであたしだとわかってくれたわ。でもこのバンドとは一ヶ月も歌っていたのに——放送では週に二回——だれもまるで気づいちゃくれない」

「おれはその声は聞いたことがなかった」と刑事はにこにこし続けた。

「この件で、なんか取引ってわけにもいかなそうね。でもね、やりかた次第ではずいぶんと実入りもあるはずなんだけどな」

「おれが相手じゃ無理だよ。すまんね」

「じゃあ行きましょうか」と彼女は立ち上がり、ハンドバッグをつかんでハンガーからコートを取った。刑事のところにおいてコートを指しだして、自分がそれを着る手伝いをしてもらおうとした。彼は立ち上がり、紳士らしく彼女のためにコートを広げてやった。

彼女はふりむき、ハンドバッグから銃をすりと取り出すと、刑事の広げていたコート越しに三回撃った。

ドアがぶち破られたときには、まだ銃に二発残っていた。みんなが部屋の半ばまでこないうちに、ヴェルマはそれを使った。二発とも使ったが、二発目は純粋な反射運動だったのだろう。彼女が床に倒れる前にみんなで取り押さえた。だが女の頭はすでにだらりと垂れていた。

「刑事は翌日まで息があった」とランドールがその話をしてくれた。「話ができるときには話してくれたよ。だからこのネタがわかるんだ。あいつがそんなに不注意だとは理解に苦しむよ、本気で何やら手打ちの相談をしようと思ってたのでもない限り。もしそうならわの空になってただろう。だがそうは思いたくないわな、もちろん」

そうだろうねえ、とおれは言った。

「心臓をきれいに撃ち抜いた——二回も。そして証言台の専門家たちが、そんなことは不可能だと言うのは聞いたが、その間ずっと私自身はそれが十分可能だとわかっていた。それともう一つある」

「なんだい？」

「あの刑事を撃つなんて馬鹿な真似をしたもんだ。絶対にあの女は有罪になんかならなかつただろうからな、あの美貌にお金に、あのお高い弁護士どもが積み上げる起訴状のお話とあってはね。ドヤ街からの貧乏小娘が、金持ちの奥さんに上り詰めて、昔の知り合いのハゲタカどもにつきまとわれたってわけだ。なんかその手の話。まったく、レネンキャンプなら老いぼれストリップダンサーを半ダースほども法廷につれてきて、自分たちが長年彼女を揺すってたんですとお涙頂戴の話をさせただろうよ。だれも実際に罪に問われたりはしないやり方でね、でも陪審員どもはそれでイチコロだ。あの女、一人で逃げ出してグレイルを巻き込まなかったのは賢かったが、つかまったときに帰ってきたほうがおさら賢かっただろう」

「おや、いまはあの女がグレイルを巻き込まなかったと思うのかよ」

彼はうなずいた。おれは言った。「何か彼女がそんなことをする理由は思いつくか？」

彼はおれを見つめた。「なんか考えでもあるのかよ。言えよ、信じてやるから」

「彼女は殺人者だった。でもマロイだってそうだ。そしてあいつは完全な悪党にはほど遠いやつだった。ひょっとすると、そのボルチモアの刑事は、記録に出てるほど清廉潔白じゃなかったのかもしれない。彼女はそこにチャンスを見て取ったのかもしれない——自分が逃げるチャンスじゃない——その頃にはもう、彼女は逃げ回るのにはうんざりしてた——ただ、自分に唯一機会を与えてくれた、たった一人の男を何とか助けるチャンスだ」

ランドールはあんぐりと口をあげ、納得できないという目でおれを見つめた。

「おいおい、そんなのオマワリを撃つ必要はないだろうに」

「別にあれが聖女だったとか、半端にでもいい娘だったとかさえ言うつもりはないよ。一度もね。追い詰められるまで自殺なんかしないだろう。だが彼女のやったこと、そのやり方のおかげで、もう裁判に戻ってこなくてすむようになった。そこんとこ、よく考えてくれ。そしてその裁判で最も痛手を受けるのはだれだ？ いちばんそれに絶えられないのはだれだ？ そして勝ち、負け、引き分けにしても、その大騒ぎで最大の代償を払うのはだれだ？ 一人の老人だよ、決して賢く愛したとはいえないが、あまりに強く愛しすぎた老人だ」

ランドールはぴしゃりと言った。「ただの感傷だな」

「そうだろうとも。自分で言いながらもそう聞こえたよ。どのみち、たぶん全部かんちがいなんだろう。おれのピンクの虫は、ここに戻ってきたりしたかい？」

彼はおれが何を言ってるのかわからなかった。

おれはエレベーターで一階に下り、市役所の階段へと出ていった。涼しくて、澄み切った日だった。ずっと遠くまで見渡せた——だがヴェルマが去ったところまでは見渡せない。

終

訳者あとがき

本書は Raymond Chandler, Farewell, My Lovely (1940) の全訳である。元のテキストには Project Gutenberg Canada のテキストを使用⁷⁵。そのテキストは 1964 年の Alfred A. Knopf 版を使い、一部明らかなまちがいを直したものとなっている。

レイモンド・チャンドラーは 1959 年没なので、彼の著作の著作権は基本的に切れているのだが、こいつはちょっと面倒で、1940 年刊ということは第二次世界大戦前。つまり戦時加算 10 年があって、その戦時加算がぎりぎり切れるか切れないかのところで 2018 年末の著作権の 70 年への延長があったので、するとその場合の著作権はどうなるのか、まあ規定を調べたい人は調べておくれ。『長いお別れ』(1953) は戦後の作品で文句なしに著作権は切れているのだが、オーウェルでもそうだったように、この戦時加算のおかげで、後から書いた作品 (『1984』) は著作権が切れているのに、以前の作品 (『動物農場』) が切れていないという変なことがときどき起きた。この作品についての厳密なアレは、調べてはいない。ただ早川書房は、2011 年の村上春樹訳を出すときにレイモンド・チャンドラー社というところから権利を取っているみたいだ。とはいえ 2040 年頃にはそれも切れるので、気にする人は読まずに待つように。

さて本書はフィリップ・マーロウの登場するシリーズの第二作となる。あらすじについては、ウィキペディアのページを見て欲しい

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%95%E3%82%89%E3%81%B0%E6%84%9B%E3%81%97%E3%81%8D%E5%A5%B3%E3%82%88>)。「長いお別れ」に比べてかなりひねりの少ないストーリーで、そんなにわかりにくいことはないし、特に「長いお別れ」のようによく考えると話のはっきりしない部分もない。苦しい部分はある。最後の、マロイに連絡を取りたいがために、確証もないのに博打船に乗ろうとして、まったくの偶然でレッドに手引きしてもらえて、いる保証のかなり低いブルネット親分にたまたま会えて、そのあらゆる偶然がすべて思惑通りにいって万事解決、というあたりのご都合主義は、よく考えるとちょっとひどいと思う。そもそもマロイを何とって呼び

75 <https://gutenberg.ca/ebooks/chandlerr-farewellmylovely/chandlerr-farewellmylovely-00-e.html>

出したの？ あそこであまく両者が同時にマーロウのアパートにこなかったら、どうなったの？ あと、ヴェルマの写真のすり替えとやらはよくわからないしストーリー上も意味もない。が、一応理屈は通るし、それぞれの場面がかっこいいので、深く追求する必要もないだろう。

また1953年の『長いお別れ』で見られた極度の文体的な凝り方も、ここでは見られない。『長いお別れ』では解説で述べたように、極度の省略、そして「のような」といった比喩を使わない、具体的な記述が特徴であり、それが訳しにくさにもつながっていた。本書はそういうことはない。「のような」はいくらでも出てくる。また省略もそれほどは見られない。また会話も、『長いお別れ』はあらゆる人と、すさまじいほめかしまみれの心理合戦がひたすら展開されていた。本書では、それはグレイル夫人との最初の出会いで行われる腹の探り合いと誘惑で使われているだけだ。悪くいえば、チャンドラー作品の中で相対的にはぬるいといえるが、その分、読み易い。そして訳しやすい。『長いお別れ』では、既訳についてかなりケチをつけた。だが本書ではそれがかなり少ない。それはそうした、原作の書きぶりによるものだ。

既訳に対する文句については、また注をいっぱいつけているので、それを見て欲しい。個人的には、特に冒頭から出てくる、ロサンゼルス都市変化——特に人種構成の変化とそれに伴う郊外化およびインナーシティー問題——の描かれかたにもうちょっと敏感になってほしかったとは思う。そして特にいちばん文句があったのは28章の、アン・リオーダンとの指の触れあいのところなのだが、それも注を参照。

実は、このアン・リオーダンとのやりとりは、本書で最大のポイントの一つではある。本書の「さらば愛しい女よ」という題名は、何を指しているのか？ 一つは、悪女ヴェルマと、ヘラ鹿マロイとの関係だ。ヴェルマに裏切られ、それでも彼女を追って人を二人も殺し、そして最後に彼女に殺されてしまうマロイは、殺人者だけど悪い奴ではなく、本当にむくわれずにかわいそうだ。そしてマーロウは、彼女が最後に自殺したことについて、彼女を愛したもう一人、大金持ちのグレイルを思いやったのでは、と夢想する。彼は最後に、そのヴェルマの消えた先に思いを馳せる。だがもう一つ、本書でアン・リオーダンとの関係の描写は、すべて妙に懐かしさに満ちていて、そしてそれが「もうそこがどんなふうだったか思い出せない。あまりに昔のことだ」とされる。最後にキスをする(らしい)ので、何かしらはあったんだろうね。でもそれはもうすべて過去のことだ。それもまた、マーロウにとって「さらば愛しき女よ」ではある。

というわけで、翻訳開始の8月5日から月内に全訳一通りあげました。何かまちがいと誤変換に気づいたらご指摘くださいな。では。

2025年8月23日 デン・ハーグにて

山形浩生 (hiyori13@alum.mit.edu)